国立西洋美術館 教育活動の記録

National Museum of Western Art Educational Activities Report

2013–2019

国立西洋美術館 教育活動の記録

National Museum of Western Art Educational Activities Report

2013–2019

ごあいさつ

2019年に60周年を迎えた国立西洋美術館では、松方コレクションを核とした常設展、及び西洋美術を紹介する各企画展に関連し、幅広い来館者層に向けてさまざまな教育活動を行ってきました。本書は、開館当時から2012年度までのデータをまとめた『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』に続き、2013年度から2019年度までの7年間の活動についての記録集です。

近年、高齢化やグローバル化などの社会の変化に伴い、多様性への配慮など、美術館、そして美術館教育の新たな役割、あり方が求められています。2017年に公布、施行された文化芸術基本法では、文化芸術に関する施策において社会的包摂の理念が明記され、観光・まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業などの関連分野との連携の必要性についても記されました。誰にでも開かれた美術館を目指す中で、教育普及の役割が益々大きくなっていると言えるでしょう。そのような中、2020年に新型コロナウイルス感染症が拡大し、世界中の美術館が長期にわたる臨時休館に追い込まれるという未曾有の事態が起こりました。マンパワーによるところが大きい教育活動は、人との関わりが制限される「新しい日常」において、一時期、活動の「場」を失ったと言っても過言ではありません。しかし、そういう時だからこそ活動の本質を見極め、同時に固定観念を取り払って、例えば来館が難しい人たちにどう届けるかなど、新たな形を模索する機会となっています。

当館の状況についても触れておきますと、ル・コルビュジエによって設計された本館が、2016年に7ヶ国17資産の一つとして世界文化遺産に登録されました。絵画や彫刻などの所蔵作品に加え、建築をどのように残し、公開していくのか、というのはこれからの大きな課題です。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、以前のように企画展を開催することが難しくなっている今、建築を含め所蔵作品をどう見せていくかについて、館全体で取り組まなければいけません。そこには教育普及のあり方も大きく関わることとなるでしょう。また、ここ数年で当館の教育普及担当者が大きく入れ替わったことから、これまでの活動、そして蓄積をどのように継承し、かつ新たに発展させていくのかが問われています。

このような状況を鑑みると、当館の教育活動の方向性について、一度立ち止まって考える転換期にあると言えるのかもしれません。そこで本書では2013年度以降の活動の実績データに加え、これまでに実施されてきたプログラムの総括、検証する意味も込めて企画担当者の論考や客員研究員へのインタビューをまとめました。さまざまな活動の経緯や、当時の状況を振り返り、その成果と課題を挙げています。客観的なデータに加え、企画担当者の意図や主観的な思いの記録が、今後、日本の美術館教育全般における一つの基礎データとして、さらなる研究につながることを願っています。

国立西洋美術館
館長　**田中正之**

目次

ごあいさつ …… 3
田中正之

国立西洋美術館　教育活動の展開　2013年度–2019年度 …… 6
酒井敦子

略年表（2013年度〜2019年度） …… 8

第1部　活動記録

常設展関連プログラム

1-1　スクール・プログラム …… 12
1-2　美術トーク …… 38
1-3　建築ツアー …… 42
1-4　鑑賞教材 …… 46
1-5　どようびじゅつ …… 50
1-6　ファン・ウィズ・コレクション …… 56
1-7　ファン・デー …… 62
1-8　ボランティアート …… 66
1-9　美術館でクリスマス …… 68
1-10　作品熟覧プログラム　西洋版画を視る …… 72

企画展関連プログラム

2-1　講演会・スライドトーク …… 76
2-2　展覧会関連印刷物 …… 84
2-3　障害者のための特別鑑賞会 …… 88
2-4　先生のための鑑賞プログラム …… 90
2-5　レクチャー・コンサート …… 92

人材育成プログラム

3-1　ボランティア・プログラム …… 96
3-2　教員研修 …… 104
3-3　インターン …… 108
3-4　他組織との連携 …… 110

第2部　論考・インタビュー

論考

1　ファン・ウィズ・コレクション …… 117
2　ファン・デー …… 120
3　どようびじゅつ …… 124
4　びじゅつーる …… 127
5　スクール・プログラム …… 129
6　障害者プログラム …… 133
7　ボランティア制度 …… 138

インタビュー

8　レクチャー・コンサート …… 142
9　教育普及活動の歩みI …… 146
10　教育普及活動の歩みII …… 150

国立西洋美術館　教育活動の展開　2013年度–2019年度

本記録集は、『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』の続きとして、2013年度から2019年度の当館での教育活動をデータでまとめたものである。前回の記録集は開館50周年にあわせて作られたが、本書は60周年である2019年までの活動を記すこととした。前記録集は発行が遅れたこともあり53年分の活動が収められたのに対し、本書は7年と、年数だけ見ると少ない。しかし、1994年に教育普及専門の職員が着任し、その後、特に2004年にボランティア制度の導入以降、教育活動の種類、回数は飛躍的に増加した。このことを踏まえ、次の50年ではなく頻度を上げて定点観測していくことを目指し、60周年にあわせて本記録集を作成するに至った。本記録集の序文として、2013年から2019年の間の美術館教育に関連した出来事、そして当館の教育活動について大まかに追いたい。

ここでは列挙するにとどめるが、この7年間に起こった美術館を取り巻く主な出来事としては、以下が挙げられる。全国美術館会議による「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」の採択（2017年5月）[1]、文化芸術そのものの振興に加え、観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業など文化芸術に関連する分野の施策も法律の範囲に取り込み、国・独立行政法人・文化芸術団体・民間業者などの連携・協議、食文化の振興、芸術祭の開催支援、高齢者及び障害者の創造活動への支援などが明記された文化芸術基本法の制定（旧「文化芸術振興基本法」改正　2017年6月）、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」の公布（2018年6月）、採択には至らなかったが「Museum」定義の見直しについて議論されたICOM京都大会の開催（2019年9月）などである。2020年に開催予定であった東京オリンピック、パラリンピックの準備期間であったこの時期、上述した文化芸術基本法や「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」などの影響も相まって社会包摂の考えが文化政策において更に浸透し、それまでにも地道に障害者に向けて鑑賞機会を開いていこうと活動を続けてきた館は各地にあったが、「助ける」「助けられる」という一方的な関係性を超え、知覚の差異を認め合い共有することで新たな作品との出合い、見方を探求するプロジェクトも実施された[2]。また、訪日外国人増加が見込まれる中、美術館においても多言語対応が進められたのもこの時期である。そして、2015年にニューヨーク・国連本部で開催された国連サミットで採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」の実現に向けて、先に述べたICOM京都大会においても「われわれの世界を変革する：持続可能な改革のための2030年アジェンダ履行」が採決された。SDGsは美術館教育においても一つの指針となり始めている。

当館の教育活動においては、2016年7月17日に当館本館を含む7ヶ国17資産で構成される「ル・コルビュジエの建築作品―近代建築運動への顕著な貢献―」が世界文化遺産に登録され、建築ツアー参加者の増加など少なからず影響があった。その他、版画作品の熟覧プログラム「西洋版画を視る」、ボランティア・スタッフ自身の企画によるボランティアートや金曜ナイトトークなど新たに始まったもの、そして美術トーク、建築ツアーなど回数を増やして拡張したプログラムもある一方、ファン・デーのように一時休止になっている活動もある。スクール・ギャラリートークの一部として、ろう学校、盲学校や自閉症の子どもたちの受け入れも継続的に行ってきたことも加えておきたい。

当館は、主に90年代以降、特色あるコレクション、そしてル・コルビュジエ設計の建築といった独自のリソースを生かし、鑑賞教育及びその研究の興隆、学校連携の促進、美術館ボランティアの普及など、美術館教育を取り巻く時代の潮流と呼応して、教育活動を大きく展開してきたことは、前記録集の冒頭でも述べられた通りである。前教育普及室長の寺島は、当館の教育活動について、（1）教育普及が専門分化される以前：1959年～1993年、（2）教育普及が専門分化された後：1994年～2003年、（3）ボランティア制度導入後：2004年～2012年の三期に分けてその変遷を述べている[3]。本書で扱う2013年度から2019年度は、上述した通り、さまざまな変化はあったものの、大方のプログラムを改善しながらも継続しており、開館からの大きな流れの中で見れば依然（3）に属していると考える。

後になってみなければ断言できないが、新型コロナウイルス感染症拡大という大きな出来事を経験し、2020年以降は（4）として新しいフェーズに入るのではないかと予想している。2021年11月現在、ワクチン接種が進み感染は落ち着いてはいるが、依然変異ウイルスの発生に脅かされ、人との関わりが制限される状況が続いている。当館は施設整備のために休館中であり、2022年のリニューアルオープンに向けて準備を進めているが、開館後も当面は以前の通りにプログラムを実施するのは難しいことが予想される。こうした状況下、上述した美術館を取り巻くできごとを踏まえ、美術館の社会的役割について熟慮した上で、教育活動のあり方の再検証及び改変が求められている。刻々と状況が変わる中、2013年度から2019年度だけを切り取って明確に位置付けるのは現時点では難しいが、まずは積み重ねてきた実践の記録を残すことで、転換期を迎える今、更なる一歩を踏み出すための手がかりとしたい。

2021年11月

（国立西洋美術館　学芸課教育普及室長　酒井敦子）

註

1 https://www.zenbi.jp/data_list.php?g=4&d=3　(2021年6月16日取得)
「社会への貢献」「多様な価値と価値観の尊重」「設置の責任」「自由の尊重と確保」「経営の安定」「収集・保存の責務」「調査研究」「展示・教育普及」「研鑽の必要」「発信と連携」「法令・規範・倫理の遵守」の11の行動指針からなる。
2 京都国立近代美術館「感覚をひらく」(2017年〜)、茅ヶ崎市美術館「美術館まで(から)つづく道」(2019年)、金沢21世紀美術館『みんなの美術館　みんなと美術館　金沢21世紀美術館×手話×ろう者　活動のあゆみ』(2020年3月発行)など。
3 寺島洋子「国立西洋美術館、教育活動の歩み」『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』国立西洋美術館、2015年、pp. 8–14.

■歴代教育普及担当者(2021年11月現在)

氏名	職名 (現在もしくは任期終了時)	在任期間
寺島洋子	主任研究員	1994年度〜2018年度
佐藤厚子	客員研究員	1995年度〜2012年度
瀧井敬子	客員研究員	2001年度〜2010年度/ 2014年度
藤田千織	研究補佐員	2002年度〜2005年度
前薗茂宏	研究補佐員	2004年度〜2019年度
横山佐紀	主任研究員	2006年度〜2016年度
藁谷祐子	研究補佐員	2008年度〜2012年度
平松英子	客員研究員	2011年度〜2015年度
イシカワカズ	客員研究員	2014年度〜2015年度
杉浦央子	研究補佐員	2013年度〜2017年度
酒井敦子	主任研究員	2004年度〜2007年度/ 2017年度〜現在に至る
松尾由子	特定研究員	2018年度〜現在に至る
大木章子	研究補佐員	2019年度〜現在に至る
長谷川暢子	研究補佐員	2020年度〜現在に至る

略年表（2013年度～2019年度）

※ 国立西洋美術館関連の項には、教育普及にかかわる主な出来事と、教育活動の最初の事例を記し、本記録集の各章に関連する活動には●を付した。

年	国立西洋美術館関連		美術館・教育関連	
2013		●「Museum Start あいうえの」共催（2013年以降） ●国立科学博物館「教員のための博物館の日」協力（2013年以降） ●「台東区学びのキャンパスプランニング事業」への協力（2013年以降）	4月	東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館・アーツカウンシル東京、東京藝術大学主催「Museum Start あいうえの」開始
			5月	国立近現代建築資料館開館
			9月	秋田県立美術館が新たに開館
	7月	●3期ボランティア・スタッフ採用・養成研修	10月	アーツ前橋開館
2014	4月	「ジャック・カロ」展版画作品拡大鑑賞タッチパネル「みどころルーペ」（大日本印刷株式会社開発）	5月	著作権法一部改正（電子書籍に対応した出版権の整備）
	7月	「指輪」展ガイダンスパネル（大日本印刷株式会社開発）	9月	京都国立博物館に「平成知新館」開館
	8月	●ボランティア・スタッフによる立ち寄りプログラム開始（2016年～「ボランティアート」）	11月	東京都庭園美術館リニューアルオープン
2015			4月	大分県立美術館開館
			7月	「文化プログラムの実施に向けた文化庁の基本構想～2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とした文化芸術立国の実現のために～」発表
			10月	豊田市美術館リニューアルオープン
2016		●建築ツアー　オンライン事前申し込みシステムの導入	3月	神奈川県立近代美術館旧鎌倉館閉館
				高松市美術館リニューアルオープン
	1月	「国立西洋美術館出版物リポジトリ」開始	7月	熊本地震により被災した文化財レスキュー開始
	6月	●4期ボランティア・スタッフ採用・養成研修	9月	東京都写真美術館リニューアルオープン
	7月	国立西洋美術館を構成資産に含む「ル・コルビュジエの建築作品ー近代建築運動への顕著な貢献ー」が世界文化遺産に登録		
	9月	国立美術館・博物館の夜間開館を拡充		
2017		展示パネル等の4ヶ国語対応開始（「アルチンボルド展」以降）	3月	幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領改定（告示）
		●展示作品パネルを展覧会担当者執筆（2006年「ベルギー王立美術館展」～2017年「アルチンボルド展」は主に教育普及室が執筆）	5月	全国美術館会議が、「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」を採択
			6月	「文化芸術基本法」施行（「文化芸術振興基本法」一部改正）
			8月	富山県美術館全面開館

年	国立西洋美術館関連		美術館・教育関連	
2018	3月	●1期ボランティア・スタッフ任期満了	3月	高等学校学習指導要領改定（告示）
	6月	●「西洋版画を視る」熟覧プログラム開始		第32回学芸員研修会「社会状況の多様化に美術館はどう向き合うか」
			4月	国立映画アーカイブ開館
			6月	「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」施行
			7月	国立文化財機構に「文化財活用センター」設置
			10月	「文部科学省設置法の一部を改正する法律」施行
			12月	著作権法改正（TPP11協定の発効に伴う著作物などの保護期間延長など）
2019	2月	●「ル・コルビュジエ　絵画から建築へ ―ピュリスムの時代」開催に伴い、会期中、旧館長室を含む特別建築ツアー実施	3月	福岡市美術館リニューアルオープン
				東京都現代美術館リニューアルオープン
	3月	●2期ボランティア・スタッフ任期満了	6月	豊田市美術館リニューアルオープン
	6月～	●5期ボランティア・スタッフ採用・養成研修		国立科学博物館が「科学系博物館イノベーションセンター」を設置
			9月	文化庁が「あいちトリエンナーレ2019」に対し公布予定だった補助金7,800万円の不交付を決定
				第25回ICOM京都大会開催
			10月	台風19号により川崎市市民ミュージアムの収蔵品約23万点が浸水被害を受け、文化財レスキュー開始
			11月	文化審議会に「博物館部会」設置
2020	2月	●新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、全ての教育普及プログラムを中止	1月	ブリヂストン美術館が「アーティゾン美術館」に名称変更し（2019年7月）、開館
	3月	●3期ボランティア・スタッフ任期満了	3月	文化庁が「あいちトリエンナーレ2019」の補助金を一部減額して6,600万円余りの交付を決定

凡例

- 本書第1部は、1章：常設展関連プログラム、2章：企画展関連プログラム、3章：人材育成プログラムに分け、2013年度〜2019年度に当館で実施された教育活動のデータをまとめたものである。ただし、展覧会、及び展覧会カタログ、国立西洋美術館ニュース「ゼフュロス」、「国立西洋美術館紀要」は省いた。
- 展覧会、作品名などの固有名詞は、当館出版物に従った。ただし、作品名については2021年現在の名称を使用した。
- 年代の記載はすべて西暦とし、各プログラムのデータは年度ごとに記載した。
- 第1部　各章各項の担当者（例えば、1–1は1章1項のスクール・プログラム、2–1は2章1項の講演会・スライドトークを指す）

  寺島洋子：1–1, 1–2, 1–3, 1–4, 1–5, 1–6

  横山佐紀：1–7

  酒井敦子：1–5（データ分析）, 1–9, 1–10, 2–1, 2–2, 2–3, 2–4, 2–5, 3–3, 3–4

  松尾由子：1–1, 1–2, 1–3, 1–4, 1–5, 1–6, 1–8, 3–1, 3–2

第1部 活動記録

1 常設展関連プログラム

1 スクール・プログラム
2 美術トーク
3 建築ツアー
4 鑑賞教材
5 どようびじゅつ
6 ファン・ウィズ・コレクション
7 ファン・デー
8 ボランティアート
9 美術館でクリスマス
10 作品熟覧プログラム

1-1

スクール・プログラム

開始時期：2005年度

スクール・ギャラリートーク

概要： 主に学校団体（60名以下）の児童生徒を対象とした対話型のギャラリートーク。本プログラムの目的は、常設展で作品を見ることの楽しさを体験してもらうことはもとより、学校教育を支援することでもある。トークは6〜10人の少人数のグループに分かれて行い、児童生徒が作品をじっくり見ること、感じたことや考えたことを自分の言葉で表現することを重視している。そこで、各グループを担当するボランティア・スタッフの役割は、児童生徒の「見る・考える・話す・聞く」活動を促し、助けることである。多様な主題、時代、表現の作品3点を約45分かけて鑑賞する。事前予約制で、1年を通じて平日（火曜日〜金曜日）の開館日に行われている。

2013年度以降：

美術館の開館日数などが影響して年度によって利用する学校の数に多少の上下はあるものの、プログラム開始から15年近くが経過して、ほぼ一定した数の学校が利用するようになった。中には、毎年このプログラムに参加する常連校も増えてきている。通年で小学校の利用が多いが、夏休み期間中はクラブ活動の一環として訪れる中学校が多い。また、来館する対象の特徴や要望に対して柔軟かつ適切に対応することで、幼稚園や特別支援学校の利用も増えてきた。例えば盲学校の来館の場合には館内の絵画彫刻室や保存修復室との連携により、実物の彫刻作品を触って鑑賞する機会を設けている。台東区教育委員会が主催する「学びのキャンパスプランニング」（2013年度より連携）の一環として、2018年度からは新たな試みである学校団体向けの建築ツアーを行った。将来的には建築ツアーもスクール・プログラムの一つとして広く提供していく可能性が出てきている。建築ツアーについては近年さまざまな団体より申し込みがあるため、「学びのキャンパスプランニング」での受け付けを含めた実績報告は建築ツアーの章に譲る。

オリエンテーションと職場訪問

概要： 60名以上の団体には、ギャラリートークの代わりに講堂でのオリエンテーションを提供している。オリエンテーションで行う講堂のスクリーンを利用した作品鑑賞においても、ギャラリートーク同様に、児童生徒の能動的な鑑賞を促している。このプログラムを利用するのは中学校・高等学校が多く、常設展や特別展の一般的なオリエンテーションだけでなく、学校側の希望する特定のテーマで行うこともある。

職場訪問は、学校の授業の一環として来館する生徒の質問に職員が答えるプログラム。質問内容は、美術館での仕事や所蔵作品に関するものなどさまざまである。中学校からの申し込みが最も多く、なかでも修学旅行を利用した全国各地の学校団体による参加がその大半を占める。

オリエンテーション、職場訪問ともに事前申込制で主に教育普及室の職員が対応している。大学などからの依頼については、内容によって美術史、情報資料、保存修復などの専門の研究員が対応している。

2013年度以降：

オリエンテーションと職場訪問を利用する学校数は、年度により変動するが、オリエンテーションの利用は高等学校が多く、職場訪問は中学校が多いという傾向に変わりはない。当初、職場訪問では生徒の質問に答えることを優先していたが、修学旅行で来館する中学校の中には美術館に行ったことのない生徒もいるため、近年は質問に答えるだけでなく常設展の作品を一緒に鑑賞するなど、美術館体験の機会を提供することを重視している。

スクール・ギャラリートークのコース

さまざまな時代、主題、表現の作品を子どもが楽しめるよう、常設展示のさまざまなジャンルと時代の美術作品から絵画・彫刻作品を約3点選んだ、ハイライト・ツアーである。少人数でじっくり見るためにグループごとに異なる作品をまわることから、約10種類のコースを設けている。コースは展示替えや学校からの要望により適宜変更している。以下に一例として2018年度〜2019年度のコースを紹介する。

Aコース
1. オーギュスト・ロダン《説教する洗礼者聖ヨハネ》(彫刻)
2. マリオット・ディ・ナルド
《「聖ステパノ伝」を表した祭壇画プレデッラ》
3. クロード・モネ《睡蓮》

Aコースの作品(左から1, 2, 3)

Bコース
1. コルネリス・デ・ヘーム《果物籠のある静物》
2. ベルナルド・カヴァッリーノ《ヘラクレスとオンファレ》
3. オーギュスト・ロダン《オルフェウス》(彫刻)

Cコース
1. ポール・シニャック《サン=トロペの港》
2. エミール=アントワーヌ・ブールデル《弓をひくヘラクレス(習作)》
(彫刻・屋内)
3. ジャン=マルク・ナティエ《マリー=アンリエット・ベルトロ・ド・プレヌフ夫人の肖像》orマリー=ガブリエル・カペ《自画像》どちらかを選択。または2点を比較。

Dコース
1. オーギュスト・ロダン《地獄の門》(彫刻)
雨天時:ヨース・ファン・クレーフェ《三連祭壇画:キリスト磔刑》
2. ジャン=バティスト=カミーユ・コロー《ナポリの浜の思い出》
3. ジャクソン・ポロック《ナンバー8, 1951　黒い流れ》

Eコース
1. オーギュスト・ロダン《オルフェウス》(彫刻)
2. ジャン=フランソワ・ミレー《春(ダフニスとクロエ)》orヨハン・ハインリヒ・フュースリ《グイド・カヴァルカンティの亡霊に出会うテオドーレ》どちらかを選択。
3. ヨース・ファン・クレーフェ《三連祭壇画:キリスト磔刑》

Fコース
1. ヤコポ・デル・セッライオ
《奉納祭壇画:聖三位一体、聖母マリア、聖ヨハネと寄進者》
2. モネの作品から1点選択。
3. エミール・アントワーヌ・ブールデル《弓をひくヘラクレス(習作)》
(彫刻・屋内)

Gコース
1. 新館1階 最後の部屋の作品から1点選択。
2. ニコラ・ド・ラルジリエール《幼い貴族の肖像》
3. オーギュスト・ロダン《考える人》(彫刻・屋内)

Hコース
1. オーギュスト・ロダン《考える人(拡大作)》(彫刻・屋外)
雨天時:オーギュスト・ロダン《考える人》(彫刻・屋内)
2. ダフィット・テニールス(子)《聖アントニウスの誘惑》
3. アルベール・グレーズ《収穫物の脱穀》

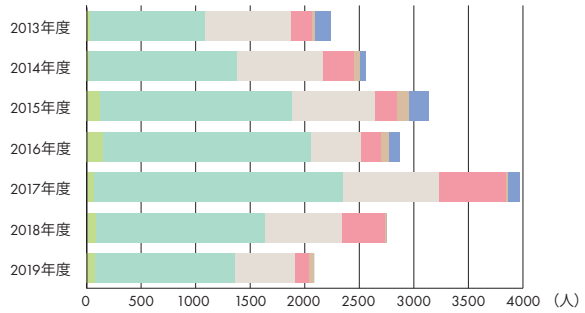
Iコース
1. オーギュスト・ロダン《カレーの市民》(彫刻)
雨天時:ヴィルヘルム・ハンマースホイ《ピアノを弾く妻イーダのいる室内》
2. フランク・ブラングィン《しけの日》
3. コルネリス・デ・ヘーム《果物籠のある静物》

スクール・プログラム　年度別参加者数

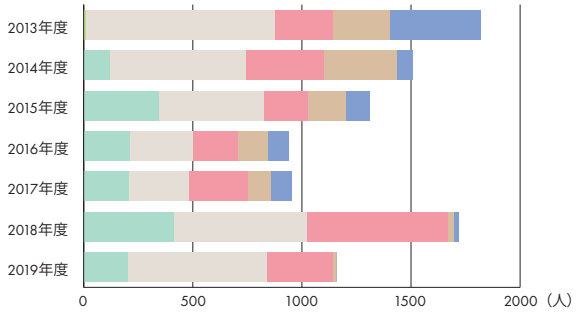
プログラム／年度	スクール・ギャラリートーク							オリエンテーション							職場訪問					合計（人）
	幼	小	中	高	専･大･院	成人	計	幼	小	中	高	専･大･院	成人	計	小	中	高	専･大･院	計	
2013年度	31	1052	788	200	30	138	2239	10	0	870	262	264	416	1822	0	67	6	0	73	4134
2014年度	24	1356	795	285	46	55	2561	0	120	626	357	335	73	1511	0	27	0	0	27	4099
2015年度	123	1769	752	209	110	177	3140	0	348	479	204	171	108	1310	0	32	9	0	41	4491
2016年度	156	1903	454	192	68	97	2870	0	214	288	204	140	93	939	0	16	7	0	23	3832
2017年度	73	2274	888	614	15	106	3970	0	208	276	273	101	94	952	0	37	9	2	48	4970
2018年度	91	1548	705	395	11	0	2750	0	418	605	650	25	20	1718	7	79	17	0	103	4571
2019年度	77	1291	541	137	39	0	2085	0	203	639	303	14	0	1159	1	29	2	0	32	3276
合計	575	11193	4923	2032	319	573	19615	10	1511	3783	2253	1050	804	9411	8	287	50	2	347	29373

表中の各数値のうち、スクール・ギャラリートークにおいて特別支援学校・学級等の参加は、2013年度は高等学校9名（3件）、2014年度は小学校及び高等学校77名（2件）、2015年度は小学校36（1件）、2016年度は小学校及び高等学校63名（3件）、2017年度は小学校36名（1件）、2018年度は小学校及び高等学校58名（3件）、2019年度は小学校及び高等学校56名（3件）。

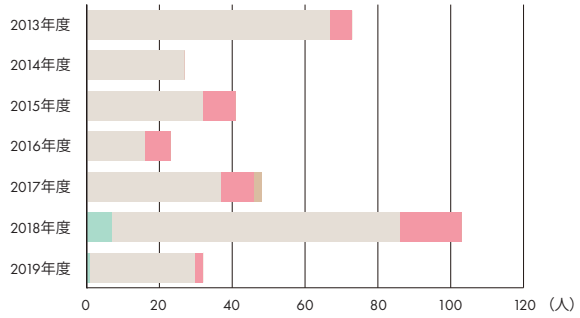
スクール・ギャラリートーク



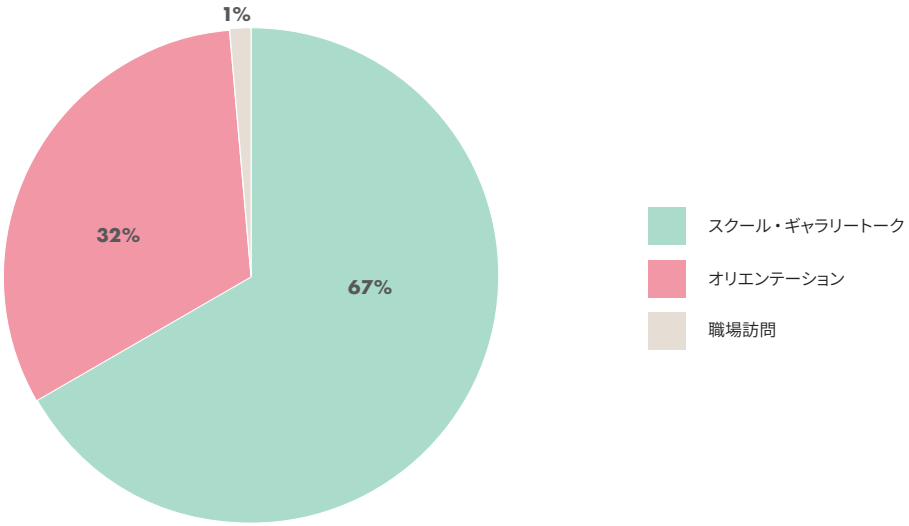
オリエンテーション



職場訪問



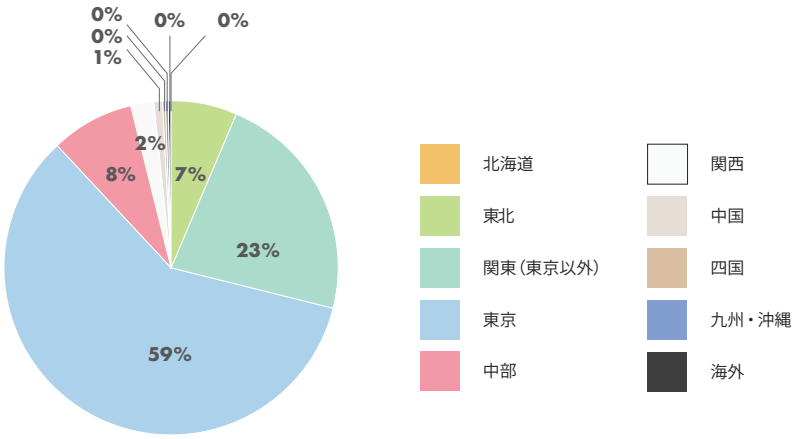
プログラム別参加者数



スクール・プログラム　参加件数の地域別割合

地域 / 年度	北海道	東北	関東（東京以外）	東京	中部	関西	中国	四国	九州・沖縄	海外	年度合計（人）
2013年度	0	11	25	62	15	3	0	0	1	0	117
2014年度	0	7	24	66	7	2	0	0	0	0	106
2015年度	0	6	32	69	10	1	0	0	2	0	120
2016年度	0	9	32	60	6	3	1	1	0	0	112
2017年度	0	8	30	78	7	5	3	0	0	1	132
2018年度	0	7	21	74	12	2	3	0	0	0	119
2019年度	0	4	13	55	8	1	0	0	0	0	81
地域合計	0	52	177	464	65	17	7	1	3	1	787

6割が東京都内からの来館であり、関東を含めると全体の8割に上る。残りは全国各地からの来館となるが、中部や、東北など、北陸新幹線や東北・山形・秋田・北海道新幹線の停車する上野駅へ比較的アクセスのよい地域が多い。関西、四国、九州、沖縄、北海道と、距離が離れると共に件数が少なくなることが分かる。



プログラム参加団体

2013年度

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
4/5	金	東京都	アトリエ虹	4〜6	18	○		
4/11	木	茨城県	筑波大学情報学群知識情報・図書館学類	1・3	129		○	
4/12	金	岩手県	花巻市立石鳥谷中学校	3	36	○		
4/16	火	青森県	弘前市立第二中学校	3	5		●	
4/17	水	千葉県	美術館を読む会	成人	25		●	
4/18	木	秋田県	鹿角市立花輪第一中学校	3	6			○
4/25	木	新潟県	佐渡市桐川中学校	3	8			○
4/26	金	山形県	東北芸術工科大学美術史・文化財保存修復学科	2	23		○	
5/1	水	埼玉県	西武学園文理中学校	3	42	○		
5/9	木	長野県	上田市立清明小学校	6	6	○		
5/14	火	静岡県	社会保険センター浜松　美術館めぐり	成人	48		●	
5/14	火	東京都	東洋美術学校	1	11	○		
5/15	水	兵庫県	稲美町立稲美中学校	3	10	○		
5/15	水	宮城県	仙台市立柳生中学校	3	4			○
5/16	木	岐阜県	羽鳥市立羽鳥中学校	3	5			○
5/16	木	東京都	上智大学学芸員課程	1〜4	40		○	
5/17	金	岩手県	盛岡市立乙部中学校	3	5	○		
5/18	土	東京都	国際博物館の日	成人	30	○		
5/21	火	静岡県	社会保険センター浜松　美術館めぐり	成人	88		●	
5/24	金	神奈川県	防衛大学校人間文化学科	3	35		●	
5/31	金	山梨県	甲府市立新田小学校	6	40	○		
5/31	金	東京都	荒川区立尾久小学校	5	58	○		
6/1	土	東京都	ベルカント保育園	3〜5歳	10		○	
6/4	火	福島県	南会津町立荒海小学校	6	23	○		
6/4	火	東京都	放送大学	不明	19	○		
6/5	水	愛知県	西尾市立平坂中学校	3	6	○		
6/6	木	千葉県	柏市立柏中学校	1	170		○	
6/6	木	愛知県	知多市立知多中学校	3	3			○
6/7	金	愛知県	大府市立大府北中学校	3	5			○
6/11	火	愛知県	大府市立大府西中学校	3	4			○
6/11	火	東京都	大田区立大森第六中学校	1	24	○		
6/12	水	愛知県	豊川市立御津中学校	3	5			○
6/12	水	新潟県	長岡市立上組小学校	6	93	○		
6/18	火	愛知県	武富町立武豊中学校	3	3	○		
6/18	火	神奈川県	県立小田原城北工業高等学校	1・3	77		○	
6/19	水	愛知県	江南市立古知野中学校	3	5			○
6/20	木	東京都	千代田区立和泉小学校	4	45	○		
6/20	木	東京都	台東区立上野小学校	5	52	○		
7/10	水	東京都	江戸川区立上小岩小学校	5	73	○		
7/11	木	東京都	北区立王子桜中学校	1	5			○
7/19	金	東京都	玉川学園中学部	1	223		○	
7/19	金	東京都	玉川学園中学部（IBクラス）	1	25	○		
7/23	火	千葉県	柏市立豊四季中学校	1〜3	26	○		
7/24	水	栃木県	下野市立南河内第二中学校	1〜3	9	○		
7/24	水	東京都	中野区立中野中学校	1〜3	15	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション (○は常設展、●は企画展)	職場訪問
7/25	木	千葉県	柏市立逆井中学校	1・3	13	○		
7/25	木	神奈川県	厚木市立依知中学校	1〜3	15	○		
7/26	金	東京都	葛飾区立双葉中学校夜間学級	1	6	○		
7/30	火	埼玉県	さいたま市立大成中学校	1〜3	28	○		
7/31	水	東京都	江戸川区立二之江中学校	1・2	18	○		
7/31	水	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	30	○		
8/1	木	東京都	品川区立荏原第一中学校	1・2	13	○		
8/1	木	東京都	足立区立千寿青葉中学校	1〜3	7	○		
8/6	火	千葉県	浦安市立富岡中学校	1・2	25	○		
8/6	火	長野県	長野県高遠高等学校	1・2	22	○		
8/7	水	東京都	江東区立深川第四中学校	1〜3	15	○		
8/8	木	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	30	○		
8/20	火	千葉県	船橋市立船橋中学校	1〜3	23	○		
8/22	木	神奈川県	横浜市立城郷中学校	1〜3	13	○		
8/23	金	東京都	武蔵野市立第六中学校	1・2	5	○		
8/27	火	神奈川県	県立横浜市緑ヶ丘高等学校	1・2	26	○		
8/27	火	茨城県	茨城県県西生涯学習センター	成人	62		○	
8/28	水	東京都	西東京市立ひばりが丘中学校	1〜3	17	○		
8/28	水	東京都	大和郷幼稚園	年長	14	○		
8/29	水	東京都	大和郷幼稚園	年長	17	○		
9/4	水	青森県	おいらせ町立木内々小学校	6	6	○		
9/10	火	東京都	葛飾区立原田小学校	5	43	○		
9/11	水	大阪府	関西大学	不明	4		○(研究資料センター)	
9/21	土	東京都	としまコミュニティ大学	成人	33	○		
9/25	水	和歌山県	県立古佐田丘中学校	3	5	○		
9/27	金	東京都	江戸川区立葛西小学校日本語学級	1〜6	27	○		
10/11	金	東京都	文京区立第十中学校	2	51	○		
10/11	金	東京都	聖心女子学院生涯学習センター	成人	27		○	
10/17	木	東京都	多摩カレッジ(多摩信用金庫多摩らいふ倶楽部)	成人	15		○	
10/18	金	東京都	芝浦工業大学付属中学校	1	184	○		
10/24	木	東京都	台東区立忍岡小学校	4	44	○		
11/8	金	東京都	株式会社びゅうトラベルサービス	成人	12		●	
11/13	水	東京都	都立文京盲学校	高1・2	6	○		
11/15	金	茨城県	土浦日本大学高等学校	1	52	○		
11/21	木	東京都	玉川聖学院中等部	1	120		○	
11/22	金	東京都	女子美術大学付属高等学校	2	185		○	
11/22	金	東京都	江東区立亀戸中学校	1	18	○		
11/26	火	東京都	トキワ松学園高等学校	2	31	○		
11/27	水	東京都	台東区立谷中小学校	5	48	○		
11/28	木	茨城県	坂東市立逆井山小学校	6	11	○		
11/29	金	千葉県	市原市立千種中学校	1	6			○
11/29	金	東京都	台東区立柏葉中学校	1	6			○
12/3	火	東京都	荒川区立第一日暮里小学校	5	45	○		
12/10	火	東京都	獨協中学校	2	208		○	
12/10	火	東京都	東京都市大学等々力中学校	3	144		○	
12/11	水	大分県	県立中津南高等学校	2	6			○
12/12	木	秋田県	秋田市立秋田西中学校	2	5			○
12/13	金	東京都	都立桜修館中等教育学校	1	4	○		
12/18	水	東京都	大田区立志茂田小学校	6	44	○		
12/26	木	東京都	世田谷区立富士中学校	1・2	10	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
2014/1/10	金	神奈川県	川崎市立戸手小学校	6	39	○		
1/15	水	千葉県	美術館を読む会	成人	27		●	
1/18	土	東京都	中央大学総合政策学部	3	6		●	
1/21	火	東京都	昭和女子大学附属昭和高等学校	3	39	○		
1/23	木	神奈川県	横浜国立大学教育人間科学部附属特別支援学校	1〜3	6	○		
1/24	金	京都府	京都造形美術大学通信教育部	不明	12		○	
1/24	金	東京都	東京鳥取県人会	成人	50		●	
1/24	金	神奈川県	川崎市立玉川小学校	6	28	○		
1/28	火	東京都	本郷学園中学校・高等学校	中1〜高2	12	○		
1/31	金	東京都	足立区立青井中学校	1	15	○		
2/4	火	東京都	中央区立明石小学校	6	36	○		
2/5	水	千葉県	西武台千葉中学校	1	54	○		
2/6	木	東京都	都立八王子盲学校	高2〜3	6	○		
2/13	木	神奈川県	厚木市立相川公民館	成人	47		●	
2/20	木	東京都	国立教育政策研究所社会教育実践センター	成人	15		●	
2/25	火	東京都	東京工芸大学	不明	15		●	
2/26	水	東京都	小中一貫教育校高砂けやき学園葛飾区立高砂小学校	5	33	○		
2/27	木	東京都	荒川区立第三瑞光小学校	5	51	○		
2/28	金	東京都	小中一貫教育校高砂けやき学園葛飾区立高砂小学校	5	33	○		
3/4	火	東京都	葛飾区立白鳥小学校	5	112	○		
3/7	金	東京都	台東区立松葉小学校	3	32	○		
3/27	木	東京都	公益財団法人立川市地域文化振興財団	成人・子ども	45	○		
3/28	金	東京都	杉並ユネスコ協会	成人	30	○		

2014年度

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
4/15	火	岩手県	八幡平市立西根中学校	3	5			○
4/15	火	岩手県	盛岡市立仙北中学校	3	17	○		
4/24	木	東京都	港区立御成門小学校	4・6	55	○		
5/8	木	宮城県	石巻市立蛇田中学校	3	6			○
5/17	土	東京都	足立区立第一中学校	不明	17	○		
5/23	金	神奈川県	平塚市立神明中学校	2	28	○		
5/27	火	東京都	千代田区立和泉小学校	4	44	○		
5/28	水	三重県	桑名市立明正中学校	3	6			○
5/29	木	東京都	上智大学学芸員課程	1〜4	49		○	
5/29	木	東京都	立教大学	3・4	25		○	
5/29	木	愛知県	高浜市立高浜中学校	3	4	○		
5/30	金	山梨県	甲府市立新田小学校	6	38	○		
6/3	火	東京都	台東区世界遺産登録推進室世界遺産登録推進担当	成人	8		○	
6/4	水	福島県	福島県南会津町立荒海小学校	6	15	○		
6/5	木	千葉県	柏市立柏中学校	1	180		○	
6/6	金	埼玉県	浦和ルーテル学院高等学校	2	15	○		
6/6	金	千葉県	千葉大学文学部	2〜4	11		●	
6/11	水	東京都	台東区立台東育英小学校	6	46	○		
6/12	木	愛知県	みよし市立北中学校	3	4			○

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション (○は常設展、●は企画展)	職場訪問
6/13	金	東京都	荒川区立尾久小学校	5	74	○		
6/13	金	神奈川県	公文国際学園中学校	3	27	○		
6/17	火	東京都	東洋美術学校	1	9	○		
6/18	水	新潟県	長岡市立上組小学校	6	100	○		
7/1	火	千葉県	城西国際大学	1	6	○		
7/8	火	東京都	ヒコ・みづのジュエリーカレッジ	3	22		●	
7/9	水	東京都	江戸川区立上小岩小学校	5	50	○		
7/9	水	東京都	修徳中学校	1〜3	144		○	
7/10	木	東京都	ヒコ・みづのジュエリーカレッジ	3	24		●	
7/10	木	東京都	台東区立上野小学校	5	52	○		
7/11	金	東京都	北区立王子桜中学校	1	6			○
7/16	水	東京都	ヒコ・みづのジュエリーカレッジ	2	21		●	
7/16	水	東京都	お茶の水女子大学	1〜4	24	○		
7/17	木	神奈川県	橘学苑高等学校	1	33	○		
7/23	水	東京都	武蔵野東小学校	6	42	○		
7/24	木	神奈川県	横浜市立東永谷中学校	1〜3	23	○		
7/24	木	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	30	○		
7/25	金	東京都	東大和市立第四中学校	1・2	10	○		
7/25	金	東京都	小金井市立南中学校	1〜3	30	○		
7/29	火	千葉県	八千代松陰高等学校	1・2	10	○		
7/29	火	東京都	学童保育リックキッズ	1〜3	13	○		
7/30	水	東京都	学童保育リックキッズ	1〜3	15	○		
7/31	木	東京都	江戸川区立鹿本中学校	1〜3	15	○		
7/31	木	東京都	中央高等学院	2・3	2	○		
7/31	木	東京都	立教大学	1〜3	15		●	
8/1	金	東京都	品川区立荏原第一中学校	1〜3	10	○		
8/6	水	千葉県	習志野市立第六中学校	1〜3	18	○		
8/6	水	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	28	○		
8/8	金	東京都	国立教育政策研究所社会教育実践研究センター	成人	15		●	
8/8	金	東京都	足立区立青井中学校 江東区立深川第四中学校	1〜3	20	○		
8/8	金	千葉県	千葉大学	1〜4	7		●	
8/19	火	三重県	県立いなべ総合学園高等学校	2	54	○		
8/20	水	埼玉県	川口市立戸塚西中学校	1〜3	25	○		
8/22	金	東京都	足立区立伊興中学校	1〜3	11	○		
8/26	火	東京都	西東京市立田無第四中学校	2	10	○		
8/27	水	千葉県	松戸市立河原塚中学校	1〜3	10	○		
8/28	木	東京都	大和郷幼稚園	年長	15	○		
8/28	木	千葉県	栄町立栄中学校	1・2	10	○		
8/29	金	東京都	大和郷幼稚園	年長	9	○		
9/3	水	千葉県	城西国際大学	3	7	○		
9/5	金	東京都	大田区立矢口東小学校	6	39	○		
9/9	火	東京都	葛飾区立原田小学校	5	39	○		
9/9	火	東京都	ヒコ・みづのジュエリーカレッジ	1	53		●	
9/10	水	青森県	おいらせ町立木内々小学校	6	10	○		
9/11	木	東京都	ヒコ・みづのジュエリーカレッジ	1	76		●	
9/20	土	東京都	としまコミュニティ大学	成人	34	○		
10/1	水	千葉県	西武台千葉中学校	1	73	○		
10/7	火	東京都	豊島区立長崎小学校	6	20	○		
10/7	火	石川県	県立金沢辰巳丘高等学校芸術コース	2	37	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
10/8	水	東京都	旭化成アミダス（株）	成人	21	○		
10/10	金	東京都	台東区立金竜小学校	5	66	○		
10/17	金	東京都	芝浦工業大学附属中学校	1	176	○		
10/30	木	埼玉県	武蔵野音楽大学附属高等学校	1〜3	71		○	
10/30	木	埼玉県	武蔵野音楽大学附属高等学校	1〜3	71	○		
11/6	木	千葉県	聖徳大学附属女子中学校	1	89	○		
11/7	金	東京都	文京区立第十中学校	2	56	○		
11/11	火	茨城県	東海村立東海南中学校	2	7	○		
11/12	水	静岡県	浜松市立篠原小学校	6	30	○		
11/13	木	東京都	玉川聖学院中等部	1	88		○	
11/14	金	東京都	女子美術大学附属高等学校	2	209		○	
11/17	月	東京都	都立文京盲学校	高1・2	35	○		
11/21	金	埼玉県	県立大宮光陵高等学校	1・3	77		○	
11/21	金	埼玉県	北本市立西中学校	2	14	○		
11/22	土	東京都	都市・建築城北会（都立戸山高校同窓会）	成人	50		○	
11/26	水	東京都	文京区立誠之小学校	5	39	○		
11/27	木	東京都	台東区立谷中小学校	5	56	○		
11/28	金	東京都	日野市立七生中学校	2	24	○		
11/28	金	茨城県	牛久市立牛久第二中学校	2	5	○		
12/1	月	東京都	文京区立誠之小学校	5	39	○		
12/3	水	東京都	荒川区立第一日暮里小学校	5	30	○		
12/4	木	東京都	文京区立誠之小学校	5	39	○		
12/4	木	東京都	中央区立明石小学校	5	24	○		
12/5	金	東京都	世田谷区立駒沢小学校	5	63	○		
12/9	火	東京都	葛飾区立白鳥小学校	5	90	○		
12/10	水	東京都	獨協中学校	2	214		○	
12/12	金	東京都	法政大学中学校	2	17	○		
12/16	火	東京都	小中一貫教育校高砂けやき学園葛飾区立高砂小学校	5	38	○		
12/17	水	東京都	小中一貫教育校高砂けやき学園葛飾区立高砂小学校	5	37	○		
12/18	木	東京都	葛飾区立幸田小学校	6	120		○	
12/19	金	東京都	荒川区立第三峡田小学校	5・6	44	○		
12/24	水	東京都	台東区立忍岡小学校	4	36	○		
12/25	木	千葉県	流山市立北部中学校	1・2	18	○		
12/26	金	東京都	葛飾区立堀切中学校	1・2	7	○		
2015/1/7	水	東京都	都立大崎高等学校定時制	1〜4	28	○		
			都立浅草高等学校					
			都立桐ヶ丘高等学校					
			都立小金井工業高等学校					
1/16	火	東京都	一橋大学大学院商学研究科	1	32		○	
3/24	火	静岡県	長泉町立長泉中学校	1・2	24	○		
3/31	火	東京都	アトリエ虹	4〜6	15	○		

2015年度

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
4/16	木	新潟県	佐渡市立相川中学校	3	5			○
4/17	金	東京都	都立葛飾総合高等学校	2	12	○		
4/18	土	東京都	青山学院大学	1	90		○	

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション (○は常設展、●は企画展)	職場訪問
4/19	日	熊本県	熊本県南阿蘇村議会文教厚生常任委員会	成人	8		○	
4/23	木	山梨県	南アルプス市立豊小学校	6	7	○		
5/7	木	東京都	大田区立志茂田小学校	6	40	○		
5/13	水	宮城県	仙台市立柳生中学校	3	7			○
5/14	木	山形県	山形市立第十中学校	3	5			○
5/14	木	東京都	上智大学	1〜4	33		○	
5/15	金	宮城県	石巻市立住吉中学校	3	4			○
5/18	水	東京都	国際博物館の日	成人	20	○		
5/20	水	千葉県	美術館を読む会	成人	20		●	
5/20	水	愛知県	稲沢市立祖父江中学校	3	23	○		
5/21	木	東京都	東洋美術学校	1	10	○		
5/26	火	東京都	葛飾区立原田小学校	5	56	○		
5/27	水	東京都	千代田区立和泉小学校	4	37	○		
5/28	木	東京都	獨協中学校	2	210		○	
5/28	木	京都府	京都市立烏丸中学校	3	3			○
5/29	金	山梨県	甲府市立新田小学校	6	29	○		
5/29	金	岐阜県	山県市立美山中学校	3	37	○		
6/4	木	東京都	ニューインターナショナルスクール・オブ・ジャパン	中1〜高3	40	○		
6/5	金	埼玉県	浦和ルーテル学院高等学校	2	17	○		
6/8	土	東京都	台東区立台東育英小学校	6	49	○		
6/9	火	千葉県	つくば開成高等学校柏校	1〜3	25	○		
6/11	木	愛知県	みよし市立北中学校	3	3			○
6/12	金	千葉県	柏市立柏中学校	1	179		○	
6/17	水	群馬県	県立西邑楽高等学校	2	33	○		
6/17	水	新潟県	長岡市立上組小学校	6	70	○		
6/25	木	愛知県	名古屋市立名南中学校	3	38	○		
6/26	金	千葉県	柏市立富勢中学校	1	97	○		
6/27	土	埼玉県	駿河台大学	1〜4	7		○(常設及び研究資料センター)	
6/30	火	東京都	江戸川区立上小岩第二小学校	6	55	○		
7/2	水	東京都	墨田区立両国小学校	6	87	○		
7/3	金	東京都	荒川区立諏訪台中学校	1	29	○		
7/3	金	東京都	雙葉小学校	6	80		○	
7/7	火	千葉県	聖徳大学短期大学部	1	4	○		
7/9	木	東京都	江戸川区立上小岩小学校	5	80	○		
7/9	木	東京都	武蔵野ファッションカレッジ	1	44	○		
7/10	金	東京都	足立区立寺地小学校	6	39	○		
7/10	金	東京都	北区立王子桜中学校	1	5			○
7/11	土	東京都	戸板女子短期大学	1	5		○	
7/14	火	東京都	台東区立千束小学校	5	25	○		
7/14	火	東京都	江戸川区立第三松江小学校	6	95	○		
7/15	水	東京都	荒川区立第二日暮里小学校	5	24	○		
7/22	水	神奈川県	県立横浜緑ヶ丘高等学校	1〜2	2	○		
7/23	木	東京都	都立永福学園	1〜3	14	○		
7/23	木	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	30	○		
7/24	金	東京都	武蔵野東小学校	6	29	○		
7/28	火	東京都	武蔵野東小学校	6・保護者	36	○		
7/28	火	神奈川県	相模原市立鵜野森中学校	1〜3	21	○		
7/29	水	千葉県	柏市立光ヶ丘中学校	1〜2	15	○		
7/29	水	栃木県	上三川町立本郷中学校	1〜3	8	○		
7/30	木	埼玉県	川口市立元郷中学校	1〜3	17	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
7/30	木	神奈川県	厚木市立林中学校	1〜3	20	○		
7/31	金	埼玉県	さいたま市立大成中学校	1〜3	23	○		
7/31	金	埼玉県	県立南稜高等学校	1〜3	14	○		
8/4	火	東京都	東大和市立第四中学校	1〜3	14	○		
8/4	火	東京都	町田市立堺中学校	1〜3	24	○		
8/5	水	千葉県	市原市役所生涯学習部ふるさと文化課	成人	40	○		
8/5	水	東京都	都立安立西高等学校	1〜3	12	○		
8/6	木	東京都	アトリエあおき（小学生）	2〜5	10	○		
8/7	金	千葉県	浦安市立富岡中学校	1〜3	18	○		
8/11	火	千葉県	栄町立栄中学校	1〜2	10	○		
8/13	木	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	30	○		
8/20	木	神奈川県	横浜市立汐見台中学校	1〜3	8	○		
8/20	木	東京都	足立区立第十三中学校	1〜3	15	○		
8/21	金	東京都	世田谷区立三宿中学校	1〜3	5	○		
8/25	火	東京都	大和郷幼稚園	年長	15	○		
8/27	木	東京都	大和郷幼稚園	年長	9	○		
8/27	木	東京都	武蔵野市立第四中学校	1〜3	14	○		
8/28	金	東京都	大和郷幼稚園	年長	7	○		
9/1	火	千葉県	城西国際大学	3・4	16	○		
9/5	土	東京都	としまコミュニティ大学	成人	41	○		
9/9	水	東京都	聖心女子学院初等科	6	127		○	
9/9	水	青森県	おいらせ町立木内々小学校	6	5	○		
9/11	金	東京都	杉並区立井草中学校	1	5	○		
9/14	月	東京都	明治大学	1	5		○（アートライブラリー）	
10/1	木	栃木県	栃木県大田原市川西女性セミナー	成人	25	○		
10/16	金	東京都	芝浦工業大学付属中学校	1	162	○		
10/20	火	東京都	台東区立台東育英小学校	4	56	○		
10/21	水	東京都	台東区立金竜小学校	5	66	○		
10/22	木	静岡県	静岡市立駒形小学校	6	41	○		
10/23	金	栃木県	宇都宮市立陽南小学校	6	8	○		
10/23	金	長野県	上田市立清明小学校	6	4	○		
10/24	土	神奈川県	文教大学	3	10		○（びじゅつーる）	
11/4	水	埼玉県	獨協埼玉高等学校	3	1			○
11/6	金	茨城県	土浦日本大学高等学校	1	20	○		
11/6	金	東京都	文京区立第十中学校	2	63	○		
11/6	金	千葉県	県立国府台高等学校	1	8			○
11/10	火	東京都	ゼニア・ジャパン（株）	成人	10	○		
11/11	水	東京都	玉川聖学院中等部	1	90		○	
11/11	水	東京都	京王ウェルシィステージ（株）	成人	24	○		
11/12	木	千葉県	聖徳大学附属女子中学校	1	80	○		
11/17	火	東京都	大田区立六郷小学校	6	67	○		
11/18	水	東京都	台東区立上野小学校	6	55	○		
11/19	木	東京都	台東区立谷中小学校	5	54	○		
11/19	木	東京都	女子美術大学付属高等学校	2	204		○	
11/20	金	東京都	若草幼稚園	年長	46	○		
11/20	金	東京都	駒沢女子大学	2〜4	36	○		
11/25	水	東京都	小中一貫教育校高砂けやき学園葛飾区立高砂小学校	5	57	○		
11/26	木	東京都	府中市立第三中学校	1	6	○		
11/27	金	東京都	大田区立東蒲小学校	4	39	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
11/27	金	栃木県	栃木市立吹上小学校	6	15	○		
12/4	金	東京都	若草幼稚園	年長	46	○		
12/4	金	三重県	冨士交通トラベル	成人	17	○		
12/8	火	東京都	文京区立誠之小学校	5	33	○		
12/9	水	東京都	文京区立誠之小学校	5	33	○		
12/10	木	東京都	文京区立誠之小学校	5	31	○		
12/11	金	東京都	文京区立誠之小学校	5	32	○		
12/15	火	熊本県	県立湧心館高等学校	2	20	○		
12/16	水	東京都	江東区立第二亀戸小学校	5	36	○		
12/17	木	東京都	港区立南山小学校	6	21	○		
12/18	金	東京都	江東区立第二亀戸小学校	5	35	○		
12/22	火	東京都	葛飾区立白鳥小学校	5	92	○		
12/22	火	東京都	葛飾区立幸田小学校	6	141		○	
2016/1/7	木	神奈川県	横浜市立菅田小学校	6	45	○		
1/15	金	東京都	一橋大学大学院商学研究科	1〜2	21		○	
3/16	水	千葉県	美術館を読む会	成人	20		●	
3/19	土	埼玉県	公益財団法人いきいき埼玉	成人	60		○	
3/23	水	東京都	足立区立島根小学校	3	90	○		
3/25	金	東京都	台東区立忍岡小学校	4	26	○		

2016年度

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
4/12	火	秋田県	湯沢市立湯沢南中学校	3	5	○		
4/14	木	秋田県	仙北市立桧木内中学校	3	3			○
4/15	金	岩手県	一関市立千厩中学校	3	24	○		
4/21	木	東京都	桐朋学園小学校	6	71	○		
4/22	金	香川県	土庄町立豊島中学校	2	3	○		
4/22	金	東京都	一橋大学大学院言語社会研究科	1	5		○	
4/28	木	東京都	品川区立浅間台小学校	5・6	40	○		
5/10	火	宮城県	石巻市立蛇田中学校	3	60	○		
5/12	木	東京都	上智大学	1〜4	34	○		
5/18	水	東京都	国際博物館の日	成人	30	○		
5/20	金	宮城県	仙台市宮城野中学校	2	2			○
5/24	木	千葉県	銚子市立第五中学校	2	6	○		
5/25	水	宮城県	仙台市立新生中学校	3	5			○
5/27	金	千葉県	東洋学園大学	3・4	36		○	
5/31	火	埼玉県	越谷市立東中学校	3	4	○		
6/1	水	三重県	桑名市立陵成中学校	3	4	○		
6/7	火	愛知県	碧南市立東中学校	3	5	○		
6/9	木	東京都	台東区立谷中小学校	5	42	○		
6/9	木	東京都	中央大学	3・4	25		○	
6/10	金	千葉県	柏市立柏中学校	1	172		○	
6/10	金	茨城県	筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻	1	10		○	
6/14	火	東京都	荒川区立尾久小学校	5	61	○		
6/14	火	埼玉県	県立越谷南高等学校	3	6	○		
6/16	木	東京都	墨田区立両国小学校	6	85	○		
6/22	水	三重県	県立桜丘高等学校	1	7	○		
6/22	水	愛知県	豊田市立井郷中学校	3	2			○

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション （○は常設展、●は企画展）	職場訪問
6/23	木	埼玉県	聖徳大学短期大学部	1	9	○		
6/23	木	新潟県	長岡市立上組小学校	6	74	○		
6/24	金	東京都	東洋美術学校	1	8	○		
6/28	火	東京都	江戸川区立上小岩第二小学校	6	44	○		
7/6	水	東京都	専門学校武蔵野ファッションカレッジ	1	47			
7/14	木	千葉県	千葉県木更津市立桜井公民館	成人	34	○		
7/15	金	神奈川県	NPO法人子どもと共に歩むフリースペースたんぽぽ	中1〜高3	15	○		
7/21	木	東京都	練馬区立関中学校	1〜3	7	○		
7/22	金	千葉県	船橋市立八木が谷中学校	1〜3	18	○		
7/26	火	神奈川県	相模原市立相原中学校	1〜2	20	○		
7/27	水	東京都	武蔵野東小学校	6	36	○		
7/28	木	千葉県	柏市立逆井中学校	1〜3	23	○		
7/28	木	兵庫県	関西学院高等部	1〜3	10	○		
7/29	金	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	30	○		
8/2	火	神奈川県	川崎市立住吉中学校	1〜3	7	○		
8/3	水	神奈川県	厚木市立依知中学校	1〜3	15	○		
8/4	木	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	30	○		
8/5	金	茨城県	土浦日本大学高等学校	1	38	○		
8/5	金	千葉県	千葉大学文学部	2〜4	13		○	
8/9	火	山梨県	都留市立都留第二中学校	1〜3	11	○		
8/10	水	千葉県	昭和学院中学高等学校	1〜3	20	○		
8/19	金	埼玉県	草加市立松江中学校	1〜3	21	○		
8/23	火	東京都	都立園芸高等学校	1	8	○		
8/24	水	富山県	県立小杉高等学校	2	8	○		
8/25	木	東京都	杉並区立杉森中学校	1〜2	8	○		
8/30	火	東京都	大和郷幼稚園	年長	16	○		
8/31	水	東京都	大和郷幼稚園	年長	13	○		
9/8	木	埼玉県	豊島区立東長崎小学校	6	34	○		
9/13	火	東京都	江東区立第一亀戸小学校	6	90	○		
9/15	木	東京都	江戸川区立上小岩小学校	5	52	○		
9/16	金	東京都	杉並区立井草中学校	1	10	○		
9/23	金	東京都	台東区立黒門小学校	6	50	○		
9/27	火	東京都	江戸川区立下小岩第二小学校	5	29	○		
9/28	水	東京都	葛飾区立原田小学校	5	43	○		
9/29	木	東京都	葛飾区立西小管小学校	4	26	○		
9/30	金	千葉県	市川市立東国分中学校	1〜3	5	○		
10/6	木	千葉県	千葉大学教育学部付属中学校	1〜3	26		○	
10/7	金	東京都	雙葉小学校	6	82		○	
10/13	木	千葉県	船橋市　西部公民館	成人	20	○		
10/20	木	東京都	足立区立寺地小学校	6	41	○		
10/26	水	東京都	台東区立金竜小学校	5	6	○		
10/27	木	東京都	台東区立金曽木小学校	6	64	○		
11/2	水	静岡県	焼津市立大井川西小学校	6	15	○		
11/4	金	東京都	文京区立第十中学校	2	73	○		
11/9	水	東京都	台東区立上野小学校	6	56	○		
11/9	水	茨城県	茨城県立近代美術館ボランティア	成人	55		○	
11/10	木	東京都	玉川聖学院中等部	1	90		○	
11/11	金	千葉県	聖徳大学附属女子中学校	1	77	○		
11/16	水	千葉県	美術館を読む会	成人	20		●	

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
11/16	水	東京都	女子美術大学附属高等学校	2	204		●	
11/17	木	島根県	石見智翠館高等学校	2	7	○		
11/18	金	東京都	大田区立東蒲小学校	4	43	○		
11/21	月	東京都	都立文京盲学校	高1〜2	21	○		
11/21	月	埼玉県	埼玉県議会図書室委員会	成人	18		○	
11/22	火	東京都	小中一貫教育校高砂けやき学園葛飾区立高砂小学校	5	57	○		
11/24	水	東京都	都立総合工科高等学校	3	33	○		
11/25	金	東京都	若草幼稚園	年長・保護者	56	○		
11/29	火	東京都	台東区立松葉小学校	5・6	61	○		
12/1	木	東京都	八王子市立浅川小学校	6	76	○		
12/2	金	東京都	若草幼稚園	年長・保護者	56	○		
12/6	火	東京都	大田区立六郷小学校	6	57	○		
12/7	水	東京都	荒川区立第一日暮里小学校	6	24	○		
12/8	木	東京都	江東区立第五砂町小学校	6	132		○	
12/9	金	東京都	台東区立大正小学校	2	71	○		
12/13	火	東京都	荒川区立第三峡田小学校	5・6	44	○		
12/14	水	東京都	江東区立第二亀戸小学校	5	49	○		
12/15	木	群馬県	中央情報経理専門学校保育福祉学科	2	17	○		
12/21	水	東京都	大和郷幼稚園	年長	15	○		
2017/1/13	金	東京都	荒川区立第三瑞光小学校	5	70	○		
1/14	土	東京都	一橋大学大学院商学研究科	1	21		○	
1/17	火	神奈川県	鎌倉市立深沢小学校	6	55	○		
1/25	水	千葉県	西武台千葉中学校	1	48	○		
2/10	金	東京都	都立八王子盲学校	高1〜3	6	○		
2/15	水	東京都	大田区立志茂田小学校	6	45	○		
2/16	木	東京都	江戸川区立第三松江小学校	3	98	○		
2/21	火	東京都	台東区立根岸小学校	3	7	○		
2/22	水	東京都	墨田区立業平小学校	3	30	○		
2/28	火	神奈川県	川崎市立金程中学校	2	6			○
3/1	水	千葉県	城西国際大学	1〜4	30		○	
3/3	金	東京都	国本小学校	6	47	○		
3/8	水	東京都	墨田区立業平小学校	3	30	○		
3/10	金	東京都	お茶の水女子大学附属小学校	4	17	○		
3/17	金	東京都	台東区立忍岡小学校	4	30	○		
3/29	水	岩手県	県立盛岡第一高等学校	1〜2	13	○		
3/30	木	神奈川県	エコースタッフ（社員研修）	成人	13	○		
3/31	金	東京都	アトリエ虹	3〜6	15	○		

2017年度

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
4/12	水	岩手県	盛岡市立松園中学校	3	4			○
4/14	金	東京都	都立葛飾総合高等学校	2	9			○
4/20	木	東京都	桐朋学園小学校	6	72	○		
4/21	金	岩手県	北上市立北上中学校	3	5			○
5/15	月	東京都	東京理科大学大学院	1	30		○	
5/16	火	千葉県	銚子市立第一中学校	1	5	○		
5/17	水	山形県	天童市立第三中学校	1	5			○
5/18	木	東京都	東洋美術学校	1	6	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション (○は常設展、●は企画展)	職場訪問
5/24	水	宮城県	仙台市立中田中学校	3	7			○
5/25	木	千葉県	地域活動支援らいおん千葉	成人	25	○		
5/25	木	三重県	いなべ市立北勢中学校	3	8	○		
5/27	土	東京都	北欧楽会	成人	20		●	
5/31	水	三重県	桑名市立明正中学校	3	12	○		
5/31	水	三重県	桑名市立綾成中学校	3	6	○		
6/6	火	東京都	台東区立谷中小学校	5	56	○		
6/6	火	神奈川県	相模原市立相武台中学校	2	26	○		
6/8	水	滋賀県	彦根市立彦根中学校	3	4	○		
6/8	水	栃木県	足利市立第三中学校	1	64	○		
6/9	金	埼玉県	浦和ルーテル学院高等学校	2	17	○		
6/9	金	東京都	荒川区立第二日暮里小学校	5・6	40	○		
6/13	火	東京都	葛飾区立原田小学校	5	63	○		
6/14	水	愛知県	名古屋市立天白中学校	3	52	○		
6/14	水	愛知県	豊田市立前林中学校	3	5			○
6/20	火	東京都	荒川区立尾久小学校	5	65	○		
6/22	木	新潟県	長岡市立上組小学校	6	73	○		
6/22	木	東京都	台東区立黒門小学校	6	48	○		
6/22	木	東京都	上智大学	1〜4	36		○	
6/23	金	神奈川県	橘学苑高等学校	2	25	○		
6/28	水	東京都	墨田区立両国小学校	6	89	○		
6/28	水	千葉県	千葉市立越智中学校	1	6	○		
6/29	木	埼玉県	聖徳大学短期大学部	1	9	○		
6/29	木	東京都	港区立南山小学校	6	16	○		
6/30	金	東京都	北区立滝野川第四小学校	6	50	○		
6/30	金	東京都	ヨハン・インターナショナル・クリスチャン・スクール	中1〜高3	28	○		
7/4	火	東京都	墨田区立両国小学校	5	79	○		
7/7	金	東京都	北区立王子桜中学校	1	6			○
7/12	水	東京都	江戸川区立上小岩小学校	5	80	○		
7/14	金	東京都	文京区立根津小学校	6	41	○		
7/19	水	東京都	玉川学園中学部	1	190		○	
7/21	金	神奈川県	横須賀市立浦賀中学校	1〜3	20	○		
7/21	金	東京都	東星学園中学校・高等学校	中1〜高3	12	○		
7/25	火	東京都	武蔵野東小学校	6	36	○		
7/25	火	千葉県	千葉県高等学校教育研究会学校図書館部会第七地区図書委員連絡協議会	成人	40	○		
7/26	水	栃木県	河内郡上三川町立本郷中学校	1〜3	9	○		
7/26	水	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	30	○		
7/27	木	富山県	県立呉羽高等学校	2	64	○		
7/28	金	千葉県	柏市立逆井中学校	1〜3	19	○		
7/28	金	東京都	中野区立中野中学校	1〜3	17	○		
8/1	火	東京都	江東区立大島西中学校	1〜3	12	○		
8/1	火	東京都	杉並区立西宮中学校	1	5	○		
8/3	木	千葉県	習志野市立第六中学校	1〜3	15	○		
8/4	金	東京都	小平市立小平第六中学校	1〜3	21	○		
8/9	水	埼玉県	川口市立戸塚西中学校	1〜3	16	○		
8/9	水	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	30	○		
8/10	木	東京都	品川区立荏原第一中学校	1〜3	10	○		
8/18	金	千葉県	流山市立北部中学校	1〜3	21	○		
8/23	水	東京都	柏市立酒井根中学校	1・2	22	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
8/24	木	東京都	荒川区立尾久八幡中学校	1〜3	11	○		
8/24	木	東京都	板橋区立中台中学校	1〜3	20	○		
8/25	金	埼玉県	三芳町立三芳東中学校	1・2	19	○		
8/29	火	東京都	豊島区立長崎小学校	6	32	○		
8/29	火	東京都	葛飾区立葛飾小学校	4〜6	22	○		
8/30	水	東京都	大和郷幼稚園	年長	14	○		
8/30	水	東京都	都立足立西高等学校	2	4	○		
8/31	木	東京都	大和郷幼稚園	年長	13	○		
9/5	火	東京都	豊島区立巣鴨小学校	6	30	○		
9/6	水	群馬県	県立高崎高等学校	2	15	○		
9/7	木	宮城県	角田市立金津中学校	3	5	○		
9/12	火	東京都	聖心女子学院初等科	6	126		○	
9/13	水	東京都	豊島区立巣鴨小学校	6	42	○		
9/14	木	東京都	足立区立寺地小学校	6	41	○		
9/14	木	埼玉県	川越市立霞ヶ関中学校	3	14	○		
9/15	金	東京都	江東区立第一亀戸小学校	6	87	○		
9/21	木	東京都	江戸川区立第三松江小学校	6	101	○		
9/22	金	東京都	江東区立葛西小学校日本語学級	2〜6	30	○		
10/3	火	広島県	広島市立基町高等学校	2	26	○		
10/5	木	東京都	雙葉小学校	6	82		○	
10/6	金	静岡県	浜松市立白脇小学校	6	22	○		
10/11	水	広島県	県立安古市高等学校	2	61	○		
10/12	木	東京都	江戸川区立下小岩第二小学校	5	39	○		
10/13	金	東京都	芝浦工業大学附属中学校	1	165	○		
10/18	水	広島県	近畿大学附属広島中学校東広島校	2	30	○		
10/19	木	東京都	田園調布雙葉小学校	6	122	○		
10/25	水	東京都	KTC中央高等学院東京秋葉原キャンパス	1〜3	80	○		
10/26	木	埼玉県	武蔵野音大附属高等学校	1〜3	68		○	
10/26	木	埼玉県	武蔵野音大附属高等学校	1〜3	68	○		
10/26	木	福島県	福島工業高等専門学校	4	44	○		
10/27	金	東京都	聖心女子大学	2〜4	20		○	
10/31	火	東京都	西東京市谷戸公民館	成人	23		●	
11/7	火	山梨県	富士吉田市立下吉田中学校	1〜2	13	○		
11/7	火	東京都	玉川聖学院中等部	1	86		○	
11/9	木	千葉県	聖徳大学附属女子中学校	1	66	○		
11/10	金	東京都	文京区立第十中学校	2	66	○		
11/14	火	千葉県	市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課	成人	40	○		
11/14	火	東京都	台東区立大正小学校	3	6	○		
11/15	水	東京都	女子美術大学附属高等学校	2	205		○	
11/15	水	富山県	県立八尾高等学校	2	31	○		
11/17	金	東京都	日本大学第三中学校	1	65	○		
11/22	水	東京都	若草幼稚園	年中	46	○		
11/22	水	茨城県	開智望小学校	4	22	○		
11/24	金	東京都	若草幼稚園	年中	48	○		
11/28	火	東京都	中野区立第七中学校	1	5			○
11/28	火	東京都	台東区立大正小学校	3	6	○		
11/30	木	東京都	墨田区立中川小学校	4	19	○		
12/1	金	東京都	大田区立東甫小学校	4	45	○		
12/5	火	東京都	台東区立大正小学校	2	62	○		
12/6	水	東京都	墨田区立中川小学校	6	31	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
12/13	水	東京都	日出高等学校通信制	1・3	34	○		
12/15	金	東京都	江東区立第二亀戸小学校	5	32	○		
12/20	水	東京都	江東区立第二亀戸小学校	5	32	○		
12/21	木	東京都	港区立南山小学校	5	24	○		
12/22	金	東京都	台東区立忍岡小学校	4	44	○		
2018/1/5	金	兵庫県	華道専正池坊（日本礼道小笠原流）	成人	31		●	
1/11	木	アメリカ	Bucknell University	3・4	2			○
1/11	木	東京都	日本大学理工学部	2・3	15		○	
1/12	金	埼玉県	鹿島学園高等学校通信制所沢キャンパス熊谷キャンパス	1〜3	25	○		
1/16	火	神奈川県	鎌倉市立深沢小学校	6	25	○		
1/17	水	千葉県	美術館を読む会	成人	20		●	
1/19	金	東京都	小中一貫教育校高砂けやき学園葛飾区立高砂小学校	5	81	○		
1/24	水	東京都	荒川区立第三瑞光小学校	5	69	○		
1/25	木	東京都	文京区立汐見小学校	6	36	○		
1/26	金	千葉県	西武台千葉中学校	1	41	○		
2/27	火	東京都	台東区立金竜小学校	5	82	○		
2/28	水	東京都	大田区立志茂田小学校	6	52	○		
3/1	木	東京都	葛飾区立西小菅小学校	3	30	○		
3/7	水	東京都	墨田区立業平小学校	3	35	○		
3/7	水	神奈川県	平塚市美術館ボランティア	成人	21	○		
3/14	水	東京都	墨田区立業平小学校	3	35	○		
3/16	金	東京都	豊島区立南池袋小学校	4	70	○		
3/28	水	東京都	荒川区立第四中学校	1	3	○		
3/30	金	千葉県	八千代松陰中学校・高等学校	中1〜高3	40	○		
3/30	金	神奈川県	かわさき市民フロンティア	成人	20	○		

2018年度

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
4/19	木	鳥取県	鳥取大学付属中学校	3	10	○		
4/19	木	東京都	桐朋学園小学校	6	70	○		
4/24	火	福島県	福島市立信陵中学校	3	6	○		
4/25	水	栃木県	那須塩原市立高林中学校	2	3			○
4/25	水	宮城県	富谷市立成田中学校	3	6			○
4/26	木	山梨県	南アルプス市立豊小学校	6	8	○		
5/11	金	東京都	都立大塚ろう学校城東分教室	1〜6	19	○		
5/11	金	宮城県	多賀城市立第二中学校	3	4			○
5/16	水	富山県	富山市立大沢野中学校	3	12			○
5/17	木	東京都	東洋美術学校	1	11	○		
5/18	金	茨城県	石岡市立八郷中学校	3	4			○
5/30	水	北海道	小樽市立汐見台中学校	3	3			○
5/31	木	岐阜県	山県市立高富中学校	3	10			○
6/1	金	千葉県	柏市立富勢中学校	1	28	○		
6/1	金	埼玉県	飯能市立原市場中学校	1	10	○		
6/5	火	千葉県	柏市立柏中学校	1	139		○	
6/6	水	愛知県	知多市立八幡中学校	2	5			○
6/6	水	愛知県	豊橋市立章南中学校	3	17	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション (○は常設展、●は企画展)	職場訪問
6/6	水	岐阜県	揖斐川町立谷波中学校	3	5	○		
6/8	金	埼玉県	浦和ルーテル学院高等学校	2	23	○		
6/13	水	愛知県	名古屋市立天目中学校	3	19	○		
6/13	水	三重県	桑名市立光陵中学校	3	7	○		
6/13	水	愛知県	豊田市立竜神中学校	3	7	○		
6/21	木	新潟県	長岡市立上組小学校	6	80	○		
6/22	金	東京都	台東区立東泉小学校	3	42	○		
6/22	金	千葉県	県立沼南高柳高等学校(芸術コース)	2・3	80	○		
6/26	火	東京都	北区立柳田小学校	6	31	○		
6/28	木	東京都	墨田区立両国小学校	5	90	○		
6/29	金	東京都	葛飾区立西小菅小学校	3	33	○		
6/29	金	東京都	立教大学文学部	3・4	25		○(作品研究、保存管理)	
7/6	金	東京都	北区立王子桜中学校	1	6			○
7/10	火	東京都	板橋区立緑小学校	6	70	○		
7/24	火	東京都	武蔵野東小学校	6・保護者	27	○		
7/27	金	千葉県	柏市立柏第二中学校	2・3	10	○		
7/31	火	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	30	○		
7/31	火	東京都	小中一貫教育校興本扇学園足立区立扇中学校・興本小学校	小6〜中2	9	○		
8/1	水	東京都	江戸川区立小岩第三中学校	1〜3	19	○		
8/1	水	東京都	目黒星美学園中学校	2	1			○
8/2	木	東京都	飛鳥未来高等学校池袋キャンパス	2・3	29	○		
8/2	木	神奈川県	相模原市立由野台中学校	1〜3	9	○		
8/3	金	千葉県	柏市立酒井根中学校	1・2	27	○		
8/3	金	千葉県	流山市立おおたかの森中学校	1〜3	33	○		
8/7	火	東京都	大田区立志茂田中学校	1・2	12	○		
8/8	水	東京都	杉並区立松渓中学校	1〜3	11	○		
8/9	木	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小3〜6	28	○		
8/17	金	東京都	都立板橋有徳高等学校	1〜3	6	○		
8/21	火	東京都	東村山市立東村山第三中学校	1・2	19	○		
8/21	火	東京都	都立小松川高等学校	1	4			○
8/22	水	東京都	江戸川区立小岩第四中学校	1〜3	16	○		
8/24	金	東京都	武蔵野市立第四中学校	1・2	12	○		
8/24	金	埼玉県	三芳町立三芳東中学校	1〜3	15	○		
8/28	火	東京都	大和郷幼稚園	年長	30	○		
8/28	火	東京都	板橋区立赤塚第一中学校	1〜3	15	○		
8/29	水	東京都	荒川区立尾久八幡中学校	1〜3	20	○		
8/29	水	埼玉県	狭山市立柏原中学校	1〜3	8	○		
8/30	木	東京都	大和郷幼稚園	年長	13	○		
9/5	水	岩手県	北上市立北上中学校	3	6			○
9/7	金	茨城県	県立土浦第二高等学校	2	160		●	
9/11	火	東京都	聖心女子学院初等科	5	125		○	
9/13	木	静岡県	焼津市立豊田小学校	6	27	○		
9/27	木	東京都	江戸川区立下小岩第二小学校	5	23	○		
10/2	火	東京都	荒川区立尾久小学校	5	61	○		
10/11	木	広島県	県立賀茂高等学校	2	5			○
10/12	金	東京都	芝浦工業大学附属中学校	1	160	○		
10/19	金	東京都	京華女子中学校	2	40	○		
10/23	火	東京都	雙葉小学校	6	82		○	
10/24	水	東京都	豊島区立巣鴨小学校	5	51	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
10/26	金	千葉県	西武台千葉中学校	1	44	○		
11/2	金	静岡県	焼津市立大井西小学校	6	20	○		
11/2	金	東京都	文京区立第十中学校	2	66	○		
11/2	金	千葉県	松戸市立第二中学校	1	6			○
11/6	火	東京都	玉川聖学院中学校	1	92		○	
11/7	水	東京都	都立瑞穂農芸高等学校	1・2	10	○		
11/7	水	東京都	田園調布雙葉小学校	6	124		○	
11/9	金	東京都	江東区立第一亀戸小学校	6	115	○		
11/13	火	東京都	大田区立志茂田小学校	6	50	○		
11/13	火	山形県	九里学園高等学校	2	21	○		
11/14	水	東京都	攻玉社中学校	1	267		○	
11/15	木	東京都	都立つばさ総合高等学校	1	1			○
11/20	火	東京都	若草幼稚園	年長・保護者	24	○		
11/20	火	東京都	台東区立忍岡小学校	3	7			○
11/21	水	東京都	若草幼稚園	年長・保護者	24	○		
11/22	木	千葉県	柏市立柏第六小学校	6	7	○		
11/26	月	東京都	都立文京盲学校	高1〜3	24	○		
11/27	火	東京都	台東区立大正小学校	2	69	○		
11/27	火	東京都	中野区立第七中学校	1	6			○
11/28	水	東京都	女子美術大学附属高等学校	2	210		●	
11/28	水	東京都	台東区立忍岡小学校	4	35	○		
11/30	金	茨城県	県立日立工業高等学校定時制	1〜4	38	○		
12/4	火	東京都	桐朋女子高等学校	3	22	○		
12/5	水	新潟県	新潟市立木戸中学校	2	6			○
12/5	水	岡山県	岡山市立後楽館中学校	3	6	○		
12/6	木	東京都	豊島区立長崎小学校	6	47	○		
12/7	金	東京都	文京区立汐見小学校	6	63	○		
12/11	火	東京都	台東区立上野中学校	1	107		○	
12/11	火	東京都	葛飾区立川端小学校	4	59	○		
12/12	水	東京都	墨田区立業平小学校	3	28	○		
12/12	水	東京都	日出高等学校通信制	1〜3	40	○		
12/13	木	東京都	墨田区立業平小学校	3	28	○		
12/14	金	東京都	大田区立おなづか小学校	6	61	○		
12/19	水	東京都	墨田区立業平小学校	3	29	○		
2019/1/17	木	東京都	郁文館夢学園高等学校	1	40	○		
2/19	火	東京都	墨田区立業平小学校	6	8	○		
2/20	水	東京都	専門図書館協議会	成人	20		●	
2/21	木	千葉県	県立沼南高等学校	2	34	○		
2/22	金	埼玉県	武蔵越生高等学校	1	178		○	
2/26	火	東京都	小中一貫教育校高砂けやき学園葛飾区立高砂小学校	5	64	○		
2/27	水	東京都	江東区立第二亀戸小学校	5	34	○		
2/28	木	東京都	江東区立第二亀戸小学校	5	33	○		
2/28	木	東京都	荒川区立第三瑞光小学校	5	87		○	
3/5	火	東京都	台東区立金竜小学校	5	66	○		
3/5	火	埼玉県	聖進学院高等学校	1・2	8	○		
3/7	木	東京都	墨田区立中川小学校	4	42	○		
3/7	木	東京都	豊島区立西池袋中学校	1	1			○
3/8	金	東京都	豊島岡女子学園中学校	2	23	○		
3/19	火	東京都	都立多摩科学技術高等学校	1・2	20	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
3/20	水	東京都	都立上野高等学校	2	102		○	
3/26	火	東京都	葛飾区立堀切中学校	1・2	10	○		
3/26	火	東京都	練馬区立大泉北中学校	1・2	12	○		
3/29	金	兵庫県	関西学院大高等部	1・2	7			○

2019年度

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション（○は常設展、●は企画展）	職場訪問
4/11	木	岩手県	大槌町立大槌学園中学校	2	5			○
4/18	木	東京都	桐朋学園小学校	6	75	○		
4/23	火	愛知県	愛知教育大学附属岡崎中学校	3	13	○		
4/23	火	岩手県	一関市立千厩中学校	3	26	○		
4/25	木	山梨県	南アルプス市立豊小学校	6	7	○		
5/9	木	東京都	品川区適応指導教室マイスクール八潮	小6・中1・中3	4	○		
5/10	金	愛知県	東海市立上野中学校	3	3			○
5/14	火	静岡県	長泉町立長泉中学校	2	34	○		
6/11	火	東京都	墨田区立両国小学校	5	70	○		
6/11	火	千葉県	西武台千葉中学校	1	41	○		
6/13	木	群馬県	前橋市立桂萱中学校	2	12	○		
6/13	木	三重県	桑名市立光陵中学校	3	12	○		
6/14	金	埼玉県	浦和ルーテル学院高等学校	2	15	○		
6/15	土	東京都	中央大学文学部美術史美術館コース	3・4	35	○		
6/18	火	愛知県	江南市立古知野中学校	3	6	○		
6/20	木	新潟県	長岡市上組小学校	6	82	○		
6/26	水	東京都	足立区立島根小学校	4	86	○		
6/26	水	東京都	聖徳大学短期大学部	1	4	○		
6/26	水	茨城県	筑波大学	学部・院	14		●	
7/4	木	東京都	北区立王子桜中学校	1	5			○
7/9	火	東京都	自由学園男子部高等科	1～3	98		○	
7/17	水	東京都	玉川学園中学部	1	97		○	
7/18	木	東京都	玉川学園中学部	1	89		○	
7/23	火	東京都	武蔵野東小学校	6	21	○		
7/25	木	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小4～6	19	○		
7/31	水	埼玉県	川口市立芝東中学校	1～3	19	○		
7/31	水	東京都	大田区立志茂田中学校	1・2	15	○		
8/1	木	千葉県	柏市立豊四季中学校	1	13	○		
8/2	金	東京都	東村山市立東村山第三中学校	1・2	24	○		
8/2	金	東京都	大田区立矢口中学校	1・2	13	○		
8/6	火	福島県	会津鉄道利用芸術文化鑑賞体験促進事業	小5・6	20	○		
8/7	水	千葉県	柏市立柏の葉中学校	1～3	8	○		
8/21	水	神奈川県	藤沢市立大庭中学校	1～3	19	○		
8/22	木	東京都	荒川区立尾久八幡中学校	1～3	13	○		
8/27	火	千葉県	柏市立柏第二中学校	1	3	○		
8/29	木	東京都	大和郷幼稚園	年長	12	○		
9/3	火	東京都	大和郷幼稚園	年長	14	○		
9/6	金	東京都	杉並区立桃井第四小学校	6	1			○
9/11	水	東京都	聖心女子学院初等科	5	124		●	
9/20	金	東京都	荒川区立第二日暮里小学校	5・6	61	○		

日付		都道府県	学校名	学年	人数	トーク	オリエンテーション (○は常設展、●は企画展)	職場訪問
9/25	水	東京都	江戸川区立下小岩第二小学校	5	26	○		
10/4	金	東京都	文京区立第十中学校	2	56	○		
10/10	木	東京都	墨田区立錦糸小学校	6	56	○		
10/11	金	埼玉県	星槎学園高等部大宮校	1	40	○		
10/11	金	東京都	雙葉小学校	6	79		○	
10/29	火	福井県	敦賀気比高等学校付属中学校	3	18	○		
10/30	水	静岡県	磐田市立大藤小学校	6	18	○		
10/30	水	東京都	杉並区立天沼中学校	1	6			○
11/1	金	東京都	台東区立東浅草小学校	5	51	○		
11/6	水	東京都	玉川聖学院(中学部)	1	91		○	
11/7	木	東京都	女子美術大学付属高等学校	2	125		●	
11/7	木	東京都	女子美術大学付属高等学校	2	80		●	
11/7	木	千葉県	聖徳大学附属女子中学校	1	46	○		
11/13	水	東京都	攻玉社中学校	1	125		○	
11/13	水	東京都	攻玉社中学校	1	125		○	
11/14	木	群馬県	群馬県立渋川女子高等学校	1	40	○		
11/20	水	東京都	豊島区立長崎小学校	6	41	○		
11/22	金	東京都	若草幼稚園	年長	24	○		
11/22	金	東京都	葛飾区立川端小学校	4	53	○		
11/26	火	東京都	台東区立大正小学校	2	63	○		
11/27	水	東京都	開成中学校	3	4			○
11/29	金	東京都	若草幼稚園	年長	27	○		
11/29	金	東京都	江戸川区立松江第二中学校	2	6			○
12/4	水	東京都	武蔵野高等学校	3	17	○		
12/5	木	東京都	荒川区立第一日暮里小学校	5	29	○		
12/8	日	東京都	江戸川区子ども未来館	4〜6	17	○		
12/17	火	東京都	台東区立金竜小学校	5	70	○		
12/18	水	東京都	台東区立忍岡小学校	4	52	○		
12/19	木	東京都	豊島区立巣鴨小学校	5	44	○		
12/19	木	千葉県	県立小金高等学校	1	2			○
2020/1/15	水	東京都	東京都立浅草高等学校	2〜4	16	○		
1/16	木	東京都	台東区立上野中学校	1	72	○		
1/17	金	東京都	台東区立上野中学校	1	74	○		
1/21	火	東京都	葛飾区立高砂小学校	5	64	○		
1/22	水	東京都	大田区立志茂田小学校	6	40	○		
1/24	金	東京都	品川区立芳水小学校	3	88	○		
2/12	水	東京都	葛飾区立梅田小学校	4〜6	26	○		
2/13	木	東京都	都立八王子盲学校	高1〜3	9	○		
2/14	金	東京都	台東区立御徒町台東中学校	1	112		○	
2/18	火	東京都	墨田区立中川小学校	4	42	○		
2/20	木	東京都	荒川区立尾久小学校	5	70	○		

利用団体数（2018年度）

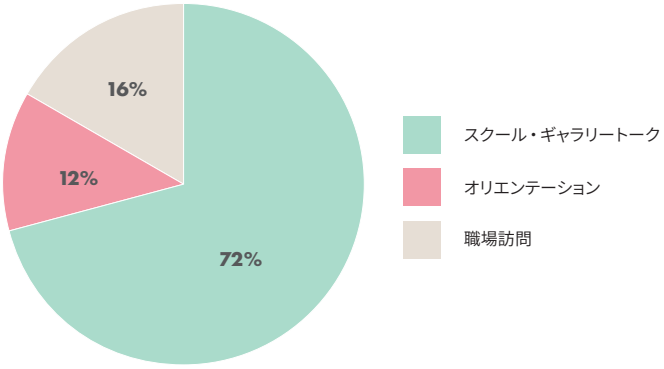
校種＼プログラム	スクール・ギャラリートーク	オリエンテーション	職場訪問	学校種別合計（件）
幼稚園・保育園	4	0	0	**4**
小学校	33	4	1	**38**
中学校	32	4	15	**51**
高等学校	13	4	4	**21**
特別支援学校	3	0	0	**3**
その他	2	2	0	**4**
プログラム別合計	**87**	**14**	**20**	**121**

※特徴的な部分に色付けをした。

スクール・プログラムでは、学校団体から事前に申込書を提出してもらう。2018年度の申込用紙や事前打ち合わせ内容を集計し、参加団体の傾向を抽出することを試みた。pp. 14–15では利用人数を集計したが、ここでは利用団体数を扱った。

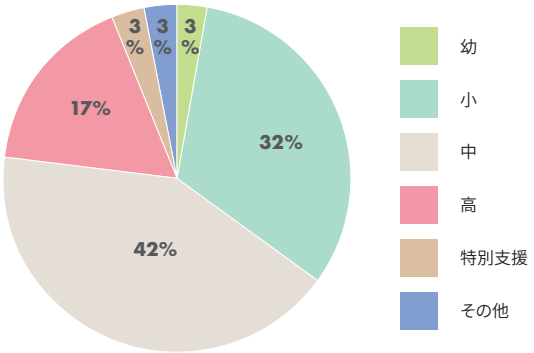
以下の分析を通じて、当館のスクール・プログラムを利用する学校団体の特徴として、①小学校における図画工作の授業、②中学校における修学旅行、③中学校における部活動が多いことがわかった。

プログラム別　利用団体数の割合



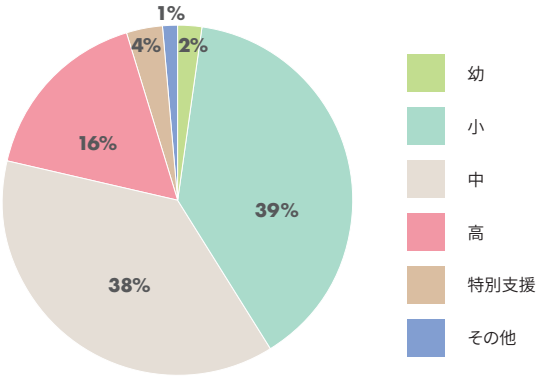
2018年度のスクール・プログラム（スクール・ギャラリートーク、オリエンテーション、職場訪問）を利用した121校のうち、7割がスクール・ギャラリートークで最も多く、残りの3割がオリエンテーションと職場訪問である。

校種別　利用団体数の割合



最も利用件数の多いのが中学校で、小学校と合わせると全体の7割を超える。高等学校は2割弱である。

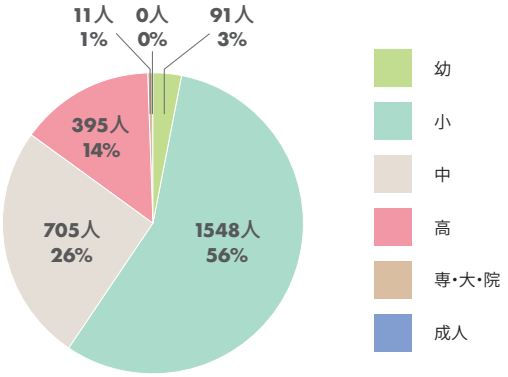
スクール・ギャラリートーク　校種別団体数の割合



スクール・ギャラリートークの利用団体数を校種別に見ると、小学校39%と、中学校38%はほぼ同じ割合で、合わせると全体の8割にのぼることが分かる。一方で参加者数別に集計した前出（p. 14）のデータからは、小学生が1548人（56%）に対し中学生が705人（26%）と2倍以上の差があることが読み取れる。

スクール・ギャラリートーク　校種別利用人数別の割合

※p. 14のデータより

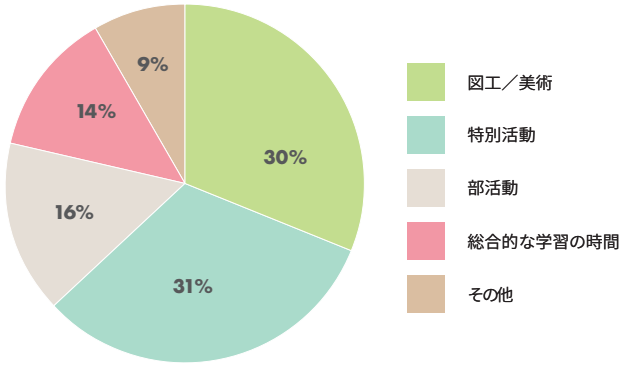


このように団体数はほぼ同数にもかかわらず、人数に大きな違いがみられる理由は、中学校は長期休み中の部活動や修学旅行での班行動など比較的少人数のグループ来館の機会が多く含まれるからである。

学校における美術館訪問の位置付け

学校における美術館訪問の位置付けとしては、特別活動が31％、図工／美術30％であり、合わせると全体の約6割を占める。続いて部活動と総合的な学習の時間はそれぞれ1割を超え、その他には、小学校の生活科、高校の世界史や生活科、学校独自の総合芸術の授業などの回答があり、学校がさまざまな授業時数を用いて美術館のプログラムへ参加していることが分かる。

美術館訪問には往復の時間もかかるため、学校では2種類の時数に位置付けていることもある。その場合は1件を0.5ずつに分けて集計した。



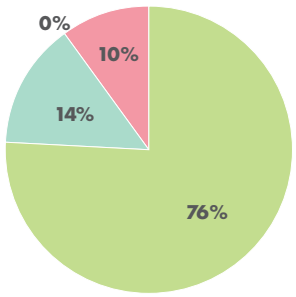
※二つを選択している学校は0.5ずつへカウントした。

校種別の美術館訪問の位置付け

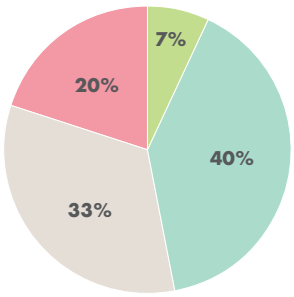
※二つを選択している学校は0.5ずつへカウントした。特徴的な部分には色付けをした。

教科等 / 校種	図工／美術	特別活動	部活動	総合的な学習の時間	その他	校種別合計（件）
幼稚園・保育園	0	2	0	0	未回答2	4
小学校	27	5	0	3.5	イベント2、生活科0.5	38
中学校	3.5	20.5	17	10	0	51
高等学校	3	10	2	3	世界史1、総合芸術1、美術鑑賞1	21
特別支援学校	3	0	0	0	0	3
その他	0	0	0	0	美術作品鑑賞1、未回答3	4
目的別合計	36.5	37.5	19	16.5	11.5	121

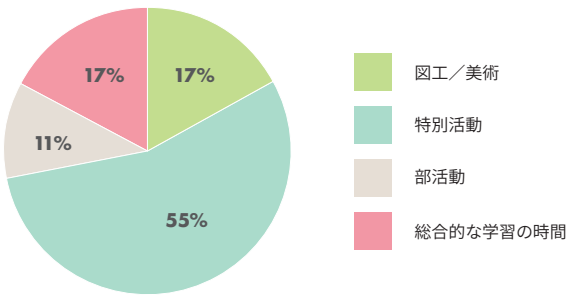
小学校



中学校



高等学校



小学校の7割が図工の授業での来館であるのに対し、中学校の美術の授業での来館は1割に満たない。中学校においては特別活動が4割、部活動（美術部）の来館が3割に上る。高等学校は5割が特別活動の利用である。校種によって美術館訪問の位置付けが異なることがわかる。

特別活動の内訳

※二つを選択している学校は0.5ずつへカウントした。特徴的な部分には色付けをした。

内容／校種	修学旅行	校外学習	社会見学	芸術鑑賞	その他	校種別合計（件）
幼稚園・保育園	0	0	2	0	0	**2**
小学校	2.5	2	0	0	遠足0.5	**5**
中学校	11.5	3	1	0	芸術の見識を深める1、詳細不明4	**20.5**
高等学校	1	4	2	1	サイエンスワークショップ1、詳細不明1	**10**
特別支援学校	0	0	0	0	0	**0**
その他	0	0	0	0	0	**0**
目的別合計	**15**	**9**	**5**	**1**	**7.5**	**37.5**

特別活動の内訳では、中学校の修学旅行が多い。

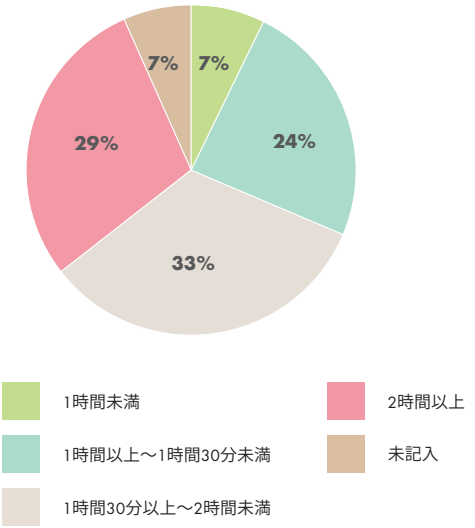
月別の美術館訪問件数の位置付け

※二つを選択している学校は0.5ずつへカウントした。特徴的な部分には色付けをした。

教科等／月	図工／美術	特別活動	部活動	総合的な学習の時間	その他	月別合計（件）
4月	1	4	0	1	0	**6**
5月	1	3.5	0	1.5	美術作品鑑賞1	**7**
6月	4.5	8.5	0	3	未回答1	**16**
7月	2	0	2	1	イベント1	**7**
8月	0	2	13	1	世界史1、イベント1、未回答3	**21**
9月	2	1.5	0	1.5	0	**7**
10月	4	3	0	0	0	**7**
11月	7	8	1	3.5	生活科0.5、美術鑑賞1	**20**
12月	8	2	0	1	総合芸術1	**12**
1月	1	0	0	0	0	**1**
2月	4	2	0	1	未回答1	**7**
3月	2	3	3	2	0	**10**
目的別合計	**36.5**	**37.5**	**19**	**16.5**	**11.5**	**121**

月ごとの来館状況では、学校での美術館訪問の位置付け別に、いくつか特徴的な利用を確認することができる。まず、図工／美術や総合的な学習の時間では各学期の中間にあたる6月や10〜12月、2月の利用、修学旅行を含む特別活動／校外学習では6月や11月の利用、部活動（美術部）では夏休み期間にあたる8月の利用である。

美術館での滞在時間



プログラム参加を含めた美術館での滞在時間は、1時間30分以上2時間未満が最も多く3割を超えている。また、2時間以上が29%、1時間以上1時間30分未満が24%であるので、8割が1時間30分以上滞在していることが分かる。申込書に記載はないが、プログラム（45分〜50分程度）以外の時間については自由鑑賞の時間とする学校が多かった。

また、訪問に対しワークシートや課題を用意していると答えたのは121件中41件にとどまり、その中で事前に美術館へワークシートの送付があったのは22件、その内18件は図工／美術での利用であった。

スクール・ギャラリートークへのリクエスト

●事前・事後にコースや鑑賞作品名を知りたい（5件）

●鑑賞作品やトーク内容のリクエスト（8件）
- 平面1点、立体1点希望
- 建築について簡単に触れてほしい
- 「いのち」をテーマにした作品を鑑賞したい
- 企画展についても少し聞きたい
- 「ホワイトペインティング」をみんなで見たい
- 初めて西洋絵画を鑑賞する子が多いので、鑑賞を楽しいと思えるようにしたい
- 作家や作品の解説希望
- 作品を通して歴史を感じられるように

●その他のリクエスト（5件）
- バインダーを用意してほしい
- ブリーフガイド送付希望
- 写真撮影をしたい
- 水筒、筆記用具置場がほしい
- 校内展覧会に向けて、学芸員の仕事について一言ほしい

●利用の詳細な連絡（5件）
- 班別行動（3件）
- 学校独自の科目の最終回
- 車いす使用

オリエンテーションへのリクエスト

- イコンから始まる絵画の流れ、キリスト教絵画と自分たちとのつながり、《悲しみの聖母》を入れてほしい（小学校）
- 講堂前で保護者に引き渡したい（小学校）
- 学校側で展示室のアクティビティを計画しているためルールやマナーのみにしてほしい（小学校）
- 《睡蓮》を入れてほしい（中学）
- 企画展、ルネサンス、ル・コルビュジエ、世界遺産を希望（高等学校）
- アーカイヴ、松方幸次郎の資料について知りたい（大学）

スクール・ギャラリートーク申込書

FAX TRANSMISSION
スクール・ギャラリートーク
申込用紙

国立西洋美術館　教育普及室宛
電話：０３－３８２８－５１９８
FAX：０３－３８２８－５７９７

お電話にて予約状況をご確認の上、この用紙を使い
右記番号へＦＡＸでお申し込みください。

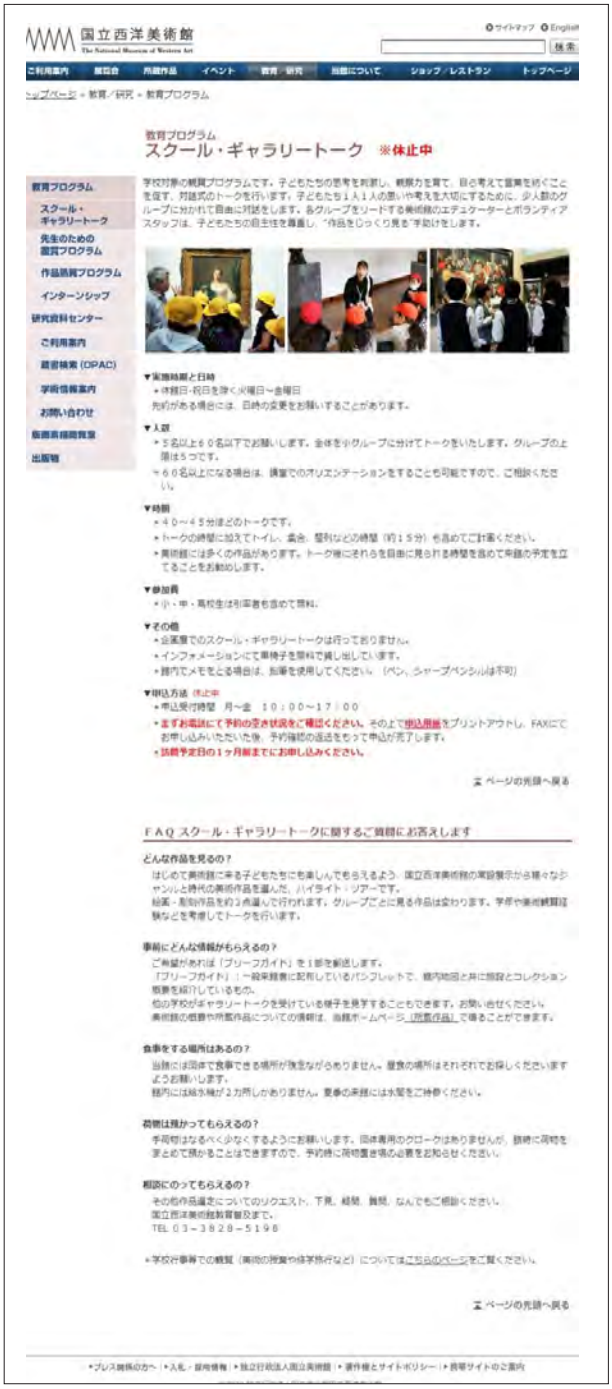
送信日　　年　　月　　日

学校名	
責任者名（担当教員）	
住所	〒
電話	（学校）　　ＦＡＸ
	携帯電話（当日連絡の取れる番号）
訪問希望日時	年　　月　　日　　曜日 （　　）時（　　）分～（　　）時（　　）分 ※当館での滞在時間をご記入ください。
訪問人数	生徒数（　　）名（　　）学年　引率者（　　）名
今回の訪問の位置付け	□教科（図工・美術　／その他　　）
	□総合的な学習の時間
	□特別活動（修学旅行／社会見学／その他　　）
荷物置き場	ロッカーとは別に、一時的に大人数の荷物を保管できる場所があります □使用する　／　□使用しない
学校で用意したワークシートや課題	□ 有　／　□ 無
希望・連絡事項	

１週間以内に予約確認書が届かない場合にはお知らせください。

美術館使用欄　予約確認書送付日：　　月　　日（担当：　　）

スクール・プログラム申込ウェブ画面



1-2
美術トーク

開始時期：2009年度

概要： 美術トークは、常設展で行われる一般向けのギャラリートーク。開館時の第1・第3・第5土曜日および毎週日曜日に実施している。所蔵作品4〜8点を約50分かけて鑑賞していく予約不要のプログラムで、トークでは作品の解説が中心となるが、参加者自身の眼で作品をよく見てもらうこと、そしてさまざまな視点を他者と共有する楽しさを体験してもらうことを心がけている。そこで、トークで取り上げる作品やテーマ・内容は、担当するボランティア・スタッフがそれぞれに工夫を凝らすことで、個性や持ち味が生かされた多様なトークが展開されている。同じ作品でもその日のトーカーによってどのように料理されるかを楽しみに来館するリピーターも増えてきている。

2013年度以降：

ボランティア・スタッフの提案により、回を重ねるごとにボランティア・スタッフと参加者双方にとって良い方法を模索しながら、運営面、内容面ともに改善されてきた。2016年度、有志の発案で金曜日の夜間開館を利用した金曜ナイトトークが始まった。これは、基本的に企画展開催期間中に限定した約30分のギャラリートークで、月1回を目安に実施日を決めて行っている。通常の美術トーク同様に一人のボランティア・スタッフが担当することもあれば、3名が10分のトークをリレー式につなぐ場合もある。また、夜間開館の周知にも一役かっている。2017年度からは美術トークを午後の回に加え、午前の回を増やし、各日2回行うようにしたことで、全体の参加者数も2倍近くに増加した。

実施回数及び参加者数

美術トーク

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
実施回数	59	59	60	69	146	145	124
参加者数	957	840	1083	1636	2593	2575	2133
1回あたりの平均参加者数	16	14	18	23	18	18	18

金曜ナイトトーク

	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
実施回数	6	10	12	9
参加者数		278	283	224
1回あたりの平均参加者数		28	24	25

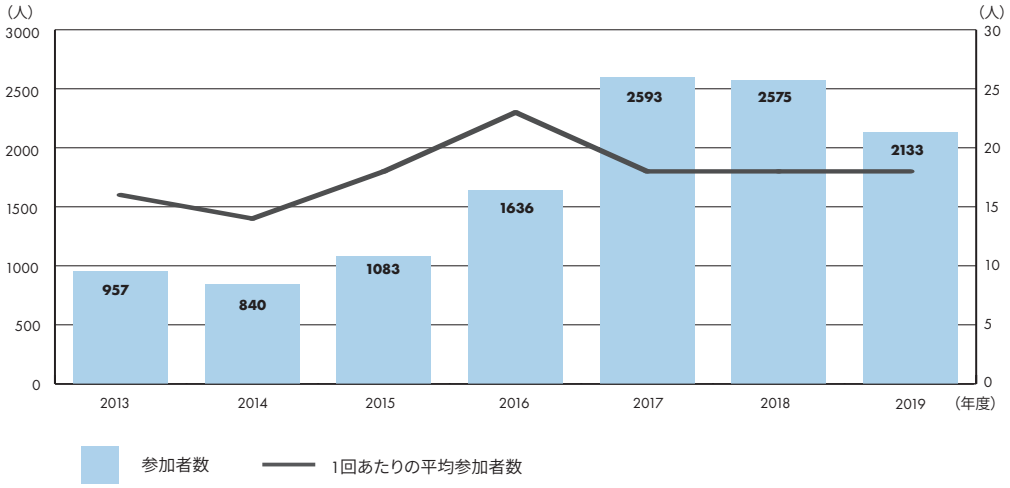
※小数点第一位を繰り上げた
※2016年度は参加者数のカウントなし

平日大人向けトーク

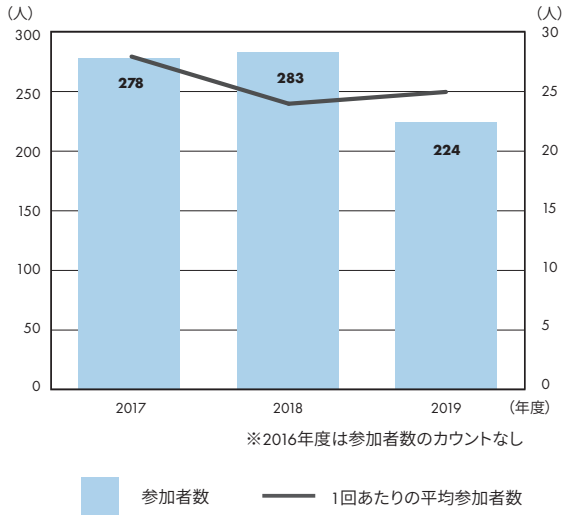
	2018年度
実施回数	2
参加者数	25
1回あたりの平均人数	13

他の美術館で活動するボランティア団体などの成人団体から要望があり、実施した。

美術トーク参加者合計及びトーク1回当たりの参加者数の推移

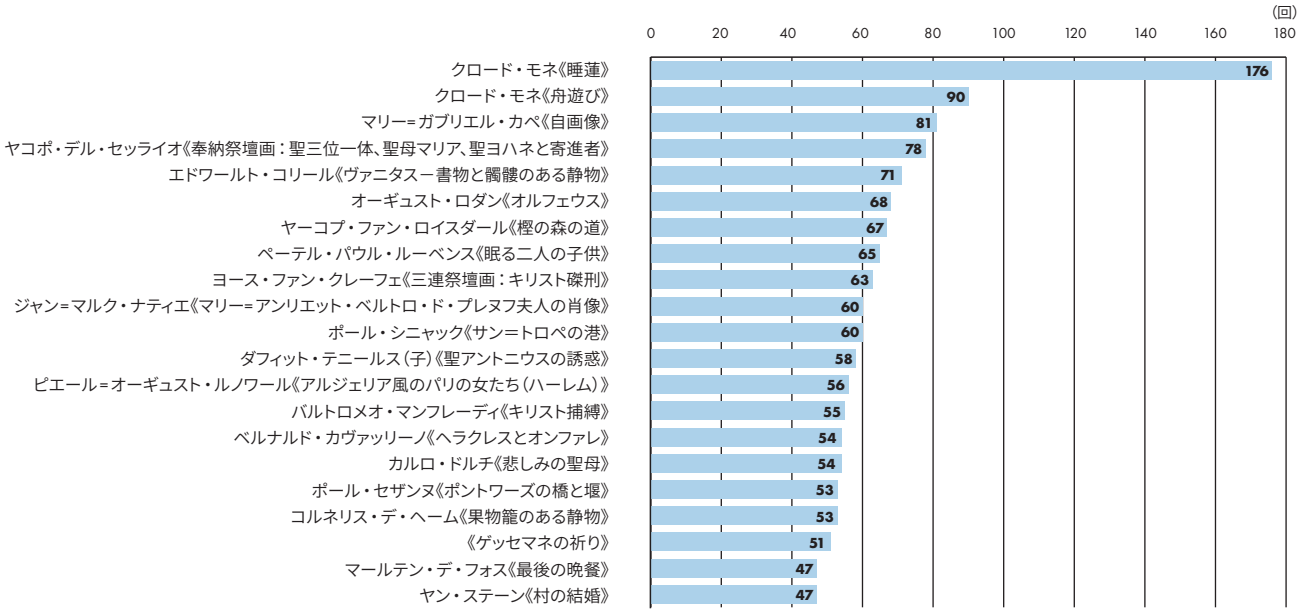


金曜ナイトトーク参加者合計及びトーク1回あたりの参加者数の推移



美術トークの1回あたりの平均参加者数を見ると、2016年度のみ23名と増えている。これは同年7月に当館本館と前庭が世界文化遺産に登録されたことにより、来館者数が増えた影響と考えられる。また、2017年度よりトークの回数を午前午後と2回行うようになっても、1回のトークの平均参加者に変化がないことが分かる。加えて、美術トークと金曜ナイトトークのトーク1回あたりの平均参加者数を比較すると、美術トークは18人であるのに対して、金曜ナイトトークは25人であり、金曜ナイトトークの参加者数の方が多いことが読み取れる。

トーク回数ベスト20



注）《ゲッセマネの祈り》は、ジョルジョ・ヴァザーリまたはルカス・クラーナハ（父）の二作品の合計数。

ベスト1｜クロード・モネ《睡蓮》

ベスト2｜クロード・モネ《舟遊び》

ベスト3｜マリー=ガブリエル・カペ《自画像》

ベスト4｜ヤコポ・デル・セッライオ《奉納祭壇画：聖三位一体、聖母マリア、聖ヨハネと寄進者》

ベスト6｜オーギュスト・ロダン《オルフェウス》

ベスト5｜エドワールト・コリール《ヴァニタス－書物と髑髏のある静物》

ベスト8｜ペーテル・パウル・ルーベンス《眠る二人の子供》

ベスト7｜ヤーコプ・ファン・ロイスダール《樫の森の道》

1-3
建築ツアー

開始時期：2009年度

概要： 建築ツアーは、20世紀を代表する建築家の一人である、ル・コルビュジエが設計した本館（1959）や前庭を約50分かけてめぐる、ボランティア・スタッフによるプログラム。開館時の第2・第4水曜日および毎週日曜日に実施している。2016年、ル・コルビュジエの設計した17資産の一つとして当館の本館と前庭がユネスコの世界文化遺産に登録されたことで、本プログラムへの注目度も上がっている。ツアーでは、ル・コルビュジエが提唱した「無限成長美術館」や「近代建築の5つの要点」などの特徴を、本館の各所で確認し、そのユニークな空間を体感することを重視している。また、来館者が普段あまり意識することのない美術作品と建物の関係について考える機会も提供している。

2013年度以降：

開始初年度は毎週日曜日、2年目以降は第2・第4日曜日に、定員を15名として実施した。解説を聞き取りやすくするためにインカムを使用し、ボランティア・スタッフはトーカーとアシストの2名一組体制とした。2012年10月以降は第2・第4土曜日に変更し、2013年10月からは定員を20名に増やした上で2グループに分け、参加者とのコミュニケーションをこれまで以上に丁寧に行うようになった。世界文化遺産への登録が決まったことを契機に2016年9月以降は第2・第4水曜日と第2・第4日曜日の実施とし、その後ボランティア・スタッフからの要望に伴い2018年度からは第2・第4水曜日と毎週日曜日と変更し、受け入れ人数と回数を増やしている。それに伴い参加方法も当日の先着制から事前予約制にすることで、遠方からの来館者も確実にツアーに参加できるように改善した。また、従来問い合わせがあった場合に応じていた主に成人団体向けのツアーに加え、2018年度からは学校団体向けツアーの試行も開始した（スクール・プログラム参照）。大学などからの依頼については内容によって建築の専門の職員が対応している。

より多くの来館者へ対応しようとするボランティア・スタッフの積極的な姿勢によって、建築ツアーは更なる展開を迎えようとしている。

実施回数及び参加者数

建築ツアー

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
実施回数	9	18	11	32	45	67	60
参加者数	135	301	213	641	747	1179	1082

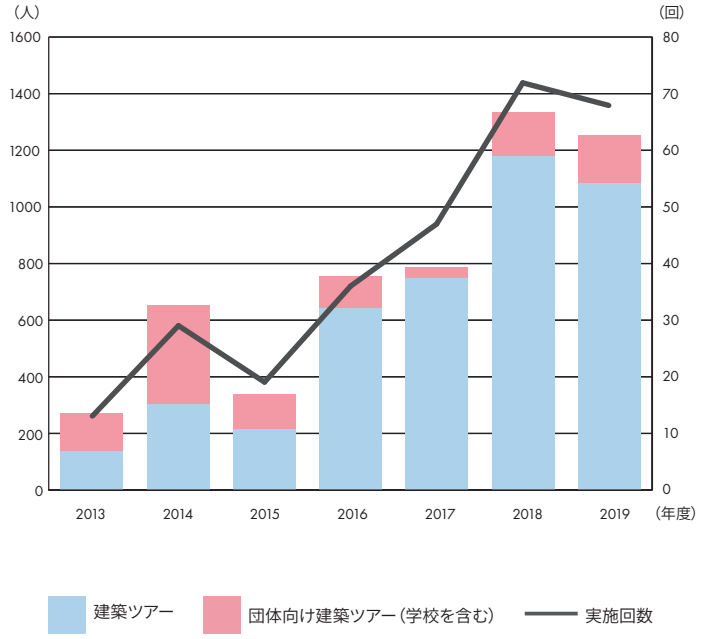
団体向け建築ツアー（学校を含む）

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
実施回数	4	11	8	4	2	5	8
参加者数	135	351	126	115	42	154	173

建築ツアー合計

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
実施回数	13	29	19	36	47	72	68
参加者数	270	652	339	756	789	1333	1255

参加者数の推移



コース例

参加者20名は10名ずつ二つの班に分かれてツアーに参加する。二つの班の見学場所が重ならないよう、事前にツアー担当のボランティア・スタッフがコースを組み立ててから実施している。見学場所やツアーの内容は各回で少しずつ異なる。

通常時

1班コース：
集合場所（本館ロビー）→19世紀ホール→2階展示回廊→新館→前庭で解散→（地下免震：オプション）

2班コース：
集合場所（本館ロビー）→前庭→19世紀ホール→2階展示回廊→本館ロビーで解散

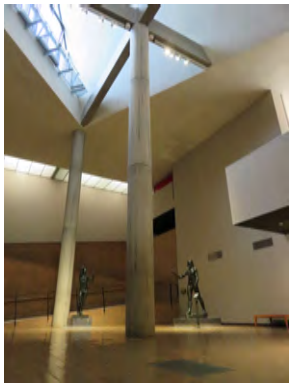
期間限定特別建築ツアー時

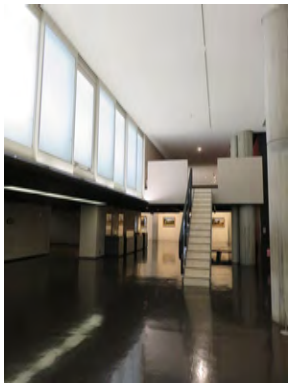
※「国立西洋美術館開館60周年記念　ル・コルビュジエ　絵画から建築へ ―ピュリスムの時代」展期間中（2019.2. ～2019.5.）は通常未公開の旧館長室をコースに加え、建築ツアー参加者のみに案内した。

1班コース：
集合場所（本館ロビー）→前庭（ピロティ下）→19世紀ホール→2階展示回廊→旧館長室→本館ロビーで解散

2班コース：
集合場所（本館ロビー）→19世紀ホール→2階展示回廊→旧館長室→新館→本館ロビーで解散

前庭


19世紀ホール


2階展示回廊

ピロティ

2階バルコニー

申込ウェブ画面

国立西洋美術館
The National Museum of Western Art
サイトマップ English
ご利用案内 展覧会 所蔵作品 イベント 教育／研究 当館について ショップ／レストラン トップページ
トップページ » イベント » 美術トーク／建築ツアー » 建築ツアー
日付選択・同意
申込送信
責任者からのメール
完了手続き
完了
建築ツアー
建築ツアー申込
申し込みは先着20名となります。一度に申し込むことができるのは2名までです。
参加希望日を選択し、同意文書を確認のうえ「同意」ボタンをクリックしてください。
ツアー実施日の2週間前、午前10時から申し込みができます。
：ツアー実施日
2019年08月
2019年09月
2019年10月
日 月 火 水 木 金 土
あなたのツアー希望日
同意文書
«観覧券の購入について»
・展示室に入りますので、観覧券が必要となります。
・観覧券は、お客様ご自身であらかじめご購入ください。混雑状況によっては観覧券購入に時間がかかることもありますので、お早めにお越しください。
«個人情報の取り扱いについて»
・ご記入いただく個人情報は申し込まれた建築ツアー実施のためにのみ使用し、それ以外の目的で使用することはありません。
・個人情報は申し込まれた建築ツアー終了後に破棄します。
«申込受付・キャンセルについて»
・申し込みはインターネットからのみ受け付けます。お電話・ファックス等による申し込みはできません。
・同時に申し込むことができるのは、1つのメールアドレスにつき2名までです。3名以上で申し込む場合は別途申込手続を行ってください。その際、連絡先のメールアドレスは異なるアドレスをご入力ください。
・申込手続が可能な期間は、ツアー当日の午前10時までです。
・申込手続中に表示される人数はお客様が申込を開始した時点の数ですので、手続途中に変わる場合があります。
・参加できなくなった場合は必ずキャンセル手続を行ってください。キャンセル方法は申込完了時にお送りするメールをご覧ください。お電話・ファックス等によるキャンセルは受け付けません。
«ツアーに参加する際のご注意»
・本プログラムは、自然災害、事故、その他のやむを得ない事情により事前の連絡なく中止する場合があります。
・展示室内での作品への接触等を防ぐため、大きなお荷物等はあらかじめコインロッカーにお預けください。
・ツアー中の写真及び動画撮影はご遠慮ください。
・館内で使用できる筆記用具は鉛筆のみです。
上記の内容にご了承いただいたうえで「同意」ボタンを送信下さい。
同 意
プレス関係の方へ ▸ 入札・採用情報 ▸ 独立行政法人国立美術館 ▸ 著作権とサイトポリシー ▸ 携帯サイトのご案内

1-4
鑑賞教材

びじゅつーる

開始時期：2002年度

概要： びじゅつーるは、常設展の作品を大人と子ども（6歳〜10歳）で楽しく鑑賞するための補助ツールである。びじゅつーるの開発・制作・改善は、当館インターンの活動の一つにもなっていて、2002年度から2010年度までに8種類のツールが制作された。作品と関連のあるフェルト製の人形、カンヴァス、筆など直接触れることのできるモノや、ゲームなどで構成されたこれらのツールの利点は、遊びの要素を含むさまざまな活動を通して作品への興味・関心を促す手助けができることである。美術や美術館初心者向けの貸し出しツールである。

当初は、ファミリープログラムの一環として3ヶ月を単位として、年2回（計6ヶ月）、月の第2・第4土曜日に貸し出していたが、2010年度からは子どもがより多く来館する夏休み期間に変更した。また、常設展を無料開放するファン・デーでは、年齢を問わず希望者に貸し出した。

2013年度以降：

2016年に本館と前庭が世界文化遺産に登録され、来館者が増加して展示室が混雑するようになったのを機に、ツールの貸し出しは中止しているが、必要に応じてスクール・ギャラリートークで活用している。貸し出しを再開するかは今後の検討事項である。

また、2018年度、スクール・ギャラリートークでの活用を前提に、多様な作品で使用可能な「色彩チップ」と「言葉カード」のツールを新たに開発した。

アートカード

開始時期：2007年度

概要： アートカードは、東京国立近代美術館（本館・工芸館）、国立西洋美術館、国立新美術館、京都国立近代美術館、国立国際美術館の国立美術館5館が共同で作成した、全館共通の貸し出し用鑑賞補助教材である。全65枚のカードの作品は、各館の所蔵作品から13点ずつ選ばれたもので、所蔵作品を持たない国立新美術館を除く中世から現代までの絵画、彫刻、版画、写真、工芸など、国内外の幅広いジャンルの作品で構成されている。アートカードには作品名や作家名は載せず、利用者の工夫次第でさまざまな使い方が可能という特徴がある。

授業、あるいは美術館訪問前の鑑賞の導入として、主に学校団体に広く活用されているが、大学や教員研修などさまざまな用途で使うことができる汎用性の高い教材である。2012年度からは、カードを薄くし、作品解説の冊子も加え、コンパクトなケースで販売を開始している。

2013年度以降：

2013年度、2016年度、2018年度と増刷を繰り返し、作品を一部入れ替えるなどの変更を行っている。学校での使用におけるアートカードの利便性を向上させるため、2012年度より販売を開始し、学校はカードを借りる度にかかっていた送料や手続きの手間なく自由にアートカードを利用できるようになった。現在も、アートカードの使い勝手を試す意味を含め、初回の使用を中心に貸し出しを行っている。

2013年度、2014年度はファン・デーの中でびじゅつーるの貸し出しを行い、2015年度はファン・ウィズ・コレクションとして複数のツールの貸し出しを実施したため、本書では両ページに実績を掲載する。

びじゅつーる貸し出し件数

ファン・デー 2013年度

日付	ツールの種類	参加者数	件数
8月10日(土)	ロダン	117	52組 (子ども61、大人56)
8月11日(日)	ロダン	182	77組 (子ども105、大人77)
合計		299	129組 (子ども166、大人133)

ファン・デー 2014年度

日付	ツールの種類	参加者数	件数
9月27日(土)	ロダン	137	62組
	モネ	82	46組
9月28日(日)	ロダン	226	80組
	モネ	133	58組
合計		578	246組

ファン・デー2015年度

日付	ツールの種類	参加者数	件数
6月13日(土)	ロダン	301	116組
6月14日(日)	ロダン	395	148組
合計		696	264組

ファン・ウィズ・コレクション 2015年度
「びじゅつーる：みて！つかって！たのしんで！」

日付	ツールの種類	参加者数	件数
8月7日(金)	わたしのしるし、かるたブック、絵をめぐる本と地図	95	39組 (子ども58、大人37)
	モネ、ドニ、ロダン	58	23組 (子ども31、大人27)
8月8日(土)	わたしのしるし、かるたブック、絵をめぐる本と地図	101	38組 (子ども49、大人52)
	モネ、ドニ、ロダン	79	32組 (子ども39、大人40)
8月9日(日)	わたしのしるし、かるたブック、絵をめぐる本と地図	165	60組 (子ども87、大人78)
	モネ、ドニ、ロダン	79	27組 (子ども44、大人35)
合計		577	219組 (子ども308、大人269)

びじゅつーるの紹介

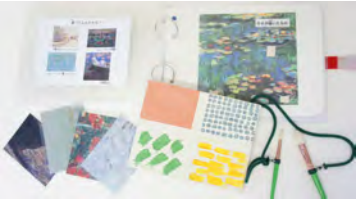
『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』より、2013年度以降に使用したびじゅつーるを再掲載する。

〈ロダン〉
ロダンの作品を楽しむツール。人形を使いながら、ロダンの彫刻の動きやポーズを見ていく。

〈ドニ〉
ドニの作品を楽しむツール。フェルト素材の小さな丸い点で、絵を描くことができる。

〈絵をめぐる本と地図〉
地図をもとに、イエス・キリストの描かれた絵を探しに行く。一人の人物の物語をたどることができるツール。

〈モネ〉
モネの作品を楽しむツール。カンヴァスに触れたりクイズに答えたりしながら、モネの筆使いや描き方を見ていく。



〈かるたブック〉
カルタ遊びを通して、絵と言葉のつながりが楽しめるツールには、絵を言葉で表現する作業が含まれる。

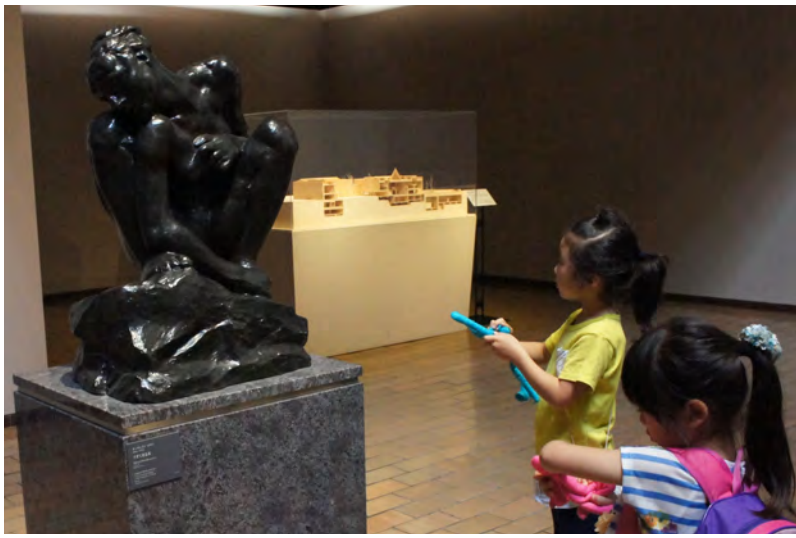
〈わたしのしるし〉
人物の上半身と下半身を合わせるゲームをした後、持ち物やポーズに注目しながら、その人物が描かれた絵を鑑賞する。

アートカード貸し出し一覧

年度	学校名	セット数
2013	世田谷区立笹原小学校	10
	杉並区立浜田山小学校	8
	埼玉県ふじみ野市立東台小学校	8
	渋谷区立加計塚小学校	8
	江戸川区立葛西小学校日本語学級	3
	稲城市立稲城第四小学校	6
	江戸川区立小松川第二中学校	6
	茨城県守谷市立大井沢小学校	9
	跡見学園中学校高等学校	3
	新潟県新発田市立本丸中学校	9
	江戸川区立西葛西小学校	7
	葛飾区立白鳥小学校	10
	三鷹市立高山小学校	7
	計	**94**
2014	江戸川区立上小岩小学校	2
	墨田区立両国小学校	7
	北海道森高等学校	5
	葛飾区立白鳥小学校	10
	計	**24**
2015	豊島区立池袋本町小学校	3
	千葉県松戸市立松ヶ丘小学校	4
	葛飾区立住吉小学校	10
	横浜女学院中学校高等学校	3
	開智望小学校	3
	世田谷区立笹原小学校	10
	中野区立新山小学校	10
	足立区立西伊興小学校	10
	埼玉県羽生市立須影小学校	8
	荒川区立峡田小学校	10
	江戸川区立二之江中学校	10
	計	**81**
2016	日本電子専門学校	3
	東京藝術大学博士課程	5
	葛飾区立清和小学校	10
	日本電子専門学校	1
	豊島区立目白小学校	8
	茨城県那珂市立横堀小学校	4
	千葉県習志野市立袖ヶ浦東小学校	10

年度	学校名	セット数
2016	神奈川県川崎市立古川小学校	10
	立教大学文学部	3
	荒川区立荒川第四中学校	5
	福生市立福生第一中学校	10
	葛飾区立住吉小学校	10
	日本電子専門学校	1
	計	**80**
2017	千葉県船橋市立小室中学校	6
	東京学芸大学附属世田谷小学校	6
	群馬県沼田市立沼田小学校	10
	千葉県木更津市立八幡台小学校	7
	江戸川区立葛西小学校日本語学級	1
	田園調布雙葉学園小学校	1
	千葉県習志野市立大久保小学校	9
	鹿児島県宇検村立田検中学校	3
	台東区立金竜小学校	8
	栃木県立足利高等学校	4
	計	**55**
2018	横浜美術大学教職課程研究室	10
	台東区立金曽木小学校	10
	荒川区立赤土小学校	8
	杉並区立杉並第九小学校	8
	神奈川県横浜市立黒須田小学校	9
	神奈川県横浜市立東小学校	6
	神奈川県横浜市立北方小学校	10
	神奈川県横浜市立旭小学校	1
	世田谷区立奥沢中学校	7
	埼玉県小鹿野町立小鹿野中学校	7
	計	**76**
2019	新潟県見附市立葛巻小学校	8
	玉川学園中学部	6
	墨田区立錦糸小学校	7
	練馬区立富士見台小学校	7
	荒川区立第二日暮里小学校	7
	国分寺市教育委員会学校指導科適応指導教室トライルーム	1
	江戸川区立第二葛西小学校	10
	葛飾区立梅田小学校	4
	世田谷区立奥沢中学校	7
	計	**57**

びじゅつーる
ロダン人形
どなたでもどうぞ!



1-5

どようびじゅつ

開始時期：2004年度

概要： どようびじゅつは、常設展の作品鑑賞と創作などの体験がセットになったファミリー・プログラムで、美術や美術館を家族で楽しんでもらうことを目的としている。さまざまな活動をとおして豊かな感受性と自己表現を養うだけでなく、大人と子どもが相互に学びあう場であることも重視している。また、プログラムで制作した作品は、美術館と家族をつなぐ役割を担う貴重なお土産である。

教育普及室職員とボランティア・スタッフによって企画・実施されているこのプログラムは、事前申込制で、春と秋の各3ヶ月を一期間として、第2・第4（2016年度以降第1・第3）土曜日の午前と午後に行われている。家族で参加しやすい2時間という時間設定もあり、繰り返し参加する家族が多い。また、兄や姉が対象年齢を超えても、引き続き弟や妹が参加するなど、長期間にわたって参加する家族も出てきている。

2013年度以降：

2013年度、2016年度の募集によって、新たに加わったボランティア・スタッフの新鮮な視点とアイディアが、プログラム企画の原動力となって新しいプログラムが次々と生まれている。また、2013年度には常設展示室で開催された企画展を利用したり、2014年度には当館の版画コレクションによる企画展を利用したりと、変則的な対応を行った。どようびじゅつの人気は変わらず、毎回ホームページで案内を出すと2、3日で予約が埋まる状況である。

運用面については、プログラム遂行のスキルアップを図るため、担当スタッフを春と秋の2グループに分けて、担当する期間に複数回プログラムを担当できるよう変更した。これによって初回の反省点を次の回で改善することができるようになった。2016年、本館と前庭の世界文化遺産登録に伴い、無料観覧日となる第2・第4土曜日の常設展の混雑を避けて、実施日を第1・第3土曜日に移したため、大人のみ常設展観覧料が有料となった。

プログラムの概要

年度	実施日 2013〜2015年度：第2・第4土曜日 2016年度〜　：第1・第3土曜日 ①10：00〜12：00 ②14：00〜16：00	タイトル	参加者数	概要	鑑賞で取り上げられた作品
2013年度	9月14日・28日 10月12日	ミル。ハル。コル？―コラージュで遊ぼう	88	「ル・コルビュジエと20世紀美術」展から抽象絵画2点を選んで鑑賞した後、丸い画用紙に色紙を使ってコラージュ作品を作った。	《静物》、《サイフォンのある静物》、《女性のアコーディオン弾きとオリンピック走者》、《ラ・ガループの海水浴場》
2014年度	4月19日・26日 5月10日・24日	虫めがねで探してみよう！見てみよう！	114	虫めがねを使って「ジャック・カロ」展の緻密な版画を鑑賞した後、ドライポイントの技法を使って版画を作成した。	《インプルネータの市》、《ナンシーの競技場》
2014年度	9月13日 10月11日・25日 11月8日・22日	ペタペタ・色いろ・タマテバコ	145	筆のタッチに注目して絵画作品を3点鑑賞した後、蓋付きの箱に細かくちぎったマスキングテープやシールを貼って飾った。	《狩猟者のいる風景》、《波立つプールヴィルの海》、《エプト河の釣人たち》、《ナポリの浜の思い出》、《サン＝トロペの港》
2015年度	4月11日・25日 5月9日・23日	セイビ・パレット	112	色に注目して3点の絵画作品を鑑賞した後、エコバックに円、三角形、正方形などの型を置いて、型の内側に好きな色の絵具を重ねて混色を楽しんだ。	《マグダラのマリア》、《睡蓮》、《ホワイト・ペインティング》
2015年度	9月12日・26日 10月10日・24日 11月14日・28日	いろいろ＊ミロ	174	お話作りやゲームをしながら3点の絵画作品を鑑賞した後、最後に見た抽象絵画を参考にして、フェルトや羊毛、ボタンなどでコラージュ作品を作った。	《アルクマールの運河、オランダ》、《赤い鶏と青い空》、《絵画》
2016年度	4月2日・16日 5月7日・21日	あかるいところ☀くらいところ	120	絵画の明暗に注目して鑑賞した後で、カラーセロハンを好きな形に切って組み合わせたものをラミネート加工し、色の重なりを楽しんだ。	《ゲッセマネの祈り》、《果物籠のある静物》、《ラ・シエスタ、スペインの思い出 》
2016年度	9月3日・17日 10月1日・15日 11月5日・19日	セイビのたてもの再発見！2016	178	7月に世界文化遺産登録が決まった本館と前庭を巡る建物ツアーを楽しんだ後、ル・コルビュジエが好んだ建材コンクリートを使ってペーパーウエイトを作った。	本館の建物と前庭
2016年度 〜 2017年度	3月4日・18日 4月1日・15日 5月6日・20日	わくわく☆わ〜く！！	176	「額」に注目しながら3点の絵画作品を鑑賞した後、段ボールを自由に切り抜いてオリジナルの額縁を作った。	《聖母子》、《城の見える風景》、《最後の審判》
2017年度	9月2日・16日 10月7日・21日 11月4日・18日	コネコネ・ペッタン！ねんどで遊ぼう！	176	絵のモチーフの組み合わせに注目してグループごとに2点の静物画を鑑賞した後、家族ごとに決めたテーマに合ったモノを紙粘土で複数作って組み合わせ、家族で一つの作品を作った。	《ヴァニタス－書物と髑髏のある静物》、《果物籠のある静物》、《楽器のある静物》、《果物籠と猟鳥のある静物》
2017年度 〜 2018年度	3月3日・17日 4月7日・21日 5月5日・19日	ホントはにぎやか？びじゅつかん！	183	絵の中から聞こえてくる音を想像しながら絵画作品を鑑賞した後、色紙やフェルトを使って音を表現したコラージュ作品を作った。	《ピアノを弾く妻イーダのいる室内》、《ホワイト・ペインティング》、《ナンバー8, 1951 黒い流れ》他
2018年度	9月1日・15日 10月6日・20日 11月3日・17日	らぶ♡らぶ　フロッタージュ	186	色彩をテーマに、グループごとに作品探しのゲームなどを行いながら3点の絵画作品を鑑賞した後、色鉛筆と厚紙を使ってフロッタージュ作品を作った。	《音楽》、《花の中の子供 (ジャック・オシュデ) 》、《ヴェトゥイユ 》、《収穫物の脱穀》
2018年度 〜 2019年度	3月2日・16日・30日 4月6日・20日 5月4日	ボン・ボヤージュ!	185	描かれた世界に入り込み、旅をするように3点の絵画作品を鑑賞した後、旅をした作品の思い出を詰めたトランクを作った。	《春（ダフニスとクロエ）》、《石化した森》他
2019年度	9月7日・21日 10月5日・19日 11月2日・16日	ココロでコラージュ	175	描かれた人物の気持ちに注目して3点の絵画作品を鑑賞した後、さまざまな素材を用いて自分の気持ちを表すコラージュ作品を作った。	《ソドムを去るロトとその家族（ルーベンスの構図に基づく）》、《パリスを戦場へと誘うヘクトール》他

※各プログラムの詳細は『国立西洋美術館ボランティア活動報告 2012年度 –2015年度』、『同 2016年度 –2019年度』を参照のこと。
※2013年3月〜5月に開催された「アニマル・ウォッチング☆2013」は『国立西洋美術館教育活動の記録 1959–2012』に記載。
※2019年度〜2020年度（2020年3月〜5月）に実施予定だった「アートリンピック　西美で見つけよう！君だけの競技」は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止となった。

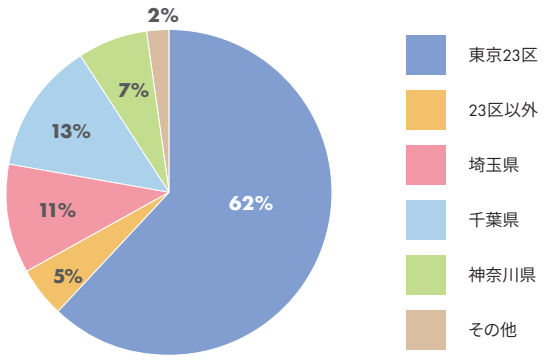
アンケートより

これまで毎回、子ども、大人の参加者を対象に、プログラム終了時にアンケートを実施してきた。その中から、「ホントはにぎやか？びじゅつかん！」（2017年度〜2018年度）、「らぶ♡らぶフロッタージュ」（2018年度）、「ボン・ボヤージュ！」（2018年度〜2019年度）の3つのプログラムの参加者によるアンケート（回答数：全36回分　子ども260名、大人255名）を集計した。どのような家族が参加しているのか、その傾向を捉えることを試み、参加者のプログラムに対する感想の集計、分析を行った。

参加者の属性

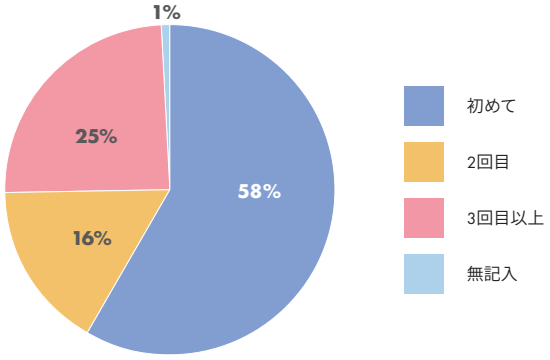
— 大人へのアンケートより　n=255 —

Q1. お住まいはどちらですか。



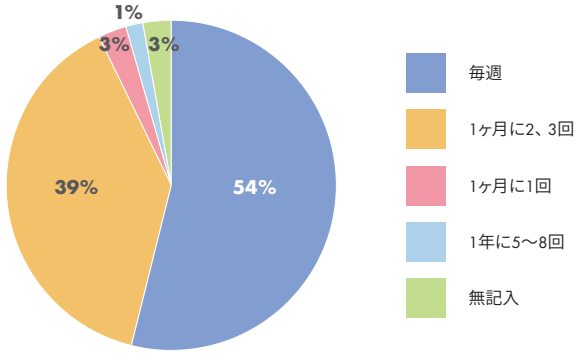
東京23区が圧倒的に多く6割を占め、残りの4割も23区以外の東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県と近隣の地域が占めている。参加者は来館しやすい地域の住民であることが分かる。

Q2. 何度目のご参加ですか。



2回目、3回目以上とリピーターが4割を占めているが、6割は新規参加者である。リピーターは多いものの、6〜9歳と年齢を区切っていることもあり、参加者の入れ替えがある。

Q3. 休日には親子でどのくらい外出しますか。



半数以上が毎週親子で外出していると答え、4割が1ヶ月に2、3回外出していると答えている。日頃から親子で出かける習慣があることが窺える。また、その行き先についての自由回答をカテゴリー分けして集計したところ、美術館でのプログラムの直後に行ったアンケートであることも影響していると考えられるが、公園に次いで博物館／美術館が上がった。

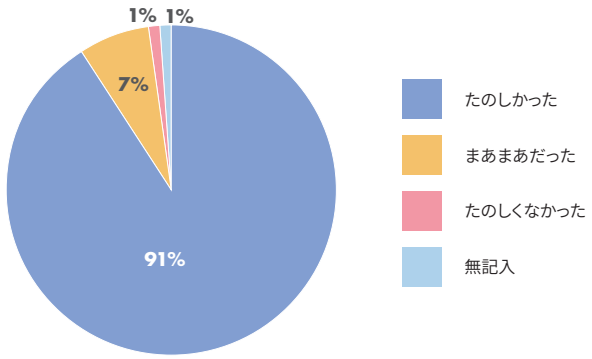
Q3-2. その時はどんなことをしていますか。どんな場所に行きますか。（自由回答）

・公園	124件
・博物館／美術館	109件
・イベント／ワークショップ	41件
・ショッピング	38件
・アウトドア	24件
・スポーツ／スポーツ観戦	20件
	など

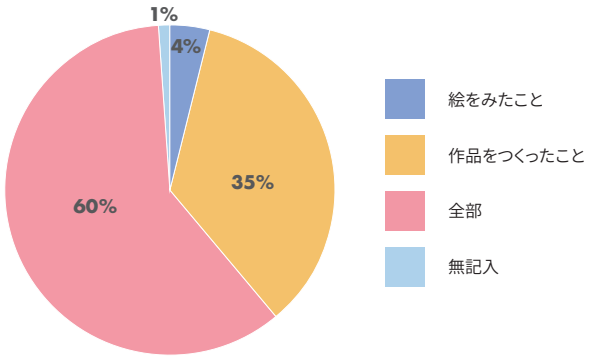
プログラムに参加しての感想

— 子ども（選択式）　n=260 —

Q1. 今日はどうでしたか？たのしかったですか？



Q2. なにがたのしかったですか？



Q1、Q2共に、『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』での集計と同じ設問である。前回とほぼ同じ割合で、子どもの参加者の9割がプログラムを楽しかったと答え、そして6割が鑑賞と創作のプログラム全般を楽しんだと答えている。

— 大人（自由回答）—

Q1. プログラムの感想をお聞かせください。（抜粋）

「ホントはにぎやか？びじゅつかん！」

1. 好意的な意見
(1) テーマについて
- 音を想像しながら絵画をみる、ということをこれまで意識したことがなかったので、面白かったです。意外といろんな音がしているものなんだなあと気付きました。
- 注意してみると、ほかの絵からもいろんな音が聴こえてきました。館内を再度めぐってみたいと思います。
- 絵から音をイメージするという発想が自分では思いつかないので、とても良かった。
- “音”という楽しみ方をしたことがなかったので、楽しみ方がふえた点が良かったです。

(2) プログラムの構成について（鑑賞、トークなどについての感想）
- 絵の鑑賞と実際に手を使った工作がセットになっているところがより理解を深めることができて良かったです。
- とてもよかったです。まさか私も作品を作るとは思ってはおらず最初はとまどいましたが、実際にやってみると楽しく、良い記念となりました。
- 問いかけながらの鑑賞は作品を深く理解できるのでとっても楽しかったです。先生方（ボランティア・スタッフ）の雰囲気もやわらかくとても居心地が良かったです。

(3) 作品の見方、美術館の楽しみ方について
- 新しい観点で美術館を楽しめそうで、いいきっかけになりました。
- 一人ひとりの感性を発表できる、勉強ではない、とても楽しい内容でした。子どもたちと美術館を楽しむヒントを学びました。
- あらためて、絵画をじっくり見ることができました。
- 絵を掘り下げて考える事が出来て楽しかったです。

(4) 家族で参加することについて
- 家族全員で楽しめるプログラムでとても良かったです。

(5) 子どもの様子、子どもにとってどうだったか
- 家ではおしゃべりな子どもの静かなところが見られておもしろかった。
- わかりやすく丁寧な解説と導き／サポートのお陰で子どもが絵を理解しようとする視点を持てました。
- 毎回成長が見られてとても楽しいです。

(6) 他の参加者からの影響
- 先入観のない子どもの目から見た美術品の感想を聞くのが、とても新鮮でおもしろかった。
- お子さん達の感性の豊かさを感じました。

2. 要望
- 美術館で絵画を観る時間が、もう少しあると良いなと思います。
- 製作の時間がもう少し長いと良かった。
- 小学生高学年が参加できるプログラムがあれば、ぜひ参加したい（有料可）。
- 最初に3つの原則で「大きな声でしゃべらない」というと、発表するときも、小さい声になってしまうのが残念。

「らぶ♡らぶ　フロッタージュ」

1. 好意的な意見
(1) フロッタージュの体験について
- 新しいこと（フロッタージュ）ができてよかったです。
- フロッタージュの技法の基礎に触れられて、とても良い機会となりました。

(2) プログラムの構成について（鑑賞、トークなどについての感想）
- 前半絵を見て後半ワークショップで2時間あっというまでよかったです。絵画をあんなにじっくり見たことなく感想を述べる機会もなかったのでとてもよい体験でした。
- バランスが取れていてよかった。
- 時間内、もちかえりやすい、汚れない、助かります！
- 絵画鑑賞のあと、制作と、めりはりがあってよかった。
- 絵の鑑賞法を知らなかったので、一つひとつ質問しながら見るのは良いと思いました。

(3) 作品の見方、美術館の楽しみ方について
- 非常に楽しかった 。美術が身近に感じられ、視点が広がる。
- 自由な発想と感覚を持つ良い機会になると思いました。大きな絵画、作家さんの本物にふれるよい機会にもなりました。
- いつもなら、すっと通りすぎてしまう絵画も、見方を変えてみることができて勉強になりました。

(4) 家族で参加することについて
- 大人も作品を作ることで一緒に楽しむことができ、とても良かったです。
- 子どもはよく一人で物作りをしているのですが、親子ではなかなかやることが少ないので、今日は一緒に楽しめて嬉しかったです。
- 普段親子で一緒に参加するようなワークショップだと子どもメインになりやすくなりますが、これは親も楽しめてよかったです。

(5) 子どもの様子、子どもにとってどうだったか
- ボランティアの方のヒアリング力がすごいと思いました。普段あまり発言しない娘が、めずらしくたくさん発言していました。
- 絵のおもしろい見方がわかり工作の時間もあったので子どもがあきずに楽しめました。
- 1作品をじっくり観て、子どもの思いをきき、新しい発見がありました。子どもの創造力を引き出す楽しい時間でした。
- 子ども自身が段々と絵について考え、思いを発言していく変化が見られて嬉しかったです。

(6) 他の参加者からの影響
- 同じ作品でも人によってさまざまな感じ方があり、一緒に鑑賞するのは楽しいと思いました。
- 絵画鑑賞をみんなでして、色々な子どもさんたちの視点を知れて、良かったです。

2. 要望
- 一つの作品を見る時間がやや長く感じた。
- もう少し作品を見られたらよかったです。

「ボン・ボヤージュ！

1. 好意的な意見
(1) テーマについて
- 絵の中へ旅に出られて新鮮な気持ちで鑑賞できました。
- 絵の中に旅するという発想がなかったので 考えたことのない視点でみることができて楽しかった。

(2) プログラムの構成について（鑑賞、トークなどについての感想）
- たくさんいろいろな材料を使えてよかったです。
- 絵をじっくり見て、イメージをふくらませることが楽しくできました。工作も親子で集中して楽しくとりくめました。
- 絵を鑑賞するだけでなく、印象を形にすることでより深く作品世界に浸ることができ、とても楽しかったです。
- 絵を見て感じた事をひきだして下さった最初の30分が貴重でした。見て 言葉にして その後 工作で表現するという、今までしたことのない楽しい体験でした。
- 絵の世界をふくらませるのはすごく楽しかったです。平面の絵を立体で表現する、子どもも大人もすごく楽しめました。

(3) 作品の見方、美術館の楽しみ方について
- 絵を見るということで自由にいろいろな気持ちになれました。
- いつもより、深く絵のことを考えるきっかけがえられました。
- 絵を見て、イメージし考えることや自分の世界を作っていけることが知れて参考になりました。
- ひさしぶりに絵をながめて、色々なことを考えました。

(4) 家族で参加することについて
- 娘と絵の世界に入りこむ機会ができてよかった。
- 家族みんなで絵に関心をもって話ができたので楽しかったです。
- 親子でじっくり絵を見る機会がなかったので新鮮な気持ちだった。子どもの視点で見るとさらに新しい想像力が広がって楽しかった。

(5) 子どもの様子、子どもにとってどうだったか
- 子どもがとても夢中になっており、新しい一面が見れた。 改めて子どもたちのイメージの豊かさに感動しました！
- 子どもが、自分とは全く違う風に作品を捉えていて興味深かったです。

(6) 他の参加者からの影響
- 息子も含めお子さんたちのピュアな感性を感じられ とても良かったです。
- 絵の印象が人によって色々ちがってとても楽しめました。

2. 要望
- 作品を作る時間はもう少し長いと良いと思います。
- もう少し時間があるといいと思いました。
- 10歳以上向けのプログラムもできるとうれしいです。

各プログラムで出た自由記述の回答すべてを、内容ごとに分類を試みた。好意的な意見と要望の二つに分けると、どのプログラムも、概ね前者であった。そして、その内訳については（1）テーマについて（ただし、「らぶ♡らぶ　フロッタージュ」についてはプログラムの性質上、全体のテーマと言うよりはフロッタージュと言う技法についての記載）、（2）プログラムの構成について、（3）作品の見方、美術館の楽しみ方について、（4）家族で参加することについて、（5）子どもの様子、子どもにとってどうだったか、（6）他の参加者からの影響、の6つに分けた。

全体を通じて言えることは、大人の参加者が本プログラムを自身の体験として捉えているということである。「子どもにとってよかった」という意見も一定数あるが、「楽しかった」「見方が広がった」「じっくり作品を見ることができた」という自身の体験や感想が大半を占めている。また、「家族で一緒に楽しめた」、「子どもの新たな一面を見ることができた」など、家族での参加を喜ぶ意見や、複数の家族で場を共有することを通じて他の参加者の様子から刺激を受けた様子が窺える意見もあった。

個々のプログラムにおける意見の特徴を挙げるとするならば、「ホントはにぎやか？ びじゅつかん！」では、作品から音をイメージするというテーマに対して、「（初めての方法で）面白かった」、「新鮮だった」、「楽しみ方が増えた」などの好意的な意見が多く、「らぶ♡らぶ　フロッタージュ」はさまざまなアクティビティを取り込んだ内容だったためか、全体のバランスに対する好意的な意見が見られ、「ボン・ボヤージュ！」では、鑑賞で得た作品のイメージが創作でより深められる内容だったからか、作品を見て感じたことを「形にした」、「ふくらませた」、「深めた」といった意見があった。

チラシ

どようびじゅつ2013年春

どようびじゅつ2013年秋

どようびじゅつ2014年春

どようびじゅつ2014年秋

どようびじゅつ2015年春

どようびじゅつ2015年秋

どようびじゅつ2016年春

どようびじゅつ2016年秋

どようびじゅつ2017年春

どようびじゅつ2017年秋

どようびじゅつ2018年春

どようびじゅつ2018年秋

どようびじゅつ2019年春

どようびじゅつ2020年春・秋

1-6

ファン・ウィズ・コレクション

開始時期：1995年度

概要： ファン・ウィズ・コレクション（Fun with Collection）は、当館の所蔵作品を活用した、教育普及室による小企画展として1995年度から始まった。当初は「子どものための美術展」として、児童・生徒を対象に開催した。2002年度からは広く大人も含め、当館の所蔵作品を中心に、建築、ときには特別展などもとりあげて、展示とプログラムをセットに、あるいはプログラムのみの企画として、美術作品をさまざまな視点から紹介して美術をより身近に感じ、理解し、楽しんでもらう機会を提供している。

2013年度以降：

2013年度と2014年度は、当館の所蔵作品による展覧会をテーマにプログラムを企画した。2015年度は、第54回東京都図画工作研究大会「中央大会」に協力して、台東区立台東育英小学校に限定した鑑賞の研究授業を企画・実施するという変則的な活動となった[註1]。2016年度と2017年度は、本館と前庭が世界文化遺産に登録されたことを記念して、ル・コルビュジエが設計した本館の魅力を紹介する企画を連続して実施した。本館の建物をテーマとする企画はこれで4回目となった。

2018年度から所蔵版画作品を活用した新たな企画（作品熟覧プログラム参照）が始まったことでファン・ウィズ・コレクションは一時中止となっている。今後は、他のプログラムと調整を図りつつ不定期に実施する予定である。

註
1　概要は、東京都図画工作研究会の報告（http://convention.tozuken.com/cn49/pg340.html 2020年12月10日取得）を参照。

「動物たち、み〜つけた！」

プログラムの概要

2013年度

ピカソが描いた動物たち
― アニマル・ウォッチング@美術館

小企画展会期：7月9日（火）～8月25日（日）

狩猟、家畜、ペット、動物園など、動物は昔から私たちの生活と強い結びつきをもっている。動物の不思議な習性や、特徴のある姿は、大きな魅力となって私たちを惹きつけ、絵や彫刻などにも表されてきた。パブロ・ピカソ（1881-1973）は、ビュフォンの『博物誌』にもとづき、動物や鳥、昆虫などの姿を30点あまりの版画に表した。

これらの版画を用いた版画・素描室による小企画展「ピカソが描いた動物たち ― ビュフォン『博物誌』にもとづく挿絵本より」に関連して、動物をテーマにしたプログラムを実施した。また、ビュフォンの『博物誌』（東京国立博物館所蔵）を展示に加えるなど展覧会への協力も行った。恩賜上野動物園には、『博物誌』の動物に関する解説とプログラムへの協力をいただいた。

〈作品〉

小企画展「ピカソが描いた動物たち ― ビュフォン『博物誌』にもとづく挿絵本より」の展示作品

協力：恩賜上野動物園

〈関連プログラム〉

活動の種類	内容
創作・体験	**●アニマル・フェイス** フェイス・ペインティングで好きな動物に変身して上野動物園へ行き、そこで飼育員の方の話を聞きながら動物を観察した。 実施日：　8月2日（金）・6日（火）11:00～15:00　※2日とも同じ内容 対象：　小学4年生～中学生 講師：　宮原嵩広（美術作家）、恩賜上野動物園飼育員 参加費：　中学生は上野動物園の入園料（ただし、都内在住・在学の中学生は無料） 参加者：　計12名
	●動物たち、み～つけた！ 展覧会を鑑賞した後、自分だけの動物園を描いた。 実施日：　8月3日（土）①10:00～12:00 ②14:00～16:00　※2回とも同じ内容 対象：　4～7歳の子どもと同伴の大人 講師：　藁谷祐子・藤田百合（エデュケーター） 参加費：　無料（ただし大人は常設展観覧券が必要） 参加者：　計31名
講演会	**●動物の不思議な力** 実施日：　8月24日（土）14:00～15:00 対象：　一般 講師：　石田戢（帝京科学大学 総合教育センター教授） 参加者：　10名

チラシ表

チラシ裏

「アニマル・フェイス」好きな動物に変身！

リング・リング
― 祈る、誓う、飾る、楽しむ指輪

企画展会期：7月8日（火）～9月15日（月・祝）

〈作品〉

企画展「橋本コレクション 指輪　神々の時代から現代まで ― 時を超える輝き」の展示作品

2012年、橋本貫志氏（1924–2018）が収集した指輪を中心とする宝飾品約870点が当館に寄贈された。寄贈を記念して開催された企画展「橋本コレクション　指輪　神々の時代から現代まで ― 時を超える輝き」に関連して、指輪の魅力を伝えるプログラムを企画した。

指輪は、装身具というだけでなく、夫婦が取り交わす結婚の誓約の証、あるいは魔よけとしてのお守り、印鑑という機能から権力の象徴など、さまざまな機能と意味を持つモノとして使われ、そのための創意工夫や、高価な素材を使い凝った意匠が施されている。本企画では、そうした指輪の多様性に注目して、おしゃれ、素材とデザイン、象徴性などさまざまな視点から指輪を楽しむプログラムを行った。

〈関連プログラム〉

活動の種類	内容
創作・体験	**●指輪　その輝きに隠された技術** 展覧会を鑑賞した後、ヒコ・みづのジュエリーカレッジの工房で指輪制作に使われるさまざまな技法・材料を見学した。 実施日：　7月19日（土）13:00～17:00 対象：　一般 講師：　井村裕司（ヒコ・みづのジュエリーカレッジ講師、日本ジュエリーデザイナー協会理事） 参加費：　指輪展観覧料と渋谷までの交通費 参加者：　14名 ＊協力＝ヒコ・みづのジュエリーカレッジ
	●ぐるぐる指輪の物語　指輪にまつわる秘密をさぐって、なが～い指輪、つくってみよう！ 展覧会を鑑賞した後、自分だけのオリジナルの指輪を作った。 実施日：　7月21日（月・祝）①10:00～12:00 ②14:00～16:00 ※2回とも同じ内容 対象：　6～9歳の子どもと同伴の大人 講師：　阿部祐子・藤田百合（エデュケーター） 参加費：　大人は指輪展観覧料 参加者：　18名
	●はめて帰ろう！色いろリング ボランティア・スタッフによる予約不要の立ち寄り制プログラム。身近な素材で簡単なリングが作れるデスクを本館ロビーに設置した。 実施日：　8月2日（土）・3日（日）・9日（土）・10日（日）・16日（土）・17日（日）・23日（土）・24日（日） 各日11:00～15:00 対象：　一般 参加者：　3968名
講演会	**●装飾が“罪”ではなかった時代** 実施日：　7月26日（土）14:00～15:30 対象：　一般 講師：　天野知香（お茶の水女子大学大学院教授） 参加費：　無料（ただし、聴講券と指輪展の観覧券が必要） 参加者：　57名
	●ファッション史のなかのジュエリー 実施日：　9月6日（土）14:00～15:30 対象：　一般 講師：　能澤慧子（東京家政大学教授） 参加費：　無料（ただし、聴講券と指輪展の観覧券が必要） 参加者：　83名
映画とトーク	**●ニーベルングの指輪（2004年／184分）のDVD上映** 実施日：　7月27日（日）前編：13:00～14:40　後編15:00～16:30 対象：　一般 トーク：　飯塚隆（国立西洋美術館研究員） 参加費：　無料。ただし、聴講券と指輪展の観覧券が必要 参加者：　40名 ＊協力＝日活株式会社

※講演会は企画展関連のイベントとして、「講演会・スライドトーク」にも記載した。

第54回東京都図画工作研究大会「中央大会」への協力

2015年度は、東京都図画工作研究会の研究大会「中央大会」に協力して、台東区立台東育英小学校に限定した鑑賞の研究授業を企画・実施した。「ここからはじまる〜子どもの未来をひらく図工」という大会テーマのもと、台東区立育英小学校の南明日香教諭による「絵！？ この先に！」という題材の授業である。

当館では、この題材の第一時として「子どもたちが感じたことや思ったことを話したり、友達の想いを共有したりしながら、作品の見方を感じ深める」というねらいのもと、ギャラリートークを行った。各自が自分の想いを膨らませることができるような発問を吟味し、それぞれの考えを共有できるようにした。

続く第二時では、学校での活動として、美術館で鑑賞した作品から想像したことをもとに、新たに自分なりの表現として絵を描いた。美術館での時間を振り返り、子どもたちがその思いを表しやすい描画材を用いて表現した。

〈関連プログラム〉

活動の種類	内容
スクール・ギャラリートーク	●「絵！？ この先に！」 実施日：　6月8日（月）13:00〜15:00 参加者：　台東区立育英小学校5年生49名 ファシリテーター：　教育普及室4名（寺島洋子、横山佐紀、杉浦央子、阿部祐子） 見学・記録：　台東区図工部会会員12名、都図研美術館連携局3名

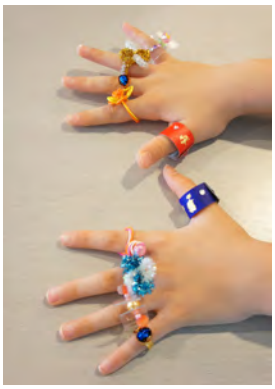
チラシ表

チラシ裏

DVD 上映会チラシ

ぐるぐる指輪の物語

はめて帰ろう！色いろリング



ル・コルビュジエと無限成長美術館
― その理念を知ろう ―

小企画展会期：7月9日（土）～9月19日（月・祝）

〈展示資料〉

「松方コレクションのはじまり」「ル・コルビュジエ建築キーワード」「世界文化遺産と国立西洋美術館」の3セクションの資料パネル48枚／模型4点／映像1点

フランスで活躍した近代建築の巨匠の一人であるル・コルビュジエは、自動車や家具の設計と同様に建築においても、まずその建物の原型となるプロトタイプを研究して、それを何度も書き直すという方法で建物を設計することがあった。2016年7月17日、第40回世界文化遺産委員会において、「ル・コルビュジエの建築作品」の一つとして世界文化遺産に登録された当館の本館も、そうしてまとめあげた《無限成長美術館》のプロトタイプを基にして建てられたものである。

本企画では、国立西洋美術館設立の経緯に始まり、ル・コルビュジエが考案した近代にふさわしい建築の理論や、《無限成長美術館》のプロトタイプの理念とその特徴を取り上げ、さらにプロトタイプの中から本館に実現された要素を、パネルを中心に模型4点と映像1点による小展示で紹介した。また、本展に関連してより多くの来館者に本館の魅力を伝えるために、スライドトークや立ち寄り制のプログラムを実施した。

〈関連プログラム〉

活動の種類	内容
スライドトーク	展覧会の見どころを解説。 実施日：　8月19日（金）・26日（金）　各日19:00～19:30 対象：　一般 講師：　寺島洋子（国立西洋美術館主任研究員） 参加費：　常設展観覧料 参加者：　38名
創作・体験	**●本館のバッジをつくろう！** 立ち寄り制のプログラムで、自由に彩色した本館のイラストでバッジを作った。 実施日：　8月13日（土）・20日（土）　各日①9:30～12:00 ②14:00～16:30 参加費：　常設展観覧料 参加者：　1,628名

展示の様子

ル・コルビュジエの芸術空間
―国立西洋美術館の図面からたどる思考の軌跡

小企画展会期：6月9日（金）～9月24日（日）

2016年度に続き、2017年度も世界文化遺産に登録された国立西洋美術館の本館を取り上げた。所蔵品の増加とともに展示室を増築していくことを基本理念とするプロトタイプ「無限成長美術館」をもとに、ル・コルビュジエは松方コレクションを収蔵・展示するための美術館を上野公園に設計した。現存する302点におよぶ本館設計に関わる資料の中から、厳選した34点の図面やスケッチの複製を用いて、ル・コルビュジエがプロトタイプをどのように日本側の希望と上野という敷地に適応させていったのかを小展示で紹介した。また、展示に関連してさまざまなプログラムを行った。

企画協力：千代章一郎（広島大学大学院准教授）

〈作品〉

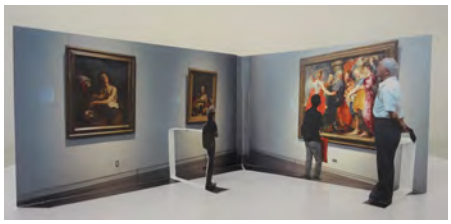
ル・コルビュジエ財団：国立西洋美術館のための図面およびスケッチの複製45点／無限成長美術館模型写真30点／国立西洋美術館模型写真20点

〈関連プログラム〉

活動の種類	内容
ギャラリートーク	実施日：6月24日（土）、7月8日（土）、8月26日（土）、9月9日（土）　18:00～18:40 対象：一般 講師：寺島洋子（国立西洋美術館主任研究員） 参加費：常設展観覧料 参加者：85名
講演・対談	**●ル・コルビュジエの今日的意味** 実施日：6月17日（土）14:00～15:30 講師：伊東豊雄（建築家） 参加者：64名 **●成長する施設：近代の矛盾の写し鏡** 実施日：7月16日（日）14:00～15:30 講師：塚本由晴（東京工業大学大学院教授・建築家） 参加者：32名 対象：一般 参加費：常設展観覧料 モデレーター：千代章一郎（広島大学大学院准教授）
創作・体験	**●フォトモで楽しむ本館** 参加者が撮影した本館の写真を、講師の制作技法にならって立体に作り上げた。 実施日：7月22日（土）10:00～17:00 対象：一般（高校生以上） 講師：糸崎公朗（美術家・写真家） 参加費：常設展観覧料 参加者：8名
	●読図クラブ 馴染みのない建築図面の読み方について学び、図面から完成した建物の姿を想像した。 実施日：8月5日（土）①10:00～12:00 ②14:00～16:00 対象：一般 講師：奥矢恵（建築デザイナー） 参加費：常設展観覧料 参加者：22名

チラシ表

チラシ裏


フォトモで楽しむ本館

ギャラリートーク

読図クラブ

1-7
ファン・デー

開始時期：2007年度

概要： 本プログラムは、週末の2日間（土曜日、日曜日）、常設展および自主展（当館のみが主催の展覧会）を教育普及プログラムと共に無料開放し、国立西洋美術館のコレクションとプログラムを広く市民に紹介して当館を身近に感じてもらうことを目的に、2007年度に開始された。ファン・デーは、これまで、2007年度～2009年度、2011年度～2015年度と、合計8回開催されている。

プログラムについては、ボランティア・スタッフによって日常的に実施されているものを中心に置き、当館の教育活動を参加者がひと通り体験できるよう構成した。具体的には、常設展を中心とするギャラリートーク、建築ツアー、びじゅつーる貸出である。これらに加え、自主展会期中に開催される場合は、ジュニア・パスポートの配布（通常は小中学生限定だが、希望する来館者全員に配布）や、関連プログラム（版画展であれば版画の技法のデモンストレーション）を企画・実施した。

また、三菱商事株式会社の協賛を得たり、各プログラムで外部団体と連携するなどして外部組織から協力を得られたことは、プログラムの充実化ばかりでなく国立西洋美術館の教育活動の周知のためにも有効であった。

2013年度以降：

2013年度以降も、上述の通り2015年度までファン・デーが実施された。2013年度は常設展に加え、自主展「ル・コルビュジエと20世紀美術」、小企画展「ピカソが描いた動物たち ― ビュフォン『博物誌』にもとづく挿絵本より」も無料開放とし、作品ツアーやセルフガイド配布などの関連プログラムも実施した。また、この年に制作された「本館立体パズル」も続く2014年度、2015年度のファン・デーでも定番のプログラムとなった。

当館本館が2016年7月に世界文化遺産に登録され、これに伴う常設展の混雑が予想されたため、2016年度以降、ファン・デーは休止となっている。ボランティア・スタッフの日ごろの活動を新規来館者に紹介する機会がないことは残念だが、これに代わるように「ボランティアート」の企画が順調に進んでおり、ファン・デーは一定の役割を果たし、発展的に休止している状況である。

前庭コンサート

2013年度

FUN DAY 2013

8月10日（土）・11日（日）

全入館者数（常設展＋ル・コルビュジエ展）：6,171名

プログラム別参加者数

プログラム	参加者数
ギャラリートーク「コレクション、この1点」	441
びじゅつーる　ロダン人形編	299
セイビ・パズル	640
本館パズル	370
本館建築ツアー	60
ル・コルビュジエの絵画を見よう！作品ツアー	60
セルフガイドもらえます！ （小企画展「ピカソが描いた動物たち ― ビュフォン『博物誌』にもとづく挿絵本より」関連）	3,000
前庭コンサート	423

協賛：三菱商事株式会社
協力：ジャパンアカデミーフィルハーモニック

本館パズル

制作物｜（左上から時計回りに）スタッフTシャツ、当日配付プログラム表、本館パズル、セイビ・パズル、「ピカソが描いた動物たち」展ジュニア・パスポート

チラシ表

チラシ裏

2014年度

FUN DAY 2014

9月27日（土）・28日（日）

全入館者数（常設展）：4,369名

プログラム別参加者数

プログラム	参加者数
ギャラリートーク「コレクション、この1点」	364
ミュージアム缶バッジを手に入れよう！	2,600
びじゅつーる　ロダン・セット、モネ・セット	578
セイビ・パズル	407
常設展パンフレット	2,699
本館立体パズル	201
本館建築ツアー	80
ホドラー展パンフレットもらえます！	894
前庭コンサート	674

協賛：三菱商事株式会社
協力：ジャパンアカデミーフィルハーモニック

チラシ表

ミュージアム缶バッジを手に入れよう！

制作物｜（左上から時計回りに）常設展パンフレット、スタッフベスト 、当日配付プログラム表、ミュージアム缶バッジを手に入れよう！（問題シート12種類・バッジ）、「ホドラー」展ジュニア・パスポート

スタッフベストはその後の教育活動でも使用することを視野に入れ制作された。ファン・デー後もプログラムを実施する際に、スタッフが着用している。

チラシ裏

2015年度

FUN DAY 2015

6月13日（土）・14日（日）

全入館者数（常設展）：5,590名

プログラム別参加者数

プログラム	参加者数
ギャラリートーク「常設展、この1点」	572
たのしいセイビぬりえ	5,040
びじゅつーる　ロダン人形編	696（264組）
セイビ・パズル	492
本館立体パズル	450
本館建築ツアー	81
ボルドー展パンフレットもらえます！	1,285
前庭コンサート	580

協賛：三菱商事株式会社

チラシ表

たのしいセイビぬりえ

制作物｜当日配布プログラム表、「ボルドー」展ジュニア・パスポート、たのしいセイビぬりえ（6種類）

チラシ裏

1-8
ボランティアート

開始時期：2014年度

概要： ボランティアートは、企画から実施までをボランティア・スタッフの有志が行うプログラムで、夏とクリスマスの年2回行っている。当日の来館者の誰もが予約の必要なく気軽に立ち寄り、短時間で参加できるよう内容が工夫されていることから、家族連れ、友人同士、海外からの来館者など、年齢や国籍を問わない多様な人々に開かれたプログラムである。

2014年度に試験的に開始した後、2015年度にプログラム名をボランティア・スタッフから募集し、volunteerとartを組み合わせた「ボランティアート」に決定した。ロゴも誕生したことで、チラシやポスターで広報する際の目印になっている。また、1年に2回の開催時期が夏とクリスマスに定まっていることで、ボランティアートを楽しみに何度も参加してくれる参加者も見られる。

このプログラムの目的は、ボランティア・スタッフ同士の交流を図り、通常とは異なる自主的な活動を行うことにある。そのため、担当A（学校とファミリープログラム）、B（美術トーク）、C（建築ツアー）の区別なく、ボランティア・スタッフはだれでも企画に参加することができる。教育普及室の職員により初回のミーティングを呼びかけられた後、全ての運営は集まったボランティア・スタッフ有志に任され、「常設展示室の作品と関連のある企画内容」、「大人から子どもまで、誰もが気軽に参加できる内容」、「事前申込は不要の立ち寄り制」などの基本的な条件を加味しながら、ミーティングを重ねて企画を進める。使用する材料選びやプログラム当日のシフトの調整、会場設営、片付け等もボランティア・スタッフ間で行う。これまでは創作プログラムが多い傾向にあったが、鑑賞プログラムなどを実施することも可能である。また、企画を希望するボランティア・スタッフがいない場合にはプログラムは行わない。実施決定自体も含め、ボランティア・スタッフの意思にゆだねられている。

プログラム一覧

プログラム	内容
2014年度　夏	
はめて帰ろう！色いろリング	ボランティア・スタッフと一緒に身近な素材で指輪を作った。 8月2日（土）・3日（日）・9日（土）・10日（日）・16日（土）・17日（日）・23日（土）・24日（日）　11:00〜15:00 参加者：3,968名
2014年度　クリスマス	
作って飾ろうクリスマス あなたは天使？それともサンタ？	天使とサンタのどちらかひとつを選び、オーナメントを作った。 12月13日（土）・14日（日）　10:00〜16:00 参加者：404名
2015年度　夏	
きって　はって　ロダンでうちわ！	ロダンの彫刻をデザインしたオリジナルのうちわを作った。 8月1日（土）・2日（日）・15日（土）・16日（日）　①11:00〜13:00 ②14:00〜16:00 参加者：638名
2015年度　クリスマス	
作って飾ろうクリスマス ツリー、リース、天使があるよ！	さまざまな素材を使ってツリー、リース、天使のオーナメントを作った。 12月12日（土）・13日（日）　10:30〜15:30 参加者：452名
2016年度　夏	
あおげば涼し　アートでうちわ！	所蔵作品をモチーフにしてうちわと作った。 8月6日（土）・7日（日）・27日（土）・28日（日）　①11:00〜13:00 ②14:00〜16:00 参加者：719名
2016年度　クリスマス	
作って飾ろうクリスマス キラキラツリー★アートツリー	2種類のツリーから一つを選び、小さなクリスマスツリーを作った。 12月17日（土）・18日（日）　①10:00〜12:00 ②13:00〜15:00 参加者：291名
2017年度　夏	
アートでうちわ！2017	当館の作品をモチーフにしてうちわを作った。 8月19日（土）・20日（日）　10:00〜16:00 参加者：594名
2017年度　クリスマス	
作って飾ろうクリスマス とびだすカード★キラキラリース	クリスマスカードやリースを作った。 12月16日（土）・17日（日）　10:00〜16:00 参加者：475名
2018年度　夏	
アートでうちわ きんぎょでユラユラ・パンダでくるくる！！	当館の作品をモチーフにしてうちわを作った。 8月25日（土）・26日（日）　10:00〜16:00 参加者：518名
2018年度　クリスマス	
作って飾ろうクリスマス とんがりツリー★おり紙オーナメント	小さなクリスマスツリーかおり紙のオーナメントを作った。 12月15日（土）・16日（日）　10:00〜16:00 参加者：369名
2019年度　夏	
つくろうフォトフレーム　きこう波のささやき！！	所蔵作品をモチーフにしてフォトフレームを作った。 8月17日（土）・18日（日）　10:00〜16:00 参加者：357名
2019年度　クリスマス	
ユラユラ・キラキラ!!　星のツリー	ペーパークラフトのツリーを作った。 12月14日（土）・15日（日）　10:00〜16:00 参加者：360名

※2014年度は「ファン・ウィズ・コレクション」の創作・体験プログラムとして実施され、両方に記載した。
※クリスマスのボランティアートは「美術館でクリスマス」において行われるため、両方に記載した。

1-9

美術館でクリスマス

開始時期：2005年度

概要： 日本でも定着しているクリスマスという祭事と関連して、キリスト教絵画を鑑賞することを目的とするプログラム。2005年度のファン・ウィズ・コレクション「いろいろメガネ Part1」の中で実施したのを契機に、2007年度からは独立して12月の土日に開催されることとなり、宗教画を多く所蔵する当館ならではのプログラムとして毎年継続している。

キリスト教に関連する作品を紹介する、ボランティア・スタッフによる「ギャラリートーク」と、クリスマスにちなんだ歌を集めた、東京藝術大学声楽科有志による「クリスマスキャロル・コンサート」に加え、クリスマスに関連した所蔵作品のパズルの貸出や、ワークショップなどを併せて行ってきた。

2013年度以降：

2015年度からは、ボランティア・スタッフが企画する立ち寄り制プログラム（現「ボランティアート」）をこの日に合わせて行うようになった。

全て予約不要で子どもから大人まで誰もが参加できるプログラムであり、幅広い年齢層もさることながら、ワークショップやコンサートには海外からの来館者も気軽に参加している様子が見受けられる。毎年多くの参加者で賑わい、リピーターも増えている。

プログラム一覧

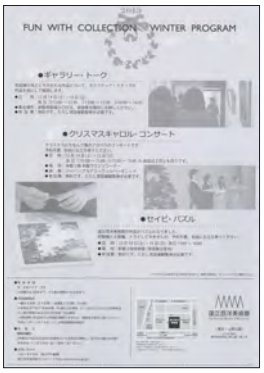
※ ボランティア・スタッフが企画したプログラムについては、「ボランティアート」のページにも記載した。

2013年度

※2013年度は「ウィンター・プログラム」として実施。

プログラム	内容
ギャラリートーク	常設展の見どころや、主な作品についてボランティア・スタッフがトークを行った。 12月14日（土）・15日（日）①12:00〜12:30 ②13:00〜13:30 ③14:00〜14:30 参加者：93名
クリスマスキャロル・コンサート	クリスマスにちなんだ歌を特集したアカペラのコンサートを開催した。 12月14日（土）・15日（日）①11:00〜11:40 ②15:00〜15:40 企画：平松英子（東京藝術大学准教授） 演奏者：金持亜実（ソプラノ）、秋本悠希（アルト）、田口昌範（テノール）、関口直仁（バス） 参加者：411名
セイビ・パズル （クリスマス・バージョン）	国立西洋美術館所蔵作品のパズル。 12月14日（土）・15日（日）　11:00〜16:00 参加者：300名

チラシ表



チラシ裏

セイビ・パズル

2014年度

プログラム	内容
10分トーク・クリスマスバージョン	クリスマスやキリスト教に関連する作品について、ボランティア・スタッフがトークを行った。 12月13日（土）・14日（日）　①12:00〜12:10 ②13:00〜13:10 ③14:00〜14:10 参加者：169名
クリスマスキャロル・コンサート	クリスマスにちなんだ歌を集めたアカペラのコンサートを開催した。 12月13日（土）・14日（日）　①11:00〜11:40 ②15:00〜15:40 企画：平松英子（東京藝術大学准教授） マネジメント：中須美喜 演奏者：原千裕（ソプラノ13日）、金持亜実（ソプラノ14日）、平山莉奈（アルト）、宮下大器（テノール）、関口直仁（バス） 参加者：435名
セイビ・パズル （クリスマスバージョン）	国立西洋美術館所蔵作品のパズル。 12月13日（土）・14日（日）　10:00〜16:00 参加者：194名
作って飾ろうクリスマス 　あなたは天使？それともサンタ？	ボランティア・スタッフが企画したワークショップ。オーナメントを作った。 12月13日（土）・14日（日）　10:00〜16:00 参加者：404名

チラシ表

チラシ裏

作って飾ろうクリスマス　あなたは天使？それともサンタ？

2015年度

プログラム	内容
ギャラリートーク	常設展の見どころや、主な作品についてボランティア・スタッフがトークを行った。 12月12日（土）・13日（日）　①12:00〜12:30 ②13:00〜13:30 ③14:00〜14:30 参加者：155名
クリスマスキャロル・コンサート	クリスマスにちなんだ歌を集めたアカペラのコンサートを開催した。 12月12日（土）・13日（日）　①11:00〜11:40 ②15:00〜15:40 企画：平松英子（東京藝術大学准教授） マネジメント：大森彩加 演奏：原千裕（ソプラノ）、平山莉奈（アルト）、田口昌範（テノール）、関口直仁（バリトン） 参加者：405名
作って飾ろうクリスマス 　ツリー、リース、天使があるよ！	ボランティア・スタッフが企画したワークショップ。オーナメントを作った。 12月12日（土）・13日（日）　10:30〜15:30 参加者：452名

チラシ表

チラシ裏

2016年度

プログラム	内容
ギャラリートーク	常設展の見どころや、クリスマスに関連する作品についてボランティア・スタッフがトークを行った。 12月17日（土）・18日（日）　①12:00〜12:30 ②13:00〜13:30 ③14:00〜14:30 参加者：156名
クリスマス・コンサート	クリスマスにちなんだ曲を中心に演奏する歌とギターのコンサートを開催した。 12月17日（土）・18日（日）　①11:00〜11:40 ②15:00〜15:40 企画：平松英子（東京藝術大学准教授） 演奏者：金持亜実（ソプラノ）、金成佳枝（ソプラノ）、田部井辰雄（ギター） 参加者：395名
ボランティアート 作って飾ろうクリスマス 　キラキラツリー★アートツリー	ボランティア・スタッフが企画したワークショップ。ツリーを作った。 12月17日（土）・18日（日）　①10:00〜12:00 ②13:00〜15:00 参加者：291名

チラシ表

チラシ裏

クリスマス・コンサート

2017年度

プログラム	内容
ギャラリートーク	常設展の見どころや、クリスマスに関連する作品についてボランティア・スタッフがトークを行った。 12月12日（火）〜15日（金）　①13:00〜13:30 ②14:00〜14:30 12月16日（土）・17日（日）　①12:00〜12:30 ②13:00〜13:30 ③14:00〜14:30 参加者：310名
クリスマスキャロル・コンサート	クリスマスにちなんだ歌を集めたアカペラコンサートを開催した。 12月16日（土）・17日（日）　①11:00〜11:40 ②15:00〜15:40 企画：平松英子（東京藝術大学教授） 演奏者：金持亜実（ソプラノ）、岡田愛（ソプラノ）、宮下大器（テノール）、関口直仁（バリトン） 参加者：601名
ボランティアート 作って飾ろうクリスマス 　とびだすカード★キラキラリース	ボランティア・スタッフが企画したワークショップ。オーナメントを作った。 12月16日（土）・17日（日）　10:00〜16:00 参加者：475名

チラシ表

チラシ裏

ギャラリートーク

2018年度

プログラム	内容
ギャラリートーク	常設展の見どころや、クリスマスに関連する作品についてボランティア・スタッフがトークを行った。 12月15日（土）・16日（日）　①12:00〜12:30 ②13:00〜13:30 ③14:00〜14:30 参加者：163名
クリスマスキャロル・コンサート	クリスマスにちなんだ歌を集めたアカペラコンサートを開催した。 12月15日（土）・16日（日）　①11:00〜11:40 ②15:00〜15:40 企画：平松英子（東京藝術大学教授） 金持亜実（ソプラノ）、岡田愛（ソプラノ）、沼田臣矢（テノール）、関口直仁（バリトン） 参加者：540名
ボランティアート 作って飾ろうクリスマス 　とんがりツリー★おり紙オーナメント	ボランティア・スタッフが企画したワークショップ。オーナメントを作った。 12月15日（土）・16日（日）　10:00〜16:00 参加者：369名

チラシ表

チラシ裏

クリスマスキャロル・コンサート

2019年度

プログラム	内容
ギャラリートーク	常設展の見どころや、クリスマスに関連する作品についてボランティア・スタッフがトークを行った。 12月14日（土）・15日（日）　①12:00〜12:30 ②13:00〜13:30 ③14:00〜14:30 参加者：138名
クリスマスキャロル・コンサート	クリスマスにちなんだ歌を集めたアカペラコンサートを開催した。 12月14日（土）・15日（日）　①11:00〜11:40 ②15:00〜15:40 企画：イシカワカズ 金持亜実（ソプラノ）、岡田愛（ソプラノ）、田口昌範（テノール）、関口直仁（バリトン） 参加者：560名
ボランティアート ユラユラ・キラキラ!!　星のツリー	ボランティア・スタッフが企画したワークショップ。ツリーを作った。 12月14日（土）・15日（日）　10:00〜16:00 参加者：360名

チラシ表

チラシ裏

ボランティアート　ユラユラ・キラキラ!!　星のツリー

1-10

作品熟覧プログラム　西洋版画を視る

開始時期：2018年度

概要： 当館の版画・素描閲覧室では学術研究を目的とする研究者を対象に、当館所蔵の版画、素描、書籍を見る機会を提供している。通常、紙作品はアクリル板などで保護して展示されるが、閲覧室では額装されていない状態で直接作品を「熟覧」することができる。この活動を活性化するために、教育普及室と版画・素描室の協働で、保存修復室の協力の下、「熟覧」のエッセンスを取り込んだ展示及び関連プログラムを行っている。

2018年6月19日～9月24日に版画・素描展示室にて開催した小企画展「西洋版画を視る ― エングレーヴィング：ビュランから生まれる精緻な世界」では、当館所蔵版画作品の中からエングレーヴィングによる15世紀から17世紀の作品を取り上げ、セクション I では「運命」という主題を軸にこの技法のさまざまな表現を紹介し、セクション II では技法そのものに焦点を当てた資料展示を行った。この展示期間中に、当館所蔵版画作品を直にじっくりと見る「熟覧」とエングレーヴィング技法による制作を組み合わせたプログラムを実施した。対象を大学、教員としたのは、大学の授業の一環で版画の熟覧をしたいという要望や、教員が研修として参加できるプログラムを望む声があったことに加え、当館で行われているプログラム全般を見た時に、教員や美術専攻の学生に向けたプログラムを強化したいという考えもあった。これまでも閲覧室で行われてきた熟覧をプログラム化することで、作品の安全を保ちながら利用の拡大を図ることを目指している。

「西洋版画を視る」の展示は、シリーズ化して他の技法などについても不定期に継続していく予定である。また、関連プログラムとして始まった熟覧プログラムは、毎年期間を決めて実施することを目指し、2019年度には熟覧と制作を分けて実施した。

小企画展「西洋版画を視る ― エングレーヴィング：ビュランから生まれる精緻な世界」
会期：2018年6月19日（火）～2018年9月24日（月・休）
会場：版画・素描展示室
企画：版画・素描室、教育普及室、保存修復室
協力：国立印刷局、坂本雅美（紙本保存修復家）、多摩美術大学版画研究室、東京藝術大学版画研究室
展示：当館所蔵版画作品24点、技法に関連する資料展示

2018年度熟覧プログラム

2019年度熟覧プログラム

2018年度展示

2019年度熟覧プログラム

プログラム一覧

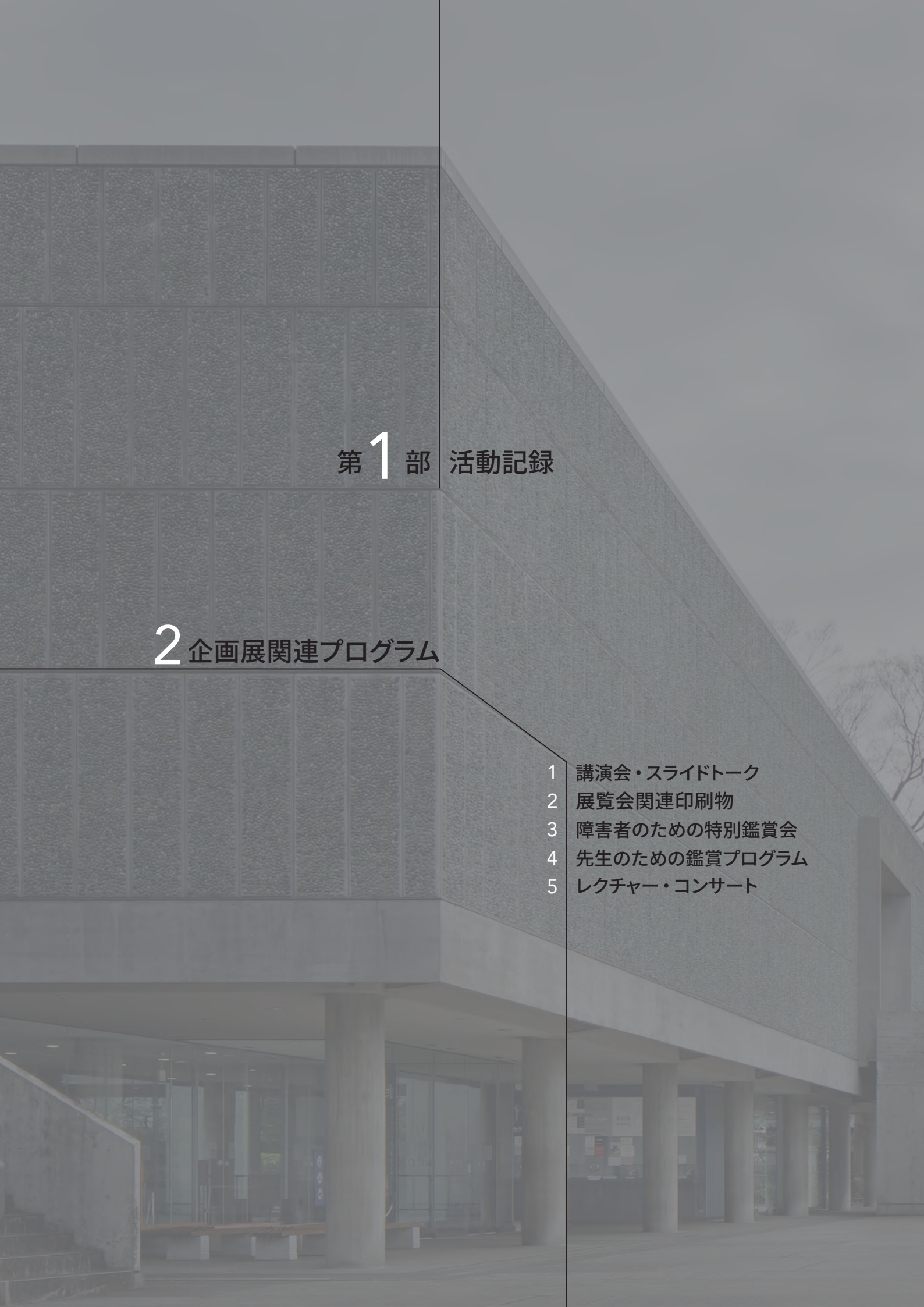
2018年度

活動の種類	内容
熟覧 + エングレーヴィング制作体験	2グループに分かれ、約1時間ずつ熟覧と制作を交互に行った。制作では小さな銅板に実際にビュランを使って版を制作し、簡易プレス機で刷るところまで行った。 講師（エングレーヴィング制作）：渡辺達正（多摩美術大学名誉教授）、楊佳（多摩美術大学大学院） 会場：版画素描展示室『西洋版画を視る』展セクションII（熟覧）、ワークショップ室（制作） ［大学・大学院生対象］※学校単位で申込　7月23日（月）10:00〜12:30・25日（水）14:00〜16:30・26日（木）①10:00〜12:30 ②14:00〜16:30・30日（月）①10:00〜12:30 ②14:00〜16:30 参加者：52名（6回） ［教員対象］※個人で申込　8月13日（月）①10:00〜12:30 ②14:00〜16:30・14日（火）①10:00〜12:30 ②14:00〜16:30 参加者：39名（4回） **熟覧作品：** アルブレヒト・デューラー《『聖母伝』：聖母の婚約》1504–05年頃 木版 マルティン・ショーンガウアー《キリスト降誕》1471–73年頃 エングレーヴィング クロード・ロラン《略奪されるエウロペ》1634年 エッチング アンドレア・マンテーニャ《海神の闘い（左半図）》1475年頃 エングレーヴィング、ドライポイント アルブレヒト・デューラー《書斎の聖ヒエロニムス》1514年 エングレーヴィング ヘンドリク・ホルツィウス（コルネーリス・コルネーリスゾーン・ファン・ハールレムの原画に基づく）《竜に噛まれるカドモスの部下》1588年 エングレーヴィング

2019年度

活動の種類	内容
熟覧	道具や動画などを用いたエングレーヴィング技法の説明と併せて、数点の版画作品を見た。 会場：版画素描閲覧室 ［大学・大学院生対象］※学校単位で申込　7月19日（金）10:30〜11:30・22日（月）10:30〜11:30・26日（金）14:00〜15:00 参加者：19名（3回） ［教員対象］※個人で申込　8月8日（木）①10:30〜11:30 ②14:00〜15:00・9日（金）①10:30〜11:30 ②14:00〜15:00 参加者：19名（4回） **熟覧作品：** N. H. の画家（ニコラウス・ホーゲンベルク）《裸体の男性と農民の戦い》1522年 木版 クロード・ロラン《話し込む羊飼いの男女》1651年頃 エッチング イスラエル・ファン・メッケネム《荊冠を受けるキリスト》1480年頃 エングレーヴィング ヤン・サーンレダム《『三つの対神徳』：信徳》1601年 エングレーヴィング アルブレヒト・デューラー《ネメシス（運命）》1502年 エングレーヴィング
エングレーヴィング制作体験	小さな銅板に実際にビュランを使って版を制作し、簡易プレス機で刷るところまで行った。インクの色や拭き取り方を変え、異なる刷り上がりのヴァリエーションも体験した。 講師：渡辺達正（多摩美術大学名誉教授） 会場：ワークショップ室 8月23日（金）13:30〜16:30 対象：熟覧プログラム受講者 参加者：3名

エングレーヴィング制作体験



第1部 活動記録

2 企画展関連プログラム

1 講演会・スライドトーク
2 展覧会関連印刷物
3 障害者のための特別鑑賞会
4 先生のための鑑賞プログラム
5 レクチャー・コンサート

2-1
講演会・スライドトーク

講演会

開始時期：1964年度

概要： 講演会は、当館で最も長く実施されている教育活動の一つである。開始当初は展覧会に関連しない美術史の講座として実施されていたが、次第に企画展に関連する内容となり、現在では各企画展の定番のプログラムとなっている。

2013年度以降：
2013年度以降も企画展の関連プログラムとして、各展覧会3〜5回ほど開催されてきた。展覧会に関連した内容で国内外の専門家の話を聞ける機会として定着し、多くの来館者が参加している。2019年の時点では、事前申込は受けておらず、当日開始2時間前より整理番号付きの聴講券を配付している。長蛇の列ができ、配付開始後すぐに定員に達することもある。参加者からは列に並ばなくても確実に予約できるネットによる事前申込の導入を望む声がある一方、当日キャンセルが多くなることが懸念され、美術館としては最適な申込システムの整備は今後の課題の一つである。
　講演会に加え、展覧会の内容に限らず、美術史研究のさまざまなシンポジウムも実施されている。国内外の研究者による発表、議論を通して、その分野を専攻する学生や研究者を含む美術館利用者にとって、多角的な視点からの専門的な知見に触れる機会となっている。

スライドトーク

開始時期：1994年度

概要： 企画展の概要、見どころなどを講堂でスライドを用いて説明するプログラムで、各展覧会3〜5回ほど実施されている。展覧会アシスタントを務める大学院生などが担当することが多く、学生にとって専門性に即した経験を積む場となっている。

2013年度以降：
変わらず継続されている。展覧会によって参加者数は変動するが、満員になることもある。当館の事業担当が実施しているアンケート調査によると、「鑑賞の手引きになった」や「展覧会を見る前に聞けて良かった」という声があり、展覧会鑑賞の導入として機能していることが窺える。

講演会・シンポジウム

※「シンポジウム」という記載がないものは全て講演会。

【企画展関連】

2012年度

日付	タイトル	講演者	所属	参加者数
ラファエロ				
2013年3月2日（土）	ラファエロ ― イタリアの宮廷に輝いた芸術	クリスティーナ・アチディーニ	フィレンツェ文化財・美術館特別監督局長官	140
3月9日（土）	ラファエロ作《友人のいる自画像》の新解釈 （助成：鹿島美術財団）	トム・ヘンリー	ケント大学教授	128

2013年度

日付	タイトル	講演者	所属	参加者数
ラファエロ				
4月6日（土）	若きラファエロ ― ウルビーノからフィレンツェへ	伊藤拓真	恵泉女学園大学助教	88
4月20日（土）	フィレンツェのラファエロ	渡辺晋輔	国立西洋美術館主任研究員	140
5月11日（土）	“ローマの画家”ラファエロ	石鍋真澄	成城大学教授	140
5月18日（土）	美術史への経済学的アプローチ ― ラファエロとパトロンたち	ジョナサン・ネルソン	ハーバード大学ルネサンス研究センター、ヴィラ・イ・タッティ研究員	140
ル・コルビュジエと20世紀美術				
10月6日（日）	美術作品による建築空間の創造 ― 壁画、タピスリー、フォトモンタージュ ―	林美佐	大成建設ギャルリー・タイセイ学芸員	88
10月19日（土）	国立西洋美術館とル・コルビュジエの綜合芸術	山名善之	東京理科大学准教授	58
システィーナ礼拝堂500年祭記念　ミケランジェロ展 ― 天才の軌跡				
9月7日（土）	ミケランジェロとフィレンツェ	上村清雄	千葉大学教授	140
10月5日（土）	ミケランジェロと建築	金山弘昌	慶應義塾大学准教授	140
11月2日（土）	神のごとき人への行路	森雅彦	宮城学院女子大学教授	97
国立西洋美術館×ポーラ美術館　モネ、風景をみる眼 ― 19世紀フランス風景画の革新				
6月15日（土）	モネ、水のテーマとアトリエ船の人物像	セゴレーヌ・ル・メン	パリ西大学、ナンテール・ラ・デファンス校教授	84
12月7日（土）	モネと日本	馬渕明子	国立西洋美術館長	110
2014年1月18日（土）	ポーラ美術館の印象派とモネの絵画	岩﨑余帆子	ポーラ美術館学芸課長	111
2月1日（土）	モネの連作とプルーストの文学	吉川一義	京都大学名誉教授	137
生誕150周年記念　国立西洋美術館所蔵 エドヴァルド・ムンク版画展				
12月13日（金）	沈黙の叫び ― エドヴァルド・ムンクの生涯と芸術	マグネ・ブルータイグ	オスロ市立ムンク美術館、版画・素描担当上級学芸員	60

2014年度

日付	タイトル	講演者	所属	参加者数
ジャック・カロ ― リアリズムと奇想の劇場				
4月26日（土）	カロ作品に映された17世紀前半のヨーロッパ	中田明日佳	国立西洋美術館研究員	47
5月31日（土）	バロック美術のなかのジャック・カロ	栗田秀法	名古屋大学大学院教授	72
非日常からの呼び声　平野啓一郎が選ぶ西洋美術の名品				
5月24日（土）	非日常からの呼び声	平野啓一郎	作家	148
橋本コレクション　指輪　神々の時代から現代まで ― 時を超える輝き				
7月26日（土）	装飾が“罪”ではなかった時代	天野知香	お茶の水女子大学教授	57
9月6日（土）	ファッション史のなかのジュエリー	能澤慧子	東京家政大学教授	83
日本・スイス国交樹立150周年記念　フェルディナント・ホドラー展				
10月19日（日）	フェルディナント・ホドラーの象徴主義的傑作	オスカー・ベッチュマン	ベルン大学名誉教授／スイス芸術学研究所教授	68
10月26日（日）	フェルディナント・ホドラー　世紀末の曙光	水沢勉	神奈川県立近代美術館長	54
11月15日（土）	踊る身体と絵画 ― 表現主義から抽象へ	田中正之	武蔵野美術大学教授	77

日付	タイトル	講演者	所属	参加者数
日本・スイス国交樹立150周年記念　フェルディナント・ホドラー展				
11月29日（土）	からだを動かすもの ― リズムと社会	伊藤亜紗	東京工業大学リベラルアーツセンター准教授	49
12月7日（日）	リズムの震源地 ― ホドラーの芸術思想とその余波	新藤淳	国立西洋美術館研究員	79
グエルチーノ展　よみがえるバロックの画家				
2015年3月14日（土）	ボローニャ派とグエルチーノ	高橋健一	和歌山大学准教授	118

2015年度

日付	タイトル	講演者	所属	参加者数
グエルチーノ展　よみがえるバロックの画家				
4月11（土）	グエルチーノとバロック美術	宮下規久朗	神戸大学教授	170
5月16日（土）	グエルチーノの生涯と芸術	渡辺晋輔	国立西洋美術館主任研究員	155
5月30日（土）	紙からカンヴァスへ ― グエルチーノの創作プロセスを追う（助成：鹿島美術財団）	デイヴィッド・M・ストーン	デラウェア大学教授	96
ボルドー展 ― 美と陶酔の都へ ―				
6月23日（火）	「月の都ボルドー」の3つの三日月 ― モンテーニュ、モンテスキュー、モーリヤックのボルドー	ニコラ・バルベ	ボルドー市立図書館文化遺産課長	54
7月18日（土）	ボルドーと画家たち	陳岡めぐみ	国立西洋美術館主任研究員	71
8月22日（土）	都市ボルドー　18世紀を活気づけた人びとは、何をめざしていたのか？	土居義岳	九州大学大学院教授	62
9月5日（土）	角を持つヴィーナス（ローセルのヴィーナス）に刻まれた世界：作者クロマニョンの見たヨーロッパ	赤澤威	国際日本文化研究センター名誉教授	64
黄金伝説展　古代地中海世界の秘宝				
10月24日（土）	古代トラキアの黄金文化	金原保夫	東海大学教授	54
11月14日（土）	エトルリア・古代ローマの金製品 ― 黄金をめぐる人々の世界	藤沢桜子	群馬県立女子大学教授	44
11月21日（土）	ギリシャ文学・神話における黄金というモチーフ	逸身喜一郎	東京大学名誉教授	75
12月19日（土）	古代ギリシャ美術と黄金	飯塚隆	国立西洋美術館研究員	90
日伊国交樹立150周年記念　カラヴァッジョ展				
2016年3月1日（火）	カラヴァッジョと彼の影響	ロッセッラ・ヴォドレ	美術史家、前ローマ国立美術館群特別監督局長官	155
3月12日（土）	カラヴァッジョの真実 ― カラヴァッジョとはどんな男だったのか	石鍋真澄	成城大学文芸学部教授	155

2016年度

日付	タイトル	講演者	所属	参加者数
日伊国交樹立150周年記念　カラヴァッジョ展				
5月14日（土）	ローマとナポリにおけるカラヴァッジョの継承者たち	川瀬佑介	国立西洋美術館研究員	154
聖なるもの、俗なるもの　メッケネムとドイツ初期銅版画				
7月9日（土）	イスラエル・ファン・メッケネムのコピー制作について	アヒム・リーター	ミュンヘン州立版画素描館15〜18世紀ドイツ部門主任学芸員	56
8月6日（土）	ドイツ初期版画の魅力	平川佳世	京都大学大学院准教授	54
8月27日（土）	俗なるもの ― メッケネムと世俗主題版画	中田明日佳	国立西洋美術館研究員	34
クラーナハ展 ― 500年後の誘惑				
10月15日（土）	旅する芸術家 ― クラーナハとネーデルラント	グイド・メスリング	ウィーン美術史美術館学芸員	122
10月29日（土）	クラーナハ VS. デューラー ― ドイツにおける「芸術家」の誕生をめぐって	秋山聰	東京大学教授	149
11月19日（土）	クラーナハと宗教改革	田辺幹之助	東京藝術大学教授	145
12月10日（土）	誘惑は時を超えて ― クラーナハと〈女のちから〉	新藤淳	国立西洋美術館研究員	145
日本・デンマーク外交関係樹立150周年記念　スケーエン：デンマークの芸術家村				
2017年2月11日（土）	スケーエン派の画家たち	リセッテ・ヴィン・エベェセン	スケーエン美術館長	74

※『シャセリオー展 ― 19世紀フランス・ロマン主義の異才』講演会［3月2日（木）ヴァンサン・ポマレッド（ルーヴル美術館文化メディエーション部長）］は登壇者の都合により中止。

2017年度

日付	タイトル	講演者	所属	参加者数
日本・デンマーク外交関係樹立150周年記念　スケーエン：デンマークの芸術家村				
4月8日（土）	デンマーク近代絵画とスケーエン派	萬屋健司	山口県立美術館専門学芸員	83
シャセリオー展 ― 19世紀フランス・ロマン主義の異才				
4月2日（日）	テオドール・シャセリオーと聖堂装飾	喜多崎親	成城大学教授	120
5月13日（土）	シャセリオーと会計検査院の大壁画	陳岡めぐみ	国立西洋美術館主任研究員	85
アルチンボルド展				
6月20日（火）	アルチンボルド ― 自然模倣と空想のはざま	シルヴィア・フェリーノ＝パグデン	美術史家、元ウィーン美術史美術館絵画部長	143
7月1日（土）	アルチンボルドと北イタリアの美術	水野千依	青山学院大学教授	145
7月29日（土）	驚異の時代の驚異の芸術 ― マニエリスム芸術と自然描写の世界	桑木野幸司	大阪大学准教授	144
8月4日（金）	ジュゼッペ・アルチンボルド ― 自然の変容 （「糸・布・衣の循環史研究会」Global History Collaborative と共催）	トマス・ダコスタ・カウフマン	プリンストン大学教授	119
8月26日（土）	ハプスブルク家とアルチンボルド	田辺幹之助	東京藝術大学教授	137
北斎とジャポニスム　HOKUSAIが西洋に与えた衝撃				
10月21日（土）	西洋における趣味 ― 欧州の人々はなぜ北斎を好むのか	ヨハネス・ヴィーニンガー	オーストリア工芸美術館学芸員	135
11月3日(金・祝)	陶芸のジャポニスムにおける北斎の受容 ― 彩られたイメージとその技法	今井祐子	福井大学准教授	76
12月2日（土）	北斎が西洋に与えた衝撃	馬渕明子	国立西洋美術館長	154
プラド美術館展　ベラスケスと絵画の栄光				
2018年2月24日（土）	ベラスケスとプラド美術館：運命共同体としての歩み	ハビエル・ポルトゥス	プラド美術館スペイン絵画（1700年以前）部長	151
3月17日（土）	宮廷画家ベラスケスの挑戦と革命 ― ボデゴンと肖像から物語絵へ	大髙保二郎	早稲田大学名誉教授	148

2018年度

日付	タイトル	講演者	所属	参加者数
プラド美術館展　ベラスケスと絵画の栄光				
4月7日（土）	ベラスケスとスペインの風景	川瀬佑介	国立西洋美術館主任研究員	151
4月14日（土）	スペイン系ハプスブルク家の宮廷 ― その史的概論	宮崎和夫	筑波大学准教授	140
5月12日（土）	17世紀スペインの美術理論と画家の社会的地位	松原典子	上智大学教授	149
ミケランジェロと理想の身体				
6月19日（火）	人物そして芸術家としてのミケランジェロ ― ルネサンス期のフィレンツェにて	ルドヴィーカ・セブレゴンディ	美術史家	110
8月11日(土・祝)	ミケランジェロと古代美術	青柳正規	山梨県立美術館館長、東京大学名誉教授	151
9月8日（土）	ルネサンス期のローマ ― 古代彫刻の街	飯塚隆	国立西洋美術館主任研究員	148
ルーベンス展 ― バロックの誕生				
10月16日（火）	ルーベンス ― バロックの誕生	アンナ・ロ・ビアンコ	美術史家	142
11月24日（土）	ルーベンスとフランドル絵画におけるロマニズムの伝統	幸福輝	美術史家、慶應義塾大学講師	144
12月8日（土）	ルーベンスとイタリア美術	渡辺晋輔	国立西洋美術館主任研究員	148
ル・コルビュジエ　絵画から建築へ ― ピュリスムの時代				
2019年3月9日（土）	ル・コルビュジエとラウル・ラ・ロシュ ― ピュリスムの戦友	村上博哉	国立西洋美術館副館長・学芸課長	91

2019年度

日付	タイトル	講演者	所属	参加者数
ル・コルビュジエ　絵画から建築へ ― ピュリスムの時代				
4月6日（土）	建築＝芸術へ ― アクロポリス、初めてのタブロー《暖炉》、《ドミノ住宅》に遡行する『建築へ』の体系的読解	加藤道夫	東京大学大学院教授	119
4月20日（土）	「ピュリスムの時代」の先 ― ル・コルビュジエの絵画の変遷	林美佐	大成建設ギャルリー・タイセイ学芸員	83
5月18日（土）	建築へ ― 絵画の平面性からの透明性の探求	山名善之	東京理科大学教授	133

日付	タイトル	講演者	所属	参加者数
松方コレクション展				
6月11日（火）	写真家ピエール・シュモフのカメラがとらえた松方コレクション	ブリュノー・マルタン	フランス文部省・建築文化財メディアテーク写真部門資料調査担当	68
6月15日（土）	松方コレクション展と作品修復	邊牟木尚美	国立西洋美術館研究員	101
7月20日（土）	印象派ブームわき起こる―第一次大戦直後の日本	宮崎克己	昭和音楽大学教授	150
9月7日（土）	松方コレクション　百年の流転	陳岡めぐみ	国立西洋美術館主任研究員	150
モダン・ウーマン―フィンランド美術を彩った女性芸術家たち				
6月21日（金）	国際シンポジウム「近代の女性芸術家たち：フィンランドと日本」 主催：国立西洋美術館 助成：公益財団法人 野村財団、公益財団法人 吉野石膏美術振興財団 後援：フィンランド大使館、フィンランドセンター、一般社団法人 日本フィンランド協会、美術史学会	アンナ=マリア・フォン・ボンスドルフ	フィンランド国立アテネウム美術館主席学芸員	65
		アヌ・ウトリアイネン	フィンランド国立アテネウム美術館上級研究員	
		アンナ=マリア・ウィルヤネン	フィンランドセンター所長	
		児島薫	実践女子大学教授	
7月13日（土）	ヘレン・シャルフベックと写真―バーン＝ジョーンズ作品の複製写真による影響	佐藤直樹	東京藝術大学准教授	57
ハプスブルク展 600年にわたる帝国コレクションの歴史				
10月19日（土）	イタリア美術コレクターとしてのハプスブルク家	フランチェスカ・デル・トッレ＝ショイヒ	ウィーン美術史美術館イタリア・ルネサンス美術担当学芸員	143
11月30日（土）	世界支配者はなぜ美術品を蒐集したのか―芸術コレクションにみるハプスブルク家の横顔	山之内克子	神戸市外国語大学教授	151
2020年1月11日（土）	ハプスブルク家のコレクション―神聖ローマ皇帝ルドルフ2世を中心に	中田明日佳	国立西洋美術館主任研究員	151

【その他】

※当館が主催となっている催事のうち、当館の展覧会及びコレクションに関連するシンポジウム及び講演会のみ本リストに掲載する。

2015年度

日付	タイトル	講演者（所属）	参加者数
10月31日（土）	国際シンポジウム 「北欧の近代美術とジャポニスム」 主催：国立西洋美術館 後援：ジャポニスム学会、美術史学会 助成：スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団、公益財団法人 ポーラ美術振興財団、公益財団法人 吉野石膏美術振興財団、公益財団法人 野村財団 協力：ノルウェー王国大使館、フィンランド大使館、フィンランドセンター、デンマーク大使館、S2株式会社	馬渕明子（国立西洋美術館長）、スサンナ・ペッテルソン（フィンランド国立アテネウム美術館館長）、アンナ=マリア・フォン・ボンスドルフ（フィンランド国立アテネウム美術館主任学芸員）、ヴィーベケ・ヴォラン・ハンセン（オスロ国立建築デザイン美術館学芸員）、佐藤直樹（東京藝術大学准教授）、ヴィーダル・ハレーン（オスロ国立建築デザイン美術館館長）、萬屋健司（山口県立美術館専門学芸員）、ピーダ・ナアアゴー=ラースン（コペンハーゲン国立美術館主任学芸員）、荒屋鋪透（ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館学芸部長） 全体討議司会：宮崎克己	121

2017年度

日付	タイトル	講演者（所属）	参加者数
11月9日（木）	世界遺産登録一周年記念シンポジウム 「ル・コルビュジエ ― 日本における近代建築運動のひろがり ―」 主催：国立西洋美術館	アントワーヌ・ピコン（ル・コルビュジエ財団会長、ハーバード大学大学院教授、建築家、建築史家）、富永譲（建築家、富永譲＋フォルムシステム設計研究所主宰、法政大学名誉教授）、松隈洋（京都工芸繊維大学教授）、山名善之（東京理科大学教授）、西和彦（東京文化財研究所国際情報研究室長）	74

2019年度

日付	タイトル	講演者（所属）	参加者数
7月10日（水）	国際シンポジウム 「カタログ・レゾネ ― デジタル時代のアーカイヴとドキュメンテーション」 主催：ウィルデンスタイン・プラットナー研究所、国立西洋美術館 後援：美術史学会、日本アーカイブズ学会、全国美術館会議	エリザベス・ゴレイエブ（ウィルデンスタイン・プラットナー研究所所長）、フロランス・ソニエ（ウィルデンスタイン・プラットナー研究所パリ事務所長）、ソフィ・ピエトリ（ウィルデンスタイン・プラットナー研究所アーカイヴ部門長）、パスカル・ペラン（ウィルデンスタイン・プラットナー研究所研究部門長）、ポール=ルイ・デュラン=リュエル（デュラン=リュエル画廊アーカイヴ）、陳岡めぐみ（国立西洋美術館主任研究員）、川口雅子（国立西洋美術館情報資料室長）、山梨絵美子（東京文化財研究所副所長）、竹内順一（東京藝術大学名誉教授、茶道美術史家）	119
8月31日（土）	日本・ギリシャ修好120周年記念講演会 「日本とギリシャ ― それぞれの文化遺産の保存と修復　コルフ島とサラミナ島」 主催：国立西洋美術館 助成：公益財団法人 石橋財団 後援：ギリシャ大使館、日本ギリシャ協会	デスピナ・ゼルニオティ（国立コルフ・アジア美術館長） 木戸雅子（共立女子大学教授）	123

スライドトーク・ギャラリートーク

※展示室で行うギャラリートークの場合はその旨記載。特に記載がない場合は講堂でのスライドトーク。

2013年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月12日(金)・26日(金)、5月17日(金)	ラファエロ	西川しずか(慶應義塾大学大学院)	335
9月13日(金)・27日(金)、10月11日(金)・25日(金)、 11月1日(金)	システィーナ礼拝堂500年祭記念 ミケランジェロ展 ― 天才の軌跡	友岡真秀(東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程)	362
＊ギャラリートーク 10月4日(金)、11月15日(金)、12月20日(金)	ソフィア王妃芸術センター所蔵 内と外 ― スペイン・アンフォルメル絵画の二つの『顔』	川瀬佑介(国立西洋美術館研究員)	50
12月13日(金)、2014年1月17日(金)、2月7日(金)	国立西洋美術館×ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼 ― 19世紀フランス風景画の革新	陳岡めぐみ(国立西洋美術館主任研究員)	201

2014年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月11日(金)・25日(金)、5月16日(金)・30日(金)	ジャック・カロ ― リアリズムと奇想の劇場	中田明日佳(国立西洋美術館研究員)	129
7月18日(金)、8月8日(金)、9月5日(金)	橋本コレクション　指輪 神々の時代から現代まで ― 時を超える輝き	飯塚隆(国立西洋美術館研究員)	244
10月17日(金)、11月7日(金)・28日(金)、 12月12日(金)	日本・スイス国交樹立150周年記念 フェルディナント・ホドラー展	沖澄弘(東京藝術大学大学院博士後期課程)	205
2015年3月13日(金)・27日(金)	グエルチーノ展　よみがえるバロックの画家	中江花菜(東京藝術大学大学院)	111

2015年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月10日(金)・24日(金)、5月15日(金)	グエルチーノ展　よみがえるバロックの画家	中江花菜(東京藝術大学大学院)	214
7月3日(金)・17日(金)、8月7日(金)・21日(金)、 9月11日(金)	ボルドー展 ― 美と陶酔の都へ ―	鈴木一生(成城大学)	274
10月23日(金)、11月13日(金)、 12月4日(金)・18日(金)	黄金伝説展　古代地中海世界の秘宝	飯塚隆(国立西洋美術館研究員)	217
2016年3月18日(金)	日伊国交樹立150周年記念　カラヴァッジョ展	中江花菜(東京藝術大学大学院)	79

2016年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月8日(金)・22日(金)、5月13日(金)・27日(金)	日伊国交樹立153周年記念　カラヴァッジョ展	中江花菜(東京藝術大学大学院)	495
7月15日(金)、8月12日(金)、9月9日(金)	聖なるもの、俗なるもの　メッケネムとドイツ初期銅版画	中田明日佳(国立西洋美術館研究員)	151
10月21日(金)、11月11日(金)・25日(金)、 12月16日(金)	クラーナハ展 ― 500年後の誘惑	龍真未(東京藝術大学大学院博士後期課程)	250
2017年3月2日(金)・10日(金)・24日(金)	シャセリオー展 ― 19世紀フランス・ロマン主義の異才	中津海裕子(東京大学駒場博物館職員)	208

2017年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月7日(金)・21日(金)、5月12日(金)	シャセリオー展 ― 19世紀フランス・ロマン主義の異才	中津海裕子(東京大学駒場博物館職員)	203
7月7日(金)・21日(金)、8月4日(金)・18日(金)、 9月8日(金)	アルチンボルド展	原田亜希子(慶應義塾大学講師)	542
11月10日(金)・17日(金)、12月1日(金)・15日(金)、2018年1月5日(金)	北斎とジャポニスムーHOKUSAIが西洋に与えた衝撃	神津有希(東京大学大学院)	459
2018年3月9日(金)・23日(金)	日本スペイン外交関係樹立150周年記念 プラド美術館展　ベラスケスと絵画の栄光	坂本龍太(早稲田大学大学院)	128

2018年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月20日(金)、5月11日(金)	日本スペイン外交関係樹立150周年記念 プラド美術館展　ベラスケスと絵画の栄光	坂本龍太(早稲田大学大学院)	171
7月6日(金)、8月17日(金)、9月14日(金)	ミケランジェロと理想の身体	飯塚隆(国立西洋美術館主任研究員)	280
11月2日(金)・16日(金)、12月14日(金)、 2019年1月11日(金)	ルーベンス展 ― バロックの誕生	秋元優季(国立西洋美術館研究補佐員)	437
2019年3月22日(金)	国立西洋美術館開館60周年記念 ル・コルビュジエ　絵画から建築へ ― ピュリスムの時代	久保田有寿(国立西洋美術館特定研究員)	77

2019年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月5日（金）・19日（金）	国立西洋美術館開館60周年記念 ル・コルビュジエ　絵画から建築へ―ピュリスムの時代	久保田有寿（国立西洋美術館特定研究員）	166
7月5日（金）、8月16日（金）・23日（金）、9月13日（金）	国立西洋美術館開館60周年記念 松方コレクション展	玉生真衣子（東京大学大学院）	521
＊ギャラリートーク 7月19日（金）、8月9日（金）、9月6日（金）	日本・フィンランド外交関係樹立100周年記念 モダン・ウーマン ― フィンランド美術を彩った女性芸術家たち	久保田有寿（国立西洋美術館特定研究員）	108
11月8日（金）、12月6日（金）、2020年1月17日（金）	日本・オーストリア友好150周年記念 ハプスブルク展　600年にわたる帝国コレクションの歴史	今野佳苗（本展覧会アシスタント）	351

※ロンドン・ナショナル・ギャラリー展スライドトーク［2020年3月13日（金）中江花菜（本展覧会アシスタント）］は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止。

2-2
展覧会関連印刷物

作品リスト

開始時期：2001年度

概要： 2013年度以降も、来館者サービスの一環として、各展覧会の全出品作品リストを日本語、英語、2017年度からは中国語、韓国語も加えた4ヶ国語で制作している。配布を始めた2001年度から教育普及室で作成していたが、2017年度以降は展覧会担当者が行っている。

ジュニア・パスポート

開始時期：2002年度

概要： 企画展観覧券として、来館する小中学生全員に配布している印刷物で、以下の2点を目的として作成している。一つは、目の前にある作品をじっくり見ることを促すこと。作品は数点に絞り、「探す」「考える」「想像する」「描く」などのさまざまなアクティビティを通して、能動的に作品に関わる働きかけをする。もう一つは、帰宅後も楽しめるお土産的な要素である。後で見返すことができるよう、作品の画像は大きく載せ、特にここ数年は読み物としての機能も強化している。前記録集でも記した通り、2005年度に実施した調査では、企画展に小学生より中学生の来館者が多く来ているということが分かり、その調査結果に合わせて対象年齢を小学校高学年以上として、解説文を増やしたという経緯がある。それに加え、職員やインターンが展示室で実際に使い勝手を調べたところ、混雑した展示室では使いにくいことが分かり、家に帰ってから行うアクティビティや、読み返す解説を意識的に入れるようにしている。

作品解説パネル

概要： 2006年度以降、教育普及室で執筆をしていたが、2017年度以降は展覧会担当者によって制作されている。

A4判拡大作品解説冊子

概要： 2017年度以降、制作を休止している。企画展示室では、4ヶ国語の掲出に対応したアプリが導入されたが、今後、紙媒体以外の可能性も考慮に入れ、検討していきたい。

【企画展関連】

○　教育普及室制作
■　展覧会担当者制作
×　制作記録なし

2013年度

展覧会名	作品リスト	ジュニア・パスポート	作品解説パネル	A4判拡大作品解説冊子
ピカソが描いた動物たち ― ビュフォン『博物誌』にもとづく挿絵本より	■	○	■	×
ル・コルビュジエと20世紀美術	■	×	×	×
システィーナ礼拝堂500年祭記念　ミケランジェロ展 ― 天才の軌跡	○	○	■	○
ソフィア王妃芸術センター所蔵　内と外 ― スペイン・アンフォルメル絵画の二つの『顔』	○	×	■	×
国立西洋美術館×ポーラ美術館　モネ、風景をみる眼 ― 19世紀フランス風景画の革新	○	○	■	○

2014年度

展覧会名	作品リスト	ジュニア・パスポート	作品解説パネル	A4判拡大作品解説冊子
ジャック・カロ ― リアリズムと奇想の劇場	○	○	■	×
非日常からの呼び声　平野啓一郎が選ぶ西洋美術の名品	■	×	平野啓一郎氏	×
橋本コレクション　指輪　神々の時代から現代まで ― 時を超える輝き	○	○	○	×
日本・スイス国交樹立150周年記念　フェルディナント・ホドラー展	○	○	○	○

2015年度

展覧会名	作品リスト	ジュニア・パスポート	作品解説パネル	A4判拡大作品解説冊子
グエルチーノ展　よみがえるバロックの画家	○	○	○	×
ボルドー展 ― 美と陶酔の都へ ―	○	○	○	×
黄金伝説展　古代地中海世界の秘宝	○	○	○	×

2016年度

展覧会名	作品リスト	ジュニア・パスポート	作品解説パネル	A4判拡大作品解説冊子
日伊国交樹立150周年記念　カラヴァッジョ展	○	○	○	○
聖なるもの、俗なるもの　メッケネムとドイツ初期銅版画	○	○	○	×
クラーナハ展 ― 500年後の誘惑	○	○	○	×

2017年度

展覧会名	作品リスト	ジュニア・パスポート	作品解説パネル	A4判拡大作品解説冊子
日本・デンマーク外交関係樹立150周年記念　スケーエン：デンマークの芸術家村	■	×	■	×
シャセリオー展 ― 19世紀フランス・ロマン主義の異才	○	○	○	×
アルチンボルド展	○	○	○■	×
北斎とジャポニスム ― HOKUSAIが西洋に与えた衝撃	■	○	■	×

2018年度

展覧会名	作品リスト	ジュニア・パスポート	作品解説パネル	A4判拡大作品解説冊子
日本スペイン外交関係樹立150周年記念　プラド美術館展　ベラスケスと絵画の栄光	■	○	■	×
ミケランジェロと理想の身体	■	○	■	×
ルーベンス展 ― バロックの誕生	■	○	■	×

2019年度

展覧会名	作品リスト	ジュニア・パスポート	作品解説パネル	A4判拡大作品解説冊子
国立西洋美術館開館60周年記念　ル・コルビュジエ　絵画から建築へ ― ピュリスムの時代	■	○	■	×
国立西洋美術館開館60周年記念　松方コレクション展	■	○	■	×
日本・フィンランド外交関係樹立100周年記念　モダン・ウーマン ― フィンランド美術を彩った女性芸術家たち	■	×	■	×
日本・オーストリア友好150周年記念　ハプスブルク展 600年にわたる帝国コレクションの歴史	■	○	■	×

ジュニア・パスポート

2013年度

A ピカソが描いた動物たち―ビュフォン『博物誌』にもとづく挿絵本より
B ミケランジェロ展―天才の軌跡
C モネ、風景をみる眼―19世紀フランス風景画の革新

A

B

C

2014年度

D ジャック・カロ―リアリズムと奇想の劇場
E 橋本コレクション　指輪　神々の時代から現代まで―時を超える輝き
F フェルディナント・ホドラー展

D

E

F

2015年度

G グエルチーノ展　よみがえるバロックの画家
H ボルドー展―美と陶酔の都へ―
I 黄金伝説展　古代地中海世界の秘宝

G

H

I

2016年度

J カラヴァッジョ展
K 聖なるもの、俗なるもの　メッケネムとドイツ初期銅版画
L クラーナハ展―500年後の誘惑

J

K

L

2017年度

M シャセリオー展 ― 19世紀フランス・ロマン主義の異才
N アルチンボルド展
O 北斎とジャポニスム　HOKUSAIが西洋に与えた衝撃

M

N

O

2018年度

P プラド美術館展　ベラスケスと絵画の栄光
Q ミケランジェロと理想の身体
R ルーベンス展 ― バロックの誕生

P

Q

R

2019年度

S ル・コルビュジエ　絵画から建築へ ― ピュリスムの時代
T 松方コレクション展
U ハプスブルク展　600年にわたる帝国コレクションの歴史

S

T

U

2-3
障害者のための特別鑑賞会

開始時期：2007年度

概要： 三菱商事株式会社と共催で実施している本プログラムは、企画展会場混雑のために、来館が難しい障害者を閉館後に招き、鑑賞の機会を提供することを目的としている。通常、約2時間、企画展無料観覧の時間を設け、15分ほどの展覧会概要レクチャー（希望者のみ）を併せて実施している。

三菱商事株式会社には、プログラム実施時の看守配置や、オーディオガイド貸出、場合によってはショップ運営にかかる費用を負担いただき、告知や募集についても、三菱商事株式会社を通じ、就労支援施設の利用者、日本点字図書館利用者とその付き添い者、エイブル・アート・ジャパン利用者及び登録アーティスト等に向けて展開される。当日は三菱商事株式会社の社員ボランティアが、受付や展示室内での参加者の誘導など、運営スタッフとして活動し、当館教育普及室職員は関係部署や展覧会共催者などとの調整に加え、社員ボランティアへの事前の動線説明に加え、当日のレクチャーを担当している。

2013年度以降：

2013年度以降も年度ごとに1〜2回、2009年度以降定着したレクチャー15分と自由観覧を組み合わせた形で、継続している。仕事を持つ参加者も多いことから、土曜日の閉館後、18：00〜20：00で実施していたが、2017年夏より、国立美術館では金曜日に加え土曜日も夜間開館を実施することとなり、これまでのような閉館後の実施が難しくなった。しかし、当館としては、本プログラムの対象者が参加しやすい時間帯に実施することを優先させることとし、このプログラムを実施する土曜日は、閉館の時間を早めて本プログラムを実施してきた。2017年度の「北斎とジャポニスム」、2018年度の「ルーベンス展」、2019年度の「ハプスブルク展」は、20:00までの開館時間を、本プログラム実施日のみ17:30までとした。

2013年度

展覧会名	実施日	イベント内容	参加者数
ラファエロ	4月27日（土）18:00〜20:00	特別鑑賞会：15分程度の展覧会概要レクチャー（希望者のみ）後、自由観覧	348
国立西洋美術館×ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼 ― 19世紀フランス風景画の革新	2014年2月1日（土）18:00〜20:00	特別鑑賞会：15分程度の展覧会概要レクチャー（希望者のみ）後、自由観覧	332

2014年度

展覧会名	実施日	イベント内容	参加者数
日本・スイス国交樹立150周年記念 フェルディナント・ホドラー展	11月22日（土）18:00〜20:00	特別鑑賞会：15分程度の展覧会概要レクチャー（希望者のみ）後、自由観覧	85

2015年度

展覧会名	実施日	イベント内容	参加者数
ボルドー展 ― 美と陶酔の都へ ―	7月11日（土）18:00〜20:00	特別鑑賞会：15分程度の展覧会概要レクチャー（希望者のみ）後、自由観覧	66

2016年度

展覧会名	実施日	イベント内容	参加者数
日伊国交樹立150周年記念　カラヴァッジョ展	5月14日（土）18:00〜20:00	特別鑑賞会：15分程度の展覧会概要レクチャー（希望者のみ）後、自由観覧	171

2017年度

展覧会名	実施日	イベント内容	参加者数
北斎とジャポニスム ― HOKUSAIが西洋に与えた衝撃	11月18日（土）18:00〜20:00	特別鑑賞会：15分程度の展覧会概要レクチャー（希望者のみ）後、自由観覧	264

2018年度

展覧会名	実施日	イベント内容	参加者数
ルーベンス展 ― バロックの誕生	11月17日（土）18:10〜20:00	特別鑑賞会：15分程度の展覧会概要レクチャー（希望者のみ）後、自由観覧	181

2019年度

展覧会名	実施日	イベント内容	参加者数
日本・オーストリア友好150周年記念 ハプスブルク展　600年にわたる帝国コレクションの歴史	11月30日（土）18:10〜20:00	特別鑑賞会：15分程度の展覧会概要レクチャー（希望者のみ）後、自由観覧	189

2-4

先生のための鑑賞プログラム

開始時期：2001年度

概要： 小学校、中学校、高等学校の教員を対象に、教科の限定をせず幅広く展覧会を周知して当館に足を運んでもらい、今後の美術館の活用を考えるきっかけとなることを目的としている。企画展会期中に1回実施する本プログラムは、展覧会担当研究員による展覧会概要レクチャー（講堂にて約40分）と自由観覧を組み合わせた内容で、夜間開館している金曜日、もしくは土曜日に実施している。

2013年度以降：

参加方法についてはこれまでに幾度か変更がなされたが、2008年度以降、16:00から閉館時間までの自由観覧についてはFAXで事前申込とし、18:00〜18:40のレクチャーは申込が定員の120名を超えた場合のみ当日聴講券を配付している。本プログラムの告知については、基本的に当館のホームページのみであるが、ジュニア・パスポートを近隣の学校に送付する際、本プログラムの案内を同封したところ参加者が増加した。毎回できる訳ではないが、郵送によるプログラムの告知は、本プログラムの周知につながっている。

なお、教員を対象とするプログラムとしては、幅広い参加を求める本プログラムと並び、各地の研究部会からの依頼を受けて行う教員研修（pp. 104–107参照）や、教員を対象に行う作品熟覧プログラム（pp. 72, 73参照）など、鑑賞について深く掘り下げる内容の研修を別途設けている。また、実際に学校行事で児童生徒を引率する場合は、当日においては「引率者無料観覧申出書」の提出で観覧が可能である。事前下見についても職員証など教員であることを確認できるものの提示により、無料で受け付けている。

※参加者数はレクチャー聴講者数。（　）内は自由観覧参加者数。

2013年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月6日（土）	ラファエロ	渡辺晋輔（国立西洋美術館主任研究員）	42（60）
8月23日（金）	ル・コルビュジエと20世紀美術	村上博哉（国立西洋美術館学芸課長）	18（28）
10月5日（土）	システィーナ礼拝堂500年祭記念　ミケランジェロ展 ― 天才の軌跡	川瀬佑介（国立西洋美術館研究員）	34（51）
2014年1月10日（金）	国立西洋美術館×ポーラ美術館　モネ、風景をみる眼 ― 19世紀フランス風景画の革新	陳岡めぐみ（国立西洋美術館主任研究員）	40（57）

2014年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月18日（金）	ジャック・カロ ― リアリズムと奇想の劇場	中田明日佳（国立西洋美術館研究員）	6（15）
8月1日（金）	橋本コレクション　指輪　神々の時代から現代まで ― 時を超える輝き	飯塚隆（国立西洋美術館研究員）	28（63）
10月31日（金）	日本・スイス国交樹立150周年記念　フェルディナント・ホドラー展	新藤淳（国立西洋美術館研究員）	18（38）

2015年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月3日（金）	グエルチーノ展　よみがえるバロックの画家	渡辺晋輔（国立西洋美術館主任研究員）	20（31）
7月10日（金）	ボルドー展 ― 美と陶酔の都へ ―	陳岡めぐみ（国立西洋美術館主任研究員）	20（36）
11月14日（土）	黄金伝説展　古代地中海世界の秘宝	飯塚隆（国立西洋美術館研究員）	20（34）
2016年3月25日（金）	日伊国交樹立150周年記念　カラヴァッジョ展	川瀬佑介（国立西洋美術館研究員）	50（72）

2016年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
7月29日（金）	聖なるもの、俗なるもの　メッケネムとドイツ初期銅版画	中田明日佳（国立西洋美術館研究員）	13（60）
11月4日（金）	クラーナハ展 ― 500年後の誘惑	新藤淳（国立西洋美術館研究員）	35（50）
2017年3月31日（金）	シャセリオー展 ― 19世紀フランス・ロマン主義の異才	陳岡めぐみ（国立西洋美術館主任研究員）	16（31）

2017年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
7月14日（金）	アルチンボルド展	渡辺晋輔（国立西洋美術館主任研究員）	96（130）
12月8日（金）	北斎とジャポニスム ― HOKUSAIが西洋に与えた衝撃	袴田紘代（国立西洋美術館研究員）	56（92）

2018年度

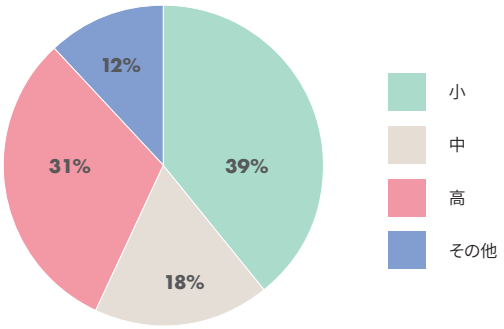
日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月13日（金）	日本スペイン外交関係樹立150周年記念　プラド美術館展　ベラスケスと絵画の栄光	川瀬佑介（国立西洋美術館主任研究員）	46（73）
7月20日（金）	ミケランジェロと理想の身体	飯塚隆（国立西洋美術館主任研究員）	115（138）
12月7日（金）	ルーベンス展 ― バロックの誕生	渡辺晋輔（国立西洋美術館主任研究員）	73（103）

2019年度

日付	展覧会名	担当者	参加者数
4月12日（金）	国立西洋美術館開館60周年記念 ル・コルビュジエ　絵画から建築へ ― ピュリスムの時代	村上博哉 （国立西洋美術館副館長・学芸課長）	26（35）
8月2日（金）	国立西洋美術館開館60周年記念　松方コレクション展	陳岡めぐみ（国立西洋美術館主任研究員）	150（192）
11月1日（金）	日本・オーストリア友好150周年記念 ハプスブルク展　600年にわたる帝国コレクションの歴史	中田明日佳 （国立西洋美術館主任研究員）	80（134）

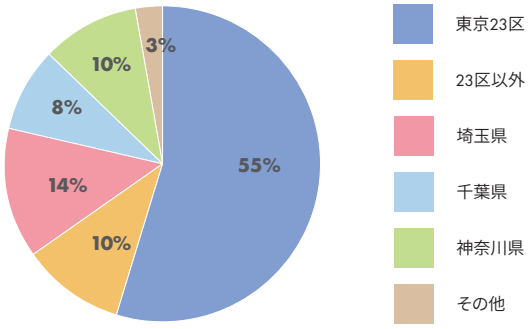
参加者の内訳（2017年度～2019年度）

参加者の校種別割合



「その他」には小中一貫校、もしくは中高一貫校の他、特別支援学校の教員も含まれる。当館で実施しているスクール・ギャラリートーク、オリエンテーション、職場訪問など、児童生徒が参加するプログラムでは高等学校の参加は他と比べて多くはないが、本プログラムにおいては、小学校の教員に次いで、高校の教員が多く参加している。

参加者の学校所在地割合

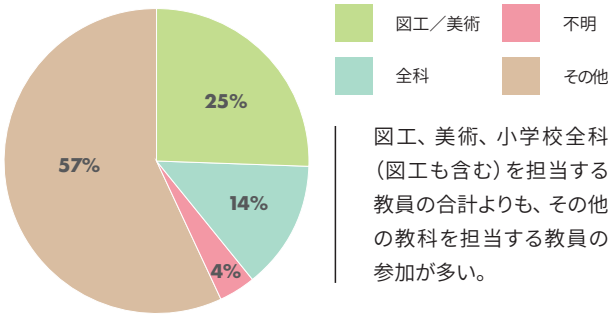


平日（金曜日）の夜間開館時に行うことが多いということもあり、物理的に来館可能な都内、神奈川、埼玉、千葉からの参加者で占めている。

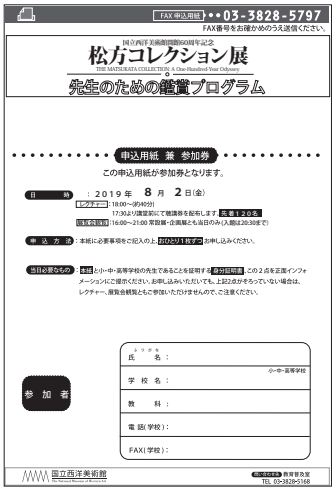
2017年度～2019年度に開催した計8回（参加者数計901名）の本プログラムにおいて、当日参加者が持参する申込用紙の記載から①校種、②学校の所在地、③教科について集計を行ったところ、以下のような内訳となった。

これら3つの集計から、「教科の限定をせず幅広く教員に展覧会を周知して当館に足を運んでもらう」という、教員による美術館理解、活用の第一歩としての機能はある程度果たしていると思われる。

参加者の担当教科割合



図工、美術、小学校全科（図工も含む）を担当する教員の合計よりも、その他の教科を担当する教員の参加が多い。


FAX申込用紙 ••03-3828-5797
FAX番号をお確かめのうえ送信ください。

国立西洋美術館開館60周年記念
松方コレクション展
THE MATSUKATA COLLECTION: A One-Hundred-Year Odyssey
先生のための鑑賞プログラム

申込用紙 兼 参加券
この申込用紙が参加券となります。

日　時：2019年 8月 2日（金）
レクチャー：18:00～（約40分）
17:30より講堂前にて整理券を配布します。定員120名
鑑賞会：16:00～21:00 常設展・企画展とも当日のみ（入館は20:30まで）

申込方法：本紙に必要事項をご記入の上、FAXにて1枚ずつお申し込みください。

当日必要なもの：本紙と小・中・高等学校の先生であることを証明する身分証明書。この2点を正面インフォメーションにご提示ください。お申し込みいただいても、上記2点がそろっていない場合は、レクチャー、展覧会観覧ともご参加いただけませんので、ご注意ください。

参加者
氏名（ふりがな）：
小・中・高等学校
学校名：
教科：
電話（学校）：
FAX（学校）：

国立西洋美術館
The National Museum of Western Art
お問合せ先 教育普及室
TEL 03-3828-5168

FAX申込用紙

2-5

レクチャー・コンサート

開始時期：2001年度

概要： 「音楽」を通じて、企画展を楽しむことを目的とするレクチャー・コンサートは、主に東京藝術大学演奏芸術センターの瀧井敬子氏との連携企画として、2001年度から2010年度まで年に1回、計11回にわたって行われた。音楽の視点に立ったレクチャーを織り交ぜながら、展覧会に出展されている作品や作家、その時代に密接にかかわる曲目によって構成され、バリエーションに富んだコンサートが行われてきた。

2013年度以降：

2010年度に一旦、継続的なプログラムとしては終了したが、2014年度には「ジャック・カロ ―リアリズムと奇想の劇場」展の関連プログラムとして、瀧井氏による企画・構成で「ハープによる奇想の劇場」と題したレクチャー・コンサートが開催された。カロ作品の奇想やグロテスクな要素をそれぞれの曲で表現しながら、カロの連作のように、全体で一つの物語を生み出す構成で、本コンサートのために作曲された《ジャック・カロの謎の微笑み》も演奏された。

チラシ表

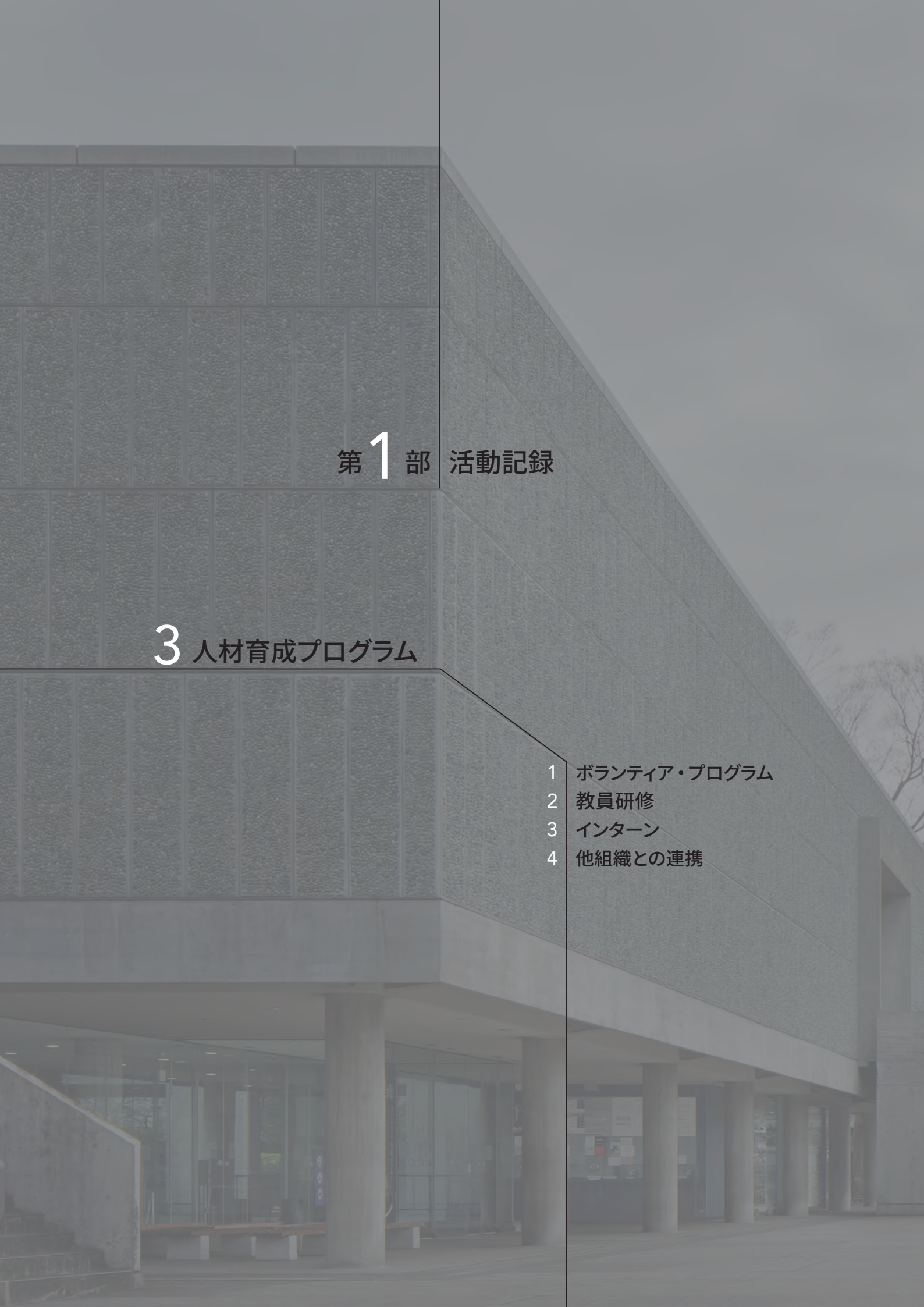
チラシ裏

2014年度

プログラム	内容
「ハープによる奇想の劇場」 （「ジャック・カロ ― リアリズムと奇想の劇場」展）	実施日：　5月22日（木）18:00〜20:00 企画・トーク：　瀧井敬子 ハープ演奏：　景山梨乃 作曲：　徳山美奈子 照明デザイン：　飯田幸司 参加者：　100名 参加費：　1,500円

作曲・編曲	曲目	演奏者
徳山美奈子	《ジャック・カロの謎の微笑み》	ハープ：景山梨乃
マルセル・トゥルニエ	《朝に》	
ジャン・クラ	《二つの即興曲》	
アンリエット・ルニエ	《小鬼の踊り》	
アンリエット・ルニエ	《伝説 ― ルコント・ド・リールの「妖精」による ―》	
マヌエル・デ・ファリャ／グランジャニー編	オペラ《はかなき人生》より〈スペイン舞曲1番〉	
マリユス・コンスタン	《ハルパリュケ》	
フランツ・リスト／ルニエ編	《夜鳴き鶯（うぐいす）》	
アンリエット・ルニエ	《瞑想》	
ジャック・オッフェンバック	オペラ《ホフマン物語》より〈ホフマンの舟唄〉	

プログラムノート



第1部 活動記録

3 人材育成プログラム

1 ボランティア・プログラム
2 教員研修
3 インターン
4 他組織との連携

3-1
ボランティア・プログラム

開始時期：2004年度

概要： 1995年の阪神淡路大震災でボランティアが活躍したことが契機となって、日本にボランティアが定着した。「心の豊かさ」を希求する時代といわれる21世紀に入り、文化庁は政策の中に「文化ボランティア」の概念を取り込み、地域やさまざまな文化施設でのボランティア制度の導入を推進した。当館では2004年度に初めてボランティア・スタッフを募集し、彼らの存在により、以前から要望のあった学校団体や家族を対象としたプログラムなどの実施が可能になった。その後既存プログラムの利用者の増加や新プログラムの開始に伴い、2008年度に2期スタッフの募集を行うことで、教育活動を更に広げることができた。

当館のボランティア・プログラムの目指すところは、利用者と美術館、そして所蔵作品と利用者の橋渡しだけでなく、ボランティア・スタッフ本人の学びの場になること、またその成果を還元する活動が自身にとっての喜びや心の支えになることである。

ボランティア・スタッフは、継続的・安定的なプログラム遂行を支援するだけでなく、当館の一番の利用者であると同時に、社会教育施設としての当館の活動を重層化・活性化させる一員でもある。あらゆる意味で、当館にとってなくてはならない存在となっている。

2013年度以降：

ボランティア制度導入から約10年が経ち、2013年度に3期、2016年度に4期、2019年度に5期募集を行った。任期については制度導入の2004年時には特に定めていなかったが、ボランティア・スタッフからの要望がきっかけとなり1期は2008年度より10年間、2期も同期間を設定し、再考の後、3期以降は任期を6年へと変更した。近年の特徴としては、美術館や博物館でのボランティア経験を有する、あるいは複数の美術館を兼任するスタッフが増加していることや、定年退職者や男性が増加していることが挙げられる。

活動内容については、2013年度以降も館の状況やボランティア・スタッフの声に添いながら徐々に変化させてきた。2019年度現在の活動は、学校団体を対象に対話型鑑賞を行うスクール・ギャラリートーク、家族を対象に鑑賞と創作をセットにしたファミリー・プログラムどようびじゅつ、美術トーク、建築ツアー、加えて企画・実施からボランティア・スタッフ自身で行うプログラムボランティアート、金曜日の夜間開館時に行う金曜ナイトトークなどがある。プログラム以外においても、ボランティア室の図書の管理を行う図書委員や、作品情報をデータにまとめるPDF委員の活動もボランティア・スタッフからの提案で行われてきた。2018年度からはグループウェアの導入により、これまでメールを主体として行っていた各活動のスケジュールの共有やツアーの報告がオンライン上で可能になった。

ボランティア・スタッフが携わったプログラムは、本報告書の中でもかなりの分量を占めているが、具体的な活動や現場の様子等の詳細な報告は『国立西洋美術館ボランティア活動報告』に譲り、ここでは募集状況とその育成に関わる研修を取り上げる。

2014年度 担当A自主研修の様子（ヒコ・みづのジュエリーカレッジにて銀製ペンダントトップ制作）

募集

2013年度、2016年度、2019年度の3回にわたって募集を行った。

担当プログラム
A：スクール・ギャラリートーク、ファミリー・プログラム（どようびじゅつ）
B：美術トーク
C：建築ツアー

※ボランティア候補生として養成研修を受講した後、ボランティア・スタッフとして正式に活動を開始した方を記載した。

2013年度　3期ボランティア・スタッフ

担当プログラム	採用者
A	稲森珠実、岡田史穂子、榊原たまき、鈴村伊知子、高野涼子、田上恵子 *、中尾小絵、西田通子（8名）
C	大堀隆嗣、岡田正宇 *、塩田伸一、中山裕子、和田昭子（5名）

* 活動開始後にB 美術トークへ移動した。

研修期間：2013年7月～2014年3月
活動期間：2014年4月～2020年3月末

募集要項

2016年度　4期ボランティア・スタッフ

担当プログラム	採用者
A	浅野尚代、大谷愛子、片岡礼子、鎌田千束、亀山麻里、窪田光江、小森絵美、島崎さゆり、清水悦子、高橋聖子、永井てるみ、夏目敬子、西岡啓太、野村和子、福住久栄、牧幸子、向山裕子、吉田早苗（18名）
B	池端伸浩、宇野三奈子、金子真紀、川﨑博康、北野純、小林裕美、髙田外次、早矢仕文男、渕野結美子、山鹿祐子（10名）
C	猪飼藍、酒井猛、角川茂子、中村喜光、野口真知子、原勲、松浦芳子、眞野晃一、山﨑尚洋、吉田小夜子（10名）

研修期間：2016年6月～2017年3月
活動期間：2017年4月～2024年3月末予定

募集要項

2019年度　5期ボランティア・スタッフ

担当プログラム	採用者
A	東悦子、池田麻美子、石川佐知子、井野口知子、岩佐高明、鈴木由紀子、関恵子、内藤知子、原田清美、福泉裕紀子、向井由紀（11名）
B	阿部廉、岸田裕子、甲野正道、長井靖子、中山莉花（5名）
C	五十嵐美香、角谷敏昭、小谷路世、鈴木敦子、中村茂、前澤薫、横畠ミサコ（7名）

研修期間：2019年6月～2020年2月
活動期間：2020年4月～2027年3月末予定

募集要項

研修

ボランティア・スタッフは、候補生として採用されてから正式に活動を開始するまで、約半年にわたり事前研修を受講する。その内容は、当館の概要、コレクション、教育理論、トークにかかわるテクニックなどである。講義を聞くだけではなく、レポート提出、プログラムのサポート、模擬トークなども行い、実際の活動を担う準備を徐々に整えていく。正式なボランティア・スタッフとなった後も、随時フォローアップ研修や自主研修を行い、より良い活動のための勉強とボランティア・スタッフ同士の交流を図っている。

2013年度 3期ボランティア・スタッフ養成研修スケジュール

※担当／講師の所属や役職は全て研修当時のもの
※A：スクール・ギャラリートーク、ファミリープログラム担当　B：美術トーク担当
C：建築ツアー担当

	日時	担当／講師	内容	対象
1	7月12日（金）	小澤孝明（庶務係長）	事務手続き	A・C
		小松弥生（副館長）	講演「国立西洋美術館の役割と現状、そしてこれから」	
2	7月27日（土）	寺島洋子（主任研究員）	講義「国立西洋美術館の教育活動について①」	A・C
		横山佐紀（主任研究員）	講義「『FUN DAY』について」	
3	8月10日（土） 8月11日（日）	1, 2期ボランティアスタッフ	「FUN DAY」のサポート（後日レポート提出）	A・C
4	8月30日（金）	川口雅子（主任研究員）	講義「美術作品の情報とは何か」	A・C
		寺島洋子	講義「当館の教育活動について②」	
5	9月21日（土）	大野照文（京都大学総合博物館館長）	ワークショップ「見る・考える」	A・C
		寺島洋子	講義「本館設立の経緯」	C
		山名善之（客員研究員）	講演「ル・コルビュジエと無限成長美術館」	
6	9月26日（木）	寺島洋子	ワークショップ「作品鑑賞」	A
		寺島洋子、横山佐紀、杉浦央子（研究補佐員）	ディスカッション	
7	10月3日（木）	寺島洋子	講義「ファミリープログラム『どようびじゅつ』について」	A
		杉浦央子	9・10月の「どようびじゅつ」と実習について説明	
8	10月12日（土） 10月26日（土）	寺島洋子、杉浦央子	「どようびじゅつ」のサポート	A
9	10月17日（木）	陳岡めぐみ（主任研究員）	講義「所蔵作品解説①」	A
		寺島洋子	講義「『スクール・ギャラリートーク』について」	
10	10月19日（土）	松隈洋（京都工芸繊維大学教授）	講演「ル・コルビュジエと日本近代建築」	C
			本館建築ツアー	
11	11月2日（土）	河野佑美（東京都美術館学芸員）	東京都美術館建築ツアー体験及びディスカッション（後日レポート提出）	C
		寺島洋子、横山佐紀、杉浦央子		
12	11月7日（木）	中田明日佳（研究員）	講義「所蔵作品解説②」	A
		寺島洋子	「スクール・ギャラリートーク」の準備について説明	
13	11月21日（木）	渡辺晋輔（主任研究員）	講義「所蔵作品解説③」	A
		村上博哉（副館長・学芸課長）	講義「所蔵作品解説④」	
14	11月22日（金）	山根基世（元NHKアナウンサー）	講演「聞くことから始めよう」	A・C
15	12月7日（土）	寺島洋子、杉浦央子、ボランティア・スタッフ	模擬建築ツアー	C
16	12月12日（木）	川瀬祐介（研究員）	講義「所蔵作品解説⑤」	A
		飯塚隆（研究員）	講義「所蔵作品解説⑥」	
17	2014年1月16日（木）	寺島洋子、杉浦央子、横山佐紀	模擬スクール・ギャラリートーク（後日レポート提出）	A
18	2月6日（木）	寺島洋子、杉浦央子、横山佐紀	模擬スクール・ギャラリートークの振り返りとディスカッション	A
		杉浦央子	「スクール・ギャラリートーク」の手順について説明	
18	2月20日（木）	村上博哉	講義「所蔵作品解説⑦」	A
		馬渕明子（館長）	講義「ジャポニスムについて」	
19	4月5日（土）	福田京（専門職員）	講義「本館の改修工事について」	C
			建築ツアー	

2013年度 フォローアップ研修及び自主研修

※以下、自主研修には色付けをした。

日時	担当／講師	内容	対象
7月5日（金）	株式会社 名村大成堂	担当A自主研修「筆の制作技法等について」	A
	白田詠子（ボランティア・スタッフ）	担当A自主研修「雑司ヶ谷宣教師記念館見学」	
9月19日（木） 10月6日（日）	村上博哉	企画展解説「ル・コルビュジエと20世紀美術」	A・B・C
10月4日（金）	松渕龍雄（東京藝術大学美術学部工芸科教員）	講義「鋳造技術について」	A・B・C
10月5日（土）・9日（水）	川瀬祐介	企画展解説「ソフィア王妃芸術センター所蔵　内と外 ― スペイン・アンフォルメル絵画の二つの『顔』」	A・B・C
10月28日（月）	松渕龍雄	鋳造彫刻制作の見学（東京藝術大学）	A・B・C
2014年3月29日（土）	教育普及室	ボランティア例会（活動報告、更新、登録など）	A・B・C

2014年度 フォローアップ研修及び自主研修

日時	担当／講師	内容	対象
4月17日（木）	飯塚隆	企画展講義「橋本コレクション　指輪　神々の時代から現代まで ― 時を超える輝き」	A・B・C
12月6日（木）	井村裕司（ヒコ・みづのジュエリーカレッジ講師）	講義「粒金技法について」、実技「銀製ペンダントトップ制作」	A・B・C
2015年3月11日（水）	白根敏昭（東京富士美術館主任学芸員）、平谷美華子（同学芸員）	担当A自主研修「富士美術館見学及びギャラリートーク体験」	A
3月24日（火）	寺島洋子	担当A自主研修「スクール・ギャラリートークについて」	A
3月28日（土）	新藤淳	講義「所蔵作品解説」	A・B・C
	教育普及室	ボランティア例会（活動報告、更新、登録など）	

2015年度 フォローアップ研修及び自主研修

日時	担当／講師	内容	対象
4月12日（日）	一條彰子（東京国立近代美術館主任研究員）、今井陽子（東京国立近代美術館工芸館主任研究員）、寺島洋子	対話型鑑賞に関する講義（グッゲンハイム美術館　シャロン・バツスキー氏ワークショップ）東京国立近代美術館本館 東京国立近代美術館ガイドスタッフと合同研修	A
8月28日（金）	袴田紘代（研究員）	講義「所蔵作品解説」	A・B・C
2016年2月8日（月）	松山俊彦（作家）	担当A自主研修「クロッキー教室」	A
3月5日（土）		担当C自主研修「建築見学会」	C
3月26日（土）	村上博哉	講義「所蔵作品解説」	A・B・C
3月26日（土）	教育普及室	ボランティア例会（活動報告、更新、登録など）	A・B・C

2016年度 4期ボランティア・スタッフ養成研修スケジュール

	日時	担当／講師	内容	対象
1	6月7日（火）	古田由布子（総務課係員総務担当）	事務手続き	A・B・C
		寺島洋子	教育普及室からの挨拶	
			自己紹介	
		山下和茂（副館長）	講義「国立西洋美術館の役割」	
		村上博哉	講義「国立西洋美術館の所蔵作品について」	
2	6月21日（火）	福田京	講義「世界遺産について」	A・B
3	6月28日（火）	福田京	講義「世界遺産について」	C
		山名善之（東京理科大学教授）	講義「ル・コルビュジエの建築について」	
4	7月5日（火）	袴田紘代	講義「所蔵作品解説①」	A・B
		新藤淳	講義「所蔵作品解説②」	
5	7月12日（火）	米山勇（東京都江戸東京博物館学芸員）	講義「国立西洋美術館の建築について」	C
			近現代建築資料館見学	
6	7月19日（火）	川瀬佑介	講義「所蔵作品解説③」	A・B
		邊牟木尚美（特定研究員）	講義「美術品の保存・修復について」	
7	8月9日（火）	福田京	講義「建築ツアーで話す内容」	C
			建築ツアー体験	
		寺島洋子、杉浦央子	建築ツアーの準備・手順説明	

	日時	担当／講師	内容	対象
8	8月23日（火）	寺島洋子	ファミリープログラム「どようびじゅつ」概要説明	A
		杉浦央子	「どようびじゅつ」秋期サポートの説明	
		寺島洋子	講義「国立西洋美術館の教育普及活動について①」	A・B・C
9	9月～3月	寺島洋子、横山佐紀、杉浦央子、ボランティア・スタッフ	建築ツアーのアシスト	C
10	9月27日（火）	寺島洋子、横山佐紀、杉浦央子	模擬建築ツアー	C
	9月30日（金）			
	10月11日（火）			
	10月21日（金）			
	10月28日（金）			
	11月4日（金）			
	11月15日（火）			
11	9月～11月	寺島洋子、横山佐紀、杉浦央子、ボランティア・スタッフ	「どようびじゅつ」サポート	A
12	9月6日（火）	寺島洋子	作品鑑賞（対話型）・ディスカッション	A
			大人向けトークに関する説明・美術トーク概要説明	B
		杉浦央子	美術トークの準備・手順説明	
13	9月20日（火）	渡辺晋輔	講義「所蔵作品解説④」	A・B
		陳岡めぐみ	講義「所蔵作品解説⑤」	
14	10月4日（火）	中田明日佳	講義「所蔵作品解説⑥」	A・B
		飯塚隆	講義「所蔵作品解説⑦」	
15	10月18日（火）	川口雅子	講義「研究資料センターの使い方」	A・B・C
		横山佐紀	講義「国立西洋美術館の教育普及活動について②」	
16	10月25日（火）	大野照文（三重県立総合博物館館長）	ワークショップ「見る、考える」	A・B・C
17	11月8日（火）	岡田京子（文部科学省教科調査官）	講義「学習指導要領について」	A
		寺島洋子	スクール・ギャラリートークの概要と準備説明	
18	11月1日（火）	寺島洋子、横山佐紀、杉浦央子	模擬美術トーク	B
	11月11日（金）			
	11月22日（火）			
	11月25日（金）			
	11月29日（火）			
	12月6日（火）			
19	12月5日（月）	寺島洋子、横山佐紀、杉浦央子	模擬スクール・ギャラリートーク	A
	12月9日（金）			
	12月13日（火）			
	12月20日（火）			
	2017年1月10日（火）			
20	3月25日（土）	杉浦央子	スクール・ギャラリートークの手順について説明	A
			美術トークの手順について説明	B
		馬渕明子	講義「『北斎とジャポニスム』展について」	A・B・C

2016年度 フォローアップ研修及び自主研修

日時	担当／講師	内容	対象
5月28日（土）	福田京	講義「国立西洋美術館の建築に関して」（世界遺産関連）	A・B・C
9月4日（日）		担当C自主研修「建築ツアーボランティア候補生との顔合わせ・実施内容の説明会」	C
9月10日（土）	紀井利臣（跡見学園女子大学准教授）、水戸茂雄（リュート奏者）	担当B自主研修「リュートの時代」	B
2017年3月25日（土）	教育普及室	ボランティア例会（活動報告、更新、登録など）	A・B・C

2017年度 フォローアップ研修及び自主研修

日時	担当／講師	内容	対象
7月31日(月) 8月5日(土)		担当A自主研修「スクール・ギャラリートークに関する意見交換会」	A
9月22日(金)	藤村拓也(町田市立国際版画美術館学芸員)	担当A自主研修「町田市立国際版画美術館見学及び学芸員によるギャラリートーク参加」	A
10月11日(水)	寺島洋子、酒井敦子(特定研究員)、杉浦央子	スクール・ギャラリートークについて(目的などの再確認)	A
11月11日(土)	柳沼茂(国土交通省大臣官房官庁営繕部設備・環境課統括工事検査官)	講義「国立西洋美術館の免震構造について」	A・B・C
11月11日(土)	寺島洋子、酒井敦子、杉浦央子	担当B自主研修「美術トークについて(基本方針などの再確認)」	B
2018年2月6日(火)	寺島洋子、酒井敦子、杉浦央子	「スクール・ギャラリートークについて(知識と思考のバランス)」	A
3月24日(土)	教育普及室	ボランティア例会(活動報告、更新、登録など)	A・B・C

2018年度 フォローアップ研修及び自主研修

日時	担当／講師	内容	対象
7月22日(日)・29日(日)	寺島洋子	「子ども向け建築ツアーについて」	C
8月5日(土)・12日(土)	寺島洋子、松尾由子(研究補佐員)	模擬子ども向け建築ツアー	C
10月13日(土)・17日(水)	寺島洋子	子ども向け建築ツアー体験	C
8月23日(木)		担当A自主研修「第1回VTSを話し合う会」	A
8月31日(金)		担当A自主研修横浜美術館「モネ　それからの100年」展観覧	A
9月8日(土)		担当A自主研修「第2回VTSを話し合う会」	A
9月23日(日)		担当A自主研修「第3回VTSを話し合う会」	A
10月14日(日)		担当A自主研修「第4回VTSを話し合う会」	A
10月28日(日)		担当A自主研修「第5回VTSを話し合う会」	A
2019年1月12日(土)	寺島洋子	担当B自主研修「美術トーク体験・分析」	B
2月20日(水)	福田京、寺島洋子	旧館長室下見(特別建築ツアー実施に向けて)	C
2月27日(水)	村上博哉	ギャラリートーク「ル・コルビュジエ　絵画から建築へ ― ピュリスムの時代」	C
3月10日(日)		担当A自主研修「第6回VTSを話し合う会」	A
3月21日(木)	村上博哉	講義「ル・コルビュジエ　絵画から建築へ ― ピュリスムの時代」	A・B・C
3月21日(祝・木)	教育普及室	ボランティア例会(活動報告、更新、登録など)	A・B・C

2019年度 5期ボランティア・スタッフ養成研修スケジュール

	日時	担当／講師	内容	対象
1	6月4日(火)	渡辺周吾(総務課係長)	事務手続き	A・B・C
		酒井敦子(研究員)	教育普及室からの挨拶	
		松尾由子(特定研究員)	ボランティア研修の概要について	
		馬渕明子	講義「国立西洋美術館の設立の経緯について」	
			自己紹介	
2	6月18日(火)	松尾由子、寺島洋子(元国立西洋美術館主任研究員)	講義「国立西洋美術館の教育普及活動(ボランティア関連)について」	A・B・C
		酒井敦子	講義「国立西洋美術館の教育普及活動(企画展関連)」	
		大木章子(研究補佐員)	アートカードを使用したゲーム	
3	6月25日(火)	渡辺晋輔	講義「所蔵作品解説①」	A・B
		酒井敦子	美術トークの概要、課題(7〜9月中の見学)について	B
4	7月2日(火)	川瀬佑介(主任研究員)	講義「所蔵作品解説②」	A・B
5	7月9日(火)	寺島洋子	講義「国立西洋美術館本館について」	C
		福田京(専門員)	講義「国立西洋美術館の増改築について」	
6	7月23日(火)	飯塚隆(主任研究員)	講義「所蔵作品解説③」	A・B
		新藤淳(主任研究員)	講義「所蔵作品解説④」	
7	7月〜9月		美術トーク見学	B
8	8月6日(火)	松隈洋(京都工芸繊維大学美術工芸資料館教授)	講義「近代建築とル・コルビュジエについて」	C
		西和彦(国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター国際情報研究室長)	講義「世界遺産について」	
9	8月27日(火)	陳岡めぐみ	講義「所蔵作品解説⑤」	A・B
		袴田紘代(主任研究員)	講義「所蔵作品解説⑥」	

	日時	担当／講師	内容	対象
10	9月3日（火）	寺島洋子	建築ツアー体験	C
		寺島洋子、酒井敦子、松尾由子、大木章子	ディスカッション「体感するツアーとは」	
		大木章子	模擬建築ツアー（10月）、見学（2〜3月）について	
11	9月10日（火）	村上博哉（副館長・学芸課長）	講義「所蔵作品解説⑦」	A・B
		久保田有寿（特定研究員）	講義「所蔵作品解説⑧」	
12	10月1日（火）	川口雅子（主任研究員）	講義「研究資料センターの使い方」	A・B・C
		田島伸彦（株式会社 協栄）	講義「展示室でのお客様対応」	
		酒井敦子	ディスカッション「美術トークを見学して」	B
		大木章子	模擬美術トーク（11〜12月）について	
13	10月8日（火）	寺島洋子	ワークショップ「見る（観る）こと（ヴィジュアル・リテラシー）」	A・B
		松尾由子	ファミリープログラム「どようびじゅつ」の概要説明、見学（10〜11月）について	A
14	10月9日（水）	寺島洋子、酒井敦子、松尾由子、大木章子	模擬建築ツアー	C
	10月17日（木）			
	10月31日（木）			
15	10月29日（火）	松尾由子	「どようびじゅつ」体験、振り返り	A
16	10〜11月		「どようびじゅつ」見学（6回実施）	A
17	11月12日（火）	寺島洋子	対話による鑑賞体験	A
		酒井敦子	講義「国立西洋美術館のスクール・ギャラリートークについて（学習指導要領、トークプラン）」	
18	11月19日（火）	寺島洋子	スクール・ギャラリートーク体験、鑑賞分析	A
19	11月26日（火）	松尾由子	ワークショップ「作品のディスクリプション、トークプランをつくる」	A
		大木章子	模擬スクール・ギャラリートーク（1月）、トークのサポート（12〜1月）について	
20	11月28日（木）	寺島洋子、酒井敦子、松尾由子、大木章子	模擬美術トーク	B
	12月3日（火）			
21	12月〜2020年1月		スクール・ギャラリートークのサポート（8回実施）	A
22	1月10日（金）	寺島洋子、酒井敦子、松尾由子、大木章子	模擬スクール・ギャラリートーク	A
	1月17日（金）			
	1月23日（木）			
23	1月14日（火）	酒井敦子、松尾由子、大木章子	模擬美術トークの振り返り、美術トークの流れ、ボランティア用ウェブページ・ボランティア室の使い方について	B
24	1月21日（火）	福田京	館内見学（建築）	C
		酒井敦子、松尾由子、大木章子	模擬建築ツアーの振り返り、建築ツアーの流れ、2〜3月のツアー見学、ボランティア用ウェブページ・ボランティア室の使い方について	
25	2月4日（火）	酒井敦子、松尾由子、大木章子	模擬スクール・ギャラリートークの振り返り、スクール・ギャラリートークの流れ、ボランティア用ウェブページ・ボランティア室の使い方について	A
26	2月		建築ツアー見学（3回実施）	C

※ 3月「建築ツアー見学」（4回予定）は新型コロナウィルス感染症の拡大防止のため、2020年2月25日〜3月31日実施中止。

2019年度 フォローアップ研修及び自主研修

日時	担当／講師	内容	対象
9月9日（月）		担当A自主研修「東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館（現館名：SOMPO美術館）とのボランティア交流会」	A
10月30日（水）	寺島洋子、松尾由子	「子ども向け建築ツアー研修（模擬ツアー・ディスカッション・講義）」	C

※ 3月22日（日）に予定していたボランティア例会は、新型コロナウィルス感染症の拡大防止のため延期・中止。

2018年度例会後の様子

3-2
教員研修

開始時期：2004年度

概要： 1998年の学習指導要領において、小中学校図画工作・美術の鑑賞の領域に、地域の美術館を利用することが明記された。これを受けて学校は、授業で積極的に鑑賞を取り上げるようになり、美術館での研修を希望するようになった。2004年度以降、当館ではさまざまな教員の団体から申し込みを受け、市区単位の図工・美術の研究会への研修を行う他、東京都図画工作研究会、東京都中学校美術教育研究会とそれぞれ行う共同研修では、当館以外の都内の3美術館（東京国立近代美術館、東京都現代美術館、東京都美術館）が徐々に加わりながら年度ごとに会場を変えて企画・実施してきた。また、2006年度より独立行政法人国立美術館企画の「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」の運営にも携わっている。

2013年度以降：
引き続き、市区単位の図工研究部などからの依頼に応じて研修を実施している。また、毎年夏季に行う独立行政法人国立美術館企画の指導者研修も継続中である。一方で、東京都図画工作研究会、東京都中学校美術研究会と4美術館との共同研修会はそれぞれ2015年度、2016年度が最後の開催である。

研修を申し込む学校教員からのリクエストには、2018・2019年改訂の学習指導要領において重視された「対話的・主体的で深い学び」への理解を深めたいという要望が寄せられている。加えて、対話型鑑賞が一定程度普及した次の段階として、方法論に留まることなくよりよい活動を志向する声や本質に立ち返ろうとする声が聞かれることもある。学校の日々の授業にすぐに生かせる題材やヒントを得たいというよりは、その土台となる鑑賞の意義や理論を理解したいという教員の要望が窺える。

一方で、教員の教養を深める目的での企画展鑑賞や解説の希望を受ける場合もある。当館では、2018年度より開始した版画作品を直接鑑賞する作品熟覧プログラムにおいて、学校の夏休みの時期に参加できる教員対象の日程を設けている。作品熟覧プログラムでは、通常の展示室での額装されたフレームのアクリル越しの鑑賞ではなく、作品を直接見ることで細部まで味わうことが可能である。そのため本プログラムが生徒に鑑賞の授業を行う教員自身のより深い鑑賞体験の場として、今後も多く利用されることを期待する。

2018年12月26日 東京都中学美術研究会の研修の様子

市区単位の図工・美術研究会等を対象とする個別研修

2013年度

日付	学校・研究部会名	人数
8月20日（火）	豊島区図工部（教員向け）	23
12月12日（木）	敷島学園（狭山ヶ丘幼稚園）	40
2014年2月17日（月）	宮城教育大学	1

2014年度

日付	学校・研究部会名	人数
7月15日（火）	大田区教員研修	30
8月21日（木）	清瀬市立小学校図工部	9

2015年度

日付	学校・研究部会名	人数
6月23日（火）	長野県松本市立県ヶ丘高等学校	1
8月11日（木）	小金井市教育研究会図工部	9

2016年度

日付	学校・研究部会名	人数
5月18日（水）	千葉県教育研究会船橋支会美術科	16

2017年度

日付	学校・研究部会名	人数
7月27日（月）	足立区小学校教育研究会図工部	20
8月22日（火）	藤沢市立中学校教育研究会美術部会	20
8月23日（水）	豊島区立小学校図工教員	23
2018年1月18日（木）	江戸川区小学校教育研究会図工部	20
1月25日（木）	石川県立小松特別支援学校	1

2018年度

日付	学校・研究部会名	人数
8月23日（木）	日本私立小学校連合会全国教頭研修会	70
12月26日（水）	東京都中学校美術教育研究会	15

2019年度

日付	学校・研究部会名	人数
6月12日（水）	中央区教育会図工部	17
6月27日（木）	杉並区教育研究会図工部	15

※ 2020年3月27日（木）東京都中学校美術教育研究会は新型コロナウィルス感染症の拡大防止のため中止。

東京都図画工作研究会との共同企画研修

※ 東京都図画工作研究会、東京国立近代美術館、東京都現代美術館、東京都美術館との合同教育研修会

2013年度

日時・場所	内容	参加者数
6月21日（金）10:00〜11:25　東京国立近代美術館 6月28日（金）13:00〜17:00　世田谷区立上北沢小学校 7月1日（月）13:00〜17:00　東京国立近代美術館	1日目：美術館でのギャラリートーク 2日目：小学校での公開授業、協議会 3日目：美術館での鑑賞活動、協議会	人数不明

2014年度

日時・場所	内容	参加者数
11月26日（水）13:35〜15:00　世田谷区立駒沢小学校 12月2日（火）13:35〜15:00　世田谷区立駒沢小学校 12月5日（金）13:30〜14:45　国立西洋美術館	1日目：小学校での表現の授業 2日目：小学校での表現の授業 3日目：美術館での鑑賞活動（公開授業）	人数不明
2015年 2月16日（月）13:40〜15:15　足立区立栗原小学校 2月20日（金）13:30〜16:30　東京都現代美術館	1日目：小学校での表現の授業 2日目：美術館での鑑賞活動、研修全体を振り返る協議会	人数不明

2015年度

日時・場所	内容	参加者数
2016年 1月22日（金）13:35〜15:15　葛飾区立西小菅小学校 1月28日（水）13:35〜14:40　東京国立近代美術館工芸館	1日目：小学校での表現の公開授業 2日目：美術館での公開鑑賞活動	1日目：18 2日目：48

東京都中学校美術教育研究会との共同企画研修

※ 東京都中学校美術教育研究会、東京国立近代美術館、東京都現代美術館、東京都美術館との合同教育研修会

2015年度

日時・場所	内容	参加者数
7月27日（月）9:00〜17:00　東京国立近代美術館	グループワーク（対話による鑑賞体験、ディスカッション、トークのチャレンジ）、中学生へのトークラリー、振り返り、発表、指導講評	57

2016年度

日時・場所	内容	参加者数
7月25日（月）9:00〜17:00　東京国立近代美術館	グループワーク（対話による鑑賞体験、ディスカッション、トークのチャレンジ）、中学生へのトークラリー、振り返り、発表、指導講評	50

独立行政法人国立美術館企画の「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」

2013年度

日時・場所		内容	参加者数
7月29日（月）～30日（火）	東京国立近代美術館・国立新美術館	講演会、鑑賞のグループワーク、グループワークの成果発表、ギャラリートーク分析、アートカードワークショップ、鑑賞教育活動の紹介コーナー、ワールドカフェ	99

2014年度

日時・場所		内容	参加者数
8月4日（月）～5日（火）	東京国立近代美術館・国立新美術館	講演会、鑑賞のグループワーク、グループワークの成果発表、ギャラリートーク分析、アートカードワークショップ、鑑賞教育活動の紹介コーナー、ワールドカフェ	99

2015年度

日時・場所		内容	参加者数
8月2日（日）	東京国立近代美術館	10周年記念シンポジウム「美術館と学校 鑑賞教育のこれまでとこれから」 講演会、過去の受講者による成果発表、討議	人数不明
8月3日（月）～4日（火）	東京国立近代美術館・国立新美術館	講演会、鑑賞のグループワーク、グループワークの成果発表、ギャラリートーク分析、アートカードワークショップ、鑑賞教育活動の紹介コーナー、ワールドカフェ	98

2016年度

日時・場所		内容	参加者数
8月1日（月）～2日（火）	東京国立近代美術館・国立新美術館	鑑賞のグループワーク、グループワークの成果発表、講演会、事例発表、アートカードワークショップ、ワールドカフェ	99

2017年度

日時・場所		内容	参加者数
7月31日（月）～8月1日（火）	京都国立近代美術館・京都市勧業館みやこめっせ	鑑賞のグループワーク、グループワークの成果発表、講演会、事例発表＋ワールドカフェ、アートカードワークショップ	80

2018年度

日時・場所		内容	参加者数
8月6日（月）～7日（火）	国立西洋美術館・国立新美術館	鑑賞のグループワーク、講演会、事例紹介、アートカードワークショップ、ワールドカフェ	103

2019年度

日時・場所		内容	参加者数
7月29日(月)～30日(火)	国立国際美術館・大阪大学中之島センター	鑑賞のグループワーク、講演会、アートカードワークショップ、事例紹介、ワールドカフェ	80

2018年8月6日指導者研修：グループワーク後の発表の様子

2018年8月6日指導者研修：グループワーク後の発表の様子

3-3
インターン

開始時期：2002年度

概要： 西洋美術に関心を持つ人材の専門的知識、技術の向上、及び視野を広げることを目的として、大学院生以上を対象に実務実習を通じて学ぶインターンシップを実施している。学芸員資格取得のための博物館実習とは異なり、本プログラムではより専門性が高く、将来美術館で働くことを想定した内容となっている。当館職員の指導の下、インターン生は所蔵作品の調査、展覧会や教育プログラムの企画補助など、それぞれが希望する専門分野に分かれて業務に携わる。研修期間は原則として3ヶ月以上、6ヶ月以内（93時間以上）で、毎年実施されている。

教育普及室でのインターンシップに限って言うと、インターン生は美術館教育の基本的な文献について共有した後、当館の教育プログラム補助、もしくはそれらに関する調査、ツールやセルフガイドの新規開発、既存のプログラムの改善、教育普及関連の資料整理などに従事してきた。その調査結果、及び提案については、毎年彼らの手で報告書が作成されている。

2013年度以降（教育普及室インターン）：
引き続き、びじゅつーるの改修、セルフガイドの作成（提案）、スクール・ギャラリートークの実践など、年度によって異なる課題に取り組んできた。こうした課題の他に、当館で実施されるさまざまなプログラムにアシスタントとして現場の業務を体験する機会も設けている。また、これまで職員によって収集されてきた国内外のワークシートを整理し、検索ができるようにデータ化する作業などもインターン生によって行われている。

2013年度

氏名	分野	期間	テーマ・活動内容	指導
武田友希	教育普及	5月8日－10月31日	教育普及プログラムの企画・実施の補助、および資料整理	寺島洋子
横田かさね				
石田さくや				
山本樹	西洋美術史	5月7日－9月10日	当館で実施予定の展覧会の準備、カタログ編集業務などの補佐	川瀬佑介
堀江直未		6月1日－10月10日	当館で実施予定の展覧会の準備、カタログ編集業務などの補佐	川瀬佑介
鈴木一生		6月5日－11月30日	当館で実施予定の展覧会の準備、カタログ編集業務などの補佐	陳岡めぐみ
樋口純子	情報資料	5月9日－8月31日	研究資料センターにおける資料収集・整理および利用者サービスの補佐	川口雅子

2014年度

氏名	分野	期間	テーマ・活動内容	指導
中江花菜	西洋美術史	6月5日－10月20日	所蔵作品の調査研究および絵画・彫刻室の関連業務の補佐	川瀬佑介
原田佳織		5月12日－8月31日	所蔵作品の調査研究および絵画・彫刻室の関連業務の補佐	陳岡めぐみ
倉地伸枝		5月13日－9月16日	所蔵作品の調査研究および版画・素描室の関連業務の補佐	中田明日佳

2015年度

氏名	分野	期間	テーマ・活動内容	指導
山本眞弓	教育普及	5月13日－10月31日	教育普及プログラムの企画・実施の補助、及び資料整理	寺島洋子
川口裕加子				
大城茉里恵				
梶西由紀子				
野村佳助				
佐藤芳哉				
益子実華	西洋美術史	5月11日－9月30日	当館で実施予定の展覧会の準備、カタログ編集業務などの補佐	川瀬佑介
福岡仁		5月13日－10月31日	所蔵作品の調査研究及び絵画・彫刻室の関連業務の補佐	陳岡めぐみ
久松美奈	情報資料	5月7日－8月31日	研究資料センターにおける資料収集・整理及び利用者サービスの補佐	川口雅子

2016年度

氏名	分野	期間	テーマ・活動内容	指導
武智あさぎ	教育普及	5月1日－10月31日	教育普及プログラムの企画・実施の補助、及び常設展セルフガイド制作	寺島洋子
小柳佳南子				
堀切里美				
稲垣真璃絵				
吉田一馬	西洋美術史	5月1日－9月30日	所蔵作品の来歴・展覧会歴の調査研究及び絵画・彫刻室関連業務の補佐	川瀬佑介
梅村尚幸		5月1日－10月31日	所蔵作品の来歴・展覧会歴の調査研究及び版画・素描室関連業務の補佐	新藤淳
龍真未		5月1日－10月31日	展覧会の準備、カタログ編集業務などの補佐	中田明日佳
石黒裕加子	情報資料	5月1日－10月31日	アート・ドキュメンテーションの最新状況と今後の可能性について	川口雅子
岩崎達也		5月1日－7月31日	美術図書館と社会貢献	川口雅子

2017年度

氏名	分野	期間	テーマ・活動内容	指導
吉田和佳奈	教育普及	5月1日－8月31日	教育普及プログラム実施の補助、及び各館のセルフガイド資料の整理	寺島洋子
軍司しずか				
森万由子	西洋美術史	5月10日－10月31日	当館所蔵作品（版画・素描）についての美術史的調査・研究、及び版画素描室に関連する業務の補佐	陳岡めぐみ

2018年度

氏名	分野	期間	テーマ・活動内容	指導
石垣熙子	教育普及	5月1日－10月31日	教育普及プログラム実施の補助、セルフガイドについての調査及び常設展セルフガイドの作成	寺島洋子、藤田百合（女子美術大学特命助教）
土田紗也				
橋本柚香				
大木章子				
出坂温子	西洋美術史	5月28日－9月30日	所蔵作品（絵画・彫刻）の来歴・展覧会歴調査、美術史的研究及び絵画・彫刻室に関連する業務の補佐	川瀬佑介
植松苑子		5月10日－7月31日、11月1日–2019年1月31日	所蔵作品（版画・素描）についての美術史的調査・研究、及び版画・素描室に関連する業務の補佐	中田明日佳
中西晴乃	情報資料	5月17日－7月31日	研究資料センターにおける資料収集・整理及び利用者サービスの補佐	川口雅子
諏訪園真子				

2019年度

氏名	分野	期間	テーマ・活動内容	指導
伊藤彩乃	教育普及	5月23日－8月31日	教育普及プログラムの企画・実施の補助、及び資料整理	酒井敦子
星野葉月				
鈴木彩乃	西洋美術史	5月13日－11月30日	所蔵作品（絵画・彫刻）の来歴・展覧会歴調査、美術史的研究及び絵画・彫刻室に関連する業務の補佐	新藤淳
野原海		5月13日－8月31日	所蔵作品（絵画・彫刻）の来歴・展覧会歴調査、美術史的研究及び絵画・彫刻室に関連する業務の補佐	川瀬佑介
諏訪俊昭		7月19日－11月30日	実施予定の展覧会の準備、カタログ編集業務などの補佐	川瀬佑介

3-4
他組織との連携

都立上野高等学校との連携

開始時期：2007年度
※2016年度で終了

概要： 東京都教育庁の主導で、高校生が社会に貢献することを目的として都立高等学校で「奉仕」（1単位）の必修科目が設けられ、当館では台東区にある都立上野高等学校の生徒を毎年受け入れてきた。

2013年度以降：
生徒たちはこれまでと同様に年に2回、「ファン・デー」や「美術館でクリスマス」などのプログラムにて、教育普及室職員やボランティア・スタッフの補助に携わってきた。都立上野高等学校での奉仕科目がなくなったことを受けて、本連携も終了した。

都立上野高等学校　奉仕活動

日程	内容	参加者数
2013年　8月10日（土）・11日（日）	「ファン・デー」補助	生徒 4 教員 1
2013年　12月14日（土）・15日（日）	「美術館でクリスマス」補助	生徒 3 教員 1
2014年　9月27日（土）・28日（日）	「ファン・デー」補助	生徒 教員 1
2014年　12月13日（土）・14日（日）	「美術館でクリスマス」補助	生徒 4 教員 1
2015年　8月7日（金）・8日（土）・9日（日）	「サマープログラム」（ファン・ウィズ・コレクション2015）補助	生徒 6 教員 1
2015年　12月12日（土）・13日（日）	「美術館でクリスマス」補助	生徒 4 教員 1

東京大学大学院 人文社会系研究科 文化資源学研究専攻の教育・研究における連携・協力

開始時期：2002年度

概要： 当館のインターンシップと当館の研究員が大学で実施する演習を、当該研究科の履修科目として提供してきた。

2013年度以降：
大学での演習を受講する学生は一定数いるが、インターンシップを希望する学生の数は減少し（2013年度1名、2015年度1名）、教育普及室のインターンシップを履修科目とするのは2018年度で一旦終了した。2019年度以降は、本連携が開始した当時から続いている美術史の分野と、新たに加わったアート・ドキュメンテーションの分野で連携が継続されている。

「Museum Start あいうえの」事業の共催

開始時期：2013年度

概要： 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団東京都美術館・アーツカウンシル東京、及び東京藝術大学が主催する事業で、上野公園にある文化教育施設（上野の森美術館、恩賜上野動物園、国立科学博物館、国立国会図書館国際子ども図書館、国立西洋美術館、東京国立博物館、東京文化会館）が共催として関わっている。企画運営を東京都美術館と東京藝術大学の専門チームが担い、各施設にてさまざまなプログラムを実施。

当館においても、年数回の常設展示室でのプログラム実施、プログラム当日及び下見の際のファシリテーター役（アート・コミュニケータ※愛称とびラー）に対する観覧料免除、本事業関連小冊子を持参した来館者への缶バッジの配布などを通じて、本事業に協力している。

バッジ配布数

2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
264	520	352	216	216	221	172

「Museum Start あいうえの」事業への協力（当館にて実施されたプログラム）

2013年度

日程	プログラム名	参加者数（延数）
11月6日（水）・13日（水）	「放課後の美術館」 第9回（国立西洋美術館、東京国立博物館、東京文化会館） 第10回（国立西洋美術館、国際子ども図書館、上野の森美術館）	とびラー 7 参加者 21 とびラー 9 参加者 29

2014年度

日程	プログラム名	参加者数（延数）
6月15日（日）・29日（日）	「あいうえのものがたり」 第2回・第3回	とびラー 15 参加者 10 とびラー 10 参加者 13
7月21日（木）、9月13日（土）、10月11日（土）・25日（土）、11月22日（土）	「あいうえの日和」	参加者 83
8月16日（土）、2015年1月6日（火）	「ティーンズ学芸員」 第4回・第7回	とびラー 9 参加者 15 大学生 14 とびラー 11 参加者 12
10月1日（水）	「放課後のミュージアム」 第4回（国立西洋美術館、上野の森美術館、東京都美術館）	とびラー 13 参加者 31

2015年度

日程	プログラム名	参加者数（延数）
4月11日（土）・25日（土）、5月9日（土）・23日（土）、9月12日（土）・26日（土）、10月10日（土）・24日（土）、11月14日（土）・28日（土）	「あいうえの日和」	参加者 118
8月1日（土）・29日（土）	「キュッパ部」ビ：国立西洋美術館編	とびラー 4 参加者 9 保護者 9 とびラー 8 参加者 14 保護者 14
10月14日（水）	「放課後のミュージアム」 第5回（国立西洋美術館、恩賜上野動物園、東京都美術館）	とびラー 13 参加者 29

2016年度

日程	プログラム名	参加者数（延数）
9月17日（土）、10月1日（土）・15日（土）、 11月5日（土）・19日（土））	「あいうえの日和」	参加者　59
2017年3月14日（火）	「うえの！ふしぎ発見」けんちく部 （東京都美術館、東京文化会館、国立西洋美術館）	とびラー　10 参加者　10 保護者　11

2017年度

日程	プログラム名	参加者数（延数）
8月18日（土）	「うえの！ふしぎ発見」けんちく部 （東京都美術館、東京文化会館、国立西洋美術館）	とびラー　12 参加者　17 保護者　15
10月21日（土）	「ミュージアム・トリップ（現：ダイバーシティ・プログラム）」NPO法人音まち計画 （東京都美術館、東京文化会館、国立西洋美術館）	とびラー　6 参加者　7 保護者　1 引率　5

2018年度

日程	プログラム名	参加者数（延数）
8月18日（土）	「うえの！ふしぎ発見」けんちく部　伝説の建築家編 （東京都美術館、東京文化会館、国立西洋美術館）	とびラー　17 参加者　15 保護者　16

2019年度

日程	プログラム名	参加者数（延数）
12月15日（日）	「キュッパ・チャンネル」ムービー部 第4回（恩賜上野動物園、国立西洋美術館）	とびラー　7 参加者　15 保護者　14

※ 2020年3月20日（金・祝）に予定されていた「リピータープログラムぼうけん部」は
新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため中止。

国立科学博物館「教員のための博物館の日」への協力

開始時期：2012年度

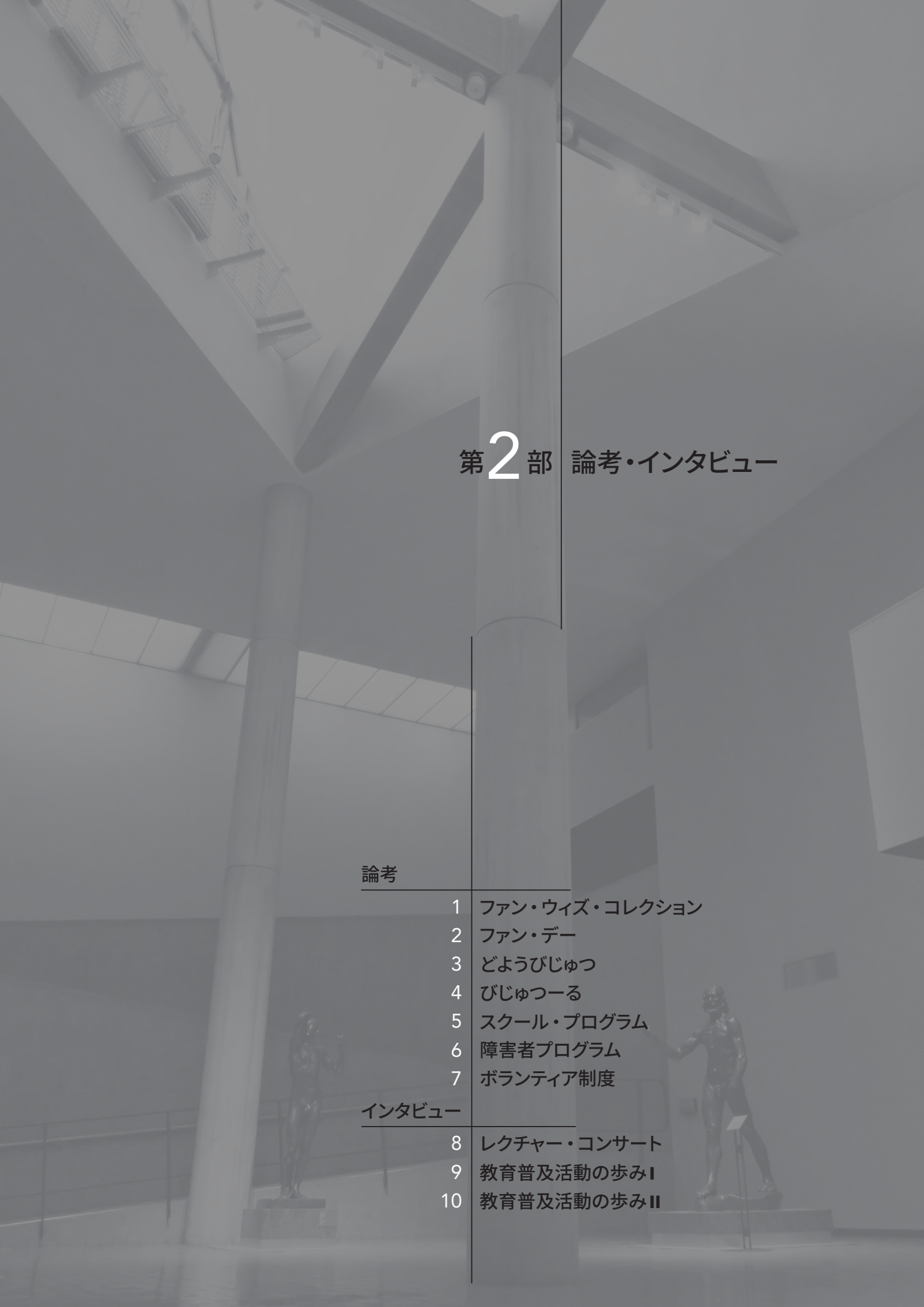
概要： 2008年度より国立科学博物館で開催している「教員のための博物館の日」に、2012年度より当館も科学博物館でのブースに当館の情報を提供する他、期間中、本プログラム参加者は常設展観覧料免除とするなどの協力をしている。

日程	内容	参加者数
2013年　8月23（金）・24日（土）	国立科学博物館ブースにて学校団体向け事業案内チラシの配布、当館常設展及び『ル・コルビュジエと20世紀美術』観覧料無料、講演会、先生のための鑑賞プログラムとの連動。	当館常設展観覧者　77
2014年　8月1日（金）・2日（土）	国立科学博物館ブースにて学校団体向け事業案内チラシの配布、当館常設展観覧料無料、『橋本コレクション　指輪　神々の時代から現代まで　―時を超える輝き展』先生のための鑑賞プログラムとの連動。	先生のための鑑賞プログラム参加者　25
2015年　7月28日（火）～31日（金）	国立科学博物館ブースにて学校団体向け事業案内チラシの配布、当館常設展観覧料無料、ミュージアムリレートークへの参加。	当館常設展観覧者　41
2016年　7月26日（火）～29日（金）	国立科学博物館ブースにて学校団体向け事業案内チラシの配布、当館常設展観覧料無料、『聖なるもの、俗なるもの　メッケネムとドイツ初期銅版画展』先生のための鑑賞プログラムとの連動。	当館常設展観覧者　83
2017年　7月25日（火）～28日（金）	国立科学博物館ブースにて学校団体向け事業案内チラシの配布、当館常設展観覧料無料。	当館常設展観覧者　63
2018年　7月24日（火）～27日（金）	国立科学博物館ブースにて学校団体向け事業案内チラシの配布、当館常設展観覧料無料。	当館常設展観覧者　53
2019年　7月23日（火）～26日（金）	国立科学博物館ブースにて学校団体向け事業案内チラシの配布、当館常設展観覧料無料。	当館常設展観覧者　112

「台東区学びのキャンパスプランニング事業」への協力

開始時期：2013年度

概要： 台東区教育委員会による「台東区学びのキャンパスプランニング事業」に、2013年度の開始当初より当館も協力している。この事業は、台東区が策定した「台東区学校教育ビジョン」の一つで、台東区教育委員会が区内を中心にさまざまな機関と連携して複数の教育プログラムを企画し、学校園の希望により実施している。当館としては、このために新たな企画をするという形ではなく、既存の学校向けプログラム（スクール・ギャラリートーク、オリエンテーション）についての情報を提供し、当事業として台東区の学校園に告知される形をとっている。また、2018年度より建築ツアーも含まれることとなり、小学校の団体に向けた建築ツアーも行われた。



第2部　論考・インタビュー

論考

1　ファン・ウィズ・コレクション
2　ファン・デー
3　どようびじゅつ
4　びじゅつーる
5　スクール・プログラム
6　障害者プログラム
7　ボランティア制度

インタビュー

8　レクチャー・コンサート
9　教育普及活動の歩みI
10　教育普及活動の歩みII

第2部

本記録集では、プログラム実績データに加え、担当者による論考を掲載する。担当者の視点から、プログラム実施に至るまでの意図、判断、そしてそのための根拠、考察を記載すると共に、その成果、そして課題を記録することを目的とし、実施したさまざまなプログラムの中から、単年ではなく一定期間実施された7つのプログラムについて振り返る。加えて、客員研究員として長年当館の教育活動に関わられた瀧井敬子氏、佐藤厚子氏、そして初の教育普及専門職員として2019年3月まで当館に勤務し、現在は放送大学客員准教授である寺島洋子氏へのインタビューも掲載した。ここで扱うプログラム内容は、本書に収録されている2013年以降のみならず、それ以前の活動を含む。現在は当館を離れた執筆者も含まれ、上述の寺島氏と、2017年3月まで教育普及担当として勤務し、現在は中央大学教授である横山佐紀氏に、担当した当時の様子を、外からの視点も踏まえての分析、考察と共に記していただいた（ファン・ウィズ・コレクション、ファン・デー、びじゅつーる、障害者プログラム）。

美術館での教育活動として行われるプログラムのほとんどは、実施した先から消えていく。しかし、どの実践もやったからこそ知り得たこと、そしてそれが故の新たな問題意識もある。通常は、現場でのみ口伝で蓄積されていくことの多いこうした情報を文章に残すことで、今後の美術館教育研究及び実践に少しでも役立てば幸いである。

「ファン・ウィズ・コレクション」を振り返って

寺島洋子

はじめに

1995年、「子どものための美術展」として始まった本プログラムは、2010年を除き2017年まで毎年継続して行われた。これは、当時、特別展に関連した大人向けの講演会が中心だった国立西洋美術館（以下、西美）で、初めて行われた子どもを対象にした、西美のコレクションを紹介する小展覧会だった。このプログラムを開始するにあたり、美術館教育研究会[1]から客員研究員として迎えた佐藤厚子氏と共に、大人向けに企画された展覧会を、子どもに解説するのではなく、展覧会自体を子どもたちの興味・関心につながるようなテーマや視点で企画し、展示に工夫を凝らすことで、美術をより身近に感じ、楽しんでもらうことを目指した。また、小展覧会に関連して、ワークシート、ギャラリートーク、創作・体験プログラムなどをセットにして鑑賞を補助し、鑑賞者の体験を深めるよう努めた。

プログラムを開始してみると、一般の来館者もこの企画を楽しんでおり、創作・体験プログラムに参加したいとの希望があった。一方で、「子どものための」という語句に気づいた中学生は、これは自分たち向けのものではないと感じたと言う声も聞こえてきた。そこで、2002年からプログラムの総称を、西美の「コレクション」であることを示す「ファン・ウィズ・コレクション」（以下、FWC）に変更[2]して、子どもから大人を対象に、より多くの人々に参加し、楽しんでもらうプログラムとしたのである。また、FWCは、コレクションを中心とする小展覧会を基本としていたが、企画の内容やその時々の状況に応じて、小展覧会を企画する代わりに、常設展や企画展を活用するなどして臨機応変に対処してきた。

今回、活動報告書を出すにあたり、23年間にわたって実施してきたプログラムの名称、テーマ、展示（小展覧会、常設展、企画展など）を表にまとめてみた。各企画の詳細は、本書と『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』を参照いただくとして、本稿では、この表を参考にしながら、1）テーマ、2）展示の工夫と関連プログラム、3）さまざまな団体・個人との協力、の3点からFWCを振り返ってみたい。

年度	名　称	テーマ	展示
1995	描かれた不思議な世界を旅する	絵の主題	○
1996	どうして像はつくられたの？	像の機能と表現	○
1997	ものがたりの森	物語の表現	○
1998	夏休み子どもプログラム	色彩・ポーズ	常設展
1999	夏休み子どもプログラム	光の表現	常設展
2000	西美をうたう	美術作品と短歌	常設展
2001	水の誘い	水の表現	○
2002	手と心	作家の意図と表現	○常設展
2003	ココロのマド	絵の形と表現	○常設展
2004	建築探検	ル・コルビュジエの本館建築	○本館
2005	いろいろメガネ1	多様な鑑賞	常設展
2006	いろいろメガネ2	多様な鑑賞	○常設展
2007	見る楽しみ・知る喜び1	知識と鑑賞	常設展
2008	見る楽しみ・知る喜び2	知識と鑑賞	常設展
2009	ル・コルビュジエと国立西洋美術館	国立西洋美術館の建築	○本館
2011	サマー・プログラム	オリンピックと身体表現	企画展
2012	彫刻の魅力を探る	彫刻の技法	○企画展
2013	ピカソが描いた動物たち	ピカソの動物表現	小企画展 *
2014	リング・リング	指輪の機能と表現	企画展
2015	都図研大会「中央大会」	学校教育と鑑賞	常設展
2016	ル・コルビュジエと無限成長美術館	ル・コルビュジエの美術館	○
2017	ル・コルビュジエの芸術空間	習作図面から辿る本館建築	○

※ 展示欄の○印は、ファン・ウィズ・コレクションとして企画した小展覧会を示す。
* 常設展示の一環として実施している所蔵作品による版画素描展。

1. テーマ

「ファン・ウィズ・コレクション」では、作品のさまざまな要素に焦点を当ててテーマを設定してきたが、それらを整理してみると、おおよそ「表現」「鑑賞」「建築」の3つに分類できることがわかった。

（1）表現

表のテーマ欄を見てわかるように、企画ごとに焦点を当てている要素は異なるが、美術作品であるがゆえに多くのテーマは表現に関わる内容であった。光や水といった絵のモチーフや、絵の主題となる物語を取り上げて、それらの表現が時代の様式や作家の個性などによって異なることを紹介する、表現の多様性をテーマとする企画は典型的な例である。また、表現の多様性を鑑賞することからさらに一歩踏み込んで、作家の意図や、作品の機能・役割と

表現の関係を考えることをテーマにした企画もあった。2002年の「手と心」は、一人の作家が生涯にわたって制作した作品の表現や技法の変化と作家の意図との関係に、また、1996年の「どうして像はつくられたの？」と2014年の「リング・リング」では、像と指輪がそれぞれに持っている機能や役割とその表現（デザイン）の関係に、さらに2003年の「ココロのマド」では、絵画の形態と表現（構図）の関係にそれぞれ焦点を当てている。

表現をテーマにした企画では、作品と展示方法で課題が生ずることがあった。例えば、表現の多様性を紹介できる近現代の作品が西美のコレクションには少なかったこと。選んだ作品を1ヶ所に集めて展覧会の形式で見せることができず、常設展を利用すると、作品が散在してしまうために来館者にテーマを伝えづらかったことなどである。こうした課題には、他館から作品を借用したり、ワークシートに作品写真を載せて説明したりすることで対処した。

（2）鑑賞

表現の次に多いのは、鑑賞をテーマにした企画だった。表現では作品に重点が置かれるのに対して、鑑賞は来館者が中心となるテーマである。例えば、2005年・2006年の「いろいろメガネ」は、作品を見る視点を提供してきたそれまでの企画とは逆に、来館者個々人の鑑賞を取り上げ、その自由な作品の見かた、楽しみ方を他の来館者と共有するという、来館者が主役の企画として画期的なものだった。一方、2007年・2008年の「見る楽しみ・知る喜び」は、来館者の鑑賞を深めるために作家や作品にまつわるさまざまな知識・情報を提供することを中心に据えたプログラムになった。

2000年の「西美をうたう」は、筆者が在外研修で不在の年に、筆者に代わり主任研究員の佐藤直樹氏（現東京芸術大学教授）が企画したもので、現代歌人協会の方々が常設展の作品を見て詠んだ短歌を通して、来館者に作品を鑑賞してもらうユニークなものだった。また、2015年は、東京都図画工作研究会の都図研大会に協力して、台東区立台東育英小学校に限定した鑑賞の研究授業をFWCとして実施するという異例の企画となった。

鑑賞をテーマとしたこれらのプログラムでは、いずれの場合も常設展を利用して、西美のコレクションを余すところなく活用することができた。

（3）建築

コレクションを入れる器である建物をテーマにした経緯については、本書のインタビュー（p. 151）でも触れているように、絵画の形と建築の関係を探っていたことに端を発している。普段はあまり意識することはないが、建物の空間構成や照明などの物理的要素は、実は来館者の作品鑑賞に影響を及ぼしていることに着目して、建築をテーマとしてとりあげることにしたのである。さらに、西美の本館は、近代建築の巨匠の一人であるル・コルビュジエが設計した建物で、構造や造作など、それ自体が一つの作品として楽しめることもテーマに値すると考えた。

2004年の「建築探検」は、本館の空間を体験しながら、それが作品の鑑賞を左右することを実感すると同時に、ル・コルビュジエが建物に施した独自の造作を楽しむことを目的としていた。2009年の「ル・コルビュジエと国立西洋美術館」は、西美の創立50周年を記念する企画として、本館に増築された部分も含め、建物の歴史を概観する小展覧会となった。本館が、ル・コルビュジエの建築を代表する17作品のうちの一つとして、世界文化遺産に登録されて以降の2016年の企画では、ル・コルビュジエが設計した無限成長美術館の理念を紹介する小展覧会を、また、2017年の企画では本館設計の経緯を習作図面やスケッチから辿る小展覧会をそれぞれ実施した。

今日、建築は展覧会のテーマとして珍しいものではないが、2004年当初はまだそれほど多くはなかった。コレクションと同様に、建築も教育資源の一つとして取り上げたことは、美術愛好者とは異なる、新たな来館者を発掘することにつながったという点でも意味のあるテーマだったと言えるだろう。

2. 展示の工夫と関連プログラム

（1）展示の工夫

今日、美術の展覧会でも、作品に関連する資料やハンズオン・ツールなどを一緒に展示して、作品への興味や理解を促す工夫を見かけることが多くなってきている。FWCは、当初、子どもを対象にしていたこともあって、文字情報ではなく、直接触れることで、遊びながら理解を深めることができるようなツールを用意するようにしていた。例えば、1995年の「描かれた不思議な世界を旅する」で取り上げた点描画には、カラーの風景写真を、赤、青、黄の3色の点に分解して3枚の透明シートにそれぞれプリントして重ね合わせたツールを用意した。1枚に1色ずつプリントされたシートを、3枚を重ねることで綺麗なカラーの風景写真となるこのツールは、子どもたちが日常的に目にする現代のカラー印刷技術と関連させて、点描画家が意図したことを遊びながら理解してもらうための工夫だった。また、2001年の「水の誘い」では、さまざまな水の音を奏でる楽器を用意して聴覚に働きかけたり、1995年の企画で取り上げた作品で使用されているフロッタージュ技法を、来館者が実際に試すことができるコーナーを設けるなど、来館者が能動的に楽しめる仕掛け作りに取り組んだ。

作品と一緒に展示する資料やハンズオン・ツールは、子どもだけでなく、大人も積極的に活用しており、年齢に関係なく鑑賞者の能動性を引き出すのに有効であることを確認することができた。しかし、ツールを作品の近くに置く方がより効果的であることは分かっていても、作品保護のために離さざるを得ず、期待通りの効果が得られないこともあった。

（2）関連プログラム

ワークシート、ギャラリートーク、講演会、創作・体験プログラム、コンサート、見学会などは、美術館の教育活動として広く実施されているものである。FWCでも、展示のテーマや作品について考えるきっかけになるように、さまざまな活動を行った。特に、新たに展示を組むのではなく、既存の常設展、企画展を活用したFWCでは、元の展示に手を加えることが難しく、プログラムの種類や数を増やして対応している。

関連プログラムの種類や数が多かったのは、2年にわたる「いろいろメガネ」の企画だった。常設展の中で、来館者が時間をかけずに参加できるものから、数日かけた創作プログラム、各界（アニメーション、音楽、食文化、ファッションなど）から講師を招いて西美の作品について独自の視点から語ってもらう講演会、コンサート、さらに、来館者にエッセイを募集するなど、さまざまなプログラムを実施した。そして、1年目に来館者が参加して制作した作品やエッセイなどは、2年目に展示してその成果を他の来館者と

共有した。

近年の傾向として、現代美術の展覧会の場合、出品作品の制作者であるアーティストに、創作のワークショップを依頼するケースが多い。FWCでは、取り上げた作品の主題やモチーフ、表現の点で類似する作品を制作しているアーティストに、プログラムを依頼していた。西美の場合、西欧文化の古い作品を今日の視点から考えるきっかけを提供するという点で、現在活躍中のアーティストにプログラムを依頼することには大きな意味があったと思う。そして、プログラムの内容は、FWCとの関連性を持たせるようにアーティストと相談しながら企画し、プログラムの最中に、必ず関連作品を鑑賞するよう心掛けた。

3. さまざまな団体・個人との協力

FWCでは、各分野の専門家を始めとして、外部の団体や機関の協力を得ることで、企画の内容を深めることに努めてきた。それによって、より良い展示やプログラムを実現できただけでなく、協働することで得た知識や経験は、その後に続く企画の糧ともなっている。

(1) 東京都図画工作研究会との協力

子どもを対象とする展覧会を開催するにあたり、ターゲットとなる子どものことを知るために、東京都の公立小学校の図画工作の教員で組織している東京都図画工作研究会(以下、都図研)に協力を依頼することにした。都図研は、当時、セゾン美術館の展覧会にも参画して活発に活動していた。そこで、1995年の初回の企画では、作品選択や展示の工夫として用意するハンズオン・ツールなどについて、全般的な助言を仰いだ。1996年の「どうして像はつくられたの ?」では、この展覧会に関連したティーチャーズ・ガイドの制作を委託した。それぞれの像の造形的な特徴や美しさ、面白さを活かした、創作の授業案を多数掲載したガイドは、都内の小学校へ無料配布された。1997年の「ものがたりの森」では、さらに協力を推し進め、創作活動の事例を含んだ展覧会の子ども向けガイドを共同で編集した。

都図研との連携は、3回の展覧会をもって一旦終了となったが、立ち上げたばかりの企画に多くの小学校を迎えることができたのは、企画内容への助言や協力は言うまでもなく、都図研が行った展覧会の周知に負うところが大きかったと言えるだろう。

(2) 東京国立博物館との共同企画

1995年に初回の展覧会を立ち上げると、次の年から企画展示館の増築と本館の免震工事が始まり、西美は2年間休館することとなった。そこで、この2年間は、館外で本プログラムを開催せざるを得なくなり、同じ上野公園内の東京国立博物館(以下、東博)での共同開催を要請したのである。

1996年の展覧会は西美が企画したものだったが、1997年は東博の教育担当者との共同企画による展覧会となった。東博での展覧会は、日本の作品が加わったことで、変化に富んだ展示になっただけでなく、西洋と日本の表現の違いを並べて見せることができる貴重な機会となった。今となっては、信じられないことかもしれないが、筆者が教育活動を開始した当初、子どもを対象とする展覧会で、わざわざ日本の美術作品を借用して、西洋の作品と一緒に展示することの意味に、学芸課は懐疑的であった。また、東博では子ども向けの企画に重要文化財の作品を展示することを、想定さえしていなかったと聞いている。この共同企画は、期せずしてそうした両館の固定観念に、小さな風穴を開ける先例となったのではないかと思っている。

(3) 東京藝術大学との連携

上野公園内にある東京藝術大学とは、展覧会、講演会、コンサートなど大小さまざまな活動で相互に協力する関係であるが、FWCでは2012年の「彫刻の魅力を探る」で、大学内の彫刻科研究室・工芸科鋳金研究室・共通工房(石材工房)の3部門と連携して、ロダンの彫刻作品に使われている技法の展示資料を制作した。各研究室の高い技術力によって、原型となる塑像を大理石、テラコッタ、ブロンズなどの異なる素材に置き換え、その記録映像を道具や資料と併せて展示することでロダンの技法をわかりやすく紹介することができた。

このFWCは、当館のロダン彫刻を活用した主任研究員の大屋美那氏[3]による企画展「手の痕跡」と提携するという新しい取り組みで、本展のロダン彫刻の展示とFWCの技法展示は互いに補完しあうものだった。

(4) 個人との協力関係

FWCでは、毎回、さまざまな分野の専門家の協力を得て、関連プログラムを実施してきた。専門家の力を借りることで、さまざまな視点からFWCのテーマについて考え、体験し、楽しむプログラムを行うことができた。例えば、建築をテーマとするFWCでは、数多くの建築家と協働することによって、建築を新たな教育資源として活用することができた。また、館外の協力者だけでなく、2000年、2011年〜2014年のFWCは、学芸課の同僚との連携が活きた企画となっている。

おわりに

23年にわたる活動を、3つの点から振り返って思うのは、「ファン・ウィズ・コレクション」が、現在の教育活動の基盤となっているということである。FWCのギャラリートークに参加した教員の「テーマを設けた展覧会のトークもいいけど、常設展を使っていつでもトークしてもらえる方が有難い」という一言が、現在のスクール・ギャラリートークへとつながり、ワークシートはジュニア・パスポートへ、創作・体験プログラムはファミリープログラムへと姿を変えて受け継がれている。プログラムの形式は変わっても、コレクションや建築などを教育資源とする多様な教育機会を、美術館の利用者に提供していくことが、今後も教育活動の中核となるだろう。そして、これまでの教育活動を支えてくれた人々とのつながりを大切にして、新たな協力者や利用者と共に、国立西洋美術館ならではの活動が展開されていくことを期待している。

註

1 筆者も会員の一人であった任意の研究会。大日本印刷のメセナによって内外の美術館の教育活動を検証・紹介する会誌を発行。調査・研究成果をまとめたDVD「美術館教育1969–1994 日本の公立美術館における教育活動18館の記録」(1998)を発行後、活動を停止した。

2 名称の変更については、本書の佐藤厚子氏へのインタビューp. 148参照。

3 2013年6月、研究調査のため滞在されていたパリで急逝され、「手の痕跡」が最後に企画された展覧会となった。

協賛企業から支援を受けた教育プログラムの可能性と課題

横山佐紀

はじめに

ファン・デー（FUN DAY）は、美術館にあまり足が向かない人に国立西洋美術館（以下西美）のコレクションやプログラムを紹介し、美術や美術館を楽しんでもらうことを目的に、2007年から2015年まで（ただし、2010年を除く）、1年に1回行われたプログラムである。

いつもは静かな西美が、金管楽器によるにぎやかな前庭コンサートと共に学園祭のような雰囲気に包まれる2日間には特別感があったが、その実、ファン・デーの中核となったのは教育普及室が定番として行っている「いつものプログラム」である。他方、その年ごとに専門家に依頼してギャラリートークや技法のデモンストレーションなどを試み、教育プログラムの新たなバリエーションとして後に定着したものもある。「試み」という点について加えるならば、プログラムの内容ばかりでなく、ファン・デーを通じて協賛企業との協力関係を築いたことは、当館の教育プログラムの歴史においても、あるいは国立美術館全体の経験においても特筆すべきであろう。

こうしたチャレンジは課題を残すことにもなった。とりわけ協賛企業との協働については、それまで教育普及室が前線に立って協賛企業とプロジェクトを進めた経験がなかったこともあり、反省すべき点が多い。だが、コロナ禍のもと、クラウド・ファンディングを始める美術館が登場したり、展覧会における今後のスポンサーシップのあり方が再検討されたりしている現在、教育プログラムと資金（源）の問題はもはや「美術館や職員に経験がない」のひと言で片づけられるものとも思われない。

以下、ファン・デーのアイディア源や各プログラムの特徴と工夫について、担当者としての個人的な所感を織り交ぜながら振り返ったうえで、教育プログラムとスポンサーシップの反省点と課題を整理してみたい。

1. ファン・デーのアイディア

2006年4月に教育普及室に着任した時点での筆者のおもな業務は、企画展関連の教育プログラムの企画・運営であった。具体的には、毎回の展覧会の作品解説パネルの執筆、作品リストの制作、会場内の休憩用ソファーで利用してもらえるよう、作品解説パネルをA4判に拡大したラージ・プリントの制作、講演会やスライドトークの日程や担当者の調整などである。その存在が広く認知されている西美に多くの来館者がやってくることは疑いようのないことであったが、同時に「西美は敷居が高く、行きにくい」と思われていたのも事実である。実際、あるプログラムに参加していた親子に「美術館は、きれいなかっこうをして来なければいけない場所ですよね」と言われたことがある。「動物園に行く人と西美に来る人は違う（動物園に行く人は西美には来ない）」といったことを館内で耳にすることもあった。つまり、良くも悪くも西美は特別な場所であるという、認識が内外で醸成されていたわけである。

現実には、西美にはボランティア・スタッフがおり、学校対応のギャラリートークは毎日のように行われ、ファミリー・プログラムも定期的に実施され、コレクションをさまざまな角度から紹介するプログラム「ファン・ウィズ・コレクション」の開催や「びじゅつーる」の貸出も定着していたはずだが、それでもなお、西美は「敷居が高い」として敬遠されているようであった。このような状況をふまえ、もしも美術館の中で行われていることをよく知らなかったり、きっかけがなかったりするがゆえに美術館に足が向かない人たちがいるのであれば、とりあえず一度来てみてもらうために何かできないだろうかというようなことを考えるに至った。

その手がかりとなったのが、2006年7月に開催されたナショナル・ポートレート・ギャラリー（以下NPG）とスミソニアン・アメリカ美術館（いずれもワシントンDC、スミソニアン協会）の「ターゲット・ファミリー・デー」である。改修工事のため2000年1月以来休館していた両館は2006年7月1日にようやく開館、この再開に花を添えたのが、小売業者のターゲット社がスポンサーとなったミュージアム開放プログラム「ターゲット・ファミリー・デー」である。筆者は2004年から2006年までNPGにフェローとして留学し、開館に向けた準備やプログラムの進行状況はおおよそ理解してはいたものの、実際に参加してみたターゲット・ファミリー・デーには、目が見開かれるような新鮮な驚きがあった。建物の前での館長挨拶に続いて公開された館内では、各所で立ち寄り制のワークショップなどが開かれ、あちらこちらで軽快なバンドやコーラスによるミニコンサートが行われ、ポートレートに描かれた人物に扮した役者が館内外を回遊し、バルコニーではよく知られた作品が活人画風に再現されるなど、ポートレートによってアメリカの歴史を表象するNPGとアメリカ美術館らしさを前面に打ち出したプログラムが終日行われたのである。

企業をスポンサーとする1日であるので、チラシなどの印刷物をはじめターゲット社のロゴマークがいたるところに掲出され、来館者に渡されるおみやげ（うちわやショッピングバッグ）にもターゲット社のロゴが必ず入り、このプログラムのスポンサーシップがあらゆる場面でぬかりなく宣伝されていたのはいうまでもない。そのようなスポンサーシップのありようについて是非はあるにせよ、プログラムと共にミュージアムを開放し（スミソニアン協会傘下のミュージアムは入場無料）、通りがかりの人にもギャラリートークや簡単なワークショップに参加してもらう機会を提供するのは、市民とミュージアムをつなぐ試みとして魅力的に思われた。何よりも、改修された建物やコレクションを目に入れつつ、にぎやかな美術館をあちらこちらと歩き回ってみて、筆者自身がたいへん楽しかったのである。

帰国後、当館でも同様のプログラムが実現可能かどうか教育普及室内で相談を重ねた後、ターゲット・ファミリー・デーの記録写真を交えながら青柳正規館長（当時）に企画をプレゼンテーションする機会を得た。同時に、国内における事例として大原美術館の「チルドレンズ・アート・ミュージアム」について、大原美術館の柳沢秀行さんにご教示いただき、プログラムの記録写真をお借りするなどしてさらに検討を進めた。この時点で想定していたのは、ターゲット社のようなスポンサー企業を募ることであり、これが後の「OPEN museum」の一プログラムとしてのファン・デーへとつながっていくことになる。また、西美で実施するのであれば、入館無料、コレクションのみの開放（企画展は除外）などが条件となることは早い段階から意識されていたと記憶する。

館長へのプレゼンテーションの後、学芸会議を経て、2007年5月12日、13日に第1回ファン・デーを開催することが決定した。

2. 教育普及プログラムのオープンハウスとしてのファン・デー

ファン・デー開催にあたり、教育普及室が基本方針として留意したのは以下の5点である。（1）所蔵作品および西美を知ってもらうこと（したがって企画展は対象外とし、常設展のみの期間にファン・デーを実施すること）、（2）定番化しているプログラムを中心に構成し、これらを周知すること、（3）新しいプログラムを追加する場合でも「作品をよく見ること」を目的に据えること、（4）入場無料とすること、（5）事前予約は不要とし立ち寄り制を基本とすること。年度ごとの実施記録は『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』pp. 115–122及び本書pp. 62–65を参照していただくこととし、以下では、年度を超えてプログラムを横断的に整理してみたい。

（1）ギャラリートークの反省と工夫

ボランティア・スタッフが日常的に行っているギャラリートークは当館教育普及活動の基本であり、ファン・デーにおいても不可欠であった。第1回（2007年度）ファン・デーでは、数点の作品を見ていくツアー形式としたのだが、これが失敗であった。「事前予約不要」というのは、「参加者数が読めない」ということである。ツアーを見かけて途中から参加する人もいて、トーカーが大勢を引き連れて館内を移動する危険な状況となり、トークを担当するボランティア・スタッフに大きな負担をかけてしまった。そこで2年目からは、作品1点について10分間のトークを行う「10分トークスタイル」に変更し、1日に取り上げる作品は5点ほど、作品ごとにトークの開始時間をずらすようスケジュールを組んだ。なお、第1回の人数制限の失敗から、第2回以降は、ツアー式のプログラム（建築ツアーなど）は参加券を当日の決まった時間に配布する仕組み（先着定員制）を取り入れ、「ファン・デー全体としては事前予約不要だが、プログラムによっては人数制限を課す」という対応とした。

（2）びじゅつーる貸出、スタンプラリー、クイズ、セイビ・パズル、ぬりえ：「子ども向けは、大人向け」

びじゅつーるは2004年以来、大人と子どもで来館する人たちを対象に、ボランティア・スタッフによる貸し出しを行っていた鑑賞補助教材である。ファン・デーでは対象に制限を設けずに貸し出したところ意外なことに好評で、大人どうしの利用も多かった。後述のジュニア・パスポート同様、「子ども向けは、大人向けである」ことがよく理解できた。

一方、スタンプラリー、クイズ、セイビ・パズル（コレクションの作品をパズルにしたもの）、ぬりえはファン・デー・オリジナル企画である（パズルについては2007年のクリスマス・プログラム「絵でたのしむクリスマス」を参考にしている）。いずれも「作品を自分の目でよく見ること」が目的である。たとえば20種類ほど（1枚1作品）用意したクイズシートのクイズの内容は、ふだんのギャラリートークでの作品をよく見るためのやりとりや問いかけを意識したものとし、パズルも同様に作品をよく見ることでピースを組み合わせて全体を完成させられるものとした。

予想外に個性的な結果を生んだのが、ぬりえである。ぬりえは作品のアウトラインのみを取って制作し、参加者が作品をよく見て色調を再現することを想定していたのだが、「作品の再現」に捉われない参加者自身の個性と自由な発想が反映されたオリジナリティの高いぬりえ作品が多かった。

参加者の個性が表現されるのは、缶バッジについても同様である。2011年以降のクイズシートは作品をよく見て問いに答えるだけではなく、常設展出口を出たところでシートの絵柄の一部を型抜きして缶バッヂを作ることができるよう構成した。準備段階ではそれぞれのシートについて「だいたいこのあたりが切り抜かれてバッヂになるだろう」と想定していたのだが、参加者の希望はさまざまで、同じシートでも、どの部分を切り抜くかによってクイズシートの数以上のバリエーションのバッジが生まれ、これもまた参加者の個性や着眼点の違いを知る機会となった。

（3）本館関連：ミニチュアペーパークラフト（2009年）、建築ツアー（2009年）、本館立体パズル（2013年）

2016年に世界遺産に登録された本館は、2004年（「建築探検 ―ぐるぐるめぐるル・コルビュジエの美術館」）、2009年（自主展「開館50周年記念展　ル・コルビュジエと国立西洋美術館」）のファン・ウィズ・コレクションでも取り上げたように、教育普及室にとってプログラムの重要なリソースである。2009年のファン・デーでは「開館50周年記念展　ル・コルビュジエと国立西洋美術館」展と関連させた本館建築関連プログラムを企画することとし、本館ミニチュアペーパークラフトを制作し、建築ツアーを実施した。この時点では、西美には建築専門のボランティア・スタッフ（現在のCグループ）がいなかったため、建築関連プログラムを定期的に行っている目黒区美術館に建築プログラムで活躍しているボランティアを紹介してもらい、ツアーを依頼した。当時、照明ギャラリーや旧館長室、屋上は、職員が付き添って安全を確保できれば立ち入り可能であったため、これらの区画を含んだファン・デーならではの特別なバックヤードツアーを行うことができた。

本館パズル（2013年登場）は、土台となる板に本館の特徴でもある柱を等間隔に差し込むところから始まる立体的なパズルで、作業を進めながら本館建築の特徴を理解してもらうことを目的に、大岡寛典事務所に制作を依頼したものである。以後、ファン・デーの定番メニューとして登場している。

（4）自主展関連：技法デモンストレーション、ジュニア・パスポート

ファン・デーは新聞社などとの共催展がない時期に行うのが原則ではあるが、西美のみの主催で、主にコレクションから成る自主展は、常設展とは違う視点から当館のコレクションを紹介するこ

とのできるチャンスであり、自主展会期中にファン・デーを行ったこともある。上記の2009年「開館50周年記念展　ル・コルビュジエと国立西洋美術館」、同年「かたちは、うつる　―国立西洋美術館所蔵版画展」、2012年「手の痕跡　―国立西洋美術館所蔵作品を中心としたロダンとブールデルの彫刻と素描」がそれである。「ル・コルビュジエ」展では出品された建築模型の制作を担当した日本大学の大学院生にトークを、「かたちは、うつる」展では東京藝術大学版画研究室に銅版画、リトグラフの制作デモンストレーションを、「手の痕跡」展では同大学彫刻研究室に技法デモンストレーションを依頼し、それぞれの展覧会のジュニア・パスポートも配布した。入場無料の小中学生を対象にチケットも兼ねて窓口で配布されるジュニア・パスポートについては、日ごろから「大人もほしい」という声が寄せられていたことから、ファン・デーでは年齢に制限をもうけず配布することとし、教育普及室が企画展に関連して用意しているセルフガイドの存在を一般に広く周知することができた。企画展ジュニア・パスポートについても、共催者の合意が取れた場合にはファン・デーで先行配布し、展覧会の告知としたこともある（2014年「ホドラー」展、2015年「ボルドー」展）。

これらのプログラムの実施に欠かせないのが、ボランティア・スタッフである。ギャラリートークはもちろんのこと、クイズシートを使った缶バッジ制作や来館者対応などは、西美と西美のコレクションを熟知するボランティア・スタッフなしには到底実施することはできなかった。こちらの配慮が足りない点が多々あったはずだが、現場で的確に判断し、問題があればすぐに教育普及室職員と共有し翌日には改善するという柔軟な姿勢には頭が下がる。また、第1回ファン・デーの準備・運営の主力となったのはインターンである。「すべてが初めて」の第1回ファン・デーの準備を全力で進めてくれたインターンには、改めて感謝したい。

3. 外部団体との協力の成果と課題

ファン・デーの新たな試みは運営体制にも及び、それに伴う課題をも生むことになった。具体的には、協賛企業との関係の構築と維持である。

当初、西美の予算のみで実施されたファン・デーではあるが、複数の企業から支援を得た期間があり、そのおもなものは、2008年、2009年に西美全体のプロジェクトとして実施されたOPEN museumのもとでの協賛であった（OPEN museumのプログラムの詳細については、以下を参照のこと。https://www.nmwa.go.jp/jp/information/openmuseum.html）

OPEN museumの構造は、ごく簡単にいうならば、西美が契約を結んだ協賛企業から3年間、支援を受けて展覧会事業や教育普及活動を行い、事業の実施にあたっては広告代理店が間に入って交渉や調整を担当するというものである（広告代理店は協賛企業から提供を受けた資金の一部を手数料として受け取る）。したがって、ファン・デーに限らずOPEN museumとして教育プログラムを実施する際には、協賛企業だけではなく広告代理店が必ず関わることとなる。

OPEN museumの事業としてファン・デーを行ったのは、上述のとおり、2008年と2009年である。この2回については、前庭彫刻《考える人》を背景としたフォトサービス（2008年）、スケッチブックの配布が協賛企業の協力によって実施されたばかりでなく、クイズシートなどの印刷物の制作や、当日のスタッフ（館内の案内や、クイズシートなどの配布を担当するスタッフ）の手配を広告代理店の関係会社に依頼することができ、また会計管理を広告代理店と共に進められたことは利点であった。

一方、難しかったのが、企業と教育機関としての美術館の間に、美術館教育活動についての共通理解を作ることであった。ファン・デーの趣旨は、西美の教育プログラムやコレクションを広く知ってもらい、西美に足を運んでもらうきっかけを作ることにある。そのために参加費をすべて無料とし、誰もが参加しやすいように事前予約不要としたのであって、多くの教育プログラムと同様、ファン・デーを通じて美術館が何らかの収益を上げることを意図したものではなかった。この点については当初より、協賛企業および広告代理店から充分な理解を得ていたことは強調しておきたい。一方で、協賛企業としてはスポンサーシップを表現するために、ファン・デーの趣旨に直接関係がない配布物などが提案されることもあり、教育目的で美術館やコレクションに接する機会を来館者に提供しようとする美術館と、これを自社のプロモーションの機会と捉え将来の収益につなげようとする企業との間で、要所要所での確認が必要であった。支援提供に伴い、協賛企業がこのような機会を求めることは当然である。加えて、原則として、美術館が受ける支援が「寄付金」であるのか「資金提供」であるのかによって協賛社へのリターンが異なるのだが、2008年、2009年の支援は「資金提供」であった。この点を教育普及室職員や美術館側が早い段階で理解し、その後の見通しを立てられなかったことは問題であった。

協賛企業と西美との間の調整は広告代理店の業務であったため、双方の担当者が直接コンタクトを取ることがほとんどなく、問い合わせや確認は広告代理店を経由することとなった。西美側の担当者は、展覧会関連業務を抱えながら展覧会と展覧会の間を縫って実施されるファン・デーの準備を進めなければならず、印刷物制作などを広告代理店関連会社に委託する一方、協賛企業との連絡は必ず広告代理店を通すため、確認や調整に通常以上の時間を要することとなった。「スポンサーと共に仕事をするとどのような業務が生じるのか、それは通常業務と並行して進めることができるのか」といった事柄を美術館や教育普及担当者がよく認識し、検討した上で進行を管理すべきであった。

また、スポンサーシップに対する美術館側の全体的な姿勢に大きな課題があったことは改めて反省すべきであろう。それは、協賛企業に対するリターンをメニュー化して、明確に提案できなかったことである。OPEN museumに提供された資金の大部分は展覧会関連事業に充当され、教育普及プログラムが得た支援金は全体から見れば、実はささやかなものであった。展覧会関連事業でも、たしかにチラシやポスターに企業名が記載されはする。しかし、教育プログラムは、参加者ひとりひとりに配布される印刷物にロゴや企業名が記載され、場合によってはおみやげとして持ち帰るグッズにもこれらが明示されるため、来館者にスポンサーシップを直接訴えかけられる重要な手段となりうる。そこで、OPEN museumでも、ファン・デーをはじめとする教育プログラムが最前線に立つことになったのだが、「支援に基づいて、プログラムを実施すること」に関心が向かうあまり、スポンサーに対していかなる特別プログラムを用意すべきかという点について、配慮を欠いていたといわざるをえない。たとえば、ファミリー・プログラムに必ず協賛企業の社員向けの回を設けたり、同様に社員

限定のギャラリートークや建築ツアーを行ったりといったことは可能であったはずである。これらを2年の間に定期的に実施していれば、美術館と企業という法人レベルでのつながりだけではなく、社員個人に西美を知ってもらい、足を運んでもらい、個人レベルでリターンを感じてもらえたはずである。支援金提供というスポンサーシップが契約期間に限定されているのに対し、美術館に対する個人の愛着や関係性はより長期に続きうるものであり、さらにはその個人から知り合いのネットワークへと広がりうるものでもある。せっかく協賛社から充分な支援を受けておきながら、これをきっかけにして、その後、西美とつながっている個人がそれほどいないであろうことには忸怩たる思いがある。

ただし、上記した2点は、実は当時の時点でやむを得なかった側面があることも付しておきたい。それは、ひとことでいうならば、美術館がファンドレイジングの専門家を欠いていたということである。アメリカの美術館では、ファンドレイジングの専門家や担当部署（渉外担当部署）が置かれていることが多く、そのような専門スタッフが中心となって「ターゲット・ファミリー・デー」のようなプログラムがコーディネートされ、実施されている。また、協賛社たるターゲット社自身がNPGに限らず複数のミュージアムで支援プログラムを展開しており、美術館に対するスポンサーシップについてそれなりのノウハウや経験を積んでいることも推測される。

これを踏まえつつ当時の西美の状況を振り返るならば、教育普及室の日頃の仕事や美術館教育の目的、仕事量を理解し渉外を担当できる職員が美術館組織の中にいれば、ファン・デーに伴って生じたさまざまな負担や不備を回避することができたのではないかと考えられる。お金をもらうということは美術館のステイクホルダーが増えるということであり、仕事が増えるということである。しかしながら、学芸職員が通常業務を抱えながらスポンサー対応を担うのは、率直に言って、過重である。ファン・デーのように1日に数千人が来館する教育プログラムは、スポンサーシップをアピールする機会としてたしかに魅力的であろうけれども、教育プログラムばかりでなく、美術館全体としての協賛企業へのリターンもある程度メニュー化していく必要があったはずである。協賛企業に対し、展覧会関連事業として誰に対して何ができるのか、教育プログラムとして誰に対して何ができるのかを現実的に検討することなく資金提供を受けることはスポンサーに対する礼を失することにもなり、継続的なスポンサーシップ（外部資金、自力での資金獲得、寄付）の獲得を難しくすると思われる。

おわりに

2016年の国立西洋美術館本館の世界遺産登録に伴う混雑を回避するため、同年以降、ファン・デーは行われていない。担当者が2017年3月に西美を離れたこともファン・デー終了の一因となったが、当初の目的は果たされたように思う。毎回の参加者のアンケートもおおむね好評であった。ただし、共催展と共催展の合間を縫って実施日時を決めていたため、開催時期が一定しなかったことはプログラムの周知やリピーター確保には大きなマイナスであった。企画展の準備とファン・デーの準備を並行して進めるのは担当者にとっては多少負担ではあったが、それでも、賑やかな雰囲気の中で、多くの人にコレクションやプログラムを知ってもらえる2日間はなかなか楽しかった。

美術館を離れた現在、大学生と日々接する中で痛感するのが、美術館の展覧会はよく知られているけれども教育活動は一般の人には遠いものであり、あまり知られていないという現実である。多くの学生が「美術館は行きにくい、敷居が高い」と言う一方で、子どもの頃から美術館のワークショップに通いながら育った学生もいる。美術館教育プログラムは、リピーターはよく知っているが、そうでない人にはあまり認識されていないというのが美術館の外に出て改めて得た実感である。この現実に鑑みると、1年に一度、ふだんの教育活動をまとめて紹介する機会はあってよく、コロナが終息したあと、もう一度そのような機会を設けてみるのも、発信方法としてよいのかもしれない。

国立西洋美術館ファミリープログラム「どようびじゅつ」についての考察

酒井敦子

はじめに

2005年（2004年度）に始まった国立西洋美術館ファミリープログラム「どようびじゅつ」は、開始以来継続的に、さまざまなテーマで組まれた30種類、合計275回が実施されてきた（2021年5月現在）。詳しい内容については、『国立西洋美術館教育活動の記録 1959–2012』、本書第1部（pp. 50–55）、及び4年ごとに作成されている『国立西洋美術館ボランティア活動報告書』をご覧いただきたい。本稿では、企画・運営に携わる担当者の視点でこれまでの実践を振り返り、その特徴、成果について言及する。また、既存のファミリープログラム研究を参照しつつ、本プログラムの課題や今後の展望について考察する。

1. これまでの実践を振り返って

今まで行ってきた「どようびじゅつ」を概観し、企画意図や想定した参加者の学び、体験、そして運営をどのように行ってきたかをまとめると共に、参加者によるアンケートなどのデータを参照しながら、その成果について述べる。

（1）テーマ設定とプログラム構成

本プログラムは、子どもと保護者がいっしょに楽しめるテーマを設定し、当館の所蔵作品を紹介してきた。そのテーマは、①顔の表情、手の動きなどから「作品に表わされた人物の気持ちを自身の経験と照らし合わせて考える」[1]、②犬などの動物、人物のまとっている服、光や色など、「描かれているものの中から、参加者にとって身近なものを入り口に作品にアプローチする」[2]、③かるた、なぞなぞ、暑中見舞い、旅など、「参加者にとってなじみのある遊びや行為を通じて作品を見ていく」[3]、④「多様な表現や技法に着目しプログラム内の創作活動と結び付けて理解、解釈を促す」[4]、などに大別できる。その他、探検するように当館の建築を見て回ったり[5]、作品から音を想像したり[6]、絵画の額縁に注目してコレクションを見たり[7]と多種多様なテーマで実施されてきた。どれも参加者の日常やそれまでの経験とのつながりを意識したもので、そのあり方は、1995年よりさまざまなテーマで所蔵作品を紹介してきた小企画「ファン・ウィズ・コレクション」[8]の延長線上にある。

1回2時間のプログラムは、目の前にある作品をじっくり鑑賞することに加え、ゲーム、創作、時には身体表現など多様なアクティビティが含まれ、「見る」「触る」「考える」「表現する」など幅広い体験を通じて作品との関わりを深めていくことを心掛けている。これらのさまざまな体験を、ただ順を追って行うのではなく、相互のつながり、全体の流れを意識しながらプログラムを組み立ててきた。参加者の既存の知識や経験、プログラム内の体験との連続性の重視、さまざまな体験を取り込むことについては、ジョン・デューイの提唱する「経験による学び」[9]や、学習者が自分の持っている経験や知識を能動的に再構築し意味を生成するという構成主義的な学習理論[10]、そして、人間の知能は単一ではなく多元的だというハワード・ガードナーの多重知能[11]などに依拠している。

本書 pp. 53, 54に記載した、事後のアンケート調査を見ると、参加者のプログラムへの感想（大人）では、「楽しみ方が増えた」「考えたことのない視点で見ることができて楽しかった」といった、テーマを入口に作品を見ることへの好意的な意見があった。また、プログラムの構成についても「（鑑賞、制作の時間があって）めりはりがあってよかった。」「より理解が深まった。」との意見もあり、さまざまなアクティビティを組み合わせることの効果も窺える。子供に向けたアンケートでは、何が楽しかったかを尋ねたところ、6割が「（鑑賞、制作なども含め）全部」と答えている。

（2）対象について：6歳〜9歳とその保護者

1990年代〜2000年代に当館で実施されていた子供向けのプログラムは、5年生以上を対象としたものが多かったため、「どようびじゅつ」は保護者同伴の低年齢の参加枠として始まった。小学校高学年対象のプログラムにおいては参加者がなかなか集まらないことがあったが、6歳〜9歳を対象とする「どようびじゅつ」に関しては、申し込みを開始するとすぐに定員に達する。その要因としては、高学年に比べると比較的この年代は家族との時間がとりやすいことや、毎年定期的に実施することで本プログラムの情報が浸透していることなどが予想される。少なくとも、「どようびじゅつ」が対象としている6歳〜9歳において家族参加プログラムの需要があることは、これまでの実績から言えることである。子どもの年齢に配慮した内容に努めているが、2012年までのアンケート結果では参加者の子どものうち94％が[12]、本書に掲載した2018年度〜2019年度の集計でも91％が「楽しい」と答えており[13]、概ね受け入れられているようだ。

本プログラムでは、大人は付き添いではなく子どもと共に参加者である。博物館教育研究者の大髙幸は、家族内教育とは「子どもも大人を教育し、兄弟姉妹、夫婦間も教育しあっている」という見地に立ち、2005年〜2006年に行ったニューヨーク市内の3美術館の家族プログラム参加者を対象に行った調査から、「大人は、さまざまな教育機会のうち、学校教育を最重視」し、「教育において“大人が子どもを教育する”側面に認識が偏って」おり、「会話などのふれあいの過程が重要であるという認識が薄い」と3つの問題点を指摘している。その上で、「必要な新しい教育モデルは民主的な家族内教育である」と説き、競争ではなく共感の醸成に寄与する家族間の対話の重要性を述べている[14]。「どようびじゅつ」においては、創作の時間は大人にも子どもの参加者と同じ材料が用意され、それぞれが制作し、工夫した点などを発表して、大人も子どもも自身の制作の意図を他の参加者と共有する。この

ように大人にも能動的な参加を働きかけ、家族内、そして他の参加家族とのコミュニケーションを促すことを心掛けている。

参加者アンケートを見る限り、大人の回答の中には自分自身の学び、喜び、発見に関する感想が34%を占め、一定数、大人も参加者として学びがあったことが見てとれる[15]。上述した本書掲載のアンケート分析でも、概ねの感想において大人自身がどう感じたか、どのようなことを学んだかが語られ、「子どもの視点を知ることができた」、「家族で参加できてよかった」など、家族でのコミュニケーションについても触れられていた[16]。また、「いろいろなお子さん達の視点が知れてよかった」といった他家族の参加者についてのコメントも一定数あった。しかし、元当館教育普及職員の阿部祐子が行った「どようびじゅつ」に関する調査では異なる結果が出ている。プログラムに参加して5年後、インタビュー調査を行った12家族の大人は総じて「どようびじゅつ」を子ども向けのプログラムと認識しており、阿部は、広報などを工夫し、大人にもプログラムの意義を理解してもらうことを提案している[17]。時が経って記憶が他館などでのプログラムと混同していることもあり得るが、この点においては、引き続き留意しながらプログラムの組み立て、実施をしていきたい。

(3) ボランティア・スタッフによるプログラム企画及び実施

プログラムの企画からボランティア・スタッフの有志が関わることも本プログラムの特徴の一つである。ボランティア・スタッフの中から企画に携わる有志を募集し、2〜5人ほどが定期的に打ち合わせに参加して、教育普及室職員と共に準備を進めている。テーマの選定から始まり、動線なども考慮しながらの作品選び、プログラム中に配布する印刷物の作成、ゲームや創作などのさまざまなアクティビティの検討、全12回のシフト作成に至るまで、企画担当のボランティア・スタッフは教育普及室職員と方向性を確認しながら行う。その過程でボランティア・スタッフは、創作のための材料を探したり、家族や知人に検討中の企画を試してみたりと、打ち合わせ以外の時間も準備に費やしている。

約15年もの間、時には過去に行ったプログラムを再度行うこともあったが、概ね新しい企画を作り続けてきたのは、ボランティア・スタッフという当館の教育活動の目的を共有しつつも、さまざまな経験、視点を持ち込む存在が企画に加わったからだと言える。それぞれが得意分野を持ち寄り、そして皆が参加者に楽しんで欲しいという共通の思いを持って作り続けてきたからこそ、さまざまな視点で当館の所蔵作品を紹介するプログラムが生まれた。そして、企画に携わったボランティア・スタッフにとっても、作り上げる過程での試行錯誤は学びの場となっているのではないかと考える。このプログラムの目的を明確に把握することにつながり、当事者意識を持って意欲的に活動している様子が見受けられた。

また、企画に加え、当日の進行を全ボランティア・スタッフが行うことにより、回数を多くできることも大きい。当館のワークショップ室の広さに合わせて定員は15名と少ないが、年間で2種類のプログラムを計24回行っており、回数を多く行うことで一つのプログラムにつき約180名、年間約360名の参加を可能としている。

2. 課題、今後についての考察

本項以降、2021年5月現在の状況に触れつつ、既存のファミリープログラム研究を参照しながら、「どようびじゅつ」の課題と今後の可能性について私見を述べたい。

(1) 体験の拡張とオンライン

2020年に新型コロナウイルス感染症拡大により、世界中の博物館が休館に追い込まれた。1年以上経った現在も、東京においては先行き不透明な状況が続き、展示室でのプログラム実施は難しい状況である。そのような状況下、オンラインによるプログラムの可能性が注目され、実施する館も増えてきた。しかし、これまで作品の前での体験を大切にしてきた美術館にとって、オンライン活用の位置付けについては議論が始まったばかりである。

「どようびじゅつ」では、展示室での切り取られた時間だけでなく、そこに至るまでの参加者の経験とつなげ、プログラム参加後も家族での対話が続くことを願い、お土産として制作物を手渡したり、見た作品の図版と解説を配布したりしている。持ち帰った制作物が事後の参加者の記憶に対して影響を及ぼす点については、阿部の調査結果でも言及されている[18]。他館の実践に目を向けると、アーティゾン美術館のファミリープログラムにおいても、「プログラムの体験を“展示室での120分”の外側に、時間的にも空間的にも拡張する工夫」がなされ、事後だけではなく、事前にも申込をした時点からプログラム参加が始まるような働きかけがなされている[19]。時間的広がりの中で美術館体験を改めて考えると、オンラインプログラムは、展示室で行われるプログラムの代わりではなく、展示室での体験だけにとどまらないその広がりのどこか別の時点、すなわち来館の事前、もしくは事後の活動としても位置付けられるのだと改めて思う。

幼児期からの美術鑑賞教育について研究する林有維は、子連れの親子に向けて、「アクティブ・アート・ラーニング」という取り組みを行っている。その中では、ミュージアムでの鑑賞活動「ミュージアムツアー」に先駆けて、地区会館などで複製画などを用いた鑑賞とアートと制作を組み合わせた活動「アートブッククラブ」を実施している。林は自身が参加者に行ったアンケートから、子連れの親にとって美術館は「他の鑑賞者や美術館へ迷惑をかけないように緊張する場」という印象があるとし、親子両方の不安を払拭するために「アートブッククラブ」を企画するに至ったという。林によれば、「アートブッククラブ」を体験した参加者は概ねスムーズに「ミュージアムツアー」にも参加したという[20]。オンラインの活用は、「アートブッククラブ」のような役割を果たすのかも知れない。たとえ新型コロナウイルス感染症の拡大が収束した後であっても、子連れで美術館を訪れることに障壁を感じる人たちに新たな場を提供できる可能性を秘めている。その検証は、今後の実践及び調査で行っていきたい。

(2) 参加家族についての考察

2018年〜2019年のどようびじゅつ参加者の事後アンケート集計によると、6割が東京23区からで、23区以外、埼玉、千葉、神奈川の近隣からの参加者を加えると9割を超える。子連れでの移動を考えれば納得の結果であるが、今後、オンラインを活用したプログラムが実施されれば、近隣以外にも家族プログラムを届けることができるのかもしれない。一方、オンラインが全て解決できるわけではなく、デジタル環境が揃わないなど、その対象から外れてしまう人もいることを念頭に置く必要がある。

大髙は、前述した米国での調査に加え、アーティゾン美術館でもインタビュー調査を行った。この二つの調査で家族の状況には

共通のパターンがあり、これらは首都圏にある美術館の家族プログラム参加家族に概ね共通するだろうと推定している[21]。教育熱心で、日頃から文化芸術経験を享受しているという大髙が抽出したパターンは、「どようびじゅつ」終了直後のアンケート結果からは直接的には分からないが、子どもと出かける頻度の高さや、その出かけ先に博物館も含まれる家族もいることから[22]、おそらく本プログラム参加家族にも該当するものと思われる。

「どようびじゅつ」は、参加費無料で、事前申込制ではあるが、誰もが申し込みできるよう、当館ホームページやチラシで告知し、これまではFAXで申し込みを受け付けてきた。しかし、参加する側にとっては地域的な制約があることに加え、すぐに定員になってしまう本プログラムに参加できるのは、子供の教育にアンテナを張っている熱心な親がいて、申し込みの「競争」を勝ち得た家族に限定されることを、担当者として自覚すべきである。こうして考えると、当館で実施された「ファン・デー」、「美術館でクリスマス」、その中で行われる「ボランティアート」など、誰もが参加できる申込不要のプログラムの意義も見えてくる。更には、プログラムの情報すら届いていない家族がいること、そして貧困や教育格差などの家族を取り巻く問題、そして家族と一言で言ってもその形は多様化しているということにも目を向ける必要があるだろう。その上で、申し込み及び実施方法について検討の余地があると考える。

おわりに

本稿を執筆するにあたり、改めてこれまでの「どようびじゅつ」を振り返る機会を得た。前任の教育普及室職員、これまで携わってきたボランティア・スタッフによる蓄積の重みを感じると共に、大髙の言う「民主的な家族内教育」を目指す時、ファミリープログラムの方法は、さまざまな可能性があることを改めて思う。「どようびじゅつ」のこれまでの成果を生かし、今後もボランティア・スタッフと協働しながらも、多角的な視点で絶えず検証し、よりよいプログラム実践に努めていきたい。

註

1 「ごきげんいかが ?」(2006年)、「セイビでハンズ」(2011〜2012年)、「コロロでコラージュ」(2019年)など。

2 「美術館でアニマル・ウォッチング」(2007年度)、「ワン・だふる・びじゅつかん」(2008〜2009年度)、「ハッと発見 !」(2010年度)、「色のフシギ」(2010年度)、「セイビ・パレット」(2015年度)、「あかるいところ　くらいところ」(2016年度)など。

3 「暑中お見舞い申し上げます」(2005年度)、「なぞ★謎★びじゅつかん」(2006年度)、「アートでカルタ」(2007〜2008年度)、「ボン・ボヤージュ!」(2019〜2020年度)。

4 「おもいでの風景」(2004年度)、「キラキラ色のヒミツ」(2005年度)、「? どうやって描いたの ?」(2009年度)、「しゅっぱつ ! アート・ツアー」(2011年度)、「アートでノリノリ♪ ♪」(2012年度)、「虫めがねで探してみよう ! 見てみよう !」(2014年度)、「コネコネ・ペッタン ! ねんどで遊ぼう !」(2017年度)など。

5 「セイビのたてもの再発見 !」(2009年度)。

6 「ホントはにぎやか ? びじゅつかん !」(2018年度)。

7 「わくわく☆わ〜く!!」(2017〜2018年度)。

8 小企画「ファン・ウィズ・コレクション」では、さまざまな視点で所蔵作品を紹介してきた。詳細については『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』pp. 86–114参照。

9 ジョン・デューイ(市村尚久訳)『経験と教育』講談社、2004年。

10 構成主義教育はジョン・デューイ、ジャン・ピアジェ、レフ・ヴィゴツキーらの理論を源に持つ考えで、博物館教育学者ジョージ・E・ハインは、博物館は構成主義教育の場であると主張した。ジョージ・E・ハイン(鷹野光行監訳)『博物館で学ぶ』同成社、2010年。

11 ガードナーは、言語的知能、論理数学的知能、音楽的知能、身体運動的知能、空間的知能、対人的知能、内省的知能、博物的知能などの知能が、個々人によって異なる形で重なり合ったものだと提唱した。ハワード・ガードナー(松村暢隆訳)『MI: 個性を生かす多重知能の理論』新曜社、2001年。

12 国立西洋美術館『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』2015年、p. 74.

13 本書、p. 53.

14 大髙幸「家族のためのミュージアム・リテラシーとは：ニューヨーク市内③美術館の家族プログラムと参加家族の日常生活の研究から」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』第14号、2010年、pp. 19–28.

大髙は、家族プログラムについて次の3種の機会を提供することを提案している。①大人が家族内教育の重要性を認識できるような機会、②家族の構成員が対話する機会、③異なる家族同士が学び合う機会。

15 国立西洋美術館、前掲書、2015年、pp. 74–76.

16 本書、pp. 53, 54.

17 阿部祐子「国立西洋美術館の家族プログラムの意義に関する一考察 ―「どようびじゅつ」の分析から」『国立西洋美術館研究紀要』No. 22、国立西洋美術館、2018年、pp. 43–59.

阿部は、2012年度に実施された「セイビでハンズ」に参加したうちの12家族に、本プログラムがどのような経験として残っているかを探るため、2017年に電話インタビューによる追跡調査を行った。

18 阿部祐子、前掲論文、p. 56.

阿部の調査によれば、プログラム中に制作したモノが家に飾られることによる記憶の相関関係が示唆され、プログラム後も家族の絆を強め、会話を継続することに寄与する触媒として、絵葉書や図版などを参加者に渡すことが提案されている。

19 貝塚健「重層的な記録からたどるファミリープログラム」『美術館と家族：ファミリープログラムの記録と考察』石橋財団アーティゾン美術館、2020年、p. 224.

20 林有維「美術鑑賞におけるファミリー・アートプログラムの必要性〜アクティブ・アート・ラーニング(AAL)を通して〜」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究起用』第24号、2020年、pp. 49–57.

21 大髙幸「美術館家族プログラムのこれまでとこれから」『美術館と家族：ファミリープログラムの記録と考察』石橋財団アーティゾン美術館、2020年、p. 199.

大髙によれば、アーティゾン美術館での調査にから、参加家族について「ブリヂストン美術館ファミリープログラムの参加の回数の多寡(1〜30回)に関わらず、親は子の教育に熱心で、家族内の各自の課題(仕事、家事、学業等)に加え、家族共通・個人の様々な趣味やイベント等により、家族が多忙であること、国際的な交流、海外留学・居住・旅行等経験に基づく多様な価値観を認識していること、博物館(美術館を含む)等訪問・プログラム参加等、豊富な文化芸術経験を享受し、それらとの関連経験も継続していること、ブリヂストン美術館ファミリープログラム参加は、家族の豊富な文化芸術経験の一要素であること、自宅には豊富な文化的事物(cultural objects)を有し、日常的に文化芸術を享受していること、子として参加した者は複数の継続的な習いごとや部活経験があり、ポピュラー・カルチャーを日常的に享受していること」とパターンを抽出し、アメリカでの調査結果と共通しているとした。

22 本書、p. 52.

親子で出かける頻度は「毎週」が54%、月に2、3回が39%であり、その出かけ先も、本プログラム終了時のアンケートであるためバイアスが考えられるが「公園」についで「博物館」が挙がっている。

鑑賞用教材「びじゅつーる」— その制作と運用を振り返る

寺島洋子

国立西洋美術館（以下、西美）には、大人と子ども（6歳〜10歳）が一緒に常設展を楽しむための「びじゅつーる」という美術作品の鑑賞を補助するツール（教材）がある。これは、2002年から開発が始まり、その後、制作と改善を繰り返し、2010年までに8種類のツール：「モネ」「ドニ」「ロダン」「絵をめぐる本」「わたしのしるし」「みるっとバッグ」「かるたブック」「音のかくれんぼ」が制作された。これらのツールについては、『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』5章及び、本書第1部1章4項「鑑賞教材」に、写真と共に簡単に紹介している。ここでは、「びじゅつーる」制作と運用の概要を振り返り、その成果と課題について考察する。

1. ツール制作

（1）始まり

現在、日本の美術館には、来館者の鑑賞を補助する多様な教材がある。館内で利用される教材の中で、最も一般的なものはセルフガイドやワークシートといった印刷物であるが、1990年代に入ると、立体物である道具や作品に使われている素材などを含むツールが制作されるようになってきた[1]。ツールは、展示室に特別なハンズ・オン・コーナーとして設置されることもあれば、来館者に貸し出されることもある。文字による情報とは異なり、ツールには、直接触れることができるモノを通して五感を刺激し、遊びの要素を含んだアクティビティによって、利用者の感情や思考に働きかけ、意義深い多様な学びを誘発する力がある。

筆者が、子どもを対象にした貸し出しツールに興味を持ったのは、在外研修で1999年から2000年にかけてアメリカのワシントンDCに滞在していた時である。博物館教育の先進国であるアメリカでは、すでに多くのツールが利用されていた。複数のツールをバックパックにセットしたもの、一つのツールを小袋に入れたものなど、貸し出すときの数や形態もさまざまであった。触れることのできない作品や資料に囲まれた幼い子どもたちが、保護者と一緒にこれらのツールを使いながら、飽きずに美術館を楽しんでいる姿を実見して、当時、未就学児を対象とする教材がなかった西美でも、大人と子どもが一緒に楽しめる貸し出しツールをいつか制作しようと思ったのである。

（2）インターンの課題として

ツール制作が実現したのは、2002年に当館でインターンシップを開始してからである。広く浅く美術館の機能や活動を体験する学芸員資格取得のための実習とは異なり、専門性を重視する西美のインターンシップでは、既存プログラムのサポートで現場経験を積むだけでなく、インターンの自主性を尊重した活動を一から体験することが望ましいと考え、大人と子どもが一緒に使えるツールの制作を課題としたのである。「びじゅつーる」という名称は、初代インターンによって命名された。

しかし、毎年、新しいツールを制作したわけではなく、2002年に「モネ」「ドニ」「ロダン」を、2003年に「絵をめぐる本」「わたしのしるし」「みるっとバッグ」「かるたブック」を、2010年に「音のかくれんぼ」をそれぞれ開発し、それ以外の年のインターンによってツールの改善が行われて現在の形になっているのである。また、既存のツールの改善以外にも、印刷物教材の制作や各種調査（ギャラリートーク、ジュニア・パスポート、高齢者プログラム）などをインターンの課題とした年もあった。それらの活動は、各年度のインターンによって「インターン活動報告書」にまとめられている[2]。

（3）ツールの制作

インターンによるツール制作で重要な役割を果たしたのは、教育普及室の職員であった藤田千織氏（現東京国立博物館教育普及室室長）である。藤田氏は、西美の作品を基にしたツール制作の経験があり、制作指導の適任者だった[3]。彼女の指導の下、セルフガイドやワークシートといった印刷物さえ作ったことのないインターンと最初に行ったのは、教育活動や教材制作の基本となる理論、知識、事例などを共有することだった。そこで、文献講読、教材の評価体験、他館のツールを実見するなどの事前準備をしてから制作に着手した。個々のツール制作の試行錯誤については、「インターン活動報告書」にその詳細を記録しているので、ここではすべてのツールに共通する基本となる制作手順をまとめる。

①前提となる条件の提示

ツールを制作するうえで前提となる条件を、毎回最初に提示した。例えば、「モネ」「ドニ」「ロダン」は、当時開催されていた小企画展「手と心 — モネ、ドニ、ロダン」[4]で、「絵をめぐる本」「わたしのしるし」「みるっとバッグ」「かるたブック」は、西美が所蔵する18世紀以前の絵画作品で、また「音のかくれんぼ」は、19世紀以降の作品で、それぞれ使うことが前提条件となっていた。

②ツールの評価基準の設定

次に、前提条件を踏まえて、ツールの目標、対象、内容、デザインを定義する。これらは有効なツールを制作するための基本的な要素で、制作途中で迷いが生じた時や、試作品を評価・検証する際に立ち返る基準となるので必ず明記するようにした。

③試作品の作成と利用者調査

評価基準に沿って、対象となる作品を選び、ツールで行う具体的な活動を検討しながら試作品を作成する。試作品は必ず利用者調査にかけて制作途中評価を行った。調査方法は、利用者がツールを使用している様子の観察と事後アンケートである。

④改善と再調査

調査結果の分析から問題点を抽出し、試作品を改善する。それを再度調査にかけて改善点の有効性を確認し、最終的な提案をして終了となる。

以上がツール制作で基本となる一連の作業で、いずれのツールもこの手順に沿って行い、必ず2名以上のインターンが協力して一つのツールを制作するようにした。

2. ツールの運用

(1) 貸出の時期と場所

当初は、インターンシップ期間の限定された日時に、インターンが貸し出しを行ったが、2005年以降はボランティア・スタッフが、春と秋の各3ヶ月(合計6ヶ月／年)、各月の第2・4土曜日の10：00～17：00に定期的に貸し出すようになった。また、2010年からは、児童・生徒の来館が多くなる夏期へと貸出時期は変更され、さらに美術館を無料開放する「ファン・デー」プログラムの一環としても貸し出された。しかし、2016年の本館の世界遺産登録を機に、貸し出しは中止されている。

「びじゅつーる」は常設展示室で使用するので、当初は展示室の入口付近にデスクを用意して貸し出しを行っていたが、後にツールを使用する作品に近い場所へ移すと同時に、貸し出す場所も2ヶ所に増やし、さらに貸出と返却場所を分けるなどして利便性を図るようにした。

(2) 貸出手順

貸出用のデスクを用意して、ツールを借りにやって来る親子に、見本のツールを使い内容や使い方を簡単に説明する。借りたいツールが決まった親子には館内ルールを確認してもらい、連絡がとれる携帯電話の番号と引き換えにツールを貸し出す。貸出・返却の時間を記録して、ツールが返却されたら状態を確認して破損があれば記録して修理にまわし、ツールにセットしておいたワークシートなどが不足していれば補充して貸し出す前の状態に戻す。これを一連の手順として貸出を行った。

(3) アフターケア

貸出手順の最後に行う破損したツールの修理や汚れたツールのクリーニングは基本となるケアである。それとは別に、展示替えによるツールの部分的な修正や、貸出を行ってみてわかる利用頻度の高いツールを増産するといった大掛かりなケアも必要に応じて随時実施した。

3. 成果と課題

(1) 鑑賞の間口を広げる

未就学児を対象とする教材を作ったことで、西美の利用者の裾野が広がったかと言えば、残念ながら人数という点ではそれほどの効果はなかったかもしれない。しかし、「びじゅつーる」によって、鑑賞の間口を広げることに貢献したと言うことはできるであろう。例えば、「ロダン」ツールのロダン人形は、子どもたちに人気があり、人形に彫刻と同じポーズを取らせるために、熱心に彫刻に見入る子どもたちの姿を確認することができた。また、かるた遊びになぞらえた「かるたブック」を使うことで、「分からない」「暗い」などの理由から敬遠されがちな古い時代の絵画作品を、子どもたちは自分なりに自由に解釈して、面白い読み札をたくさん書いてくれた。このように、「びじゅつーる」によって、さまざまな鑑賞の入口を提供することができたのである。さらに、一部のツールは、「どようびじゅつ」や「スクール・ギャラリートーク」でも活用されたことで、西美の鑑賞活動に資することとなった。

(2) 運用を踏まえたツール制作の課題

ツール自体の完成度は、インターンの柔軟な発想と努力によって一定の水準を満たすことができたと考えている。しかし、実際に貸出を始めると、ツールが正しく、効果的に使われるかどうかは、その運用によっても大きく左右されることを実感した。反省点としてあげられるのは、ツールの貸出は親子が来館しやすい時期と時間帯に設定すること、貸出デスクはなるべくツールを使う作品に近い場所に設置すること、貸し出すツールの種類は子どもが迷わない適切な数になるよう配慮することなどである。また、改善しようのない物理的な問題や美術館全体の運用に左右されることもあった。例えば、一筆書きの動線となる展示室では、ツールを返却するためには動線を逆行するか、一周してからデスクに戻るという不便さが生じたり、展示替えによって突然ツールを修正しなければならなくなることがあった。そして、貸出の担当者は、ツールの目的や内容を十分に理解しておくことと、借りに来た親子への親切で臨機応変な対応が求められる。この点については、西美のボランティア・スタッフは優秀で、運用面では助けられることが多かった。

以上のことからも分かるように、ツールを効果的に利用してもらうためには、運用も視野に入れて制作することが肝要であり、それは今後のツール制作の課題と言えよう。

4. おわりに

ツール制作を思い立ってから、多くのインターンと共に「びじゅつーる」の制作と改善を繰り返し行ってきた。その作業を通して、良いツールは、良い玩具と似ている点があると思うようになった。筆者が考える良い玩具とは、使うたびに異なる結果がもたらされ、また、結果は使う人に応じて変わるものである。つまり、良いツールとは、飽きることなく何度でも使えて、子どもだけでなく大人でも使うことができるツールである。そんなツールを目指して、今後の「びじゅつーる」を展開してくれることを願っている。

註

1 目黒区美術館の画材、木、紙、金属などの素材をテーマに、キャスター付きの木製の箱に引き出しが縦一列に収納された「画材と素材の引き出し博物館」や、セゾン美術館(1999年閉館)が小学校教員と共同開発した貸し出し用教材ツール「あそびじゅつ」などは先駆的な事例である。

2 2002年に制作した「モネ」「ドニ」「ロダン」のツールについては、一連の活動と2003年のインターンによる改善調査までを『国立西洋美術館研究紀要』No. 9で報告している。紀要と「インターン活動報告書」は、当館の情報資料室で閲覧可能である。

3 藤田氏は、ニューヨークのBank Street College of Educationで博物館教育の修士課程在学中に、西美の作品を基にしたツール制作を行っている。

4 『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』pp. 96, 97参照。

国立西洋美術館スクール・プログラム　成り立ちから現在まで

松尾由子

はじめに

美術館にとって学校は重要な利用団体であるだけでなく、学校教育の支援は美術館の事業の一つである[1]。1959年に開館した当館と学校との関りが深くなったのは、1995年に始まる「子どものための美術展」におけるさまざまな取り組みからである。2000年代にはそれらをもとにスクール・プログラムが展開し、2021年現在、児童生徒（以下、子ども）向けには、常設展を利用した対話型のスクール・ギャラリートーク、大人数の団体に向けたオリエンテーション、キャリア教育に対応する職場訪問を実施している。教員向けには美術館の利用や鑑賞教育に関する研修、企画展における「先生のための鑑賞プログラム」、版画作品をじっくりと観る作品熟覧プログラムなどもある。

本稿の目的は、学校教育のさまざまな変化とともに当館のスクール・プログラムを振り返り、その特徴を考察することである。なお筆者は2018年度に当館へ着任したため、今回振り返るプログラムの現場のすべてに居合わせたわけではない。そのため執筆にあたっては『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』をはじめとする既出の刊行物や当時のさまざまな記録を参照し、当館初の教育普及専門の研究員であり前教育普及室長の寺島洋子氏にご協力いただいた。

1. 1990年代　スクール・プログラムのはじまり

1990年代に学校の美術教育を取り巻く環境は大きく変わりつつあった。まず1989年改定の学習指導要領においては、それまで表現活動と付随・付帯して行うとされてきた「鑑賞」の授業が、小学校高学年では独立して行うことが求められた。それにより、子どもが互いの作品を鑑賞する授業とは異なる、新たな対応が必要となった。加えて、生涯学習振興の流れや、1992年から段階的に実施された学校週5日制とそれに伴う授業時数の削減も重なり、学校からは、図工・美術科の存続に対する危機感や、美術館に学校の図工・美術の授業が奪われるのではないかという不安の声が上がっていた。また一方で、両者の連携による相乗効果を期待する向きもあった[2]。

学校や社会における変化と共に、この時期美術館においても教育活動への関心が高まり、各地の美術館においてさまざまな美術館教育の取り組みが展開された。その実践は美術館関係者の間だけで取り上げられるというよりは、学校における美術教育の在り方の変化の中で、学校関係者の関心を引きつけながら形成されていった[3]。例えば1991年よりセゾン美術館において実施されたプロジェクト「あそびじゅつ」では、学芸員、東京都小学校図画工作科の教員からなる東京都図画工作研究会（以下、都図研）、デザイナーらによるチームが組まれ、学校と美術館の両方で作品を鑑賞するプログラムが行われた[4]。

当館においては1994年に教育普及専門の研究員が初めて配置されて以来、教員との協働や学校教育への取り組みが開始されることとなる。1995年より始まる「子どものための美術展」において、第1回目の「描かれたふしぎな世界を旅する」、翌1996年の「どうして像はつくられたの？」、続く1997年の「ものがたりの森」での展覧会や関連プログラムで、さまざまな方法で学校とのつながりが形作られてきた。

教員との協同作業としては、展示に際して客員研究員の佐藤厚子氏を介して都図研へ協力を依頼し[5]、子どもの興味・関心をひきつける工夫を凝らしたことが挙げられる。また、展示を活用する授業案を載せたティーチャーズガイドの作成を都図研に依頼し、近郊の小学校に無料配布した。さらに、学校教員を対象とした内覧会を開催して展覧会の周知を図っている。会期中のプログラムとしては、学校の団体で来館した子どもに向けたスクール・ギャラリートークを実施し、学校教員に向けてアンケート調査を行った。これらの取り組みからは、当館にとって学校は、単に展示やプログラムを提供する対象ではなく、子どものよりよい美術館体験や鑑賞体験のために協働するパートナーとして捉えられていたと言えるだろう。

また「子どものための美術展」の開催の趣旨には、現在のスクール・プログラムに通底する価値観を見いだすことができる。それは、鑑賞者自身が作品をよく見て多様な心の動きを味わい、作品に新たな価値を見いだすということ、そして美術館で歓迎されていると感じることができるということである。第1回目の展覧会の企画書には「美術作品にはさまざまな鑑賞の方法があり、また年齢や経験によって同一の作品でも異なる印象、イメージをもつものである。それゆえ幼年期における美術作品との出会いは、その後の出会いにも増して重要なものと思われる。」「描かれている事物、主題、描き方等に対して共感、反発、疑問などさまざまな反応が引き出されるように、また、当館の所蔵作品の紹介の意味も含め、作品は画題、様式もさまざまなものを取り上げる。」と記されている。展覧会を鑑賞した子どもの感想には「子どものためのてんじだったのでとても分かりやすく、マンガのセル画、さわっていい絵などがありとても楽しかったです。《中略》いつものてんじは大人のだから絵を見るだけでなんとなく終わってしまうけど、私たちが主役（子どものため）なのでとてもよく見たし、分かり易かったので楽しかったです。」とある。展示に際して都図研の協力を得たことは先に記したとおりであるが、企画段階において研究員が子どもと共に所蔵作品カタログを見ながら、複数のインタビューを行い、子どもの経験、興味、関心などを踏まえて作品選定を行っていたことも、特記すべき取り組みであろう。このように、「子どものための美術展」においては、美術史の流れや作品の情報を鑑賞者が理解するというよりは、鑑賞者が自分の経験や関心に基づい

て自由に楽しむことを志向されてきた。

2. 2000年代　スクール・プログラムの広がり

ここまで初期の「子どものための美術展」における学校との関わりを見てきたが、1998年4月に2年間に及ぶ企画展示館増築と本館耐震改修の工事が終了し、2001年に国立美術館が「独立行政法人国立美術館」へ移行することなどを経て、教育普及活動が本格的に拡大する。まず2001年より、学校の教員を対象として、展覧会を周知し学校での美術館活用を考えてもらうことを目的に、無料観覧と展覧会概要のレクチャーを行う「先生のための鑑賞プログラム」が開始された。「子どもための美術展」における都図研との連携は3年間でひと区切りとなったが、2003年からは都図研や市区の図工・美術研究会などの依頼による研修が新たに始まる。スクール・ギャラリートークは、「子どものための美術展」が「ファン・ウィズ・コレクション」と改名された後も職員により継続され、2005年からは「ファン・ウィズ・コレクション」から独立して常設展を対象に実施する通年のプログラムとなる。

以下にスクール・ギャラリートークと都図研との共同研修を取り上げ、その内容や経過を振り返る。

3. スクール・ギャラリートーク

1995年の「描かれたふしぎな世界を旅する」から始まったスクール・ギャラリートークは、参加した教員から好評を得る一方で、常設展示を利用した通年実施への要望が寄せられていた。そこで、2004年にボランティア・コーディネーターを採用し、続いてボランティア・スタッフの採用・研修を行い、2005年より通年でのスクール・ギャラリートークが開始された[6]。

このプログラムは、子どもが10人以下の少人数のグループに分かれ、各グループにボランティア・スタッフがつき、1点の作品に約15分間をかけて3、4点を鑑賞する対話型のギャラリートークである。幼稚園から大学まで多様な学校団体が、図工・美術の授業だけでなく修学旅行や部活動など多様な目的で利用している。

スクール・ギャラリートークの内容は『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』において次のように説明されている。「VTSの手法や学習理論を参考にしながら、鑑賞者である子どもの能動性を重視する対話型のトークを実施している。学校と連携するにあたり、美術作品を楽しんでもらうことを前提としたうえで、観察力、思考力、表現力、コミュニケーション力などを育むといった、学習指導要領の目的を共有しながら、学校とは異なる美術館ならではの体験を提供するように心掛けている。」

この説明を踏まえて、スクール・ギャラリートークの特徴を確認したい。

(1) VTSや学習理論を参考にした、子どもの能動性を重視する対話型のトーク

スクール・ギャラリートークで大切にしているのは、子ども自身が能動的に作品を見ることである。何らかの正解が求められるのではなく、自分の目で作品を見て、それをもとに解釈する。自身の体験や興味・関心に照らした鑑賞は「子どものための美術展」の頃から志向されてきたが、スクール・ギャラリートークにおいてはVTSやさまざまな学習理論をもとに、他者理解やコミュニケーション能力、論理的思考力などを育むことを目指している。

VTS（Visual Thinking Strategies）は、ニューヨーク近代美術館で開発された鑑賞手法で、鑑賞者が「自分が目にしたことや考えたことを発信して、観察力、言語表現力、想像力などを促す鑑賞方法」[7]であり、作品の解説を行うギャラリートークと区別して対話型のギャラリートークと呼ばれている[8]。日本では1995年に水戸芸術館がこの手法を紹介する研修会を開催し、当館の研究員もこの研修会に参加した。当館のスクール・ギャラリートークは、VTSの基本的な理念を共有し子どもの発言を交通整理するファシリテーションを参考にしていると思われる。また、トークを担当するボランティア・スタッフの研修では、VTSの前提となる構成主義の学習観や、博物館教育学者ジョン・H・フォークとリン・D・ディアーキングの提案した来館者の学習体験の概念的枠組みとなる「学習の文脈モデル」などを紹介して、トークの理解を促している。

(2) 学習指導要領の目的の共有

学習指導要領においては、言語による思考力、判断力、表現力といった能力を育むことの重要性が明記されており[9]、それらは「自ら学び自ら考える力などの生きる力の育成」という1998年以来の学習指導要領の理念にもつながるものである。

スクール・ギャラリートークでは「子どもたちは、作品を自由に見て、感じ、そして自分なりの考えや解釈を持つ。それを他者と分かち合うことによって、自分を発見し、自らの世界観を広げていく」[10]ことを目指している。児童生徒が作品を注意深く観察し、感じたことを言葉によって表現し、他の人の発言を聞き、さらに考えるという一連のコミュニケーションは、まさに言語による思考力、判断力、表現力といった能力を育むことにつながるものであり「生きる力の育成」という理念に沿うものと言える。

(3) 美術館ならではの体験

a. 作品を前にした展示室での活動

美術館でなければできない体験と言えば、まず本物の作品からの学びが挙げられる。学校では教科書等を用いて主に教室で学ぶが、美術館では実物を間近にするからこそできる学びがある。

スクール・ギャラリートークでは、作品に近づいたり離れたりしながら作品の印象や見え方が変化することを楽しむことがある。近くから見たときには勢いよく盛り上がる絵具の塊が、距離を空けて遠くから見ると一輪の花に変化して見える。また、彫刻の周りをぐるりと動いて見ることで、角度によってシルエットや光の加減が変わる立体作品のおもしろさに気づいたり、自分の好きな視点を探しだしたりする。自分の体で彫刻と同じポーズをとる際には姿勢の不自然さなどに気づき、見るだけでは分からない造形の特徴を体感する。これらは展示室で作品を前にするからこそ取り入れやすい鑑賞活動である。身体活動などを含めたさまざまな見る方法を体験的に取り入れることで、プログラムの後は見るものを自分で選び、じっくりと鑑賞することを促している。

b. さまざまな人とのコミュニケーション

「博物館はボランティア・スタッフなどにより多様な人々とのコミュニケーションを通して学ぶ機会を提供することができる」[11]。学校では先生が子どもたちに教えるが、美術館では教える側／教わる側という関係とは異なり、ボランティア・スタッフや教育普及室職員は、子どもが作品をじっくり見て自ら言葉を紡ぐことを促し、そ

の言葉を受け止める。

美術館に到着した時、子どもたちは必ずしも鑑賞に適した状態とは限らない。疲れていたり、高揚してふざけていたり、初対面の大人に口を開きづらかったりすることもある。時には障害や他言語など、特別な配慮が必要な場合もある。ボランティア・スタッフは子どもたちとコミュニケーションをとりながら彼らの心が整い作品に向かうように工夫し、まずは学校のことを尋ねて緊張を解きほぐしたり、保護者のような優しいまなざしで発言を引き出したり、注意が続きにくい子どもに自然に寄り添ったりする。その臨機応変な対応には、各ボランティア・スタッフの熱意や、仕事や子育てなどさまざまな経験が生かされている。

子どもたちにとって美術館は、学校生活の一環で連れてこられた場所という一面も確かにあろう。しかしその場所で歓迎され、自分の感想を聞いてもらうことは、彼らの美術館体験に大きく影響するだろう。美術館にとっては、子どもに生涯にわたり美術館を利用してもらう種まきの機会ともいえる。

以上スクール・ギャラリートークの特徴と内容を概観してきたが、最後に近年のスクール・プログラムの利用目的について簡単に触れる。2018年を例に申込用紙や事前の打ち合わせ内容を元にデータを抽出した結果、①小学校の図画工作の授業、②中学校、高等学校の修学旅行などの特別活動、③中学校の部活動での利用が多いことがわかった。

4. 教員研修

スクール・ギャラリートークが安定的継続的に利用されてきた背景には、学校と美術館がコミュニケーションを図りながらお互いの立場、役割、考えを理解しあう場を持ち続けてきたことも挙げられる。次に、教員向けプログラムの例として、異なる機関が互恵的な関係を築く機会として機能してきた教員研修を取り上げ、その成り立ちや展開を振り返る。

スクール・ギャラリートークが通年実施となる以前の2003年、当館では初の試みとして学校の夏休み期間中に教員研修を行った。都図研、東京都中学美術教育研究会（以下、都中美）、武蔵野市立小中学校教育研究会図工・美術部会の3団体からの要望に応えた試験的な開催であった[12]。その後は都図研や都中美との共同研修を続ける他、市区単位の図工・美術研究会への研修等、さまざまな団体からの要望を受けて複数の研修を実施するようになる。2006年からは独立行政法人国立美術館企画の「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」も開始される。

研修が始まった当時の学校は、1998年、2008年の2度の学習指導要領の改定において図工・美術の授業時数が実質的・相対的に減らされる一方で、鑑賞の授業の充実や美術館との連携が強化される状況であった[13]。そのような中で、都図研から継続的な連携を視野に入れた依頼があり、それを受ける形で共同研修が開始された。

この連携の特徴は、学校と美術館が何度も会合を重ねながら子どもの鑑賞を考えてきたことである。各自の業務が終わった夕方から教員と学芸員が集まり、どちらか一方の意見を優先するのではなく、互いの意見を聞き合いながら研修企画を行った[14]。既存の価値観をスタート地点とはせずに、子どもが美術館で本物の作品に出会い鑑賞に至る過程を共に見つめた。その中で、学芸員は学校の教員から要望や意見を聞くことで学校の事情を知り、教員自身も美術館で深い鑑賞を体験するなど、双方に意義のある学びの場を築いてきたことが窺える[15]。

2003年以降2015年まで毎年続けられる中、教員向けの研修だけでなく公開授業も実施され、その内容は年を追うごとに広がりや深まりが見られるようになる。都図研は毎年度活動報告書を刊行し、学校側と美術館側の声を記録している。報告書を基に、内容によって研修を4つの時期に区切り変化を概観したい。

（1）2003年～2005年：相互理解、美術館で子どもの実態を捉える、教員自身の鑑賞体験

最初の3年間の活動での一つの特徴は、教員と学芸員がそれぞれの幼年時代の鑑賞体験を語り合っていることである。個人の原点や実体験を開示し合うことからは、お互いを理解しながら対等な立場で連携を進める姿勢や、実感を伴う体験を起点に鑑賞を見つめようとする姿勢が窺える。2004年からは「子どもの姿を捉えていきたい」という都図研の申し出を受け、休館日の美術館で公開授業を行った。2005年には教師自身が作品画像を見て自由に作文した後展示室でギャラリートークに参加、さらに美術史の作品研究の方法を学ぶなど、教師自身がさまざまな視点で鑑賞を体験している。

（2）2006年～2007年：子どもの動きを言語化、教員と学芸員による対話型のトーク、鑑賞を促す教員の在り方

2006年には鑑賞時の子どもの活動を4つのキーワードによって言語化、整理した。それは「見る（先入観や情報にたよらないで自分の目で見る）」、「感じる・考える（自分なりに見て、感じたことから考えを組み立てる）」、「言葉にする（自分の思いや考えを他者に伝える）」、「聞く（他者の思いや考えを知る・認める）」である。公開授業では教員も学芸員とともに子どもたちにギャラリートークを行うようになり、「作品と子どもの間で教員はどうあるべきか」、「美術館での子どもの体験をどのように学校の授業へ繋げていくか」という視点についても協議されるようになる。

（3）2008年～2010年：さまざまな館との協働、鑑賞方法のバリエーション、対話型鑑賞の手法の検討

連携が始まった当初は当館と都図研が共同で研修を企画していたが、2005年には東京国立近代美術館、2007年からは東京都現代美術館、2010年からは東京都美術館など、複数の館が加わった。これによって鑑賞作品の幅が広がり、作品に触る、素材に注目する、補助ツールを使って見る、展示空間を使うといった鑑賞の方法にバリエーションが生まれるのと同時に、美術館同士でもギャラリートークの目的や手法を検討する場ともなった[16]。公開授業では、さまざまな発言を促すための問いかけが逆に鑑賞の深まりを損なう可能性が指摘されることもあった。

（4）2010年～2015年：表現と鑑賞を結び付けるさまざまな取り組み

対話型鑑賞が教員の間で一定程度周知されてきた次の段階として、美術館での鑑賞を学校での表現の授業につなげる試みがはじまった。学習指導要領に「「B鑑賞」の指導においては「A表現」との関連を図るようにすること」と表記されていることから、美術館で見たものをもとに学校で絵を描く、美術館の作品を学校に飾る、作品を学校へ運び鑑賞・表現を学校で行う、複数回美術館を

訪問する、学校での授業テーマに合わせて美術館で鑑賞するなど、挑戦的な取り組みを続けた。

その後、都図研の美術館連携局の活動休止に伴い本共同研修は一旦幕を閉じたが、学習指導要領に美術館の利用が明記されて以来20年以上が経過し、市区単位の図工・美術研究会からは改めて鑑賞の本質を捉えなおしたいという要望が聞かれるようになった。一方美術館においても、2018年より教員の研修の場として、普段アクリル越しに展示される版画作品を直接熟覧するプログラムが開始された。これまでの流れの中で作品熟覧プログラムを捉えると、作品そのものをよく見るという原点に立ち戻った教員研修の場であると位置付けることもできるだろう。

おわりに

本稿では、当館のスクール・プログラムの展開と特徴を確認してきた。執筆準備中の2020年2月中旬より、新型コロナウイルス感染症拡大によってすべての教育普及プログラムは中止になり、そのまま同年10月より長期工事休館に入った。

休館中にオンラインによるスクール・プログラムをいくつか実施してきたが、その中で感じたのは、オンラインプログラムでは、展示室で本物の作品を鑑賞する醍醐味はないものの、子どもは日常生活の場である学校から、自然体で美術館とつながることができるという利点である。また往復の時間や体力、交通費をかけることなく学校が美術館とつながることができるという特徴もある。そのため、距離と教科を越えて、美術作品のもつ多様な背景や要素と学校のさまざまな教科を結びつけ、国語、歴史、英語などの通常の授業で作品を通した学びが可能になるのではないか。そのためには、所蔵作品の多面的な理解はもちろん、学習指導要領や各種教科書、カリキュラムへの理解や、教員との新しい協働の必要がある。

現在の学校教育においては、一人1台の学習用端末の配布がなされるギガスクール構想の前倒しや、さまざまな教科が協力して行う領域横断型授業の推進が行われている。2017、2018年に改訂された学習指導要領においては、これまで図工・美術の教科内で明記されていた美術館の活用・連携が、学校の教育活動全体を貫く総則欄にも記載された。

新型コロナウイルス感染症の拡大を契機とするさまざまな変化は、これまでの活動にまた一つ、新たな局面を開きつつあると言えるだろう。改めて、本文で確認した当館の在り方が強く思い出される。

- 子ども自身が作品をよく見て解釈することを通じて作品に新たな価値を見いだすこと
- 子どもの学びのためのパートナーとして学校と協働すること

これらは、さまざまな変化の中でも守り続けるべき美術館の姿勢であるように思われる。そしてこれらの姿勢を具体的な形に落とすことで、よりよいスクール・プログラムを形作ることができるだろう。近年は教育普及室職員およびボランティア・スタッフの入れ替えの時期を迎え、学校教員の要望に応える専門知識や技能、ギャラリートークに対する共通理解などの現実的な課題と向き合ってきた。スクール・プログラムは、家庭等の環境によって美術館に来る機会のない子どもたちにも美術館を体験してもらうことのできる大切な機会である。学校と大きな視点で目的を共有し、美術館の資源を用いた学びへの試行錯誤を続けていきたい。

註

1 1951年に制定された博物館法において「学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を援助すること。」と明記されている。

2 「シンポジウムテーマ3 子どもと美術館　学校教育と連携する美術館」『美術館教育普及国際シンポジウム1992』1993年3月、pp. 105–148.

3 大木由以「1990年代における美術館教育の展開 ― 関係団体の活動および学校教育との連携に注目して ―」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』第10号、2016年、pp. 55–75.

4 1994年には伊勢丹美術館の「親子で楽しむ美術の時間」に協力した。

5 佐藤厚子氏は、「あそびじゅつ」にも携わった。

6 60人以上の場合は講堂のオリエンテーションとし、キャリア教育を支援する職場訪問も同年開始し、現在も主に職員が対応している。

7 逢坂恵理子「メイキング・オヴ「なぜ、これがアートなの？」」逢坂恵理子編集『なぜ、これがアートなの？』（展覧会カタログ）水戸芸術館現代美術センター、1999年、pp. 5–7.

8 アメリア・アレナス『Mitel：ティーチャーズキット』木下哲夫訳、淡交社、2005年を参照。

9 2017、2018年改訂学習指導要領の図画工作科における3. 指導計画の作成と内容の取扱いには、「各学年の「A表現」及び「B鑑賞」の指導に当たっては、思考力、判断力、表現力等を育成する観点から、〔共通事項〕に示す事項を視点として、感じたことや思ったこと、考えたことなどを、話したり聞いたり話し合ったりする、言葉で整理するなどの言語活動を充実すること」と明記されている。

10 寺島洋子「国立西洋美術館連携の報告」『2004年度東京都図画工作研究会・研究局＋研修局報告書』2005年3月、p. 6.

11 寺島洋子「学校と博物館」、大髙幸、端山聡子編著『新訂 博物館教育論』一般財団法人 放送大学教育振興会、2016年、pp. 150–166.

12 藤田千織「ヒトとモノの力」『2003年度東京都図画工作研究会・研究局＋研修局報告書』2004年、p. 5.

13 小学校の図画工作では1998年の鑑賞の領域で「地域の美術館などを利用すること」と初めて明記されたが、2008年には「利用したり、連携を図ったりすること」と追加の上改定されている。中学校の美術では1998年以降の鑑賞の領域で「適切かつ十分な授業時数を確保すること」「美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること」と表記されている。

授業時数については、小学校では1998年の学習指導要領において年間70時間の総授業数削減に伴い、図画工作はそれまでの全学年年間70時間が3、4年生は60時間、5、6年生は50時間と大きく削減されたが、2008年の改定において全学年が35～68時間が増加したのに対し図工の授業時数は回復せず、全授業時数に占める図画工作科の授業時数の割合は相対的に減少する。中学校では1989年の学習指導要領では必修科目の美術の授業時数がそれまでの全学年70時間から2年生は70～35時間、3年生は35時間と大幅に削減された後、総授業数が削減された1998年の学習指導要領においては1年生が45時間、2年生が35時間と更なる削減となり、2008年に総授業数が年間35時間増加したが図工と同様美術は回復せず、全授業時数に占める美術の授業時数の割合も相対的に減少した。

14 寺島洋子「国立西洋美術館連携の報告」『2008年度東京都図画工作研究会・研究局＋研修局報告書』2009年3月、p. 17.

15 「トークセッション『鑑賞の夢トーク』記録」（2005年11月以降の作成と推定）、南育子「諸機関との連携（美術館＋都図研）連携鑑賞研修・研究会」2011年を参照。

16 一條彰子「更新し続ける合同研修」『平成22年度東京都図画工作研究会活動報告書』2011年3月、p. 20.

所蔵品を活用したアクセス・プログラム ― 触察とトークの試行錯誤を振り返る

横山佐紀

はじめに

現在、国立西洋美術館（以下、西美）で行われているアクセス・プログラムは、企画展の特別鑑賞会（1年に1回〜2回）と、常設展における学校団体を対象とする対話型ギャラリートークの二つである。前者については、『国立西洋美術館教育活動の記録 1959–2012』pp. 182, 183及び本書pp. 88, 89にこれまでの経緯などがまとめられており、プログラムとしてもある程度の認知は得られているものと思われる。しかし、件数こそ少ないながら、コレクションを使った事実上の「西美のアクセス・プログラム」は、実は後者である。実施にあたっては一般のギャラリートークとは異なる配慮と入念な準備が必要であり、件数の少なさは、むしろプラスに作用しているほどなのだが、これまで学校対応プログラム「スクール・ギャラリートーク（以下、SGT）」の枠の中で行われてきたため「アクセス」として独立して周知されておらず、詳細が記録されてこなかった。

アクセス・プログラムについては筆者が個人的に関心をもっていたこともあって、2011年から2012年にかけて、在外研修でメトロポリタン美術館教育部のアクセス部門に籍を置きながらニューヨークのおもな美術館のプログラムを調査したり、国内ではシンポジウムに参加したり他館のプログラムを見学したり、あるいは個人的に八王子盲学校の研修に参加するなどしてきた。しかし、これらを充分にプログラムに反映させられず、アクセス・プログラムをひとつの独立したカテゴリーとすることのないまま美術館を離れてしまったことには悔いが残る。

ここでは、これまで行われてきたSGTでのアクセス・プログラムについて現時点での記録として、また、今後、「西美のアクセス・プログラム」を確立していくための一つの道すじとして、筆者が担当した武蔵野東小学校（自閉症児）、および盲学校（八王子盲学校、文京盲学校）を事例に、作品選択や学校訪問を中心とする準備、当日の対応や生徒の反応を振り返りながら課題を整理したい。

1. 事前準備：学校訪問、作品選びなど

トークの準備段階において重要なのは、（1）作品選び、（2）館内調整、（3）事前の学校訪問、である。基本コース（作品およびルート）が決まっているSGTとは異なり、アクセス・プログラムの場合は参加者一人ひとりの様子を教員と共有したうえで作品を選び、ルートを決めていく。この綿密な打ち合わせを踏まえて、館内各所との調整を取ることになる。

（1）作品選び

【武蔵野東小学校の場合】

武蔵野東小学校は、学校が夏休みに入った7月に6年生が親子で美術館を訪れる「親子で美術館へ行こう」というプログラムで来館する。美術館をはじめて体験する子どもが多いことや、小学生の集中力の限度を考慮し、トーカーと一緒に見る作品は絵画1点、彫刻1点（30分〜40分間）とした。また、抽象性の高い作品は避け、子どもが関心をもちそうなテーマが表現された作品や、物語のある作品を選択した。たとえば2014年に取り上げた作品は、以下である（参加者：6年生18名、家族24名、合計42名）。

ジョヴァンニ・セガンティーニ《羊の剪毛》＋オーギュスト・ロダン《オルフェウス》：2グループ
マールテン・デ・フォス《最後の晩餐》＋アリスティード・マイヨール《夜》：2グループ

羊の毛刈りの様子が描いた《羊の剪毛》であれば、動物や羊がトークのきっかけとなるであろうし、《オルフェウス》や《最後の晩餐》についてはそれぞれの物語を伝えることで想像が広がるであろうことが期待された。彫刻については、参加者が自分の身体を使って作品と同じポーズを再現してみることができるかどうかというのも重要で、その点、《オルフェウス》、《夜》は手堅い選択である。

【盲学校の場合】

盲学校の生徒を対象とするトークでも絵画作品と彫刻作品の組み合わせを原則とするが、キーとなるのは、彫刻作品の触察である。これまでのところ、触察は二つのパターンで行っている。一つが、展示室内の作品を使うもの（休館日にトークを実施することが多い）、もうひとつが保存修復室の担当者と相談の上、両手で全体像を把握することのできる大きさの作品2点ほどを収蔵庫から移動させてワークショップ室で行うものである（開館日に実施することが多い）。たとえば、2016年の文京盲学校のトークにおいては、以下の作品を取り上げ、グループごとに展示室では絵画1点、彫刻1点を、加えてワークショップ室で彫刻2点を鑑賞した（1

展示室での鑑賞。作品と同じポーズをとる。（2016年　文京盲学校）
作品：アリスティード・マイヨール《夜》

グループ4〜6名で全4グループ、トーク時間は80分間）。

ジョルジョ・ヴァザーリ《ゲッセマネの祈り》
ヤン・ステーン《村の結婚》
ジョアン・ミロ《絵画》
アリスティード・マイヨール《夜》
オーギュスト・ロダン《オルフェウス》
エミール・アントワーヌ＝ブールデル《ヴェールの踊り》
＊ワークショップ室での触察彫刻
エミール＝アントワーヌ・ブールデル《絶望の手》
オーギュスト・ロダン《ヴィクトル・ユゴー》

一人ひとりの見え方などを教員と共有しながら作品を決めていくことになるが、絵画、彫刻とも大きなサイズの作品が必ずしもよいわけではないこと（全体像をつかみにくいことがある）、美術や社会について高校生として一定程度の知識をもっていること（たとえば、ピカソの名前は知っているので1点入れてみる）などについては留意が必要である。

また、参加者の身体的負担にも配慮しなければならない。参加者が多い場合は、比較的見えていて自分の考えを話す生徒のグループと、重複障害があり疲れやすく教員を介して話す生徒のグループというように、学校側があらかじめグループ分けをしていることが多い。後者のグループでは、移動しやすいルートを用意すること、初めて体験する美術館という「場」を参加者が楽しめるコースを用意することが重要であった。それは、言い換えるならば、トーカーが「トークを成立させることにこだわらないこと、明確な反応を求めすぎないこと」でもある。

「打ち合わせ」に関連して付け加えると、打ち合わせを通じて、当日どのような交通手段や経路を使って児童、生徒が来館するのかを把握しておくのも重要であった。たとえば、西美に最も近く便利がよいのはJR上野駅だと思い込んでいたが、視覚障害のある人たちにとってはそうではない。文京盲学校のある飯田橋からの移動にあたっては、乗り換えのしやすさやエレベーターの使い勝手の良さから、大江戸線新御徒町（その後徒歩）のほうがよいという。また、武蔵野東小学校の場合は、急遽病院にかかる事態を想定し、地域の中核病院の連絡先を学校側と共有することが必須であった。

（2）保存修復室との協力

トークで取り上げる作品が決まったら、保存修復室との相談・調整を進める。

触察については保存修復室の協力が不可欠であり、2015年度に保存修復室に金属専門の常勤職員が着任し大きな協力と助言を得られていることは、西美のアクセス・プログラムにとって非常に幸運なことである。たとえば、収蔵庫からワークショップ室に彫刻を移動させて行う触察の場合、大きさや主題といった触察作品に関する希望を伝えつつ、作品の状態や移動の可否などについて保存修復室と協議し、収蔵庫で作品を確認した上で最終決定し、移動や返却のスケジュールを確定する。このような確認は、常設展示室内の作品についても同様である。あるとき、全体を把握できる大きさであったため、エミール＝アントワーヌ・ブールデル《ヴェールの踊り》を触察の候補として相談したところ、「本作品は先の尖ったところがあり、触察者がケガをしたり作品が折れてしまう危険性があるので留意すべきである」といった助言を得たことがある。

触察実施前後には作品の手入れが必要となるが、保存修復室がこの手入れを一手に引き受けてくれていることは、きわめて重要である。「手入れ」とは、具体的には、触察前にブロンズ彫刻の表面保護のために塗られているワックスを除去した上で厚めに塗り直し、触察後には表面についたホコリや汗、皮脂などの汚れと、厚めに塗った表面のワックスを通常の厚さに戻すためのクリーニングなどである。

保存修復室は、彫刻作品が安全に固定され、必要な道具一式が載せられた台車を当日ワークショップ室に移動すればよいところまで準備万端に整えて、触察中には様子を見に来てくれたり、終了後にはクリーニングに迅速に取りかかったりと、その協力態勢は終始一貫しており、コレクションで触察が行えるのは保存修復家が常駐する西美の強みである。

このような作品に関わる準備と並行して、当日のスケジュールやトーク作品を含む資料を館内会議に提出して了承を得ることはいうまでもない。会議に提出したのと同じ情報は、看視スタッフとも共有する。

保存修復室によって台車に用意された、触察のための作品。

（3）学校訪問

西美のアクセス・プログラムでは、教員との打ち合わせ、館内の協力に加え、来館する子どもたちとの関係を事前に築くことを重視している。そのきっかけとなったのが、武蔵野東小学校の学校訪問である。武蔵野東小学校は、健常児と自閉症児が同じ環境で学ぶことを重視するインクルーシブ教育を実践する学校で、筆者が初めてトークを担当したのは2010年7月である。筆者自身が自閉症児に接したことがなく、一般的に読んだり聞いたりする以上のことを知らなかったため、子どもたちにまったく会ったことのないままトークを担当するのは不安であった。そこで、子どもの様子をわずかでも知るために、事前に学校訪問をさせてもらうことにした。

訪問時には図工の担当教員（来館時に子どもたちを引率する教員）に校内を案内してもらい、自閉症の子どもたちの授業や、休み時間のそうじなどの様子を見学し、さらに、図工室で子どもたちの作品を見たり、学校の教育方針や、学校行事などについてもお話をうかがったりしたのだが、何よりも、来館予定の子どもたち何人かとやり取りができたことは重要であった（「《モナ・リザ》はありますか？」と期待いっぱいに尋ねられて、申し訳なく思った

りしたけれども）。武蔵野東小学校の美術館プログラムでは、子どもだけではなく保護者やきょうだいも一緒に来館するので、美術館の職員があらかじめ子どもたちと顔を合わせていることは、保護者にとっても安心材料であると聞く。子ども本人だけでなく、家族にとっても美術館スタッフが事前に子どもたちと何らかのつながりをもっていることは大切で、ボランティア・スタッフがトークを担当するようになってからも、ボランティア・スタッフと共に教育普及室職員が可能な限り事前訪問を続けている。

八王子盲学校、文京盲学校についても同様に、来館予定の生徒と事前に交流するよう努めている。たとえば、授業中に少しだけ時間をもらって、「美術館に行ったことはありますか。西美にはこんな作品があります」と美術館紹介をしたり、生徒には得意なことや好きなことを話してもらったりする。このようにしておくと、来館当日、「こんにちは。この間、会いましたね」というようにスムーズにトークを始めることができる“はず”なのだが、必ずしもそうはならないというのが高校生の手ごわいところである。教室では話が弾んだのに、美術館に来たら口数が少ない、なんだかこちらを見てくれないということはままある。それでも、事前に顔合わせをしているほうが安心できるのはいうまでもない。

触察の様子（2016年　文京盲学校）
作品：エミール＝アントワーヌ・ブールデル《絶望の手》

2. トークの現実：工夫と失敗

さて、このような多方面にわたる準備を経ていよいよトーク当日を迎えるわけだが、うまくいったこともあれば、失敗したこともある。ここでは、トーク構成の注意点や、作品選択の適否などをめぐる全体的な反省点をまとめてみたい。

（1）興味のないことには正直

武蔵野東小学校のトークの際、動物が話題の一つになりそうだと考え《羊の剪毛》を選んだのだが、「羊が毛を刈られている」、「羊を見たことがある」ということ以上に話すことがなくなってしまった。対象に興味がもてない子どもたちの集中力はあっという間に切れ、近くのソファーに座ったり別の作品を見に行ったりと、トークが成り立たない状態となった。子どもと話ができそうだと思ってどれほど念入りに作品を選び準備をしたところで、うまくいかないこともあるのは通常のトークと同様である。

後日、保護者から「子どもが美術館で2時間おとなしくしていられたことに驚いた」といった反応があったと聞いた。「みんなが積極的にお話しするトークがよい」というのはトーカーの思い込みであるかもしれず、子どもたちの美術館体験を「初めて美術館に行ったが、悪くはなかった」というように、少なくとも悪いもの、いやなものにしないことに注意を傾けるべきであると思う。

（2）触察は時間がかかる：作品数は控えめに、時間は余裕をもって

アクセス・プログラムにおいては、余裕をもって全体のスケジュールを組むことが欠かせない。小学生であっても高校生であっても、子どもたちは美術館に到着した時点で少し疲れているかもしれず、トークを始める前にひと息つく時間や、帰る前の身支度の時間は、通常のSGTよりも長くみておく必要がある。館内の移動時間にも余裕があると参加者もスタッフも気持ちにゆとりが生まれるので、決して急いではならない。

また、触察には特別に時間がかかることには留意しなければならない。ワークショップ室での触察は、ルール（前後に必ず手洗いをし、水気はきちんとふき取ること、袖にボタンがついている場合はまくること、時計は外すこと、爪は切っておくことなど）を確認したうえで開始、作品は2点用意し、2グループにわけて交替でひとりずつさわるという段取りで進める。それぞれの作品に担当者がつき、たとえばブールデルの《絶望の手》であれば、これが人間の左手を表現した作品であることを伝え、彫刻のどの部分を今さわっているのかといったことをやりとりしたり、左手で同じポーズとってみたりするのだが、このような内容で進めるためには、一人あたりの時間を確保しないと充分な触察ができない。一方で、一人あたりの時間を確保すると、ほかの子どもの待ち時間が長くなってしまう。これがマンツーマンで丁寧に進める触察のジレンマである。解消するには触察作品を増やすか1グループの人数を減らすことになろうが、点数を単純に増やすことは作品保護の観点から必ずしも容易ではなく、かといって参加者数を減らすことは触察の機会を狭めてしまうことになるわけで、いずれも今後の検討が必要な事項である。

なお、初めてワークショップ室で触察を行った際には触察には時間がかかるということを筆者がまったく理解しておらず、予定を1時間も超過してしまった。時間を超過すると、もともと疲れやすい子どもの場合負担が大きくなるので、トーク時間は厳守すべきである。

(3) みんながさわりたい／さわれるわけではない

「視覚障害者はさわることによって世界を知る人であり、さわることに抵抗がない人である」という思い込みには注意が必要である。必ずしも全員がさわることに積極的であるわけではなく、むしろ、よくわからないものにふれることに恐怖を感じる子どももいるので、視覚障害のある人との鑑賞では触察を当然行えるとは考えないほうがよい。基本は「その人しだい」であり、さわりたければさわればよし、さわりたくなければさわらなくてよし、である。

他方、さわることに関心がある人であっても、あらゆる作品をさわれるわけでもない。ワークショップ室での触察にあたり、両手で全体像を把握できるサイズの裸婦像を用意し、高校生に順番にさわってもらったときのことである。なんとなくさわりにくそうにしている生徒がおり、それまでの様子から「手が出ないこと」を不思議に感じていたのだが、彼の抵抗は「裸の女性をさわること」にあったことを担当の教員から聞き、作品選びに配慮が欠けていたことを反省した。これは「さわりやすさ」(作品の大きさ)や「わかりやすさ」(作品が何を表現しているのか)といった「モノの事情」を優先し、男子高校生という「人の事情」への配慮を欠いたために起きた事態である。見えやすさやわかりやすさといった視覚障害に由来する要素にばかり注意が向くと、それ以外の要素を見落としてしまう危険性がある。

(4) 見え方が違うことは困ることではない

盲学校の子どもたちのトークを担当するたびに少々不安に感じていたのが、見え方が違う人たちを同じグループにすることである。しかし、「一つの作品についてグループ全員で話し合ううちに、見えている人も見えていない人も、他の人の意見を聞いたり取り入れたりしながら、それぞれの考えや意見がまとまり、作品に対するその人の理解が出来上がっていくようだ」というのが、現在の実感である。八王子盲学校のトークの際、ある作品を担当者がおおまかにディスクリプションした後は、比較的見える生徒は見た感想を言い、見えにくい生徒はその感想をふまえて自分の意見を言い、それがさらにグループ全体に波及しそれぞれの感じ方や考えを共有されていくというプロセスを経験したからである。

実は、2011年から2012年にかけて筆者が在外研究期間中、グッゲンハイム美術館で見学したアクセス・プログラムでも同様の場面に立ち会ったことがある。全体的に白を基調とする大画面の抽象作品を取り上げたトークで、最初に担当学芸員が概要を話したあとは、視覚障害のある参加者たちが、「私には雪原のように思われる」、「私はちょっと違う印象をもった、過去のこういう経験を思い起こさせる」というように、ほかの人の話を聞きながら次々に自身の印象や考えを話し始め、全員でそれが共有されていったのである。彼らの対話は見えている私にとっても非常に刺激的で、作品を目にしながら「ああ、たしかにそうかもしれない」と感じるところが多々あった。

トーカーが参加者の見え方の違いに不安を感じるのは、上記(3)と同じことで、「視覚障害」という要因にトーカーが強く影響されるためであろう。見え方の違いに対応するにはマンツーマンの鑑賞も同時に用意できることが理想的であろうが、一方でこのスタイルは、トーカー＝教える人(話す人)、見えない人＝生徒＝教えられる人(話される人)という関係となる可能性もある。盲学校のように学校団体が来館する場合は、一人ひとりの見え方ばかりでなく、生徒どうしの人間関係も尊重したほうがよいと思われる。生徒たちはふだんから見え方の違う友だちと一緒に学校生活を送っているのであり、友だちと同じものを見たり考えたりすることで、リラックスしながらそれぞれの意見を表明できるようであるからだ。トーカー一人が作品を詳細に説明するばかりが方法ではなく、見えている生徒がどのように見え感じるのかを他の生徒に伝えることでグループ内で作品を共有する方法もあろうし、彫刻であれば、見える生徒に彫刻のポーズを再現してもらい、その生徒を他の生徒がさわって確認するといったことも可能であるかもしれない。「見え方が違う、だから同じ情報を全員に等しく伝えることができない」というのは自縛であり、参加者(どうし)の楽しい体験をどのように実現できるかに意識を向けることが重要であろう。何よりも、参加者のことばや意見からトーカー自身が多くを学ぶのは、一般的なギャラリートークと何ら変わりはない。

おわりに

このようにして、年間実施件数は少ないながらも、西美のアクセス・プログラムは担当教員との連絡を取りながら、準備に時間をかけ丁寧に進められてきた。今後もこれを継続していくにあたっては検討すべき課題がすでにいくつか明らかになっていよう。

はじめに、広報の問題である。現在、この丁寧なプログラムはSGTの枠内で行っており、アクセス・プログラムを探している人や西美のSGTのシステムを知らない人にとっては非常に見えにくく、わかりにくい。現状では、「SGTは特別支援校対応をしている」ということを知っている人しか利用できない。国立館としてアクセス・プログラムを実施していることはSGTとは別枠に明示されるのが望ましくであり、そのような情報があってこそ障害のある人たちのアクセシビリティを確保できると考えられる。企画展において三菱商事株式会社と共同開催してきた特別鑑賞会についても、1年に1回程度時間外の鑑賞会を設けることは、昨今強調されるSDG's を持ち出すまでもなく国立館としてのミッションであり、不開催という選択肢はない。

第二に、盲学校のギャラリートークに関して、展示室での触察は開館時間中に行えるのが理想的である。休館日に盲学校の生徒が来館する最大のメリットは、ほかの来館者を気にせず、ゆっくりと、自分たちのペースで常設展を使うことができることにある。また、彫刻をさわる生徒に対する一般来館者のコメント(たとえば「なぜあの人たちさわってよくて自分はさわれないのか」)への対応を考えずにすむかもしれない。しかしながら、担当者としては実のところ、複雑な思いがあった。というのは、一般来館者からさまざまな意見が寄せられたとしても、視覚障害のある人たちにはその人たちの鑑賞のしかたがあるのであって、美術館がそれを認めていること、人によって作品へのアクセス方法はさまざまであることを誠実に説明すればよかったのではないかと感じていたからである。つまり、一般来館者に視覚障害者と美術館の関係を知ってもらうのもまた教育普及の仕事ではないかということである。何らかの障害を負う人について「その人たちのニーズに配慮する」という理由のもと、一般来館者とは別の対応をすることは確かに必要なのだが、一方でそれは、障害のある人を分離して不可視のものとすることでもある。見えなくされるがゆえに、その人たちが必要とする鑑賞のあり方をマジョリティの来館者が理解することは困難となり、見えること＝健常者であることを前提として共有される社会的ルールや認識(「作品は見るものであって、さわ

るものではない」）を少しでも考え直したり、異なる鑑賞のあり方に想像を及ばせたりするチャンスを結果的に美術館も来館者も逸してしまうかもしれない。もちろん、このように書きながら筆者も「一般来館者に障害者と美術館の関係を知ってもらうこと」が理想的な目標であり、作品保護の観点からはかなり困難であることは理解している。しかし、それでもなお、美術館が学年や年齢やさまざまなバックグラウンドに関係なく誰でもが出入りできる場所であるならば、言い換えれば、さまざまな人が「まざる場所」であるならば、分離による利便性を確保するばかりでなく、まざることによる変化を意識したプログラムを作っていってもよいように思う。

「まざる」ということに関連して、最後に、盲学校を卒業した人たちがまざれる場所を西美が提供することも重要ではないかということを加えたい。八王子盲学校の先生が、最近は就労できる障害者、自立できる障害者であることが重視されているが、盲学校を終えるとそのあとは家と職場の往復が中心となる生活を送ることになる、社会に出たときにそれ以外の楽しみの場所があることを伝えておきたい、だから美術館に生徒たちを連れて来るのだ、と話していたことを思い出す。スタッフの仕事量、人手の問題をあえて度外視して言うならば、SGTの枠で西美の作品にふれた生徒たちは、就労しているであろう現在、西美に来ることができるのだろうか。一つひとつの丁寧なプログラムの積み重ねのほかに、学校を終わった障害のある人たちが使いやすいプログラムを重ねていくことが今後の大きな課題となるように思う。

国立西洋美術館ボランティア ― 2004年開始当初から現在までを振り返って

酒井敦子

はじめに

2004年にボランティア制度を導入して以来、登録者の人数も増え、ボランティア・スタッフはスクール・ギャラリートーク、ファミリープログラム、美術トーク、建築ツアーなど、当館教育普及の根幹をなす活動の担い手として活躍している。筆者は、2004年度〜2007年度にボランティア・コーディネーターとしてその立ち上げに携わり、2017年度以降、再び当館ボランティア制度の運営に関わることとなった。本稿は、ボランティア制度を運営する担当者としての視点から、開始当初の方針、運営しながら決まったこと、変更したこと、決定に至る根拠、参考にしたこと、担当者として考えたことなどを軸に本制度の変遷を記録し、そのありようや課題について考察するものである。記録を参照し、自身の記憶を辿り、不十分なところは元教育普及室長の寺島洋子氏にも協力いただいた[1]。

当館のボランティア・プログラムにおける研修の内容やボランティア・スタッフが携わった活動については、『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』、そして本書の第1部に加え、これまで4年毎に4冊出ている『国立西洋美術館ボランティア活動報告』に詳細を残している。特に後者では、ボランティア・スタッフや彼らの実施したプログラムの参加者の声も含まれ、「ボランティア・スタッフによってなされた結果」はそちらをご覧いただきたい。本稿では、その結果に至るまでの「過程」を中心に振り返る。

1. ボランティア制度導入の経緯

当館のボランティア制度を開始した2004年当時、文化庁が「文化芸術に自ら親しむとともに、他の人が親しむのに役立ったり、お手伝いするようなボランティア活動」を「文化ボランティア」とし、これを推進していた[2]。こうしたことを背景に、ボランティアを受け入れる文化施設が徐々に増加していた。当館においても、生涯学習の意味合いも鑑みてボランティア制度導入について検討がなされ、教育普及室が管轄部署となった。ボランティア・スタッフの活動内容については、当館にて開発されたファミリー向け観賞用教材「びじゅつーる」の貸出受付、ファミリー向けプログラムにおけるトーク及び創作プログラムの補助、学校の児童生徒向け対話型トークの3つが、募集時には決まっていた。これらは、単発、もしくは期間限定で行われていたが、ボランティア制度を導入することで継続的な実施が可能となった[3]。

ボランティアの受け入れ体制を整える上では、2002年より所蔵作品解説ボランティア「MOMATガイドスタッフ」の活動を始めていた東京国立近代美術館での実践を参考にし、ボランティア室の設置や、ボランティア活動マニュアルの策定などを取り入れた。また、寺島氏は2000年に在外研修でワシントンのナショナル・ギャラリーやスミソニアン博物館にて、ボランティア組織及びスクール・プログラムの運営を視察しており、その経験から、ボランティア・コーディネーターを採用して体制を整え、養成研修の立案などを行った。

2. 「ボランティア・スタッフ」という呼称

当館のボランティア・スタッフに「なぜ“ボランティア・スタッフ”と呼ぶのか」と問われた事がある。他の団体でも使われている呼称ではあるが、そもそも和製英語である。「ボランティア」の理念を表すのに一般的に用いられるのが「自発性」「無償性」「公共性」である一方、「スタッフ」は「一つの仕事を共同して行う人びと。部員。顔ぶれ。メンバー」[4]という意味だが、元の英語staffを辞書で調べるとさまざまな意味の中に、「職員、部員、社員」が含まれる。ボランティアと職員という異なる言葉が並ぶことに違和感を抱いたらしい。

他館の状況を見てみると、解説やコミュニケーションが主な活動については、「ボランティア」以外のさまざまな呼称も用いられている。しかし、当館は敢えて「ボランティア」という言葉を使うことにこだわった。当時の教育普及室長であった寺島氏は、「volunteer」という言葉が持つ「有志者、志願者」という側面を重視し、その行為は尊いものだという考えから、制度導入当初より「国立西洋美術館ボランティア」という呼び名とした。

その「ボランティア」という言葉に続いて、「スタッフ」という言葉を繋げたのは、本人としては記憶が曖昧だが、周りの証言によると筆者がそのように希望したという。そう言われて思い出してみると、「ボランティア」という言葉がその活動とそれを担う人の両方を指すため、言い分けるのに便宜上そうしたということもあるが、ボランティア・スタッフと共に時間を過ごす中で、当事者意識を持って活動に取り組む姿に、思わず「スタッフ」とつけてしまった、というのが正直なところだ。上述した「ボランティア」という言葉へのこだわりとは少しずれてしまうのだが、当館のボランティア・プログラムが生涯学習の一環として位置付けられていたこともあり、ボランティアという呼び名には気楽さのようなニュアンスがあったことも否めない。こちらとしてもボランティア・スタッフが楽しい、面白いと思って活動してもらうことを願っている。それが原動力になると考えるからだ。しかし、実際に活動を共にしたボランティア・スタッフは、こちらの予想以上に向上心、使命感、責任感があり、プロフェッショナルであった。また、一緒に新しいものを作っている、という連帯感も感じた。「スタッフ」と加えたのには、その姿勢への敬意と、参加者、来館者に良いプログラムを届けたいという同じ方向を向いた「同志」のような思いがあった。

3. 任期の設定

これまで5回のボランティア募集が行われ、2021年4月現在、4期、5期のボランティア・スタッフが活動している。ボランティア制度を開始した2004年当初、任期はなかったが、2008年より当時活動していた1期ボランティアには10年、2008年度採用の2期には2009年度の活動開始時から10年、2013年に採用となった3期以降、6年の任期を設けている。

途中から任期を設定するに至ったのは、ボランティア・スタッフ自らの申し出からだった。最年長（当時60代）の女性から、「定年を設けてほしい」という要望があった。当時、彼女はスクール・ギャラリートークとファミリープログラムを担当していたが、これらの活動は高度な技術が必要であるため、自分が高齢になってもよいパフォーマンスを続けられるか自信がないという。一方で、自身で辞め時を計るのは難しいため、年齢制限を設けてほしいというものだった。

真剣に当館での活動について考えてくれたことに感謝すると共に、もし彼女の要望を受け入れるのであればボランティアの定年を何歳にすべきなのか考えた。60代の彼女は、まだまだ現役である。一方、活動に終わりがない状況を考えると、彼女が不安に思うのも想像がついた。年齢に関係なく、ある程度見通しが立った方が活動しやすいのではないか、生涯学習という意味合いも持つ当館のボランティア・プログラムの性質を考えると、入れ替えることによって多くの人に学習機会を提供することも必要なのではないか、とも考えた。寺島氏にも相談の上、10年の任期を設けることとした。

2013年に採用となった3期からは6年の任期となったが、寺島氏によれば、当館のように展示替えが少ない常設展でトークをする場合、モチベーションを維持するのに10年は長いと判断したという。6年であればボランティア・スタッフ自身のライフ・スタイルの変化もある程度予測可能で、生活の中にボランティア活動を取り込みやすくなるのではないかという考えもあったそうだ。メンバーが総入れ替えするのではなく、3年ずつ約半数が入れ替わっていく採用計画となっている。

4. 活動と構成メンバーの推移

2004年に制度を導入した当初は、ボランティア・スタッフが活動するプログラムはスクール・ギャラリートークとファミリープログラムのみであったが、2008年から、2期の採用と同時に、ボランティアの活動をA, B, Cの3つに分けて、翌年から一般を対象とした美術トークと建築ツアーを始めた。これは、1期のボランティア・スタッフから一般向けのトークもやってみたい、という声があったこと、企画展については講演会などを実施していたが、常設展については一般に向けた通年のプログラムはなかったことから[5]、新たに実施するに至った。美術作品を紹介するトークと同時に建築ツアーも開始することとした。2004年のファン・ウィズ・コレクション「建築探検―ぐるぐるめぐるル・コルビュジエの美術館」を経て、建築を当館のリソースの一つとして考えたことや、2007年から始まった「ファン・デー」でも、教育普及室職員、または他館の建築ボランティアによる建築ツアーを実施し、多くの参加者を得ていたこともあり、恒常的なツアー開始につながった。

活動日についても、ボランティア・スタッフからの申し出により美術トーク、建築ツアーともに増えた。また、自主的な活動として「ボランティアート」や「金曜ナイトトーク」もボランティア・スタッフの要望から始めることとなり、活動の幅を広げている。ボランティア・スタッフの声を聞きつつ、既存のプログラムとのバランスを見ながら増やしてきた。その他、ボランティア室にある書籍の管理を行う「図書委員会」や、ボランティア・スタッフ同士で資料をデータ化して共有する「PDF委員会」（2019年に活動休止）など自治的な活動も生まれた。

活動内容の拡張に伴ってなのか、ボランティア・スタッフのメンバー構成にも変化が見られる。2004年に最初にボランティアとして採用された19名は、偶然にも全員女性であり、2004年12月に集計した平均年齢は、34.9歳であった。2021年度は4期、5期の60名が登録しているが、男女比は4：11、平均年齢は60.9歳である。

もう一つ、近年のボランティア・スタッフの変化としてあげられるのは、他館でのボランティア活動を並行して行う人や、他館で既に経験したことのある人が増えたことである。これは、美術館、博物館が集まる首都圏ならではの現象かもしれないが、博物館でのボランティアが浸透したこと[6]、そして当館のみならず、他館でも任期を設定していること[7]から、複数館での活動につながっていると考えられる。

5. ボランティア・コーディネーターとボランティア・マネジメント

筆者はボランティア制度開始時に採用された最初のボランティア・コーディネーターとして、冒頭で記した通り2007年度まで務めた。代々のコーディネーターを経て、2019年より2名となり、円滑に活動が行われるようにさまざまな業務に当たっている。例えば、ボランティア・スタッフからの連絡窓口として寄せられるさまざまな問い合わせへの対応、スクール・ギャラリートークの担当者割り当て、交通費の支払い、プログラム実績のデータ入力、活動中に着用するベストのクリーニング、ボランティア室の整備、特典として配布する展覧会チケットの手配、ボランティア・スタッフへのクリスマスカード送付など多岐にわたる。

ボランティア活動とは、ボランティアをする人の思いが推進力となって物事を回していく性質のためか、コーディネーターとしてボランティア・スタッフと共にいると、美術館という「組織」の中にありながら「共同体」のような温かさを感じることが多々ある。コーディネーターはお世話係のような立ち位置でもあり、ボランティア・スタッフに寄り添うことが必要だ。一方、この共同体のような集団だからこそ、ボランティア・スタッフの思いを継続させていくために大きな枠組みの下でマネジメントすることの重要性も強く感じる。「全国ボランティア・コーディネーター研究集会2007」で聴講した妻鹿ふみ子氏の講義レジメには、ボランティア・コーディネーターとは「ボランティアワールドへの橋渡しをする人、ボランティアの活動の魅力を伝えていく人、ボランティアの“思い”を“機能する力”に変えていく人、“ボランティアの漠然としたニーズ”を“参加できる形”に変えていく人」とある[8]。寄り添うだけではなく“変えていく”能動性も必要なのだ。

当館の場合は、ボランティア・スタッフのモチベーションを維持しながら、トークなどのプログラムを良い形で参加者に届けるための枠組みが、制度導入時より寺島氏によって作られ、状況に応じて作り変えられてきた。館内で了承を得てボランティア受け入

れ体制を作ること、ボランティア・スタッフを募集・採用すること、研修などを通してボランティア・スタッフに各プログラムの目的を理解してもらいスキルアップを図っていくこと、広報をしてプログラム参加者を募りボランティア・スタッフの活動の場を確保すること、参加者の要望や感想、プログラムの評価をボランティア・スタッフに伝えること、報告書を制作してボランティア・スタッフの貢献を見える形にすること、ボランティア・スタッフの発案を全体の教育普及プログラムとの兼ね合いを吟味し実施できる形にすること、これらに必要な予算を確保することなど、ボランティア制度の枠組みを、現在はコーディネーターを含む教育普及室4人全員で作り、回している。さまざまなバックグラウンドを持つボランティア・スタッフがいる中で、皆が気持ちよく活動できるようにすること、活動自体を面白い、楽しい、やりがいがあると感じてもらうこと、そして自己満足にならずプログラム参加者の存在を常に頭に置いてもらうことを心掛けている。

6. 国立西洋美術館ボランティア制度の成果と課題

ここまで、当館のボランティア制度導入の経緯から、どう変化してきたか、どのような考え、判断があったのかを主に述べてきた。ここでは、引き続き担当者の視点で、これまでのボランティア制度の成果、そして課題を述べたい。まず、成果としては、次の4つが挙げられる。

①継続的なプログラムの提供

各プログラムの受け入れ件数及び参加者数は本書の第一部に記載した通りである。これだけの数のプログラムを継続して参加者に届け続けることができたのは一つの成果である。

②さまざまな観点からのプログラム検証

教育普及室で実施しているプログラムの数々は、幅広い層の多様な来館者に向けてのものである。ボランティア・スタッフのような異なるバックグラウンドを持つ人たちがプログラムを作ることに参加し、検証してくれることは大きな財産である。

③生涯学習の場として：参加・活用を通じた深い学び

ボランティア・スタッフは各プログラムの参加者からすれば館側の人である一方で、美術館を頻繁に活用する一番の利用者である。すでに任期を終了した元ボランティア・スタッフに、活動報告書に記載するコメントを募ったところ、参加者、作品、建築に真摯に向き合った彼らの姿が感じられる数々の言葉が寄せられた[9]。ボランティア活動を通して繰り返し館に足を運び、美術館の活動に参加し、美術館というリソースを活用して自身の学びを掘り下げた形跡である。美術館になじみのない人にも楽しんでもらう機会を創出することと並び、ボランティア・スタッフのように時間をかけて自らの学びを深めていく場を作れたことは、そのこと自体に意義がある。

④学びの循環

上述の①～③を総合すると、ボランティア・スタッフの学びが各プログラム参加者の学びへとつながる循環が継続されてきたと言えるのではないか。上述した枠組みが機能したとも言えるが、ボランティア・スタッフの力によるところが大きい。彼らが当館の活動、そして実施プログラムの参加者に真摯に向き合い、膨大な時間と労力を注いでくれた結果である。更に言えば、任期を終えたボランティア・スタッフが、活動中に学んだことを活かして地域などで活躍している様子も報告されており、学びの循環に広がりを見せている。

一方、課題として感じていることの一つは、参加者に届けるプログラムの質をどこに定めるのかということと、生涯学習としてのボランティア・スタッフの学び、そしてさまざまなボランティア・スタッフの個性を尊重することのバランスである。常に迷うところであるが、運営側が各プログラムの目的、そしてボランティア制度の意義を踏まえて、その到達点を見定めることが重要だ。もう一つは、ボランティアの構成メンバーが多様化する中、帰属意識の変化への対応である。さまざまなスタンスでの関わり方があることを受けとめつつ、時には新たなルールの策定も必要となっている。そして喫緊の課題は、今後、ボランティア・スタッフの活動中の安全をどう確保していくのかという点である。2021年4月現在、新型コロナウイルス感染症拡大の状況は相変わらず予断を許さない。安全に配慮しながらボランティア・スタッフの思い、ニーズを“機能する力”、“参加できる形”に変えていくことが求められている。

おわりに

当館では、ボランティア・スタッフにとっても学びの場であること、各プログラムの目的共有に努め、よりよい体験をプログラム参加者に届けることを目指し、ボランティア・スタッフと意見を交わしながら運用の形を変えてきた。改めて思うのは、ボランティアという言葉は、皆が知っている言葉でありながら諸要素を内包する多面性のある事象を指しているということだ。さまざまな分野でのボランティアがある中で博物館でのボランティアに絞ってみても、ボランティア制度を導入している博物館の間で、その捉え方や運営方法は異なる。また、館の中においても運営を担当する職員、ボランティア本人、設置者、来館者と立場が異なれば見方、考え方は一つではない[10]。そして、今後も社会の変化により、ボランティアのあり方も変わっていくであろう。今後も状況を鑑み、ボランティア・スタッフの声に耳を傾けながら、柔軟に対応していくことが求められる。当館ボランティア制度の当初からの方向性やこれまでの積み上げてきたことに立ち返りながら、学びの循環を継続していきたいと思う。

註

1 寺島氏の下で業務をする中で聞いたことを筆者が文字にし、最終的に齟齬がないか本人に確認した。（2021年10月22日）

2 平成16年度文部科学白書
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200401/hpab200401_2_233.html（2021年7月9日取得）

3 酒井敦子「国立西洋美術館 ― 導入から初年度の活動まで」『博物館研究』日本博物館協会、Vol. 40　No. 11、2005年、pp. 12–16.

4 『標準国語辞典』旺文社、1996年。

5 ファン・ウィズ・コレクションの中で、夏季のみ一般向けのプログラムを実施することがあった。

6 平成25～27年度科学研究費助成事業基盤研究（B）「日本の博物館総合調査研究」によれば、ボランティアを受け入れている館は1997年13.9%（N＝1891）、2004年30.3%（N＝2030）、2008年34.5%（N＝2257）、2013年37.4%（N＝2258）で、加えて令和元年度日本の博物館総合調査報告書によればボランティア制度のある館は、2019年31.7%となっている。（2019年度の数値が下がっているのは、通年での制度的受入に質問を絞ったためと思われる。）1997年から2004年の間にボランティアを受け入れている館の割合が増え、その後、安定して3割が受け入れありと回答している。また、2004年以降、活動内容は「展示案内、説明、解説」が2004年53.7%（N＝609）、2008年56.1%（N＝797）、2013年（N＝844）と5割以上となっている。

http://www.mus-nh.city.osaka.jp/sakuma/mirror_museum-census_jp/data2014/data15.pdf（2021年4月13日取得）

https://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/R2sougoutyousa.pdf（2021年4月13日取得）

7 近隣の博物館におけるボランティア任期は、東京国立博物館は3年、国立科学博物館は3年（更新1回可）、東京国立近代美術館2年（更新2回可）など。

8 妻鹿ふみ子「組織の可能性を広げるためのボランティアコーディネーションのあり方　文化・社会教育施設編」2007年3月（全国ボランティア・コーディネーター研究集会2007年での講演）。

9 「“無垢な心で対象を見る”という“子供の眼”を再体験できたことは大変貴重で、それは今、高齢化社会を乗り切っていく上で必要な活力の素になっています。」「久しぶりに常設展を訪れたのですが、自分が何度も解説した作品を目にした瞬間、古い友人に再会したような懐かしい思いで胸がいっぱいになりました。」「ボランティア活動を通して、美術館がとても身近な存在になりました。」など。『国立西洋美術館ボランティア活動報告書2016–2019』国立西洋美術館、2021年、pp. 76–79.

10 菅井薫『博物館活動における「市民の知」のあり方 ―「関わり」と「価値」の再構築』学文社、2011年、p. 114–116. 菅井は「共約不可能性」という言葉を用いて「ボランティアという活動／存在自体に多様な主体が異なるまなざしをもっているため、共有する“ボランティア”という表現を用いたとしても、中身は異なる物を論じ合っていることになる。」と指摘する。

インタビュー：瀧井敬子氏に聞く

聞き手：　寺島洋子（元国立西洋美術館）

瀧井敬子
東京藝術大学大学院修士課程修了。東京藝術大学演奏芸術センターを経て、同大学社会連携センターを歴任。草創期の近代日本音楽史を専門分野として、明治の文豪の洋楽受容を研究。主要著書に『漱石が聴いたベートーヴェン』（中公新書）、『ゼッキンゲンのトランペット吹き』（紀伊國屋書店）、『夏目漱石とクラシック音楽』（毎日新聞出版）など。共著に『幸田延の滞欧日記』（東京藝術大学出版会）などがある。また、研究成果を生かした森鷗外訳オペラ《オルフエウス》（初演：東京藝大奏楽堂、再演：文京シビックホール大ホール）、坪内逍遙原作オペラ《新曲浦島》（初演：東京藝大奏楽堂）など数多くの舞台をプロデュースしている。
　2001年より10年間に亘り国立西洋美術館の客員研究員として、「水の誘い」を始め、「グレゴリオ聖歌とドイツ・コラールの連続性」、「オスマン・トルコへの恐怖と憧憬」など、いずれも企画展の内容に深く関連したユニークなレクチャーコンサートを、毎年1回企画した。

始まりと印象深いコンサート

―― 瀧井先生にコンサートの企画をお願いするきっかけとなったのは、先生が『明治の文豪と西洋音楽』をテーマに企画したユニークな一連のコンサートでした。コンサートも演奏だけでなく、レクチャーを含むそれまでとは異なるプログラムが始まりかけていました。そうしたなかで瀧井先生の活動は先駆的なものだったと思います。そんなユニークなコンサートを、当館の展覧会に関連して企画していただきたくてお願いに伺いました。それから10年にわたって、年に1回企画展に関連したコンサートを企画・実施していただきました。
　私にとっては、すべてのコンサートが大変楽しく、興味深い内容で記憶に残っていますが、企画された先生のなかで印象に残っているコンサートにはどのようなものがありますか。

瀧井：一番印象に残っているというと、やはり最初の「水の誘い」でしょうか。

―― 教育普及室が企画した、水の表現をテーマにした「水の誘い」という小企画展ですね。

瀧井：そうでしたね。
　どうしたらよいか戸惑っていると、水の捉え方にはいろいろあるということを、寺島さんから教えていただいたことは、私にとって忘れられません。ただ海や水をテーマにしている絵として鑑賞するのでなく、水のひたひた感とか、打ち寄せる波音を感じるよう示唆していただいたのです。そうした示唆があって、会場をめぐっていると、それぞれの絵からそれぞれに違う水音が聞こえてきました。
　それから、会場を一人で何度もそぞろ巡りました。そうしていると、ふと私のなかにちょっとした悪戯心が沸いてきました。せっかく国立西洋美術館を会場にさせていただくのだから、ここで邦楽が鳴り響いたら、いったいどうなるかしら、びっくりしてお客様はあきれて帰ってしまわれるかしら、と。でも、どうしてもやってみたい。
　そこで、私は藝大の邦楽科に協力を呼びかけました。主任の藤原睦子先生からのお返事は「ノー」ではなく、「まあ、嬉しい！」でした。
　2019年の今でこそ、誰も不思議には感じませんが、西洋絵画を前にしての邦楽など、当時はまだ、「まさか!?」のことだったと思います。
　とはいえ、第一曲目にいきなり邦楽を持ってくる勇気は、私にはなかったです。そこでまずは日本人作曲家の作品にしようと、武満徹作曲《雨の樹》にしました。パーカッションのための曲です。当時は、現代音楽というと、パーカッションが花形でした。現代音楽は苦手という方も、とりわけマリンバやヴィブラフォンの曲は抵抗なく、好きだという方も多かったですね。
　それだけなく、パーカッション専攻の学生というのは、パーフォーマンスのセンスもあって、確か加藤亜衣さんだったと思いますが、《雨の樹》に続いて、突如、ガラスの器に水を入れて音階を作って、即興演奏も披露して、これが喝采を浴びて、とても印象的でしたね。

―― このコンサートは、洋楽器で始まり、次に和楽器と洋楽器で共演し、最後に和楽器による演奏という3部構成になっていましたね。私は和楽器の三味線の音が、家の屋根に打ちつける雨音のように聞こえて、すごく驚いたことを覚えています。

瀧井：邦楽では季節感が大切にされます。「春雨」とか「五月雨」とか、それぞれ奏法も変えて、雨の様態の違いを表しますので、そこが洋楽とは異なっていますので、お客様も予想以上に興味深く聴いて下さったようです。だって、ショパンの前奏曲 作品28の15《雨だれ》は、どの季節の雨なのか、いつ、どこで作曲したかということでは問題されますが、季節感を出そうとして演奏するピアニストはいないでしょう。

―― 和楽器の部では、緋毛氈を敷いた壇上に演奏者が整列して

演奏したのも視覚的にインパクトありましたね。

瀧井：坪内逍遙作詞、五代目杵屋勘五郎・十三代目杵屋六左衛門作曲《新曲浦島》の演奏のときだったでしょうか。三味線、笛、大太鼓、小鼓、大鼓、太鼓と和楽器が並び、そこに唄と語りが入り、総勢十六名でしたから、国立西洋美術館始まって以来、初めての、仰天する光景だったと思います。

展覧会との関連性を重視した調査に基づく企画力

── 最初のコンサート以降は、年3回開催する企画展の中から、先生に選んでいただいた展覧会で企画していただくようになりました。私が毎回、感心したのは、展覧会の出品作品や、画家について綿密な調査を行い、それをもとに企画されていたことです。

瀧井：2004年の「聖杯展」のとき、私は藝大生時代に習ったことだけで、キリスト教について、あまりよく知らなかった。そこで、この際にあらためて勉強しよう決心して、まずは「聖杯展」の図録を読むことから始めました。「はじめに」のところに、「本展は12世紀から16世紀初頭制作され、ザクセン・プロテスタント教会の各地区に所蔵されている中世の典礼具を、聖杯（カリス）と、それと対になる聖皿（パテナ）を中心に展覧する試みです」、とあって、さらに今回展示されるものは「ドイツのプロテスタント教会で宗教改革をくぐり抜けて残された中世の金細工師による金工美術の最高峰」とあって、この「くぐり抜けて残された」という言葉に、私は魅せられてしまったのです。

展示されるのが中世の金工芸術の最高峰というのならば、中世音楽の最高峰はグレゴリオ聖歌。16世紀初頭というならば、ルター作曲の讃美歌をとりあげようと考えた段階で、どうしたら関連性がつけられるだろうか、と立ち往生。そこで、まずは勉強しようと決意して、日本カトリック典礼委員会秘書の宮越俊光先生とルーテル学院大学教授の徳善義和先生に連絡しました。お二人は快く応じて下さったばかりか、楽譜の入手の方法まで教えて下さいました。それでも私には理解するのが難しく、パニック。ラテン語にも苦しみました。徳善先生は脱稿されたばかりの論文二つのコピーまで送ってくださいました。

こうして四苦八苦して、やっとコンサートの本番を迎えるべく、見通しが立ったころには、なんと私は麹町の聖イグナチオ教会のミサに通うようになっていました。

── 聖杯展での調査は、コンサートの企画のみならず、先生がクリスチャンになられるきっかけにもなったのですね。他に覚えていらっしゃるコンサートはありますか。

瀧井：2008年の「コロー展」のコンサートでしょうか。

藝大図書館にはコローの図録がいくつも開架のスペースに並んでいます。コローに関する書籍もあります。それらをパラパラめくっていて、コローがコンサートだけでなく、オペラもバレエも好きで、劇場に出かけていたことがわかったので、西洋美術館コンサートのタイトルも「コローの音楽趣味」と決めました。企画の方向性がはっきりするし、美術の愛好家の方に楽器紹介をしたかったからです。

このときの展覧会には、《マンドリンを手に夢想する女》と《エデ》というタイトルで、マンドリンを膝になにげなく置いて物思いにふけっている女の絵が出品されていました。この2枚の絵が出品されていたので企画が立てやすく、コンサートの前半はマンドリンを主役にすることに決めたのですが、優れたマンドリン奏者を捜すのに少し苦労しました。でも、マンドリンという楽器の構造を、演奏者とのトークのなかで学ぶことができて、トークしながら楽しみました。

私はコローのスケッチ帖のなかの《ハープ奏者》がとても気に入っていたので、このときの展覧会にはこのスケッチは出品されていなかったのですが、後半はハープを主役にしました。コローの生きた時代は、ハープの構造が大きく変化した時代でしたから、ハープという楽器の変遷の歴史も紹介しました。どんな改良がされたのか、藝大生の岩城晶子さんがとても上手に説明して、難しい言葉を使わず、実際に弾きながらですから、お客様にはわかりやすかったと思います。

── そうですね。楽器の説明だけでなく、その背景となる社会や文化のことを説明されるっていうのも、先生のコンサートの一つの特徴でした。先生はまた、調査や稀少な楽譜を求めて海外まで行かれることもありましたね。

瀧井：2007年の「パルマ展」のときですね。ええ、パルマに行きました。

このときのレクチャー・コンサートのタイトルは、「音楽の都パルマ―メルロとヴェルディ」でした。出品作の中にアンニーバレ・カラッチが描いた《音楽家の肖像》という絵があって、その音楽家がパルマで活躍していたクラウディオ・メルロではないか、と言われていたので、メルロについて調べにパルマまで行きました。もちろん、本場で生ハムとパルメザンチーズを食べてみたいという別の目的もあったのですが…。

クラウディオ・メルロは16世紀の作曲家で、日本では古楽器の奏者たちにはその名は知られていたものの、文献もなく、私は彼が専属オルガニストとして活躍したパルマの大聖堂を、自分の目で見て、メルロの人となりにも思いを馳せたいと思ったからです。おかげさまで成果は十分ありました。というのは、これはパルマに行ってわかったことですが、パルマでは16世紀のメルロをほとんどの人は知らなかったのですが、ヴェルディに対しては熱狂的で、その熱狂振りに圧倒されました。このことが旅の成果でした。作曲家ヴェルディはパルマ近郊の生まれですから、もうヴェルディは自分たちの音楽家だと思っているのです。地元の歌劇場でヴェルディの《オテロ》公演があることをポスターで知って、せっかくパルマに来たのだから、どれくらいの水準の公演かと、軽い気持ちで前売券の売り場に行ったのですが、これがとんでもない。全席完売。当日券も見込みなし。それでも当日、ダフ屋のような人がいないか、劇場前をうろついてみたのですが、それもダメ。立ち見券をやっと入手しました。立ち見席は常連客で立錐の余地なし。たとえば、ヤーゴの計略にはまって、オテロが妻デズデーモナの不貞を疑うシーンなど、「騙されるな！　騙されるな！」と、オテロに向かって客席から本気の大声が飛ぶんです。だって、オテロがヤーゴの計略にひっかかるのは、筋書き通りですから、大声で「騙されるな！　騙されるな！」とどんなに叫んでも無駄です。ピューピュー口笛を吹きながらヤーゴに向かってヤジを飛ばし、怒って

騒ぎだすんです。私にはその光景こそ、滑稽でした。

演奏者について

―― 愉快な経験もされたのですね。ところで、瀧井先生の企画されるコンサートは、東京藝術大学との連携という意味もありました。先生は優秀な学生さんに発表の場を用意することも念頭に演奏者を選ばれていたと思いますが、大事なところではプロの演奏家を選ばれてましたね。是非、この方にと思って選ばれた演奏者の方はいらっしゃいましたか。

瀧井：2006年の「ロダンとカリエール展」のときのジェラール・プーレ先生ですね。

プーレ先生は、藝大のヴァイオリン科に客員教授として来日されていましたので、この展覧会のときのコンサートには、どうしても出ていただきたかったのです。

プログラムもプーレ先生のヴァイオリン演奏に始まって、最後にはプーレ家の財産ともいえるドビュッシーのヴァイオリン・ソナタで終わるように組みました。

ロダンは作曲家ショーソンと親交があり、カリエールはショーソンから家族の肖像画の依頼を受けるほどの間柄でした。ですから、コンサートはショーソンで始めました。後半はショーソンと同時代の作曲家ドビュッシーでまとめました。ドビュッシーは、ショーソンの別荘に招かれるほど、二人は親しく付き合っていました。だから、ショーソンを前半に、ドビュッシーを後半に配置したというよりも、私はプーレ先生の演奏によるドビュッシー作曲ヴァイオリン・ソナタを、お客様にどうしても聴いていただきたかったのです。

プーレ先生の父上、ガストン・プーレはドビュッシーより30歳若く、ドビュッシーの家によく出入りしていたそうです。ドビュッシーがヴァイオリン・ソナタを作曲しているときも、ヴァイオリニストとしての立場からいろいろ助言をしたということで、そうした経緯から、このソナタは若き25歳のガストン・プーレのヴァイオリン、55歳のドビュッシーのピアノで1917年に初演されました。ジェラール・プーレ先生は1938年生まれですから、誕生の20年以上も前の話です。

この曲をレッスンするときの父上は、とても厳しかったそうです。

彌勒忠史さんのカウンター・テナーも素晴らしかったですね。10年目の最後のコンサート「カポディモンテ美術館展」（2010）では、「絵画から聞こえてくる音楽」とタイトルをつけて、出品作から12点を選び、作品と共通するテーマの音楽を聴いていただきました。展覧会の内容にぴったり合致したコンサートでした。当時、カウンターテナーは日本では、まだ今ほど知られていなくて、生では初めて聴いたというお客様がほとんどで、反響がかなりありました。現在、彌勒さんは演出や企画を幅広く手がけて、大活躍されてますね。

コンサート会場について

―― コンサートは、企画展示ロビーで行いましたが、そこに決まる前に講堂も候補になっていました。先生と一緒に講堂を確認したとき、手を打つと変な残響があるので講堂は使えないことになりましたね。

瀧井：おかしな残響があるだけでなく、音が響かないんですよ、講堂は。講堂のほうがスクリーンもあって、レクチャーには向いていたんですけど、残念でした。でも、企画展示ロビーは広さもちょうどよく、音がよく響き、きれいに拡散して、こちらを会場にさせていただけて、ほんとうにありがたく思いました。

―― 音が響くと言えば、2009年の「ル・コルビュジエと国立西洋美術館展」のとき、ル・コルビュジエが設計した本館の19世紀ホールで演奏したらどうかと、先生が提案してくださいました。ところが、試しに音を出してみたら、吹き抜けから2階へ、ものすごい空気の振動が伝わって作品の画面が揺れたため、19世紀ホールでのコンサートは断念せざるをえなかったことがありましたね。

瀧井：頭で考えたときには、とてもいいアイディアではないか、と自賛していたのですが、実際にやってみると思いがけない不都合なことが起ってしまって。これはもう、発見でした。

ル・コルビュジエと言えば、彼の事務所で設計をしていて、後に作曲家になったクセナキスをとりあげたんでしたね。打楽器がこれほど空気を振動させるとは思いませんでした。これも、頭で考えていた以上で、びっくり！

総合芸術としてのコンサート

―― コンサートを美しく演出してくださった照明の方々や、無償でピアノを貸してくださったシュタインウェイ・ジャパンなど、瀧井先生のお知り合いの方々にも本当にお世話になりました。

瀧井：そうですね。そうした方々の協力があってこそ、10年間の全10回がそれぞれに個性的なものに仕上がりました。国立西洋美術館でのコンサートでは、総合芸術を目指すと意気込んでいて、多くの方にご迷惑をかけました。心から感謝しています。

「単なる美術館の余興コンサートには、絶対にしないこと」「単に時代を合わせただけのレクチャーにしないこと」「企画テーマは一歩も二歩も、可能なかぎり深く掘り下げること」、と私はよく言っていましたね。それに照明の助けを借りましょう、光で美しく演出して総合芸術を目指しましょう、と口癖にように繰り返し言っていましたね。

―― 総合芸術と言えば、コンサートのレクチャーも楽しくて勉強になりました。「ロダンとカリエール展」のときからでしたか、巨大スクリーンを使ってレクチャーをしてくださいましたね。そして、そのスクリーンに模様を映して、それがコンサートの演出にもなっていました。

瀧井：ありがとうございます。

照明を担当して下さった牛場賢二さんには、特にお礼を申し上げたいです。照明の根本をよく知らないのに、ただただ照明効果をねらう私に、よくお説教をしてくださいました。一番心に残っているのは、「いかに上品に明暗を使い分けるかが大事だ」、と。「光っていうのはね、たくさん使うと安っぽくなるよ」「使い方だよ」って、「照明は使えばいいってもんじゃないんだ」「全体で芸術っ

ていうことを考えよう」って。

牛場賢二さんを私に紹介してくださったのは、映画監督にしてオペラ演出家の実相寺昭雄先生です。実相寺先生は当時、藝大の演奏芸術センター長でした。牛場さんは、映画監督実相寺昭雄の右腕といわれた、知る人ぞ知る照明家でした。

「お金じゃないよ、ものは楽しくやらなきゃ」と、牛場さんは企画展示ロビーに差してくる外光の変化を、事前にインターネットで調べて、陰ってくる外光を計算に入れて、絶妙な照明にして下さいました。

―― 牛場さんの照明は、ドラマチックではあるけれど静謐な感じのものが多かったような気がします。でも、「ドレスデン展」のコンサートでベリーダンスを披露する場面では、照明に強さと動きがあってダンスがすごく引き立っていたことをよく覚えてます。まさに総合芸術でしたね。

10年を振りかえって思うこと

―― 先生には、10年にわたってコンサートの企画をしていただきました。西洋美術館でできたこと、これは満足したなっていうもの、あるいは逆に、もっとやりたかったこと、やり残したことはありますか。

瀧井：すべてが満足できる出来だったとは言えませんが、国立西洋美術館を舞台にして企画コンサートを10年間もさせていただいて、今振り返ってみると、夢のような10年間でした。感慨無量です。ほんとうにお世話になりました。ありがとうございました。

※本稿は2019年9月5日に瀧井氏にインタビューした内容を、聞き手が編集したものです。

インタビュー：佐藤厚子氏に聞く

聞き手：　酒井敦子（国立西洋美術館）
　　松尾由子（国立西洋美術館）

佐藤厚子

オハイオ州立大学で美術教育、なかでも博物館教育を専攻し、1990年に帰国。帰国後は、美術館の教育活動と実践及び研究をしていた有志によって1989年により発足した「美術館教育研究会」のメンバーとして、「美術館教育研究」の発行を中心に、国内外における美術館の教育普及活動の調査、研究を行った。1995年より、国立西洋美術館の客員研究員として、当館の所蔵作品をさまざまな視点で紹介する「子どものための美術展」（1995年～1997年）、「夏休みこどもプログラム」（1998年～1999年）、「子どもから楽しめる美術展」（2001年）、「ファン・ウィズ・コレクション」（2002年～2008年）の小企画展、及び関連プログラムの企画に携わった。

1980年代後半のアメリカ留学と帰国後の日本の美術館における教育活動

―― 佐藤さんは1980年代後半にオハイオ州立大学に留学されて、美術館教育を学ばれました。その当時の日本では、新しい分野だったと思います。1990年に帰国されましたが、その頃の日本の美術館教育の状況はどのようなものでしたか。

佐藤：例えば目黒区美術館などで、先駆的なワークショップが行われ、多くの人たちがそれを見学したりして学ぼうとしていました。私がアメリカで見てきたワークショップは非常に簡単で、作品を一緒に見て、その後絵を描くといった2時間くらいの内容でした。日本では、一つのワークショップに3日ぐらいかけて、非常に内容の濃いものをやっていて驚きました。素晴らしいと思うと同時に、こういった少数精鋭ではなく、もっと気軽に多くの人が参加できるようなワークショップがあってもいいのではないかと思いました。

　そういう中で国立西洋美術館の寺島さんに、声をかけてもらいました。当時のワークショップと違うことをしましょう、ということではなかったけれども、私がアメリカで勉強したのは鑑賞教育の方がメインだとお話ししたかと思います。そうしたら、一緒にやりましょうということになりました。

―― アメリカで学ばれた鑑賞教育ってどんなだったのですか？

佐藤：美術史をかみ砕いて伝えるような感じでしょうか…。

―― VTS（ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ）などは？

佐藤：MoMAのフィリップ・ヤノウィンの？　それは私の帰国後ですね。でも、アメリカではやり取りしながら作品を見ていくって、当たり前の感じがありました。それこそ、かみ砕いて話すといっても、一方的に教えるのではなく、やり取りを通してでしたね。子どもたちが絵の前に座っている様子は、当時は日本では見かけなかったので、いいなと思いました。

――「鑑賞」という言葉は広く使われていますが、佐藤さんにとってはどういう活動ですか？

佐藤：単なる美術史を教えることだけではないのだという気がします。時代背景などを教えてもらうだけではなく、考えることを奨励するということが含まれますね。それは、美術を好きになるのを促すのではないでしょうか。そういう点では、日本で先駆的なワークショップをされた方も同じように鑑賞教育をやっているという考え方だったと思います。私もそのワークショップの良さは、もちろんあると思っています。

―― 一般的にも言われていますが、やはり鑑賞というのは受け身ではなく、今、「考える」とおっしゃいましたが、能動的に関わることを通して、作品の距離を縮めていく活動なのですね。

国立西洋美術館で教育普及プログラムに携わることになって―現代美術の視点を取り込む

―― 佐藤さんはご主人が作家の岡崎和郎さんですし、河原温さんなどとも親交があって、ニューヨークでお会いになったとか。まさに「現代美術の人」ですよね。そんな佐藤さんにとっては、古い時代の作品を多く扱う国立西洋美術館は異色の世界ですよね？ご縁あって当館で教育プログラムに携わることとなった訳ですが、こんなことをやってみたい、というのはあったのですか？

佐藤：ありましたよ。やはり現代美術の視点を取り入れてみたかったですね。一番初めは1995年の「子どものための美術展 描かれたふしぎな世界を旅する」[1]で、西洋美術館の所蔵作品の中からマックス・エルンストの《石化した森》を取り上げました。この作品はグラッタージュという技法で作られています。それに似たフロッタージュという技法を試せるコーナーを展示室に隣接する小部屋に設けました。ざるとか、木とかをベニヤ板1枚の大きさの台に固定して、紙を被せその上から色鉛筆をこすりつけて作品を作れるスペースになっていました。当時、雪山行二さんが学芸課長で、あの方は現代美術もよくご存じで、この取り組みを「面白いね」と言ってくれました。

―― 当時の国立西洋美術館では講演会くらいしかしていなかったので、かなり斬新だったと思いますが、館内で受け入れられたのですね。

佐藤：でも、他館から現代美術作品を借りて展示する際には、そうはいかなかったようです。2003年の「ココロのマドー絵のかたち」[2]の時は、世田谷美術館からアンソニー・グリーンの作品を借りるなどして、現代美術作品の展示もしました。館内ではいろいろ反対意見があったそうです。

―― こういった取り組みをされた背景には、もちろん佐藤さんご自身が、現代美術が好きだったというのもあるでしょうけれども、最初に伺った鑑賞教育的な視点というのもあったのではないでしょうか？

1995年度　子どものための美術館「描かれたふしぎな世界を旅する」　フロッタージュ・プログラム

佐藤：やっぱり、現代美術って、歴史を知らなくても心をオープンにすればそれ程難しくはないと私は思うんですよね。むしろ簡単だって、ここから入っていくやり方もあるんじゃないか、という思いはありましたね。

―― 確かに、過去のことではなく、今の自分たちの生活と近いですものね。だから入りやすいというか共感しやすい部分はありますよね。そういう視点を国立西洋美術館でも取り入れたかった、試してみたかったということですね。

佐藤：そうですね、試してみたかったというのはあります。ただ、現代美術は入口です。そこを通して作品を楽しもうって感じで、私は別に現代美術をたくさん展示したいとかは思っていなかったんです。あくまで入口ですね。

―― 先ほど、少数精鋭のワークショップがある一方で、逆にいろいろな人が簡単に参加できるようにしたい、といった思いがあったとお話しされていました。国立西洋美術館でのプログラムについては、そういった方向性はありましたか？

佐藤：はい、ありました。当時、世田谷美術館の高橋直裕さんなど、そういう方向性で活動している人もいました。現代美術ってそんな難しくないよ、みたいな。あと、美術に対して先入観を持っている大人より子どもの方が入っていきやすい、というのもありましたね。

―― 国立西洋美術館でも後に対象は「子どもから大人まで」となりますが、最初は「子ども」でした。その当時、子ども向けというのはあまりなかったのですか？

佐藤：いいえ、ありましたよ。

―― 国立西洋美術館で「子どものための美術展」を行う際、子ども向けに何かをすることに対して、当時館内では抵抗はあったのでしょうか。

佐藤：いえ、それはなかったです。子どもに対する教育はやらねばいけない、講義や講座だけやっている時代ではない、という空気はあったようです。時代の要請といいますか。

―― これまで国立西洋美術館でやってきて、一番印象に残っているものはどれですか？

佐藤：1999年に実施した「夏休みこどもプログラム」[3]の中で作った「セルフガイド―光―」の中で、聖人の光輪の部分だけ切り抜いて掲載したページがあります。この輪っかにいろいろな表現があるんですよ。私、それが面白いなと思ったのね。それで光輪だけを切り抜いたんです。その時点ではそれがどんな効果を生むのか、気づいていなかったんですが、それを並べてみたら一目瞭然。いろいろな作家が自分だけの表現をしようとしていたことを発見した訳です。すごく嬉しくて、これを是非、子どもたちに知らせたいと思ったんです。

―― 光を取り上げる、というのは、やはり斬新なことだったのでしょうか。

佐藤：光の表現をテーマにしている作家は現代でもいますし、それほど珍しくないと思います。関連ワークショップでも何人か紹介しました。大和絵でも、絵巻物などでも見ることができますね。でも光輪の表現にこんなにバリエーションがあると分かるのは西洋の古い宗教画だからこそ面白くできたように思います。

―― 不思議だ、面白い、と思ったことを取り上げてみたということなのでしょうか？

佐藤：そうですね。不思議という思いから掘り下げていくと、たぶん子どもだって面白がってくれるんじゃないかと思ったのです。

1999年　夏休み子どもプログラム「セルフガイド―光―」

―― 最初は現代美術的な入口、と思っていたけれど、やっていくうちに古い時代の西洋美術作品にも向き合ったんですね。

佐藤：そうかもしれません。祭壇画にある異時同図法とか、面白いなって思います。古い時代の美術作品については全く詳しくなかったけれど、だからこその面白いと感じる視点、新鮮な視点で国立西洋美術館のコレクションを見ることができたのかもしれません、私もここでやれてよかったなと思っています。

「ジュニア・パスポート」、「ファン・ウィズ・コレクション」
― 名称、デザインへのこだわり

佐藤：もう一つ、印象に残っているのが「ジュニア・パスポート」[4]です。美術史を専門とする学芸担当が企画展を作るでしょう？それを見る子どもたちのために冊子を作りたいと言ったのは私です。「子どものための美術展」や「ファン・ウィズ・コレクション」などの所蔵作品をさまざまな角度で紹介する小企画展に加えて、企画展と関連した何かをしたかったのです。2001年度（2002年3月〜）のプラド美術館展で最初の「ジュニア・パスポート」を作成しましたが、展覧会の担当者からもいろいろ指摘があったり、一応一目置いてもらえたようで、私としては嬉しかったです。

今まで、私が携わった中では、最初の表紙のデザインが一番気に入っています。この冊子、本当にパスポートにしたかったんですよ。最初のデザインはパスポートっぽいでしょう？それが変わっていってしまうんだけれど…。違う国、異世界、アナザーワールドに行くんだ、という思いで、「パスポート」にしたかったんです。

―― この名称も佐藤さんのアイディアだったんですね。

佐藤：そうです。セルフガイドという風に言われてしまうと違うんです。もっと不思議な世界に行くためにあるもの、それがパスポートというものだと思うんですよね。略して「ジュニパス」と言ったりするけれど、パスは行くと入場料が安くなるとか無料になるとか、そういうものじゃない？だけど私はパスではなく、パスポートにこだわっていました。

―― それはお伺いして良かったです。ジュニア・パスポートの中で完結するものではなく、それを持って異世界（展覧会）に行く、という体験を演出するものなんですね。

2002年「プラド美術館展」
ジュニア・パスポート

佐藤：そうなんです。だから、その出合いにわくわくして欲しい訳です。見たことのない絵、その場の雰囲気…それらが繰り広げる世界へのパスポート。

―― このジュニア・パスポートは、最初に伺った少数精鋭のアプローチではなく、もっと広い人たちへという思いとつながりますか？

佐藤：そんなに広くとか、意識はしていませんでした。これがあるから大勢の人に来てほしいとか、そういう気持ちはありませんでした。でも、どうせ来たからには、面白く、楽しんでね、来た人は誰でもアナザーワールドに行けるわよ、という思いはありました。

「ファン・ウィズ・コレクション」[5]という名称も私が考えました。

―― これも佐藤さん発案だったんですね。佐藤さんがこの名称に込めた思いを教えてください。

佐藤：そうですね…。「ファン・ウィズ・コレクション」という意味以外ない気がするけれど。とにかく、コレクション（所蔵品）でやるわけじゃないですか、展覧会を。楽しく所蔵品を見てもらいたい、という感じ。

―― やはり、“楽しそう”というのは重要なんですね。

佐藤：楽しくないと、子どもは嫌なんじゃないかと思って。

――「ファン・ウィズ・コレクション」は子どもから大人までを対象としていますが、やはり子どもに向けて、という思いはあったんですね。

佐藤：ありましたね、もちろん。

この名称で一番問題になったのは、with の使い方がどうなのか、ということと、「Collection」が所蔵作品ではなくてコレクターみたいに集めることという風に聞こえないか、ということで、館内で議論されたと聞いています。

―― 日本語ではなく、英語の名称にしたというのは、何か理由はありますか？

佐藤：特に意図はありません。自然になってしまったというか、意識していませんでした。当時、with 〜という表現があることを知り、ほぼ同時にプロ野球のジャイアンツがロゴの語尾に＋（プラス）をつけているのをテレビかどこかで見て、インパクトを感じたので＋（プラス）も入れたかったんです。

―― それはデザイン的にですか？それとも意味合いとして足したかったのですか？

佐藤：デザイン的にかな。with の上に＋（プラス）を入れたかったんです。インパクトがあるような気がしました。意味の上では後付けになりますが、楽しいだけじゃないよ！実は我々に企みがあるんだよ、という感じですかね。

―― 実際、「ファン・ウィズ・コレクション」のロゴデザインには＋

（プラス）が入っていますね。佐藤さんが名称を考える時、既にロゴ的なイメージがあったんですかね。

佐藤：そうです。やっぱりアートが好きで、デザインも好きですね。

―― ファン・ウィズ・コレクションのチラシを大岡寛典さんにお願いするようになり、雰囲気も変わりますね。例えばキャラクターを使わないようにする、とか、少しおしゃれな感じにしたいとか、デザインについて意向があったんですか？

佐藤：そういうことは、あまり意識しませんでした。でも決めていく段階で大岡さんのデザインにしたいと思いました。大岡さんは現代美術作家との交流もあって、感性が近いかもしれないと勝手に思うところがありました。また、こねくり回したデザインではなく、ニュートラルな感じもいいと思いました。

―― こうして伺うと、佐藤さんは感性の人だと感じます。こうだから、ああだから、と理屈で考えるより、ぱっとビジュアルで思い浮かぶというか…。
　当館の教育普及に関わられた中で、どうでしたか？やりたいことはやれましたか？

佐藤：6割方は良かったと思っています。やっぱり、「ジュニア・パスポート」や「ファン・ウィズ・コレクション」のような、概念を言葉にして、それを実現することができて嬉しかったです。

―― 逆にやり残したことは？

佐藤：やはり、展覧会を続けたかったです。他館から作品を借用するのは難しいようですので、1、2点でも効果的に使う方法を考えたり、版画を交えたり、工夫次第でいろいろやり方ができると思います。

ミュージアム・エデュケーターの立ち位置

―― 佐藤さんが勉強されてきたミュージアム・エデュケーションのバックグランドが役に立ったことはありますか？

佐藤：私が行ったオハイオ州立大学では、コロンビア大学やスタンフォード大学と同様にアート・エデュケーションという学部が確立されていて、そこの先生がとても優秀でした。彼らの授業をうけるために全米・世界中から学生が集まってくるし、彼らは美術史家と対等に並んでいる印象を受けました。そういう姿を見ることができたのは大きかったと思います。キュレーターとエデュケーターの二つを考えた時、エデュケーターはちょっと下という見方をされている気がするんですね。でも、私は自分を卑下せずに、でも声高でなくやっていこうと思いました。

―― 何もない状態から何かを作り出すというのは、結構勇気がいると思うのですが、そういった気概、やっていることへの自信、手応えがあったから、できたのですね。

佐藤：あと、「カンショウ」という言葉があるじゃないですか。「鑑賞」、「観賞」と両方あると思うのですが、私は「観賞」を使いたいと思いました。「鑑」っていうと、それは大事なものをありがたくとらえる、崇めるという意味合いがあるように思います。私はもっとニュートラルに捉えたいです。そういう卑下する見方だと美術を身近に楽しめないし、新しい表現も出てこないと思うのです[6]。

―― 既存の価値に囚われず、作品をよく見るということですね。

―― 最後に、今、そしてこれから美術館の教育普及活動に関わる人たちに、アドヴァイスというか、何か伝えたいことはありますか？

佐藤：私は、やはり作品を見るのが好きなんですよね。選り好みせず美術全般に触れて、何かを発見したら、そのワクワクを見る人にどうすれば伝えられるかな、っていつも考えてほしいですね。いろいろ考えながら作品を見ていると、時として自分自身の心を覗き見るよう導かれたり、恐ろしくも得難い貴重な出会いを体験することがあります。言い換えれば、心震わせるような哲学的考察に導かれるような素晴らしい出会いに誘われることがあるのです。

―― シンプルなことがですが、とても大事なことですね。教育普及の現場に携わっていると、だんだん頭でっかちになっていく感覚があります。ワクワクする、ということより、教育的な意味や裏付けを考えてしまう。でも、お話を伺って思ったのですが、ワクワクする、心を震わせるってどういうことなのか、その本質に立ち返ることが必要ですね。

佐藤：私、美術が好きなのはずっと変わらないですね。嫌いになったことはないから、それだけは良かったと思います。

註

1　1995年7月11日（火）～9月10日（日）に開催。絵画の多様な主題や表現を紹介する展示と、関連プログラムを実施。詳細については『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』p. 87参照。
2　2003年7月1日（火）～8月31日（日）に開催。矩形ではない18点の絵画について、それらの特殊な形態が制作された背景、形体と絵の主題、形体と画面構成などを視点に紹介した。同書、p. 98.
3　1999年7月～8月にかけて、「光」を視点とした関連プログラムを実施。同書、p. 91.
4　同書pp. 160, 166–169、本書p. 84–87.
5　当館の所蔵作品を活用した、教育普及室による小企画。1995年から「子どものための美術館」という名称で始まり、2002年に対象を大人にまで広げ、「ファン・ウィズ・コレクション（Fun with Collection）と改名した。『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』pp. 86–114、本書pp. 56–61.
6　近年、美術館、学校教育の現場では、鑑賞教育について、自分の目で作品を見て、考え、自分なりの解釈を生み出すという理解が浸透しているため、本書全般では「鑑賞」を用いている。

※本稿は2020年2月17日に佐藤氏にインタビューした内容を、聞き手が編集したものです。

インタビュー：寺島洋子氏に聞く

聞き手：　酒井敦子（国立西洋美術館）
　　松尾由子（国立西洋美術館）

寺島洋子
東京芸術大学大学院美術研科終了後、女子美術大学附属高等学校非常勤講師、東京国立博物館管理課渉外係を経て、1994年より国立西洋美術館研究員、後に主任研究員として2019年まで勤務。初の教育普及専任職員として当館の展覧会、所蔵作品に関わるさまざまなプログラムの立ち上げ、企画、運営を行い、現在実施されている国立西洋美術館における教育普及活動の基盤を築いた。主な著書に『新訂 博物館教育論』（一般財団法人放送大学教育振興会、2016年）などがある。

美術館教育との出合いについて

―― 2019年3月で25年間勤められた国立西洋美術館を定年退職され、1年半程経ちました。改めて、寺島さんが美術館教育と出合い、国立西洋美術館に勤め始めた当初のことに加え、国立西洋美術館で手がけられてきたこと、この30年での美術館教育、教育活動の変化などを俯瞰して今思われることをお聞きできたらと思います。

今とは違って、両機関とも文化庁傘下の国立機関だったため、国立西洋美術館に東京国立博物館からの異動だったとお聞きしました。東京国立博物館で渉外の仕事をされていた頃から既に美術館教育研究会に所属し、「美術館教育研究」を発行して国内外の教育活動を紹介されていました。そのことが評価されて国立西洋美術館の教育普及担当になったと伺っています。そもそも、寺島さんは美術館教育とどのような形で出合ったのですか。

寺島：美術館教育研究会と出合ったことが美術館教育との出会いです。大学時代の友人が誘ってくれました。

もともと、教育には興味があり、大学時代は学芸員資格と教員資格の両方を取ろうと思っていたのですが、結果的には教員資格を優先しました。中学生の時に出会った美術の先生の影響もあり、教員資格を取ろうと考えていたのです。女子美術大学附属高等学校での教員経験を経て、東京国立博物館に勤めていたことから、その友人は声をかけてくれたのでしょう。美術館の教育なんて全く考えていなかったのですが、教育そのものに興味があったので参加しました。

―― その当時、美術館教育についてどのように思われたのでしょうか。可能性のようなものを感じたのでしょうか。

寺島：単純に、学校教育以外でも美術を教育する場所があるということに改めて気付かされました。学校で教えることばかり考えていたけれど、そうではない選択肢もあったのかと。それが、当時感じていた可能性です。その時は、多分そうだったと思います。その後、実際にやってみて可能性というよりは課題があると感じるようになりました。

―― 学校ではなくて、美術館だからできること、といった期待はありましたか？

寺島：実作品があるところでの教育、ということに期待と言うより興味を持ちました。また、実際に取り組んで課題として見えてきたことではありますが、子どもから大人までいろいろな人に対応しなければいけない、ということが学校とは大きく異なる点だと思いました。

教育普及専任の職員として

―― 寺島さんが異動されてきた頃、館内では教育活動がどのように捉えられていたのかも含め、国立西洋美術館の状況をお聞かせください。

寺島：他館と同様に学芸課ではさまざまな仕事を全員が交代で行っていました。でも、分野によっては専門性を認めて、仕事を分化したほうがいいと考え始めていた時期だったのだと思います。専門分化するポジションとしては、情報資料、保存修復に次いで、私は3人目の採用でした。当時の多くの美術館の状況を考えると、国立西洋美術館は一つの決断をしたと思います。

私が聞いた話では、海外の美術館と接点が多かったことが国立西洋美術館でも専門分化が進んだ背景にあったようです。海外から作品を借りる際、専門の修復家と対等にやり取りするのはやはり大変で、専任の採用に至ったと。また情報資料についても、学芸課の中で溜まってきた書籍の整理に加え、画像や美術館における活動の記録など、アーカイブとして多様な資料を管理運営する人が必要になってきた、ということでした。

教育に関しては、周囲の状況もあったのではないかと思います。当時、講演会以外の教育プログラムをほとんど行っておらず、何かやらなければいけないと考えていたのだと思います。

―― 寺島さんがその専任となっていざ始めるとなった時、現実の壁にぶつかるといったことはありましたか。

寺島：最初に何から始めたかということと非常に関係があるのですが、当時は教育だけでなく広報も兼任していて、しかも一人でした。展覧会毎に取材の対応をしたり、広報関連の書類を発送したりと忙しかったので、教育活動を毎日行うことは無理だと思いました。それで年に1回、所蔵作品を使って展示を組むということはできるのではないかと思いました。

―― その発想が後の「子どものための美術展」、「ファン・ウィズ・コレクション（Fun with Collection）」につながる訳ですね。1980年代以降、例えば目黒区美術館の降旗千賀子さんだったり、世田谷美術館の高橋直裕さん、宮城県美術館の齋正弘さんたちの実践のような、他館でも注目される新しい動きが出ていましたよね。寺島さんは1980年代以降の教育普及の動きをどのように捉え、どのように取り入れようと考えたのですか。

寺島：具体的なプログラムの内容をそのまま取り入れるということはなかったですが、美術館教育研究会の仕事で他館の活動を知って、それが勉強になりました。

先程挙がった美術館は先駆的な活動をしていましたが、中でも、目黒区美術館の活動は大きなヒントになりました。降旗さんは決して教育活動をメインにやろうとしていた訳ではなく、展示ができることと、その展示に関連したワークショップによって可能になることがあり、その二つをセットでやるべきだという考え方でした。多分、ワークショップの部分だけが教育活動だとは思っていなかったと思います。そういうことができたのは、彼女自身が展覧会を企画しているからで、国立西洋美術館に異動になった時、展示とプログラムを行うためには、展示そのものも自分で組むということにアドヴァンテージがあると考えました。その部分は、降旗さんの影響が大きかったと思います。

もう一つは北海道立近代美術館です。設立当初から「子どもと親の美術館」[1]を毎年シリーズで実施していて、非常に早い時期から行っていたということと、その継続性に学ぶところがありました。

国立西洋美術館の教育活動の原型
―「子どものための美術展」、「ファン・ウィズ・コレクション」

―― 1995年に始められた「子どものための美術展」を前身とする「ファン・ウィズ・コレクション」[2]は、2002年以降、テーマ、形を変えて続いています。始めた当時、国立西洋美術館の中では新しい視点の取り組みだったと思いますが、どのように受け入れられたのですか？

寺島：直接聞いてみたことがないから分からないですね。ただ、会議で企画を諮る際は、問題点は指摘してくれましたが、最終的な責任はあなたのものだから意見を押しつけはしないというスタンスでした。

―― 教育普及担当ならではの見方、作品の提示の仕方を尊重してくれたということでしょうか。

寺島：そうですね。尊重してくれました。作品保全に関することは、他部署の意見を聞いてきちんと変更しましたけれど、企画内容自体には、反対されたことはないですね。

―― 今、改めて見ると、かなり斬新な企画もありますよね。例えば、2005年、2006年の「いろいろメガネ」[3]とか。

寺島：そうですね。あの企画は一つの転機にもなりました。それまでは、こちらが「こう見ることができますよ」と、見る人に提案をし続けていた訳ですが、「皆さんはどう見ているのですか」と逆に尋ねた訳です。また、以前は展示を組むことを重視していましたが、そうではなくても良いのだと考えを変えるきっかけになりました。常設展示をそのまま使ってもいいと思えるようになったのはあの時からです。

―― 他にも、印象に残っているテーマはありますか。

寺島：難しいですね。それぞれの企画毎に思い出がありますが、それまでとは違うことをしたと言う点では、本館の建築を扱った「建築探検 ― ぐるぐるめぐるル・コルビュジエの美術館」[4]ですね。不案内だった建築を取り上げたので、外部の専門家にも入ってもらい、いろいろ勉強になりました。

―― この展示からでしたよね。建築が国立西洋美術館の一つのリソースとしてみなされたのは。建築ツアーも定期的に実施されるようにもなりましたし、2016年に世界遺産に登録されたこともあり、建築を見にくる人も多くなりました。

寺島：前年に「ココロのマド ― 絵のかたち」という展示をして、その時に窓というテーマを掘り下げるために建築家のヨコミゾマコトさんと鈴木明さんにお話を伺ったら、建築という話になりました。その時に、客員研究員の佐藤厚子さんと、「建築というのも一つのテーマになるかもね。」という話をして、やってみることになりました。ル・コルビュジエのお弟子さんの一人、坂倉準三さんの事務所で、国立西洋美術館の建設に関わられた藤木忠善先生にお話を聞いたり、ヨコミゾさんや鈴木さんにも企画に加わっていただいて実現しました。藤木先生にお話を伺った時、「この建物は本当にル・コルビュジエの設計ですか。」と聞いたら、「何を言っとる」と怒られたのを覚えています。当時、館内では本館を設計したのは、ル・コルビュジエの弟子の日本人だと聞かされていましたから。これはその後に勘違いであることがわかるのですが、職員はみなそのくらいの認識でした。

―― マップを見ながら、実際の建物を回る、というのも当時としては新しかったですよね。参考にされたものなどあったのですか？

寺島：いえ、ないですね。上述した建築家の方々に話を聞きながら建物の中を回っていろいろ教えてもらった時に、話を聞きながら見ると面白いと思いました。それで、その時に知り得たポイントをこちらであげて、鈴木さんに解説を書いてもらいました。それが建築マップです。来た人に本館を歩いてその特徴を見て、体感してもらうというのが、この企画の目玉でした。それに加えてル・コルビュジエの建築理念を紹介する展示をヨコミゾさんがいろいろ提案してくれて、本館の設計図面のコピーと併せて展示しました。この企画を経て、責任の範囲が一つ増えました。ここで建築を扱ったことで、2009年に開催した50周年記念事業「ル・コルビュ

ジエと国立西洋美術館」という展覧会を担当することになりました。これらの経験から言えることは、まずは自館の資源が何なのかを確認することが大切だということ、そして、教育普及担当は教育の専門でありながら、コレクションに関してもやはり専門を持つことが大切だということです。それが強みになると同時に活動に幅と深みが出ると思います。

――「ファン・ウィズ・コレクション」で扱ってきた切り口というのは、例えば「どようびじゅつ」やスクール・ギャラリー・トークなどでも活用できますし、教育活動をする上での蓄積となっていますよね。それはファン・ウィズ・コレクションを常設展でやったことが大きかったと思います。

寺島：その通りです。国立西洋美術館には本当に貴重なコレクションがありますし、他館とは違うユニークさがあります。また、日本美術のように展示替えを度々する必要がないというのもアドヴァンテージですね。

継続すること

―― 寺島さんが国立西洋美術館で教育普及担当として異動してきた際、北海道立近代美術館の活動を見て、その継続性が参考になったとおっしゃっていました。これまでの寺島さんがされてきた事を見返して見ると、継続してきたことが一つの大きな功績だと感じます。一歩一歩着実に、人の配置も含め続けていくためのシステムを整えるのは大切な事だと思います。最初の時点で、既に「継続性」に寺島さんが着目されていた、というのに合点がいきました。

寺島：どんなに素晴らしい活動でも、一回で終わってしまったらそこまでですよね。でも続けることで新たな展開が見えてくるので、地道に継続することを心掛けてきました。西美で教育普及を専門分化したことの意味は、活動の継続だと思っています。

―― 何かを始めるにあたって、常にどのように継続するかを考えながらされてきたのですか？

寺島：そういう訳でもないのですが、できればすぐにやめてしまうという風にはならないように、今後もこういう事をまだ取り上げられるとか、何か将来的な見通しのようなものは気にしていました。

―― それが故に、続いたファン・ウィズ・コレクションだったのですね。それと、この継続性というキーワードから思い浮かぶのはボランティア・プログラム[5]です。ボランティア活動というのは、言ってみれば金銭を介さない契約で、ボランティア・スタッフたちのモチベーションだけで成り立っていると言っても過言ではありません。それを維持するためには、楽しさ、充実感を、ボランティア・スタッフが感じられること、そして職員との信頼関係がないと続かないと思うのです。寺島さんはボランティア制度を導入し、それを続けていける形を作り上げました。ボランティア・プログラムにおいても継続性というのは最初から意識されていたのでしょうか。

寺島：始めた時に全てが分かっていた訳でも、全てを考慮していた訳でもありませんでした。今のような形になるのは、実際に始めてみて、ボランティア・スタッフに言われたこと、自分たちもやってみて感じたことなど、さまざまな反省点を取り入れながらやってきました。

ただ、当時、文化庁長官の河合隼雄さんが「文化ボランティア事業」を提唱していて、文化庁傘下の国立館ではボランティ導入は必須のような雰囲気でした。それで、簡単にはやめられないだろうから、無理はしないようにと考えました。

ボランティアについては、美術館教育研究会で既に取り上げた研究テーマで、運営が大変であることは分かっていました。2000年に在外研修でワシントンD.C.に行った際、ナショナル・ギャラリーやスミソニアンなどのボランティア活動を見せてもらい、その運営方法を参考にしました。実際の様子を見て、他の業務をしながらボランティア運営をするのは無理だと思い、館内の理解を得て、ボランティア・コーディネーターを採用することになりました。採用する際に決め手になったのは、応募者自身もボランティアとしての経験があることでした。コーディネーターになる人は、ボランティアの身になって考えることができることも大切だと考えたからです。

―― ところで、2009年度からボランティアの活動を増やしましたよね。その経緯を教えていただけますか？

寺島：最初の活動はスクール・ギャラリートークとファミリープログラムでしたが、ボランティア・スタッフの中から大人向けのトークをしてみたいという人たちが出てきたことと、そういったプログラムは恒常的には行なっていなかったので、大人向けトークをやる人たちを採用しようということになりました。その時、既に建築も先述の通り展示やプログラムを行った経験から一つの教育資源として捉えていたので、建築ツアーをやる人たちも併せて採用することになりました。

―― 最初のスキームも良かったのだと思うのですが、進めていく中で実状に合わせて変えてきたことが分かります。柔軟性も必要ということですね。同じことを続ける、というのは、実はさまざまな変化が伴うことなのだと、お話を伺って改めて思いました。

インターンシップ

―― 2002年から、国立西洋美術館ではインターンシップを実施しています。教育普及室でインターンだった皆さん、卒業後、ご活躍ですね。これまでインターンシップを行う中で、心掛けてきたことはなんですか。

寺島：大学の授業とは別に、少なくとも週一回美術館に来るのは、それなりの労力ですよね。なので、それに見合う成果があるよう最初から心掛けていました。マンパワーと考えるではなく、実績として持ち帰ることができる内容を考え、必ず報告書を書いてもらうようにしてきました。

始めた頃は、教育普及、美術館教育に興味がある学生ばかりだったのですが、今は美術史が専門で、教育普及も少し興味があるくらいの感じでしょうか。でも、そうなってから思ったのは、美術史専門の学生にこそインターンシップに参加してもらいたいという

ことです。彼らが美術館の学芸員になった時に、美術館自体が教育機関であることを意識して、何を伝えるかだけではなく、如何にして伝えるかを考えて活動できるようになって欲しいと思うようになりました。

それから、インターンシップを始める際に館内で、インターン、ボランティア、アルバイトの3つの違いは何かとか、またその差別化をしないといけないことなどを話し合いました。特に、インターンとアルバイトは、能力は同じであっても、一方は有給で一方は無給ということが起こり得るので、同じことはさせないようにしなければと最初から思っていました。また、ボランティアとの線引きも必要だと思い、当初は一緒には活動しませんでした。インターンは専門性を持っている大学院生です。一方、ボランティア・スタッフは、個人のボランタリーな活動なので、インターンと同じような負担となる仕事をボランティア・スタッフに強制してはいけないと思ったので。でも、後になってそれほど負担とならないプログラムを一緒にすることはありました。立場が違うからこそ刺激があったり、楽しかったりといった良さがありました。

国立西洋美術館の25年を振り返って

── これまで大事にしてきたことは何ですか。

寺島：難しいですね…。それほど真剣にこれは、と思っていたかと聞かれると難しいですが、やはり自分でも面白いと思えるもの、興味を感じたり、掘り下げたいと思えるような事をするようにしていました。そうでないと続かないですね。

── 達成できたこと、逆にやり残したことはなんですか。

寺島：講演会以外何も教育活動をやっていなかったのを、一応、日本の平均レベルまで引き上げたということは、達成できたと言えます。

やり残したことは、西洋美術館なればこその活動でしょうか。これまでの活動も西洋美術館の特徴を生かしたものでしたけど、さらに一歩踏み込んで西洋と日本を相対化するような活動にまでには至らなかったと感じています。

── 例えば子どもに話す時、子どもの経験と作品をつなげる事を意識すると、違いというよりは共通な部分をフォーカスすることが多くなりがちです。また、西洋と一言で言っても、地域、時代もさまざまですし、また、西洋と日本だけではなく、世界にはさまざまな文化が存在します。複雑な側面を孕んでいますね。

── このインタビューの冒頭で、美術館教育との出合いについてお話を伺いましたが、その後25年以上、海外の事例なども含めた美術館教育に関する調査を行い、さまざまな実践もされてきました。その経験を踏まえ、美術館教育に携わっている人たち、もしくはそれを志す人たちに、心得ておくべきことなどアドヴァイスありましたら、お願いします。

寺島：基本的な話になりますが、以前、イギリスの美術館の教育担当者を招いて講演会がありました。私は参加できなかったので、参加した人からの又聞きですが、日本人の聴講者が「あなたにとって美術館教育とは何ですか？」と質問したら、イギリスの教育担当者が「民主主義です。」と答えた、と言うのです。教育の在り方という点でとても印象に残る話でした。民主主義が個人の自由と平等を尊重するものであるように、教育も多様な価値観に開かれた民主主義的なものであることを意識することは大切だと思います。それから、少し具体的なことになりますが、教育活動の手法には流行があります。流行に流されず常にその活動の目的に立ち返って、本当にその手法が適切かどうかを考えながら活動することです。あと、専門分野となる教育に関する理論をしっかり学ぶことは言うまでもないことですが、もう一つ、「建築探検」のところでも話したように、美術の分野でも専門を持つことが大切だと思います。

── 最後に、これからの国立西洋美術館　教育普及室のあり方について、引き継いでいって欲しいことも含め、ご意見をお願いします。

寺島：あるべき姿、考え方は時代によって変わるので、こうであれねばならないということに囚われすぎない方がいいと思います。公共の教育施設として、求められる活動を試行錯誤しながら続けていってください。フレキシブルであれ、ということですかね。

註

1　1977年7月に開館した北海道立近代美術館では、美術鑑賞入門の展覧会として1978年3月～4月に開催された「子どもと親の美術館 ― 遠いもの・近いもの ―」を皮切りに、その後毎年、1992年まで15回にわたってテーマを変えて実施された。それ以降、「子どもと親の美術館」での実践をベースに「A★MUSE★LAND」、「A★MUSE★LAND☆TOMORROW」、「冬のワンダー☆ミュージアム」と、子どもから大人までを対象とした取り組みが続いている。

2　詳細については『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』pp. 85–114、及び本書 pp. 56–61参照。

3　「Fun with Collection いろいろメガネ Part1 ― あなたの見方教えてください」（2005年7月～10月）、及び「Fun with Collection いろいろメガネ Part2 ― みんなの見方紹介します」（2006年2月～8月）の2年続きの企画で、1年目は来館者各々の作品の見方、楽しみ方を分かち合うさまざまなプログラムを実施し、2年目には引き続き同様のプログラムを行うと共に、前年の成果を展示にした。同書、pp. 102–107.

4　「ファン・ウィズ・コレクション建築探検 ― ぐるぐるめぐるル・コルビュジエの美術館」（2004年6月29日～9月5日）。ル・コルビュジエ設計の国立西洋美術館本館を空間構成やデザインに焦点を当て紹介。同書、pp. 100, 101.

5　『国立西洋美術館教育活動の記録1959–2012』pp. 185–189及び『国立西洋美術館ボランティア活動報告』2004年度–2007年度、2008年度–2011年度、2012年度–2015年度、2016年度–2019年度参照。

※本稿は2020年8月26日に寺島氏にインタビューした内容を、聞き手が編集したものです。

国立西洋美術館教育活動の記録
2013–2019

執筆：
寺島洋子（放送大学客員准教授）
横山佐紀（中央大学教授）
酒井敦子（国立西洋美術館）
松尾由子（国立西洋美術館）

編集：
酒井敦子
松尾由子
寺島洋子

編集協力：
大木章子
長谷川暢子
土田紗也
石垣熙子
藤井美優

制作：
インターパブリカ

2022年3月31日発行

発行：
国立西洋美術館
〒110–0007　東京都台東区上野公園7–7

©国立西洋美術館

ISBN978-4-907442-37-8

All rights reserved.

The National Museum of Western Art

T&C SURF DESIGNS
enjoy surfing life
ミュージアム缶バッジを手に入れよう!
クリスマスキャロルコンサート
11:00~11:40
15:00~15:40